岸田家の異世界冒険

冬の黒猫亭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

岸田家の異世界冒険

【Ｎコード】

Ｎ８０２５Ｕ

【作者名】

冬の黒猫亭

【あらすじ】

叔父の家に向かう途中、気がつくと岸田一家を乗せたワゴン車は《ゴブリン》を轢き殺していた。

足を怪我をした西洋風の鎧を身にまとう少年を拾ったと思ったら、実は王子！？途中で熊になった王子を拾って、うわ！ゴブリンの群れがって、兄が金属バット片手に突っ込むのかい！え…あれ？ここ日本じゃなくない？？っつーか、どこですか、ここ？

岸田家一家が行く！きっと、ゆる～い異世界冒険浪漫？小説！

大変申し訳ありませんが、年末だけ更新が遅くなります。

７／２４までの『岸田家の冒険』を読んでくださった方へ。

７月２４日までの『岸田家の冒険』お読みいただきありがとうございます。

様々なご指摘から、一度完結した第一章の全ての改正と、少しのボリュームアップをさせていただきました。

ストーリーの展開は変わっておりませんがいくつか改正いたしました。

第二章から差し支える部分は、こちらになります。

1. 名前がが変わった。

真実子　家族からは「ミコ」。異世界人からは「ミィコ」。

雅美　異世界人からは「サミィ」。

由美　名前自体か「由唯（ゆい）」に変更。異世界人からも「ユイ」

昭雄　名前自体が「幸一（こういち）」に変更。異世界人から「コーチィ」

葉子　名前自体が「理恵（りえ）」に変更。　異世界人から「リィエ」

隆之介　名前自体が「怜二（れいじ）」に変更。

ゼルスターク　「ゼルスター」に変更。あんまり変わんない（涙）

2. 王様が第一章で出てこなくなった。

けど、投獄はされており、登場人物としてはがらり、と変わる

予定。

3．魔王設定は忘れてください。

本当はまだ出すところじゃなかったんで（涙）

以下の通りとなっておりますので、もう一章読み終わったのにーという方は、ここだけ抑えていただければ、大丈夫…な、はず。

作者の勝手な意向で大変申し訳ありません。

今後ともよろしくお願いいたします。

Ａｃｔ　０１．　岸田家の人々（前書き）

すみません、第一章の最初から投稿しなおしました。
岸田一家の名前が少し変更されました。

７月２７日現在。

Ａｃｔ　０１．　岸田家の人々

自宅から高速に入って２時間。
最寄のインターを降り、国道を３時間のあたりで、ゲームも飽きた。

兄のパソコンに入ってる１８以下お断りの――タイトルを口にするのも憚られる――ゲームのアイテムをこっそりコンプリートしてあげた、優しい末っ子・岸田真実子（きしだまみこ）です。

家族の中では通称・ミコ。

ついでに差分のエロイベント回収率１００％にしてやったよ。
泣いて喜ぶがいい、兄よ。

ぷぷぷ……次、立ち上げた時の兄の顔が見ものだ。

ノートパソコンを閉じて、魔法瓶に入れてきたアールグレーを飲みながら、一息つく。

少し肌寒いせいか、喉を抜けて、五臓六腑に染み渡る。

初秋というわりには気温は低い。
だが、ワゴン車の中で、がんがん暖房をいれることはできない。

姉である長女・由唯（ゆい）が『肌が荒れる』という、単純明快かつ、自分勝手な理由から、暖房を強くすることを許可しない――――もし、勝手にしたなら、処刑確実。

美しい容姿とは別に中身は、やや凶暴だ。
姉の華やかな外見に惹かれてやってくる日常的ストーカーを一人撃退するほどである。

命の惜しい家族は、口を閉ざすよりほかない。

誰も好き好んでジャイアントスイングを食らいたいなんて人いないのだ。

そのくせ、自分は膝したの薄手の水玉のワンピース、薄手のラメ入りストッキング。
同じ女でも、パーカーに、ジーパン、スニーカーに眼鏡の私からすると、ある種の尊敬も抱く。

久々に山中に篭りっきりの仙人的生活の叔父の家に行くという名目の、苦行のキャンプに向けて、体力は少しでも温存したいので、下手に騒ぐことも躊躇われる。

どうせテンションの高い叔父に、揉みくちゃにされるに決まっている。

「どうしたの、兄さん」

姉が、兄の不自然な様子に気がついたようで、眉根を寄せた。

むむむ、我が姉ながら、不機嫌そうでも綺麗である。

姉は母親似の面立ちで、化粧を取ると可愛いぐらいの印象だが、化粧を施しているせいで、華やかな美人といっても差し支えないだろう。

「いや…なんだろう。寒気が」

長兄・雅美（まさみ）は、掛けていた縁なしの眼鏡を頭に載せて、目元を揉んだ。

二冊続けて小説を読み続けていたせいで、疲れたのだろう。

この男は、ゲームも好きだが、アホみたいに本を読む。

しかも、尋常じゃない速さ。

速読というのだろうか、普通の単行本なら、2時間もかからず、読み終わってしまうぐらいだ。

兄の視線は、背後の荷台でゴロゴロしている私に向いて思わずびく、となってしまう。

なんにもないよ～とアピールしつつ、わざとらしく口笛を吹く。

「ミコ、また悪戯してるわけ？屈折した愛情表現ね」

「ほほぉう、兄ちゃんは三倍返しだぞー？」

と、姉は肩を竦めて、兄は爽やかに笑った。

整った好青年的な面立ちで笑うと、ほかの人には好印象を与えるだろうが、身内である私からすると、内面を知っているだけに、胡散臭い。

「なんで、ホワイトデー並み？普通でよくない？普通でさぁ」
「ミコ。岸田家の家訓では、厚意は倍返し、復讐は三倍返しって、決まってるんだぞ？」
「いつ決めたのさ！？」

突如として入ってきた父・幸一（こういち）につっこみながら、兄にそう教え込んだのは父だな、と妙に納得する。

強面で、その筋の人と間違えられる父の視線は、迫力がある。
めちゃくちゃ、母大好きの愛妻家で、日曜大工が好きなお茶目で温厚な人なんだが……微妙に、濃ゆい。

これと血が繋がっているのかと思うだけで、食欲が萎える。

しかも、家訓って。
いくつかあるけど、それ聞いたことないから、多分兄に便乗して即席で作ったのだろう。

父がこんな性格だから、兄が口を開くと残念な子になっちゃんだね。

「あー、もう寝る。寝るから、起こさないでね」

「ミコ。おまえ寝れんのか。寒くねないか？」
「寝れる！というか、気合で寝る」

私は後部座席の後ろの荷台で寝転んだまま、左右に激しく転がった。
底上げされた床の下に収納があるせいで、すこーし、がたがたするが、人が川の字で寝るには十分なスペースがある。
特に意味はないが、寝ることを超アピールしてみる。
この行動は、１８歳になっても、子供だといわれる由縁だろう。
なんでかなー、精神年齢が低いとか、おこちゃまとか言われるの家族だけなんだよね。
まぁ、他人がいたら、絶対にしないけど。

「兄さん、大丈夫よ。ミコに寝れない場所はないから」
「枕が替わって眠れないのにか――わけわかんない構造の体だな。一度解剖するか」
「「いや、しないで」」

突拍子もない長男の言葉に、兄の隣に座っていた姉は、私と異口同音で突っ込む。
きっと、読んでいた小説はマッドサイエンス系のなにかなのだろう。
好きそうだね、兄は。

黙っていれば、真面目で好青年そうに見えるのに、口を開くと、聊か残念な人だ。
でも、外面はいいので近所のおば様には『真実子ちゃんは、いいお兄さんもったわねぇ』とか、よく言われる。

記憶力のいい上に、全体的に反則のようなチートっぷりで、ちっちゃい頃から神童と一目置かれていたらしく、同じ中学に通いだしても、教師には「岸田の妹」か、といわれる始末だ。

ええ、そうですとも――だからなに？

チキンハートの私は、へらり、と笑って返事をするだけに留まる。

同じ中学に通っていた私は、周囲の兄の武勇伝を嫌というほど聞かされてきたし、実際兄の凄さは体感しているので、口を閉じるしかないのだけれど。

「ミィコは一日12時間寝ないと気がすまないのよね。だからもう、立派に育っちゃって…腹回りが」

ミィコって、猫の名前みたいになってきてるから。
ちっちゃいイはいらないよ、母。

「そうそう、この立派な三段腹――――って、遺伝！絶対母親似！」

助手席の母・理恵(りえ)から、デブ呼ばわりされ――インドアで、くっちゃねしてるから、否定はできないが――思わず、同じぽっちゃり体系の母親にノリ突っ込みを入れる。

料理上手で、しっかりと家族の胃袋を握っている母。
どこか天然でふわふわしてる。

姉さん女房とは思えない若さのせいのせいか、母というよりは歳の離れた姉に近い。
実は、私、母の年齢知らないけど、姉さん女房なんだと聞いたことがある。

すべての思考の根源は、食えるか、食えないか。

お前は戦隊もののカレー好きのイエローか、と突っ込みはもうやめよう。

カレーライスを連日連夜、辛口にされたら適わない。
私は甘口しか食わないんだっちゅーの。

「なにいってんの、お母さんはね、胸が五つあるのよ」
「怖っ！どんな生物？！」

はっきりいって、想像したら怪物の類である。

ファンタジーの中でも早々見たことがない。

怪物「ははーん」とでも名づけようか。

きっとレアモンスターか、ユニークモンスターとなることだろう。

「要解剖？」
「「やめろ」」

母を解剖発言する兄はもっと怖い。思わず、姉とつっこむ。

「雅美！母さんを解剖していいのは、父さんだけだ！！」
「うん、ごめん」

「いや、つっこめ、このボケ殺し！」

あぶねぇ。
兄の野郎、父のボケをスルーしやがった。

そもそも、なぜ、解剖されて喜ぶ？意味わかんないし。

車内、超寒くなるからやめて。

ほら、姉ちゃん、身縮めて、腕さすってるし――母、そこ「もう、お父さんったら……」とかって、頬染めるところじゃないから！

いらないよ！私、弟、いらないからね！
末っ子万歳だから！

2人の世界に入ってしまった両親を横目に、話題を変える。

「あーあ、叔父さん、元気だと嫌だね」

「普通逆じゃない？」

あ～…これから、さらに格闘家ばりの自給自足の山篭りをしている父親の弟である怜二（れいじ）に会いに行くかと思うと、正直気が重い。

2年ぶりぐらいということもあって、きっとテンションが高いに違いない。

やだなぁ、家が忍者屋敷みたいになってたら。

前回の訪問で、庭先に作っていたらしい罠に引っかかって、逆さまで空中ブランコする羽目になった。

というより、そこになぜ一家で一週間も泊まりいくかが分からない。

キャンプなら楽しいだろうが、あれは帰り道が分かっているだけの、ただの遭難だ。

いい年した若者が、何を好き好んで、叔父の家の庭に野菜を植えなければいけないのだろう。

車の上に備えられたソーラーパネルにくくりつけられた肥料2袋。

様々な植物の種は、寝転んだ下の収納に収まっている。

怜二叔父さんは、身内の贔屓目を抜いても、変人だ。

この便利な現代社会に背を向けて、自給自足の生活を嗜んでいる――といえば、かっこいいが所詮は世捨て人である。

「あ―…ついたら、とりあえず、三振するまで終わらないだろうなぁ」

さすがの兄も、げんなりとした様子で、傍らに置いてある金属バットを眺める。

野球だけは大好きで、それのためだけにテレビが存在している。

山奥で電波が届かなかったのだが、父が勝手に電波塔をこっそり作ったのだ。

なじみの業者から、自腹で鉄筋を仕入れたらしい。

……いいのだろうか？

まぁ、とことん、父も身内には甘い男である。

もしかすると、ただ作りたかっただけかもしれないが。

最後に会ったときに、風見鶏が盗まれたとかで大騒ぎしていたので、作る算段なのだろう――がっちゃりと、材料が床下に突っ込まれている。

っつーか、私なら、風見鶏盗むぐらいなら、庭の野菜を盗む。
多分、台風とかの時に飛んでいったんじゃないかと思うけど、見つかってないのだから仕方がない。

おかげで非常食のカップラーメンを何個か家にお留守番させることとなった。

「まぁまぁ、怜二も、自分の可愛い甥っ子と姪っ子と遊びたいんだろうよ」
「父さん、怜二叔父さんは多分、甥っ子と姪っ子『で』遊びたいんだと思うよ。俺ばっかりデットボール狙うし」

ふふ、兄が焦った顔で、叔父の玉を避けるのはかなり面白い。

時々木にめり込むほどの玉を兄が避けて、それにムキになった怜二おじさんが、連続で兄にボールを投げ続けるという惨事が起こる。

兄が山に逃げ込むと、叔父もそれを追い、3時間は帰ってこない。

恒例のそれを見ると、世界は平和だな、とか思う。

「フォークボールもありえないほど、曲がるしな」
「確かに…あたしも、時々、叔父さんの投げてるボールが光ってるように見えるときあるし」
「うわぁ、摩擦熱で発火とかしてるんじゃないよね？…ふぁあ～…」

相変わらずな家族に、防寒具としてドン●ホーテでかったトラの形をした絨毯をしき、お気に入りの黒猫の顔の形がデフォルメされた低反発枕に頭を乗せた。

叔父さんの必殺の魔球口論になった家族の会話は、よいＢＧＭとなり、私は悪夢の一歩を踏み出した。

Ａｃｔ　０２．　交通事故

深い眠りを妨げのは悲鳴と、衝撃だった。

後部座席の後ろの荷台で寝ていた私は、重力の成すがまま体が浮き上がった。

急ブレーキをかけたのだろう。

体は、前方にあった兄と姉の座る後部座席の後ろに背中から叩きつけられた。

意識を強制的に覚醒させ、肺から一気に酸素を放出し、そのまま重力に従い、床面にしこたま顔を打ち付けさせた。

これは、なにかよからぬことが起きている。

まったく、状況が飲み込めなかったにもかかわらず、そう直感――

テレテテッテテー

――するよりも先に、前方から、ファンファーレが鳴った。

まるで、ＲＰＧのキャラクターが、レベルでも上がったかのような音。

重なるように甲高い声で姉と母が喚き、痛めた顔を抑えながら、起き上がると父と兄が後部座席から飛び出したところが、視野に入

った。

こういうときに、男陣の行動は早い。

誰が何をする、というのは別に決めてはいないのに、それぞれがバラバラに動いていた。

兄は獣道の脇に進み、父はワゴンの前方に。

姉は足元にあった救急箱を取り出し、母は携帯電話を手にしていた。

ワゴンは道ではなく、少し脇に逸れて、森に入っている。

うろうろするだけで、基本的、私は何もできない。

こういう時、無性に歯がゆさを感じるも、どうにかなるわけじゃない。

ただ、どうやら何もいわれないところを見ると、自分がするべきことはないのだろう。

電気すら通っていないド田舎の叔父の家に行く途中で、ワゴンの中で眠ったのは覚えている。

テレビ見るためだけに、自家発電買うってどうよ――思ったり、思わなかったりするが、その口論はさておき。

違和感が真綿のように私の首を絞める。

胸ポケットに入れていた懐中時計を出すと、すでに叔父の家についていてもいい時間だった。
どこかに寄り道をしたって、こんなに遅くはならないはずだ。
車が通るのが精一杯の獣道は、叔父の家へと続いているのだろうか――――瞬時に否、と頭の中で奇妙な不信感が警告を鳴らす。

――――ここは、どこ？

数年に一度しか通らない道で、正確に覚えているはずなどないのに、私が出した答えは『否』だった。
肌に感じる空気も、この獣道も、聞こえる音すら、異質なものでしかなかった。

「携帯電話、通じないわ！」

母が父に叫びかける。
前方に視線を送ると、少しだけ、フロントガラスに蜘蛛の巣のような細かなヒビが少しだけ入っており、紫色の液体に濡れているのが見て取れた。
ワゴンで『何か』を轢いたのだ。

「いやっ！なにこれ！」

いつの間にか、父の傍らにいった姉が、短い悲鳴を上げた。

私が窓から顔を出すと、かろうじて人型ではあるが、巨大な緑色の塊が、無残に転がっていた。

手足を投げ出し、紫色の液体を噴出しながら、絶命している。

まるで映画の中のＣＧのように現実味がない。

なにせ、ゲームの中では、お馴染みの『ゴブリン』だったのだから。

「なに、それ…本物？着ぐるみとかじゃないよね」

折れ曲がった緑色の腕から流れる液体が紫色である時点で、人間であるはずもない。

分かっていて、あえて投げる。

「わからん――人間じゃない事だけは確かだ」

父は今までになく、眉根を寄せて、食い入るように緑色の塊を見つめている。

「由唯！こっちをみてくれ！足、怪我してる！」

兄は茂みの中から戻ってくると、１６、７歳ぐらいの少年を腕に抱いていた。

顔は見えないが、視界に入る豪奢な金髪。

姉のように染めたような違和感がまるでないので、天然なのだろう。

身に着けているものは、朱色のマントと、博物館でしかお目にかかれないような立派な白銀の甲冑を着けていた。

鞘は腰からぶら下がっているが、剣を持っていない。

どこかで落としたのだろうか？

兄は空席になった後部座席に横にさせる。

外人と一目で分かるほど、彫りが深く、瞑っている目を開けば、青とかなのだろう予想がついた。

足から血が滴り、青年？は苦しそうに呻く。

姉は青い顔のままワゴンに戻ってくると、立ち位置を変わるように兄が外に出ていく。

母も助手席から後ろに乗り込んできて、泥を落とすためか、父の秘蔵の焼酎を一本差し出すと、姉は合点がいったのか、うなずきもせず受け取った。

こちらは現実味がありすぎだ。

べろり、と肉と筋肉繊維が眼前に晒され、思わず視線を逸らす。

看護婦である姉ほどなれていない私は、後ろの窓を開けて窓から、外に脱出した。

「――…もいってたけど、なんだそれは？」

「人の形をした緑色のモンスター。いわいる、悪い妖精とか、悪魔だとでも思ってくれればいいよ」

「馬鹿な。日本に妖精はいないだろ？」

「いや、ゲームの話で――…」

兄が父に説明しているらしい。

二人の背後から、緑色の物体を眺めるが、本当に『ゴブリン』だ。

暗い緑の皮膚に覆われた筋骨。

血走ったどんよりとした色の目に、剥き出しの牙。

紫色の血。

どうみても、牧場から逃げ出した牛とか、野生の熊とかではないはずだ。

その脇の草むらの中に、紫色の液体にまみれた赤子の拳程度の灰緑色の石が転がっていた。

淵は透明に近いのに、中に液体が入っているかのように、中心に行くほど濃い色合いになっている。

じっと、見つめていると、突然、視界に青いグラデーションのかかった半透明な縦長の板のようなものが飛び出した。

「う、うわぁ！」

私の悲鳴に、兄と父が振り返る。

「どうした？」

「え、あ、なんか出てきたんですけど！？」

【緑の魔石（みどりのませき）】

グリーンゴブリンの先行隊長を倒して入手できる。
敵に投げつけると地魔法『轟く緑の大地（アリゴレスト）』を発動。
武器改造に素材使用可能。地系魔法２０％アップ。
販売価格：２４０００　Ｂ（ビル）

とかかれており、小さな赤い矢印が灰緑色の石に向かって、ぴこぴこ動いている。

まるっきり、ＲＰＧじゃん。

「なにが出てきたんだ？トカゲとかいうなよ？」
「違う、なんか、こう。ウィンドウ画面っていうかさ――」
「……うん、後でな」

父の視線が痛く、兄にはさらり、と流されてしまった。

兄は父と会話を続けながら、しゃがみこんで地面を眺めたり、ゴブリンに触ったりしている。
うん、強者だな。虫とかも平気だけどあえて触ろうとは思わない。

ともかく、私の興味はそっちじゃない。

だけど、現にプカプカ（いや動いてはいないけど）浮いてるジャン！
っていいうか、あんたら、それなに？？

反論しようとしたが、兄と父の両脇に、またしてもウィンドウ画面が表示された。

【岸田　雅美（２５）】　職業：上級国家公務員（Ｌｖ１７）
サブ職業：ゲーマー（Ｌｖ３７）

ＨＰ：３７１／３７１
ＭＰ：８２／８２

【筋力】　３８
【俊敏】　３４
【知性】　７２
【直感】　３１
【器用】　２１（＋３）
【意思】　２８
【魅力】　２４
【幸運】　２９（＋７）

【技能】　［策略（アティックス）］　［不幸中の幸い（ピンポイントラック）］
［一枚の壁（クール）］

【補正】　母の慈愛　父の加護

【ＥＸＰ：１９９５】　【次のレベルアップまで：２４】

【ボーナスポイント】　１９９Ｐ

【岸田　幸一（４５）】　職業：建築家（Ｌｖ３７）　サブ職業：大工（Ｌｖ１９）

ＨＰ：３２６／３２６
ＭＰ：３３／３３

【筋力】　４４
【俊敏】　２０
【知性】　４１
【直感】　２１

【器用】　１３６
【意思】　３８
【魅力】　８
【幸運】　１３

【技能】　［設計（プラン）］　［集中（コンセンティド）］
［職人魂（アリションソウル）］

【補正】　？？？

【ＥＸＰ：５９１１】　【次のレベルアップまで：１９９】

【ボーナスポイント】　４９１Ｐ

……そのまんまステータス画面だよ。

なに私の目が可笑しくなったの？

眼鏡が可笑しくなったの？

思わず、眼鏡をはずし、目を暖めるように揉むと――――何も見えなかった。

さすがに錯乱していたんだ、私。

ほっと胸をなでおろして、眼鏡をかけると、ステータス画面が視野にちらついた。

……害はないからいいけど、私、頭の危ない人みたいじゃね？

つうーか、兄よ……お前、なんで本職よりも、サブ職のゲーマーの方が、レベル高いの？
真面目に仕事してるのか？

「ミコ、おぉい、一度戻って来い」

疑問だらけの頭で、とりあえず手を伸ばし、草むらに埋もれている【魔石】をこっそり取得した。

Ａｃｔ　０３．　家族で異世界、これってあり？

うん、兄に謝ろう。土下座だ。

サブ職業のゲーマーのほうが、本職の上級国家公務員よりレベルが高いじゃん！とか突っ込みいれて、すみませんでした。

拾った少年の事とゴブリン（仮）のせいで、第５６回家族会議が発令されているので、私の声は心の中に留める。

いや、謝る気ないとかいうな、そこ。

きっと、いつか、気が向いたら謝るかもしれないだろう。未来は無限さ。

なので、心の中で、深々とお詫び申し上げますよ、兄。

え、家族会議に参加しないのかって？

いやいや、だって、多数決の時に数割れしないかぎり、基本的に我関せず。

それにしても、このステータス画面のことから説明したって、見えないのなら納得してもらうには時間がかかるだろう。

私は父ほど、ＫＹじゃないから、口を閉じますけど。

【岸田　真実子（１８）】　職業：ゲーマー（Ｌｖ５１）

サブ職業：専門学生（Ｌｖ１２）

ＨＰ：１２０／１２０
ＭＰ：９９／９９

【筋力】　１７
【俊敏】　３９
【知性】　１１
【直感】　９７
【器用】　１７＋３
【意思】　７
【魅力】　１４
【幸運】　４２＋７

【技能】　［悪運（グットラック）］　［調査（サーチ）］　［一枚の壁（クール）］
【補正】　母の慈愛　父の加護　地属性２０％耐性

【ＥＸＰ：３６２１】　【次のレベルアップまで：１０６】
【ボーナスポイント】　４２６Ｐ

私の本職……ゲーマーって……ｏｒｚ
サブ職業が専門学生って、普通逆だよね……うん、わかってるから、誰も何も言わないで。

意思低っ！一ケタ台だし！知性も１１だし！

辛うじて直感と、幸運と、せいぜい敏捷性が救いだけど、なんて微妙なんだ。

なんか、人として凄くバランスの悪いのではなかろうか。
技能が悪運って……いい、のだろうか、いや悪だから、駄目なのだろうか？
調査は、このステータスが見えることだと思う。
兄と父の時は動揺していたせいで気がつかなかったが、ボーナスポイントの下に、さらに個人専用のステータス画面が加わっている。

□ ≪　４　≫種類のジョブチェンジが可能
□ 称号
■ 装備
■ アイテム一覧
■ クエスト一覧

こんな妄想より先に、第５６回家族会議に出席するべきなのだろうけど気になって仕方がない。
とはいえ、ゴブリン轢いたけど、どうしよう的な会話なので私の発言は必要ないだろう。
うーん、どうやって画面に移動するんだろ？
指で、ちょい、と押してみると、色の違う文字を押してみると、装備画面が表示された。
不便だし、あからさまに変な人に見えるだろう。
家族を見るが気がついていないようだ。

えーと、なになに。

【装備表示】

武器：――
頭部：――
防具：古びたパーカー、ダメージジーンズ
足元：安物スニーカー
飾品：眼鏡、懐中時計

古びたとか、安物とか、余計なおせわだっつーの。
悪かったな、衣服にはさして執着がないんだよ。

次、次――…アイテムは、さっき拾った魔石ぐらいだな。

クエスト一覧とかも、特にないけど、まさか本当にＲＰＧみたいに、どっかの酒場とかギルドでクエストを受けることができるということだろうか？

まぁ、それも後回しにしよう。

問題は、ここからだ。

にまにましながら、私の指はボーナスポイントの振り分けボタンを押す。

すると、先ほどのステータスの数字の＋－が加わった。

＋を押すと、加えるで、－を押すと、加えたポイントが引かれる。

それから、下のほうには【取得可能技能】の一覧が出てくる。

ほほう。すばらしいな――って、スキルってこれだけ！？

【集中Ｌｖ１】　１０Ｐ
【五感強化Ｌｖ１】　２０Ｐ
【敵索Ｌｖ１】　４０Ｐ
【調査Ｌｖ２】　５０Ｐ

まぁ、職業ゲーマーで、サブ職業が専門学生じゃ、これが限界か…うーむ。

選べるだけ、ましだろうか。

これも後で要相談にしよう。

そして、おまちかね【転職】の画面を開く。

四つのジョブチェンジが――……

【盗賊（シーフ）】
【遊人（カサノバ）】
【吟遊詩人（バード）】

【弓使い（アーチャー）】

……え～と、私、基本戦力外ですか？

え、今のステータスからじゃ、慣れない職業の方が多いんですか。普通ゲームの最初は、たま●ぎ剣士とか、ノーマルエッジとかじゃないんですか。

いや、剣とか持たされても、扱える自信なんてまるでないけど、それにしたって、弓とかハープとか渡されたって使えないぞ。　弦楽器は得意だから、ハープは弾けないこともないけど。

兄は８種類。父５種類。母は６種類。

あ、かろうじて、姉と同点だ。

【遊人（カサノバ）】【吟遊詩人（バード）】【僧侶（クレリック）】【踊子（ジプシー）】

っていうか、絶対【遊人】と【吟遊詩人】は誰でもなれるんだろ！　家族全員――あ、兄には音痴なので【吟遊詩人】がないらしいが――他は入っている。

【僧侶（クレリック）】になれるだけ、姉の方がましだ。

なにせ、これ（ステータス画面）が現実であるというなら、姉は魔法が使えるということだ！

因みに兄も【魔法使い(マジシャン)】【僧侶(クレリック)】は就職できる。

う、うううう、ズルイ！ズルイ！

私も魔法が使いたい！魔法使いになりたい！

「――――だな。とにかく、怜二の家に行くとするか」

「そう、ですね。どの道、戻って、最寄の病院は４時間はないだろうし」

第５６回家族会議の開始から早数分。

話に加わる必要が出たので、私はちらり、と荷台で横たわる青年を見やり、片手を挙げた。

「はい、雅美先生」

「なんだね、ミコ生徒」

「え～と、車走らせても、おじさんの家には着かないと思います」

「なんでよ？」

「だって、ここ叔父さん家に行く道じゃない」

「は？」

怪訝そうな顔をする両親。姉は完全にアフォを見るような目つきだ。

兄は思い当たる節が多すぎるのか、瞳を伏せた。

「なにいってるんだ、ミコ」
「手当てと、外のゴブリンで時間くったけど、どっかよっても、着いてていい時間ジャン。よくわかんないけど、変だよ、この道」

あまり相手にされていないようだったが、兄がす、と瞳を細める。
いつも緩い人だけど、それはマジな時の癖だった。

「実は俺も、ミコと同じこと考えてた」

うん。漫画や小説の中じゃ、突然異世界トリップってよくあることだよね。
いや、よくないか…っつーか、家族でってどうよ。

普通は、こう、１６～１８歳ぐらいの少年少女じゃないの。
資格としては、困っている人を見過ごせないとか、正義感が強い、とか、お人よしとか。

私、年齢はあてはまるかもしれないが、どっちもないし。

やっぱ年いってるけど、兄か？
それに巻き込まれた？

「さっきから、たどり着かないってのもそうだけど。彼の服装も、鎧もリアルすぎる。さっきのゴブリンだって、体温があった」
「それは、ドッキリとかなんじゃないの？」
「誰かが仕掛けてるにしては大掛かり過ぎる。この鎧とゴブリンに

似た死骸を作ったとしたら、莫大な金がかかる。自給自足生活の叔父がするとも思えない」

うわー…すご。
私、そこまで考えてなかったんですけど。

怜二叔父さんは指先器用だけど、金もないのは確かだ。

「なにより、道だ」
「道、ってこの道？」
「フロントガラスから前を見ろ」

全員が前を向くので、私もつられて前を見る。

いつもと変わらないように感じるけど、微かに胸に宿る違和感。
生えている植物も雑草も似てはいるけど、何かが違う。

「叔父さんも俺たちも、交通手段は車。だったら当然、道に残ってるのは自動車の車輪の跡だよね？でも残っているのは、」
「足跡――いっぱいあるわねぇ」

母が合いの手を打つように、確かに前方の道は複数の人の足跡。
もし叔父の車のガソリンが切れていたとしても、足跡は一人分だ。
そもそも、よっぽどのことじゃないと叔父は町に出てこない。

それに加えて、見慣れぬものがある。

Uの字をした跡。

「おかーさん、昔近所に牧場あったけど、馬の蹄の足跡と一緒だわ」

母の実家は、田舎で隣の家まで５００メートル以上離れているほどである…らしい。

父と母は駆け落ち同然で家を出たらしく、母の故郷には行ったことがない。

それにしたって、今住んでる隣まで1メートル以内である密集生活からは考えられない遠さだ。

回覧板を持っていくのに、何分かかるんだ。

田舎は嫌いじゃないけど、昔郊外に遊びに行ったときは、街灯も1キロ以内に数本しかないし、それに蛾が群がってて超怖かった。

自動販売機なんてホラー並みの蛾で、ボタンも押せななかった。

それ以前に、お金も入れれなかったけど。

「うん。それも、一番新しいものが、叔父さんの家の方面から来ているのはおかしい」

それで、さっき地面にしゃがみこんでいたんだ。

「少なくとも、5，6人が馬を連れて走ってたってことになるけど、牧場も近くにないのに、馬がいるのはおかしいし、野生の馬は山にはいないだろうし」

父が指先でこつこつと握り締めたままのハンドルを小突く。

バックミラー越しに写る父は眉根を寄せていて、兄の話を百パーセント信じた、という顔ではない。

少なくとも、兄はよほどの確証がない限り、突拍子もないことを口にはしない。

「だが、ここらは一本道だぞ」

「そこなんだよね。俺もずっと起きてたし、いつもの順路だった」

「だろう？」

そして、車内には微妙な沈黙。

きっかり25秒で、私は耐えられなくなり、ばしばし、と後部座席を攻撃する。

「起こして、聞けば？」

とはいっても、私、起こす気ないけどね。

「あ～…まぁ、それが一番手っ取り早いんだけどな」
「ちょっと待ってよ、相手は怪我人なんだからね。アンタ、いつもみたいに、上から飛び乗るとか、やめなさいよ？」

そんなこと、赤の他人にしないし。

っつーか、何回かしかやったことないのに、めちゃくちゃ根に持ってるんだね。

内臓飛び出るからやめてっていわれた記憶はあるけど、姉さん、朝がめちゃくちゃ機嫌悪いから、一瞬で起こさないと、こっちが危険なんだよ。

誰だよ！起こした人間にアイアンクローかますやつは！

「じゃあ、擽るしかないか」
「飛び乗るか、擽る、の二択しかないのアンタの中には」
「もしもし、すみませーん」
「はや！」

そういっている間に、兄が荷台に身を乗り出して、怪我人を揺さぶった。

Ａｃｔ　０４．　困ったときはお互い様

ほどなく、兄に起こされた青年は、長い金色の睫を振るわせた。
人が苦手である私は、同じ荷台の中にいても、なるべく隅っこの方に移動していく。
トラの敷物に身を包み、眼鏡越しに青年を観察する。
ちなみに、金魚がプリントされた、お気に入りのタオルケットは青年に取られた。
かなりの美人だ。
瞳は予想通り青で、金髪碧眼という女性受けのする整った王子様ルックである。
金色の睫が、ばさばさ、と音のしそうなほど、長い。
年は１６、７歳ぐらいだろうか？
あからさまに西洋人なので、いまいち分からない。
白人だと思うが、出血多量のためか、顔色がよくないせいかもしれない。
「こ、こは…」
茫洋としたまま金色のサラサラの髪の毛をかきあげた。

どうやら、相手も日本語をしゃべるらしい――ってか、日本語通じるんだ、異世界なのに…よかった。
頭のよろしくない私が、新たな言語を覚えるって、めんどくさすぎる。

っていうか、今以上に無口になるの確実。

「っ！！」

室内を見回して、最初に目に付いたらしい私に両目を大きく見開き――うむ、失礼だな、姉なら殴られてるぞ――素早く身を起こす。
流れるように、手を腰に当てて、息を呑んだ。

「ん、これか？お前さんのっぽかったんで、拾ってきたんだが、折れてるぞ」

後部座席においてあるし、剣は兄の足元に転がっているが、半分に折れている。
そういえば、さっきちょっとだけ行方くらましてたのはそのせいか。

兄はそれを拾って、柄のほうを青年に向けた。

剣には吼えている獅子と交錯する二歩の剣の模様が剣と柄の繋ぎ目に彫られている。

交錯する剣をバットに置き換えたら、完全に叔父の好きな野球チームのマークと一緒だよね。ぷぷぷ。

「え、あ、ありがとうございます」

青年は礼儀正しく――物凄く躾をされていたのだろうと予測される――半身で頭を下げた。

多分、礼を言うところ間違ってるよ。

兄、さっきあれ、物珍しさに、勝手に弄繰り回してたから。

日本刀でも兄はテンションあがるからな。

再び落ち着いた様子で、視線を巡らせると、私に戻ってきた。

子供のように澄み切った真っ直ぐな瞳が眩しい。

私はなるべく刺激しないように、膝をいっそう抱いて、背中に後部座席が当たるほど下がった。

「その、肩は大丈夫、なのですか」

「肩、あぁ、これね。平気平気、ただの敷物だから」

と答えたのは姉で、私の肩に乗っているトラの敷物の頭の部分を、上げ下げしている。

姉は美形に弱い。善人的美形に弱い。
真面目な人間は好きだし、少し懐に余裕があって、礼儀正しい人間が好きだ。
もう少し年齢が近ければ、姉の領域だったのだろう。
でも、即嫌いではないし、好意的に接しているのは、青年の元々持っている人徳かもしれない。

「私の背後から追いかけてきたゴブリンに馬車で、轢いてくださったのですよね。感謝いたします」
「いやいや、偶然だ」
「そんな、ご謙遜を。貴方達の慈悲がなければ、私は力尽きていたでしょう」

いや、君、うちの車に轢かれそうだったのだよ。
美形、天然、善人は、私の鬼門とも言うべきトリプルコンボである。
性根まで曲がりきっている私とは、真逆。
正直、できる限りかかわりたくない、苦手なタイプなのである。

「命を助けていただいて大変申し訳ないのですが、一刻を争ってますゆえ、暇させていただきます」
「そりゃ、かまわんが」

いいのか？ここ何処か聞かなくていいのですかいな？

急いでる人間に聞いても面倒なだけか。

早歩きのサラリーマンに道を尋ねても「忙しいので」と一蹴されるし、食い下がったらたぶん逃げられるだろう。

「どうか、これをお受け取りください」

深々と頭を下げて、顔を上げると、衣服に隠れていたネックレスを首から外した。

話の相手をしている兄の手をとると、それを乗せた。

羽を模したであろう銀製の台座に、幾つか宝石が嵌め込まれている。

正直、私たち庶民では、お見かけすることのないタイプの高価な貴金属である。

なぜ、それがわかったかというと、やはり矢印がでたからである。

【イシュ加護の純銀羽の一枚】

イシュルス王家に伝わる太陽と豊穣を司るイシュ神の加護を受けた首飾り。

純金の羽を模しており、本来は六枚で一対となっている。

王家の血筋を引いていると、装備時、ステータスの全てに2

０％の補正。
普通の人間には２％、イシュ神の加護を得たものは５％の補正。
イベントクリアー品。王家の人間を助けると、与えられる。
販売価格：４３０００００００　Ｂ（ビル）

「よっ――――！！！」

思わず、最後の一文で悲鳴を上げそうになって、注目を浴びて、両手で口を塞ぐ。

アホか！こいつは！！

さ、さっきの魔石が２４０００Ｂだから――って、兄「え、ありがとう」って、さらっと受け取っちゃったし！！馬鹿！馬鹿兄！！身分不相応だから！！

っつーか、もしかして、この人！！

じっと見つめると、予想通り青年のステータス画面が出現したが、家族とは違い、その枠は小さく、簡素な表示である。

【ゼルスター＝フォン＝イシュルス（１４）】　職業：王子（Ｌｖ１７）　サブ職業：聖騎士（Ｌｖ８）

ＨＰ：３２／５９３
ＭＰ：１６／１６

「っ～～～！！」

予想もしていたこともあって、絶叫を口元でとどめることに成功した。

やっぱり、王子かよ！！
金髪碧眼って、どんだけ王道のベタな王子だよ！！

ステータス画面は見えないけど、ＨＰ高いし、王子ですよ王子！
サブ職業が騎士だし――っつーか、１４歳って……――私より年下だし。

「俺が行こう」

ん？ん？？なんだ？兄よ？どこに行くんだ？

ちょっと、パニクッってたら、会話が進んでいるんですけど？？

「で、ですが、危険な場所です」
「けど、お前さんは、その傷じゃ歩けないだろうし、仲間に知らせたいんだろ？」

「それは…そう、ですがっ、見ず知らずの方に」
「貴方、お名前は？」

姉がにっこりと、男たちを手玉にとる極上の笑みを浮かべる。

美しいだけではなく、迫力のある笑みは――私の嫌な予感を増幅させるんですけど？

「え、あ？ゼルスターと、申します」
「アタシ、岸田由唯。あなたの言い方だと、由唯＝岸田、かしら」
「えっと、ミス・ニィシラー」

……誰だよ、ニィシラーって？

わざとボケてる？
突っ込んだほうがいいところ？？

「き・し・だ」
「キシャアー？」

なんで、動物の警戒音みたいになっちゃってるの？
悪化してるよ。姉。

ってか、これだけスムーズに話しといて、名前だけが聞き取れないってどうよ。

よく分からんけど、もしかして、彼らがしゃべってる言葉って日本語、じゃないのだろうか？
言われてみれば、頭では理解しているけど、耳から入ってくる音が違うかも。

「…き、キィシガ」

何度か言い直させたものの、異世界人に、母音は少ないのに世界でも難しい言語とされる日本語の発音は無理だったようだ。

「もう、それでいいわ。一番近いし」
「ありがとうございます、ミス・ユイ」

あ、短い単語は割りと平気なんだと感心するも、待っていたように兄が名乗る。

「俺は、雅美＝岸田だ。こいつらの兄」
「えーと、アサミィさん」
「うぐっ」

兄、１２０のダメージ。
女っぽい名前が、完全に女の名前になった。

心臓を押さえて傷ついたふりしてるが、チートな兄だが、実は名前がコンプレックスなのだ。

名前をからかわれて喧嘩になったこと多数あり、時々化粧品の押し売りの電話も、兄宛に来ることがあるくらいなのだ。

「ま、マぁーみぃ」

そりゃ、ほぼ、私の名前だって。

思わず兄に同情的な視線を送り、家族全員が首を横に振る。

「ハーサミィ」

そうそう、この紙を切っていくために――――ってちゃうがな。完全に物の名前になってるよ。

「兄、もう、サミィでいいんじゃない？マの発音が難しいのかも」
「さ、サミィ…サミィ…うぅん、気弱な少年みたいな名前だが、女の名前よりはいいか…」

とため息が聞こえそうな声で、肩を落とす。

「サミィさん」

ほっとしたように、王子が胸を撫で下ろすが、まだ名前の難関っぽそうな父がいるぜ。

「おれゃ、幸一。父だ」
「母ですぅ。名前は理恵よ」

父、母、緊張で、声が裏返っているよ。

「はい、コゥーチさん、リエさん」

……どんな基準で、伝わってないんだろう。
父は、あきらめたかのように、引きつった笑いを浮かべていた。

「あの、コゥーチさん」

困ったような顔をした王子が控えめに声を上げて、父に視線を送って首をかしげる。

「なんだ？」
「……どこかで、お会いしたこと、ありませんか？」

おおぅ、ナンパの常套句だな――――って、王子！うちの父を新世界に連れてかないでってか愛妻家だから！

「い、いや、ないとおもうが」
「そ、そうですよね。申し訳ありません、変なことを聞いて」

全くだ。
危うく、脳内で父と王子による薔薇色の世界が妄想されるところだったよ。

ナンパではないとすると、普通に父が知り合いと似ているらしい。

で、最終的に視線が無言の私に集まった。
腹をくくって、あきらめると、長い、とてもながーいため息をついた。

不本意ながら、家族会議を開くまでもなく、満場一致のようだ。

とりあえず助けといて、後から、この場所のこと根掘り葉掘り聞こうという魂胆らしい。

「ミコ」
「はい、ミィコさん」

くっ、だからなんで、猫みたいな呼び方になるんですかいな！と突っ込んでしまいたかったが、彼よりは年上なので、我慢する。

大人だな、私。

あからさまに嫌々と名乗ったことか、呼び方なのか、家族が失笑している。

くそう。なんだよ、そのしたり笑顔は。

「これで、私たち名乗りあった知り合いね」

「よし。俺もなんか貰ったし、ダチだな」

「だち？」

「友達ってーことだ。だから、友達のためになにかするってのは、あたりめぇだ」

兄と父の言葉に、少年――ゼルスターが、両目を大きく見開いた。

いつもより、父が大きく見える。

いつもより、兄が勇ましく見える。

「ゼルスター…って、長いからゼルでいいか」

と兄が呟いて、座席の下に転がっていた金属バットを取り出していると、母が柔和な笑みを浮かべて、首を傾げる少年に声をかけた。

「ゼル君、あのね。うちの家訓ではね【困ったときはお互い様】っていうのよ。素敵でしょう？」

母…さらっと言えちゃう、貴女はちょっと、かっこいい。

ってか、そんな家訓、初めて聞いたけど。

うちの家族は皆――私がいうのもなんですが――自慢の家族。
私が、ブラコンで、ファザコンで、マザコンで、シスコンになっちゃうのは、仕方がないでしょう？

昔から、私の家族は凄い。

私一人だったら、間違いなく、少年を放り出していたに違いない。

「頼りないけど、力になるわ――――ミコが」
「って、私かい！！」

思わず、ズッコケたから！

「ガンバ、ミコ」

って、姉よ！歯を光らせて、爽やかな笑顔で、私にレンチを渡すんじゃない！

撤回！シスコン全面撤回！！

Ａｃｔ　０５．　王子の血を追え

生い茂る森は、非常に幻想的だった。
葉が太陽光を遮り、薄暗いのだが、差し込む一筋の光が一層美しい。

いつもなら、ご機嫌になってもいいぐらいの景色だ。

「なんで、私が……」

だが、獣道すらない森の中へと、王子の血を、ヘンデルとグレーテルのように追って進むのは、いい気分がしない上に、風で葉が揺れるたびにおっかない。

だってさ、いつゴブリンがでるかも、だよ。

兄の金属バットと、私のレンチで撃退できるわけ？
いや、昔暴走族に一人で突っ込んでいた兄ならやりそうだけど、私無理だし。

つーか、父いけよ、父。

普通こういうのって、野郎どもの仕事じゃね？

もんもんとしながら、兄の背中を追いながら、小枝を折って、流れるように大木に蛍光ペンで矢印をつけて、その後方を歩む。

よく叔父の家の裏庭（山脈）で迷子になっていた日々の賜物だろう。

「っつーか、自分たちで受けたんだから、自分でいけっつーの」
「まぁまぁ、そういうな。さっき寝てた分、少し働け。本当に三段腹になっちまうぞ」
「うっ…平気だし！」

ワゴンから見送る面々を思い出して、いら、とする。

『おれゃ、持病の水虫がな』

父よ！森に入るのに、関係ない！
その年で、水虫だけしか持病がないって、存分に健康だい！
お前の靴、二度と洗ってやるものか！！

『お母さんも、持病の四十肩が…ごほごほっ』

って、四十肩は咳きこまんでしょうよ。わざとらしすぎるワイ！
どうせ、お父さんいかないなら私もいかなーい、とか思ってるんでしょ！

このラブラブ馬鹿夫婦め。

『アタシ、ヒールだしぃ、せっかくネイル塗りなおしたのに折れたらどーすんのよ』

あーもー、父のスニーカーでいけよ！水虫になれ！
ってか、お前の花柄の爪なんか知るか！引き受けた本人いけよ！！
しかも、私の武器レンチって、リーチ短くね？死ねと？私に死ねと？

『やはり、こんな幼子にまかせるのなら、私が！』

殺すぞ！この王子！
手に持ったレンチが震え、思わず振り上げかけてしまった。
殺人光線が利いたのか、王子が怯み、家族のどっ、と笑い声が車内に響く。

『その子、一応１８歳』
『え、１８歳？と、年上なんですか！！』

目を丸くして、本気で驚いているあたりに、更なる殺意が沸いて

くる。

無論、彼に悪気がない。

だからこそ、怒ることもできず、始末が悪いのだ。

くっ、これだから天然系は！

思い出すだけで、胃の辺りがむかむかする。

要胃薬、といっても、所詮は精神的なものを緩和してはくれないだろう。

あ～、猫とか、犬とか、小動物に触りたい！撫で回したい。

いやもう、いっそ、森だから狼でも熊（切実に大人しいやつ）でもいい！

「っつーか、１４才に『幼子』いわれたかないし」

「ははは。いいじゃないか。実際、ゼルの方が、よっぽど大人っぽいぞ」

「むきー！！」

地団太を踏むも、兄は笑って取り合わない。

が、ふと、笑い声が止まり、片方の眉を器用によせて、訝しげに

振り返った。
なにか、疑問があるときの顔だ。

「なに？」
「年、言ってないよな」
「ん～…王子は言ってなかった、と思うけど」

あの後、言葉は交わしてないってか、大爆笑してた家族にムカついて、さっさと出てきたのでわからないが、年齢の話はしてないと思う。

「王子？金髪碧眼だからか？安直な」
「って、私も思ったけど、あれ、本物の王子だし」
「……本物の？」
「ついでに、その首からぶら下げてるやつ、王子ん家の国宝だって、後で返した方がいいよ。販売価格の桁が凄いことになってたから」
「ん～……」

兄は足を止めると、顎に手を当てて、明後日の方向を見ると、本格的に思考に集中し始めた。
こうなると、どれくらいかかるのかわからない。
私はこれからの危機を想定して、自分のステータス画面を表示させる。
アップしとかないと、まずいだろうか。

ゴブリンとの退治は一般人にはきつすぎるだろうし――ってか、私、一撃で、即死だな。

【岸田　真実子（１８）】　職業：ゲーマー（Ｌｖ５１）　サブ職業：専門学生（Ｌｖ１２．）

ＨＰ：１１４／１２０
ＭＰ：９７／９９

【筋力】　１７
【俊敏】　３９
【知性】　１１
【直感】　９７
【器用】　１７（＋３）
【意思】　７
【魅力】　１４
【幸運】　４２（＋７）

【技能】　［悪運（グットラック）］　［調査（サーチ）］　［一枚の壁（クール）］
【補正】　母の慈愛　父の加護　地属性２０％耐性

【ＥＸＰ：３６２１】　【次のレベルアップまで：１０６】
【ボーナスポイント】　４２６Ｐ

結構歩いてるから、地味に体力減ってるのはわかるけど、ＭＰは

何に使ったんだろ？？

なに、地味に精神的ダメージの反映？？

えーと、とりあえず、適当に１００ぐらい使っちゃうか。

私、家族よりもボーナスポイント多いし。

ゲーマーは肉体職業じゃないから、正直パラメーターの補正に期待はできない。

職業を変えれば、多少は補正がつくけど、盗賊、遊人、吟遊詩人、弓使いじゃなぁ。

基本的にネットゲーじゃ、ほとんどソロプレイヤーか兄が加わるかどうかだから、剣士とか戦士がほとんどで、サブに遊びで魔法使いとか、重装備でも素早く反応ができるように盗賊はつけてたけど。

盗賊なら、器用さと素早さ。
弓使いなら、直感と素早さ。
遊び人なら、大きく幸運。
吟遊詩人なら、直感と魅力。

補正がつくにしても、微妙に少ないなぁ。

盗賊か、弓使いかぁ…職業はやっぱり、保留。兄の選択次第で変えるしかないなぁ。

できれば、弓使いになりたいなぁ。
弓道、アーチェリーとか興味あるし、後方支援なので、危険度は低いだろう。

うん、兄全面的に、盾にしようとしてるけど、兄の性分だろうし――あ、でも本当に魔法が使えるなら、絶対魔法使いとで悩みそうな気がするけど。

先ずは、三ケタ台ゲットしよう。

「とにかく、直感力にポイント3プラス――ぎゃっ！」

【直感】97の横にある＋、－に手を伸ばす前に、三ポイントプラスされて、ピコピコ点滅している。

『決定しますか？はい、いいえ』と新たなウィンドウが横に出現する。

が、今、私が＋－を触れる前に、三ポイント加算されたということは、音声でも入力可能のようだ。

「決定します」

と、呟くと、97が100になった。

ぱららーん、と少し小さめの効果音がなり、それが実行された。

私のステータスの初の三ケタ台に思わず、にやにやしてしまう。

ゲームの達成感ほどではないが、なんとなく画面で自分が成長し

ているのが分かるのはうれしい――もっとも、これが、私の頭がいかれていなければ、の話だが。

あと、９７Ｐポイントどうしようかな～。

後、スキルは幾らあっても、消えることがないので、これも入れておこう。

【集中Ｌｖ１】　１０Ｐ
【五感強化Ｌｖ１】　２０Ｐ
【虫の知らせＬｖ１】　２０Ｐ
ＮＥＷ
【敵索Ｌｖ１】　４０Ｐ
【調査Ｌｖ２】　５０Ｐ

お、おおぅ。さっきより、スキルがひとつ増えてる。

虫の知らせ…なんか、スキル名だけでは、イマイチ何に役立つのかわからない。

直感が１００になったから、出てきたみたいな感じであるなら、直感に関するものなのだろう。

う～ん、悩みどころだけど、よし、集中、五感、虫のスキル取得しよう。

技術は嵩張らないし、多分、今みたいに、スキルは何かを達成しないと出現しないので、それを待っていても、使えるのか分からないし。

「集中、五感強化、虫の知らせ、取得。決定します」

んで、残りは４７Ｐ。

敵索はどうしようかなぁ…４０Ｐは手痛いなぁ。

それだったら、１Ｐで、ＨＰか、ＭＰを１０増やせるほうがお得感があるけど――Ｌｖ１だと、一キロ圏内に敵がいるかどうかだもん。

しかも、現在周辺地図がないため、どの方向からかは不明記ってちょっと不親切だよ。

大雑把な機能だけど、ソロプレイヤーなら必須だなぁ。

バックアタックとかされて、クリティカルヒット食らったら、即死亡コースに乗っちゃうしなぁ。

ま、いちおう付けておこう。

残り７Ｐは、一ケタ台である、精神に＋３Ｐにして、残りの３Ｐを体力に＋して、最後の１ＰをＭＰにでも入れておくか、減ってるし。

で、私のステータス、オープン。

【岸田　真実子（１８）】　職業：ゲーマー（Ｌｖ５１）　サブ職業：専門学生（Ｌｖ１２．）

ＨＭＰ：１５６／１６０
ＭＨＰ：１０９／１０９

【筋力】　１７
【俊敏】　３９
【知性】　１１
【直感】　１００
【器用】　１８（＋３）
【意思】　１０
【魅力】　１４
【幸運】　４２（＋７）

【技能】　［悪運］（グットラック）　［調査］（サーチ）　［一枚の壁］（クール）
［集中］（ゴンティッド）　［虫の知らせ（シェバ・ティーユ）］（サーチ）　［五感強化］（ファイブセンス）

【補正】　母の慈愛　父の加護　地属性２０％耐性

【ＥＸＰ：３６２１】　【次のレベルアップまで：１０６】

【ボーナスポイント】　３２６Ｐ

おー！拍手大喝采！

使えるのかわかんないけど、技能がいっぱいあると、それだけで

強そうだ。

「なにが強そうなんだ？」
「いや、スキルがさぁ、ボーナスポイントで増やしたら、二行になって……終わったの？」

冷静な声をかけられて、一人で興奮していたのが恥ずかしくなり、意気消沈する。

なんだか、温度差をすごい感じるよ、兄。
ちょっと面白いのになぁ―。

「ミコ。単刀直入に聞くが、なんであいつが王子で１４歳だってわかった？」
「ついでに、サブ職業、聖騎士だけど――ってか、雅兄がゴブリンの時、後でって言ったから」
「ぎゃーぎゃー、騒いでたときか」
「ぎゃーぎゃーはしてない！もういい、とりあえず、眼鏡さんどうぞ」

私は、風呂で裸になってもはずすことのない眼鏡を兄に渡す。

兄はすごーーーーく、怪訝そうな顔をしたが、大人しく眼鏡をかけると、一瞬呆けた。

「うぉう！なんじゃこりゃぁ！」

お気に入りの古い探偵ドラマの主人公顔負けの、叫びを上げた。

どうやら、ステータス画面が見えているようだ。

よかった。私の頭がいかれたわけじゃないらしい。

「俺のステータス、ジョブが、お前さんのより多い」

「よけいなお世話だっ！じゃなくてさ、ちょこちょこ弄って、スキル増やしたんだい！」

「ほほーうぅ」

と兄は唸って、ぽんと、私の肩をたたいた。

「……ステータスに振ってもよかったんじゃないのか？」

「悪かったね！それでも、ちょっと入れたの！後で職業決めてから、相談してから入れるつもりだったの！」

思いっきり反論するも、ステータスを観覧していた兄が、急に眉根を寄せた。

「くっ、剣士か…魔法使いか…聖職者は、だめだ…いや、サブ職業で…くぅう！！」

やっぱり言うと思った。
やーいやーい！って、うらやましい悩みだな！おい！

「あれ？」
「どうした？本職ゲーマーよ」
「悪かったな！専門職がサブ職で！じゃなくて」
「なんだ、盗賊よ」
「まだ、盗賊にしてないから！てか、候補は危険の少ない弓使い！」

どうやら、兄は私の職業を盗賊に決めてしまっているようだ。
まぁ、兄が剣士で前衛にでるにしろ、魔法使いで後衛に下がるにしろ、中衛は必須だから、どちらを選んでも合理的だろう。

「てか、雅兄の顔がはっきりと見える」
「ん？お前、眼鏡はここだぞ――あぁ、五感強化を取得したからじゃないか」
「あ、なるほど」

五感強化をしたから、眼鏡がないとボヤける顔が、わりとはっきりと見える。
というか、この視力だと眼鏡いらないな。

「いらないなら、俺にくれ！」

「やんねーよ！心を読むな、心を！てか、車に戻ったらあるじゃん、自分の」
「う～ん、でも同じように見えるかどうか」

兄は私に眼鏡を返しながら、度が合わなかったらしく目を揉んでいる。
私は再び、眼鏡をかけたが、裸眼と変わらなかった。

――――そして、その時だった。

精神を苛立たせるような甲高い警戒音。
ステータス画面が、真っ赤になって点滅を始めると、≪ＷＡＲＮＩＮＧ≫の文字が、出現した。

Ａｃｔ　０６．　ある日、森の中～♪

「うげっ！なんか、警告されてる」
「お前さんの敵索に、なんか引っかかったんだろうな」

数秒で警戒音は鳴り止んだが、ステータス画面は青のグラデーションから、赤のグラデーションへと変貌していた。

その上では黄色く大きな文字が点滅している。

――――ＷＡＲＮＩＮＧ。警告。

つまり、私を主点として、敵が一キロ以内に侵入したということになる。

人間同士ならば、レンチでもいいけど、多分無理。

私、死ぬよ、これ。

伝説の武器も持たせず裸の村人Ｌｖ１に、ドラゴン倒せっていってるようなもんじゃね？

「兄、任せた」

「敵のステータスがはっきりしねぇから、俺も自信ないなぁ」
「マジで？」
「大マジだ――ゲームと違って、コンテニューはないだろうからな」

いまいち自分たちの身におきていることは、現実味がないが、いつもマイペースな兄の今までになく、真剣みを帯びた低い声が、否応なしに危機感を煽る。

私はパーカーで手汗を拭うと、レンチを握りなおして、周囲を伺う。

一キロの範囲内というのは広すぎる。

相手がこちらに気がついているのか、どうかも分からないのだ。

コンテニューがない。
つまり、死んだらそれっきり、ということだ。

当たり前だ。

だが、自分の身に降りかかっていることが、あまりにも、いつもとかけ離れていて、認めたくなかっただけ。

私も兄も、ゲームや漫画が好きな分、分かっているのだ――両親や姉よりもずっと。

だから、その分、彼らを守らなければならない。

ここは、日本ではない。

自分たちが知らない世界なのだと。

これから、化け物（モンスター）と戦わなければならない、のだと。

「うん……でも、雅兄は行くんだよね」

周囲を警戒していた兄が、僅かに振り返ると、からっとした笑みを浮かべた。

「当然」

その笑顔だけで、私は高鳴る心臓が落ち着くのを感じる。

マイペースな兄で品行方正で通っているのに、彼に友人は少ない。

だが、兄は友人を、見捨てるような男ではない。

そして、あの子供を見捨てることもできずに、間に合わないとしても、彼は行くのだろう。

仕方のない兄だ。

だから、この愚妹が少しでも力になってやろう。

「ん。じゃ、一緒にいく」

たとえ、力に慣れなくても、私は彼の血のつながった妹なのだ。
彼らが最後まで私の味方であるように、私も最後まで彼らの味方なのだから。
同じ遺伝子を引いてるとは思えないほど、私は卑劣で臆病者だけど、彼や姉や、両親のように、優しくて強い人になりたいという、気持ちは嘘じゃない。
強くなりたい。
体も、心も――家族のように強くなりたい。

「おう。いいか、気は抜くな。俺が絶対が――――ん？」
「なに？」

兄がはっとした様子で、進みだした足を止めるから、訝しげに問う。
だが、聞かなければよかったと心底思った。

「なんか今の俺の台詞、勇者っぽくないか？」
「知るかっ！死亡フラグ立てろヴォケ！！」

怒鳴った私に、何の罪があろうか。

なんか勇ましい思ったけど、やっぱりいつもの兄である。

私は前を歩く兄の後頭部に振り下ろすべくレンチを振りかざした

――その時だった。

ひゅん。

と空気を裂くような音。

「いつっ！」

同時に、レンチに何かが当たるような感触。

そのまま、私の手が痺れて握力が抜けると、レンチが地面に転がった。

「ミコ！伏せろ！！」

「え、あ？」

兄の声と共に、私の頭を茂みの中に押し込む。

その視線の先から、数十メートル先から、緑色の物体が、耳を劈くような咆哮しながら3体が森を飛び出してくる。

――ゴブリンだ！

敵。放たれた矢は、私が冗談でレンチを振り上げていなければ、兄の頭を貫いていたのは――――考えると、全身の毛穴が開いて、嫌な汗が噴出してくる。

果たして、村人Ｌｖ１ですらない私たちに勝てるだろうか。

死んでいたゴブリンよりも小ぶりだというのに、生きて躍動しているゴブリンは恐ろしかった。

手にしている斧や剣は飾りでもないし、飛んでくる矢は終わりがない。

兄の舌打ちで、正気に戻る。

「足りない…――ミコ、レベルは」

怯えるより早く、生存本能が刺激されてたせいか、私は歯を食いしばった。

敵のステータスが、はっきりと表示されるが、それは自分や兄のように、大量の情報量はなかった。

ほかにも私の横に画面が浮かび上がったが、見ている余裕はない。

【ゴブリン兵士】　Ｌｖ６．

ＨＰ：８７／１１０
ＭＰ：２１／２１

【ゴブリン兵士】　Ｌｖ７．
ＨＰ：９７／１３０
ＭＰ：１９／１９

【ゴブリン兵士】　Ｌｖ６．
ＨＰ：４０／１０８
ＭＰ：２６／２６

止まりそうになる息を、懸命に吐き出した。

「右からゴブリンレベル６、７、６。ＨＰ残量、右８７、中９７、左４０」

咄嗟に――だというのに、まるで、いつもやっているネットゲームの中のように、私は兄に情報を公開する。

本来なら、兄の役目だが、兄はステータス画面が見えない。

見えていたところで、邪魔になっただけだろう。

弓を引いているゴブリンは遠すぎて、ステータス画面が見えない。
兄の行動は、迅速で迷いがなかった。
私の落としたレンチを一番左ゴブリンに投げつけると、鈍い音があがった。
遠めにも紫色の血が噴出し、千鳥足になると一度転んだ。
２体のゴブリンと接触まで、距離が短い。

【ゴブリン兵士】　Ｌｖ６．
ＨＰ：２４／１０８
ＭＰ：２６／２６

すぐさま、ステータスが変わり、左のゴブリンが目に見えて、走る速度が遅くなる。
ＨＰが直接ステータスに影響を及ぼしているのだろう。

「左、ＨＰ２４！」

私は、そこら辺の石を拾い上げると、更に左ゴブリンに投げつけた。

その間にも、遥か彼方から、もう一体いるのか矢が飛んでくる。
先につぶしたいが、ここを突き抜けていくのは自殺行為に等しい。
せめても、と足の遅いゴブリンに拾った石を投げつける。
私にできることなど、これくらいしかない。
兄ほどの強健ではないので、威力はないが、2、1、2と、順調にHPが削れて行く。
兄も拳大の石をひとつ投げつけて、6減った。

「残り、13！」

私は小石をいくつも拾いながら、眼前に迫ったゴブリンに対して、大きく後ろに下がった。
逆に兄も咆哮を上げて、金属バットを構えた。
一番、足の速かった右のゴブリンの剣と、金属バットが交錯し、火花が散った。
私は二番目にやってきた真ん中のゴブリンに連続で小石を投げつける。
やはり、1、2ポイント削っただけで、大ダメージにはならないが、集中をこちらに少しでもひきつけるには十分だった。
小蝿を振り払うように、投げた小石を振り払うと、私に向かって突進してくる。

が、なんと右ゴブリンにつばぜり合いしていた兄が力で勝り、相手をよろけさせると、その金属バットは、綺麗に真ん中ゴブリンの手首に決まった。

涎を撒き散らしながら、叫びを上げる真ん中ゴブリン。

一瞬、鮮やかな戦いぶりに、逃げることも忘れて、呆けていたが、すぐに気を取り直して、叫ぶ。

「真ん中７１、右８３！」

邪魔にならないように左ゴブリンに投げつける小石を手にしながら、戦闘を見守るしかない。

兄の一撃が、大よそ２０前後だとすると、左は一撃。
えーと、２０前後だから、えーと、えーと、右が４回――そう、真ん中５回。

が、兄の動きは予想以上に素早かった。

咆哮をあげる真ん中ゴブリンを無視し、右ゴブリンの脳天に金属バットを渾身の一発を振り下ろす。

改心の一撃だったのか、ぐしゃり、と生々しく頭蓋が砕ける音が響くと、まったく動かなくなった。
右、ゴブリンのＨＰは０になり、ステータスが消えた。

「雅兄っ！！」

しかし、兄の動きが鈍った隙を、真ん中ゴブリンの一撃が放たれる。

が、それを間一髪で交わしたが、下から伸びた斧を裂け切れずに、シャツが切り裂かれた。

もうすでに、左ゴブリンが迫っている。

私も負けじと、石を投げつけるが、決定打はない。

1、1――三つ目は、目に当たったようで、3の減少。残り、8。

しかし、真ん中ゴブリンは唯では倒れず、幾度となく兄と斧と金属バットを交えて、互いにＨＰを削りあっている。

気がつけば、兄の腕から血が流れていた。

――――ひどく、悔しかった。

力がない。

兄を救えない。

もう死にそうな左ゴブリンですら、素手では倒すことは私にできない。

周囲にある石はすでに、投げきってしまった。

真ん中ゴブリンとの鍔迫り合い。

やってきた瀕死の左のゴブリンが刃を振り上げる———その、凶刃が、兄に、迫った。

駆け出した私よりも、先に薪を真っ二つになるかのような音が盛りに響いた。

ごきゃり。

そんな音だった気がする。

兄と退治していたゴブリンの首が不自然な方向に曲がり、空中に浮き上がると、だらり、と手にしていた斧を落とす。

一瞬にして、絶命しているのが分かった。

はっとした兄が間髪入れずに、瀕死のゴブリンの一撃をいなすと、力任せに、その脳天を叩きつけ、大きく揺れて、ゴブリンの体が大地へと倒れた。

同じくして、首の折れたゴブリンが地面に転がった。

レベルアップのファンファーレと共に、その背後から、口元をゴブリンの紫色の血で染めた漆黒の毛並みの巨大な熊が私たちを燃え

るような緋色の双眸で見下ろしていた。

Ａｃｔ　０７．　熊さんに、出会った～♪

兄の身長は１８５ｃｍぐらいある。
その兄と頭ひとつ以上違うということは、２メートル以上あるだろう。

それくらい巨大な熊だった。

動物園で見たことのある熊など対比するのもおこがましいぐらいだ。
後ろ足だけで立っているせいか圧巻の迫力である。

しかも、口からはゴブリンの紫色の血をダラダラと流れている。

癖のついた黒毛と白目のない緋色の目を持つ熊は、ただ立っているだけでも、気品というか、王者の風格があり、足を竦ませる。

離れた場所にいるのに、そう感じるのだから、側に立っている兄は相当な威圧を感じるだろう。

兄は瞬時に構えたが、黒熊は動かない。
だが、視線を逸らせば、平手一発で即死するだろう。

鳥肌の立つほどの緊迫状態。

はらはらと、動向を伺っていた私だが、いささか妙なことに気がついた。

さきほど、ゴブリンが全滅した後――途中で弓が飛んでこなくなったと思ったら、いつの間にかいなかったから、逃走したのか？――勝利のファンファーレらしき音が聞こえたのだ。

ふ、とステータス画面を見ると、予想通り、最初見たときと変わらずに、青のグラデーション。

警告されていない。

つまり、こんなに近くに黒熊がいるのに、画面が赤くなっていないということは、黒熊は敵ではないということになる。

刺激しないように、声をかける。

「兄、その人、敵じゃない…っぽい」
「まさに視線を反らせば、死にそうなんだが？」

こちらに視線を向けず、兄は金属バットを構えたまま、黒熊を見据えている。
ゴブリンと戦ったせいなのか、黒熊の威圧のせいか、額から汗が滲んでいるのが分かる。

「金属バット構えてるからだと思うけど……あの、もし、私たちの言葉が分かるようでしたら、数歩下がってもらえませんか――――えっと、カルム？カルム王子」

ばっと、黒熊の大きく見開かれた――のかは、白目がないので――緋色の円らな双眸が私に向く。

黒熊の丸い耳がピクピクと動いているのが、密かに可愛い。

いや、今はそれどころではないけど。

兄に視線が戻ると、こちらを刺激しないように、のたのたと黒熊は数歩下がった。

二足歩行状態から四足を地面につけると、私を凝視している。

ひぃ、穴あくからやめて。

チキンハートには巨大熊の、獲物を狙うような視線は、厳しいんですけど。

「まて、俺には熊にみえるぞ」

「私にも熊に見えるよ」

黒熊の動きにあわせて、数歩下がった兄は、ようやく金属バットを下ろした。

「でも、そう書いてあるんだもん」

私は兄に眼鏡を渡した。

こんな風に表示されているだろう。

【カルム＝フォン＝イシュルス（１８）】　職業：聖騎士（Ｌｖ２１）　サブ職業：王子（Ｌｖ１９）

ＨＰ：２９８１／３１０９
ＭＰ：１７２／１７２

「おぉ、年が上だから兄とかか？なんで熊か知らないが…災難だなぁ」
「つーか、私たちからするとドラゴン並みの強さだね。あ、私たち、なんか――えーと、名前忘れたけど、あの子って名前なんだっけ」
「お前、ほんと興味のないこと忘れるなぁ…ゼルスター」

そんな名前だったか。
興味がないので、あっさり忘れていた。

なにか、黒熊がうがうがと訴えられてるが、さっぱりわからん。

熊から兄に視線を戻すも、首を横に振っているので、やはり三ヶ国語を話す兄も、熊言語は分からないようだ。

わかったらわかったで、ひくけど。

「あ～…悪いんだが、なにいってるかさっぱりわからん。熊語は話せないし、理解できない」

兄がそういうと、心なしか肩が落ち、がっかりした様子に感じる。
やっぱり、黒熊はこっちの話は理解しているらしい。

「で、お前の弟のゼルスターのことなんだが……」

とりあえず、兄は真面目な顔で、黒熊に事情を掻い摘んで説明した。

黒熊の弟王子がゴブリンに追われていたこと。
治療はしたが足に怪我をして、私たちの家族のところで休んでいること。
部下の人たちに、居場所を伝えに行くところで、森に残る弟王子の足跡を追っていること。

黒熊に、人語で話しかけている兄は、傍からみたらすごくシュールだ。

なんだか、御伽噺の国のようだ。

「ん～…後はないとは思うが、あれじゃないか？」
「なに？」
「話してるときに思ったんだが、よくあるだろう？後継者争いとかで、兄と弟がいがみ合っていて、殺意を抱いているところに変な情

報流しちゃった、だったら不味くないか？」

あぁ、よくあるパターンだよね。
でも、その場合って大抵、弟が第一継承者の兄の命を狙ってるって感じだろう。

ちらりと、黒熊を見ると、首を横に振っている。

どうやら違うことを主張している。

「だとしたら、呪われてる時点で被害者はこっちの王子で、あの弟王子が加害者って事になるけど、それはなさそうじゃない？ぼやぼやしてたし」
「それもそうかぁ――――逆襲って可能性もあるだろう？」
「え、あるの？」

思わず、黒熊に問うと、物凄い首を横に振っている。

やっぱり違うらしい。
うん、無表情なのに黒熊の必死っぷりが、ちょっと面白い。うぷぷぷ。

「首横に振ってるから、俺はそんなことしないぞ～の、アピールじゃない？」
「ん～～～」

兄は顎に手を当てて考え込んだが、この様子だと深く考えてない気がする。

しないよね？と話しかけると、こくこく、と頷いている。

「ま、いっか。俺たちには、王位継承権とか、まったく、関係ない話しだしなぁ」

「さっき弟王子、お友達宣言したばっかりじゃん」

「や、あれは、ああでもいわないと、あいつ自分で行きそうだっただろ？あの怪我じゃ、歩くのは無理だ。由唯のドクター…ナースストップがかかってたしなぁ」

ってことは、足の傷はかなり深かったのだだろう。

そうでなければ、姉が早々ドクターストップならぬ、看護婦ストップなどしない。

プロレス好きの姉は、男は血を流して何ぼと思っている節があり、鼻の骨が折れた程度では、タオルをセコンドに投げたりはしない。

むしろ、華々しく散れぐらいのことを、さらりと言ってのけるだろう。

にっこりと、悪意のない満面の笑顔で。

「完全なる、成り行きだ」

「さいですか」

相変わらず適当というか、懐が深いというか、めんどくさがりというか。
ともかく、黒熊をどうしようかと思っていたのだが、気がつけばのっしのっしと重量感あふれる足取りで、近くに寄ってきている。

ってか、若干、臭い。
ゴブリンの紫の血の生臭い空気が漂う。

一応、人間で言葉が通じるのだから怯えることもないだろうが、大迫力だ。

格子のない動物園か、これは。
これが3Dのテレビならば、即電源を切っている。

なにせ、四本足で歩いていても、私の顎の辺りに顔がある。

黒熊は、こちらが怯えていることに気がついているのか、伺うように上目遣いだ。
鼻先からはくぅん、くぅんと、犬が甘えるような音が聞こえる。

う、う～ん。緋色の目が、円らで、可愛いような気もしないでもないが…ちょっとでかい――いや、でかすぎるぬいぐるみだと思えば、大丈夫だろうか。

ってか、割と、毛並みが綺麗じゃないか、ちょっと触ってみたいなぁ。

「ミコ」

怒るかなぁ、激怒かなぁ。
ほんのちょっとでいいんだけどなぁ。

「ミコ、和んでいるとこ悪いが、そろそろいくぞ？」
「え、は？う、ぅおう！ごめん！」

無意識のうちに伸びた手は、見た目よりもずっと剛毛な熊毛を、もふもふしていた。

触らせてくれたお礼に、パーカーの袖で、口の端から出てるゴブリンの血を拭ってやろう。
黒熊――もとい、兄王子は成すがままだ。

寛大な男らしく、私に噛み付いたりしなかったので、ほっと胸をなでおろす。

「で、どうする、カルム王子？一緒に行くか？」

がう、と一啼きして、頷く――――どうやら、手を貸してくれるらしい。

が、ゴブリンの死体に向かっていくと、何かを手元で転がしなが

ら近づいてくる。

兄がさっき投擲した私の装備品レンチだ。

その横には、小さいあれだ。

「魔石？」

灰色がかった緑色のビー玉のようなものが、私の足元に当たる。

そういや、さっきの魔石もポケットに入れっぱなしだ。

「えっと、とっとけ、ってことじゃないか？」

こくり、と兄の言葉に頷く黒熊。

「あ…えっと、ありがとう」

相変わらず綺麗な色だ。

カラスじゃないけど、光物には目がないのだろうか、私？

礼をいって、ありがたく頂戴すると、黒熊は向かって左手の方向を、しきりに鼻先を向けて、見た目よりもずっと敏捷に動いた。

数メートル進んでは、こちらを振り返る。

まるで、ついてこい、とでも行っているかのような動きである。

「どうやら、案内してくれるみたいだな。熊って視力が悪い割には、嗅覚が聞くって言うな」

「へぇ…そうなんだ」

私は兄の言葉に頷いて、割と足の速い黒熊の背後についていくこととなった。

「とりあえず、メガネ返せや」

「あ、ばれた」

兄は、しぶしぶと、私にメガネを帰すと、黒熊の後に続いた。

Ａｃｔ　０８．　戦士と盗賊

熊を先頭に兄、私、と森に続く。

王子の血は途中で消えた。

逃げてる途中で怪我をしたらしく、血が続いていなかったらしい。

私たちは鼻が利かないから、ありがたい限りだ。

さて、ステータス画面で、戦闘ログを眺めていて気がついたのだが、私がパニックに陥りかけたときに、妙に冷静だったのは、どうやら技能が発動したかららしかった。

あの役に立つのか分からなかったゲーマ技能の『一枚の壁（クール）』である。

どうやら混乱を軽減する作用があるようだ。

兄は繰り出した五打撃のうち、二つがクリティカルヒットを出している。

これは、かなりの奇跡だろう。

ついでに、弓のゴブリンは逃走したのではなく、真っ先に援護に入っていた黒熊によって、一撃で撃沈していたらしい。

恐ろしい熊手だ。

兄の高い数値を出したクリティカルヒットの約四倍が、普通の攻撃である。

そりゃぁ、ゴブリンも一撃だよね。

なんか熊化してるせいで、基本的な能力も上がってるんじゃなかろうか。

獣人化のパターン的に。

それがなければ、私たち、特に兄は生きていなかっただろう。

改めて、黒熊が参戦してくれてよかった。

兄に掻い摘んで話すと、兄は「そうか」とひとつ頷いた。

「助かったよ。ありがとうな、カルム王子」

びく、と黒熊が驚いたように、足を止めた。

振り返ると、じっと兄を見つめていたので、聞こえなかったのかと、私も付け加える。

「雅兄助けてくれて、ありがとう」

数秒置いて、こくり、と頷いた。

黒熊は、もう口を開いても、こっちに話が通じないことは悟ったらしく、うがうがと熊語で長文を喋ることはなかったが、感謝は通じたようだ。

黒熊はすぐに進み始める。

私は戦闘ログに視線を戻して、最後に兄のレベルが上がり、魔石を回収したログが残る。

「あれ？」

違和感を感じて戦闘ログを戻すと、レベルアップしたはずの兄のレベルが下がっている。

レベルが17だったなのに、レベルが上がって、1から5になっているのだ。

ステータスのほとんどが、最初に見たよりも、全体的に上がっているのに、レベルが下がっている。

私はあわてて、兄のステータス画面を表示した。

そこで、驚きの事実がわかったのだ。

「っ、戦士？」

兄の本職が変わっていた。

サブ職業だったゲーマーがなくなり、サブ職業が上級国家公務員になっている。

魔法使いと戦士で悩んでたんじゃないの？

兄が戦士になったことを気がついたのがわかったらしく、小さくため息をこぼした。

「――俺だってな、本職を魔法使いにしたかったんだが、ありゃ、防御が紙装甲だからな」

妙に哀愁の漂う背中だ。

葛藤に葛藤を重ねて、泣く泣く魔法使いを捨てたのだろう。

いい気味――かわいそうに。ぷくくく。

魔法使いと戦士は、ステータス的に対極に位置する。

サブ職に魔法使いをするともっとも効率の悪いステータスの上げ方となり、序盤に苦しむ。

だからこそ、普通は戦士のサブ職に向かない――ということは、あきらめたのだろう。

「よし、ナイス兄。壁ファイト」

「うぐっ」

戦士の最もたる仕事は敵を打ち倒すことではない。

それは、副業といってもいい。

一番は壁。

つまり背後の魔法使いや、弓使いに敵を近づけないための壁役が本職だ。
実にじみーで、やりがいがありすぎるのだ。
兄が魔法使いになったときは、壁役は間違いなく私に回ってくると思っただけに、ガッツポーズを思わずとってしまった。

「後々考えるさ。頑張れ、盗賊」
「やだ、私は弓――――」

うが、という黒熊の促しに私たちが、沈黙する。
ステータス画面の警報が鳴り出したのは、数十秒ほど後だった。
1キロ圏内に敵。

「雅兄」
「わかってる」

低く声をかけると、兄は要領を得ているように、身構えた。
今度は、遠くから叫びや金属音が聞こえるので、はっきりと分かったらしく、気合を入れなおしているのが背中越しに分かる。
3人で（黒熊は一人でいいのだろうか？）足音を忍ばせて近づく。

あのゴブリンの血の特有の異臭が、風に乗って流れてきて、思わず顔を顰めた。

進むにつれて、数体のゴブリンの死体が転がっている。

ついでに、狼みたいなのと、巨大な緑色の塊のようなものも転がってる。

尋常ではない数だ。

眼前には未知の領域が広がっていた。

そこは――――現実（リアル）の戦場だった。

満身相違の3人の騎士を、１０以上はいるであろうゴブリンの群れが取り囲んでいる。

しかも、1人の騎士は肩に弓が刺さっており、膝をついている。

顔色もひどく青ざめていた。

それを2人がかばうような体制で、本物の戦場を知らない素人の私だったが、状況が不利であるのは一目瞭然だった。

弟王子と同じ型の鎧を着ていることから、彼らが私たちの目当ての人物なのだろう。

しかし、まだ戦闘中だとは思いもしなかった。

一番弱っているであろう矢の刺さった騎士のステータス画面を見

つめると、ＨＰの横に紫色のどくろマークがついている。
ということは、普通に考えれば。
「毒にやられてるっぽい」
言葉は少なかったが、兄は弓の刺さった人間だとすぐに察したようだ。
「残存ＨＰと、減少の速度は？」
「ＨＰ１３７――っ、早い、１０秒に１ぐらい」
いつになく険しい顔をした兄が、珍しく鋭い舌打ちをして、己の腕時計を眺めた。
それだけ、状況が悪いということになる。
え～と、１分間に６ダメージ受けるから、１３７を６で割って――
「あと２２分、あるかどうか、か」
――――早。兄、計算早。
これだから、理系は――とじゃれあう暇もなかった。

黒熊が突然走り出し、その方向に視線を向けると、彼らの騎士の後方から近づく巨大な狼へと向かっていった。

その塊に繋がる鎖を手にした2体のゴブリンがいたが、黒熊の熊手で一撃で葬られた。

勢いのまま、咆哮をあげるがまま、黒熊よりも一、五倍もの大きさもあろうかという塊に飛び掛る。

【ビックウルフ】　Ｌｖ１９．

ＨＰ：６１１／６３２

ＭＰ：２０／２３

「雅兄っ」

ゴブリンが飼いならしたのだろう。

その横にいるゴブリンよりも数倍のレベルをしている。

「ミコ。アレは、今の俺たちじゃ無理だ。こっちに集中しろ――俺たちには、俺たちにできることをするんだ」

真剣な声色の兄に、黒熊が気になりはしたが、私は頷く。

黒熊とビックウルフと取っ組み合いになると、周囲のゴブリンを巻き込みながら、すごい咆哮と音を上げて転がっていく。

「いいか、1体3分でも、全部倒すには30分かかる。間にあわない」

あの騎士は、死ぬだろう。

それに、あれだけの数で瀕死の騎士を庇いながら、1体3分で倒せるはずもない。

2人の騎士の攻撃はけん制だけで、体力を削られているだけだ。

兄にもそれが分かっているだろう。

私は唇を噛む。

目の前で、また生のあるものが死んでいく。

まだ、生きているのに――――まだ、呼吸をしているのに。

「だが毒をもってるやつは、必ず解毒剤をもってる。お前は、メガネでアイテムが何なのかわかる」

そう、背後から騎士たちを狙っている3体の弓矢をうつゴブリン。

その誰かが、解毒剤をもっている可能性が高い。

兄は苦しそうな顔をして、私の目を覗き込んだ。

「できるか」

「――――やる」

さすがに逡巡したものの、真っ直ぐに見返すと、やはりいつものように、から、とした笑みを浮かべると私の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「それでこそ、俺の妹だ。やってこい、盗賊」

「絶対、サブ職は魔法系にするんだから！職業選択」

ステータス画面の職業欄に移行して、上から二番目の、盗賊を睨みつけた。

「盗賊、決定」

――――職業を『盗賊』にしますか。　はい　いいえ

「はい！」

やけくそで、声をあげた。

ステータス画面に変動が出たのか、妙に体が軽くなったような気がする。

やるか、やらないか、ではない、やらなくてはならない――――頭の中で、誰かの言葉が浮かぶ。

昔、誰かがそういったような気がするのだが、誰なのか思い出す前に、私はレンチを片手に、ゴブリンの背後に回るべく迂回して走り出した。

一歩踏み出すと、強い加速がかかって、前につんのめる。
どうやら、足の速さが増したらしく、その感覚に体がついていかなかったようだ。

慌てて、それを調整して、身を低くして、駆け出した。

背後で、兄も走りだした気配がした。

ちらり、と振り返ると、兄の横顔は鬼気迫るものがあり、鋭い犬歯を覗かせて――笑っていた。
家族には滅多に見せることのない好戦的な一面。

負けず嫌いで、不平には容赦のない、頑固なのは母親譲りなのだ

ろう。

私にはないものだ。

数十秒後に大気が震えるような咆哮が響き、兄は金属バットを片手に、ゴブリンの群れのど真ん中に踊りだしたのが分かった。

Ａｃｔ　０９．　作戦名ハゲタカ

兄の咆哮が途絶え、数十秒。

私は弓矢ゴブリン３体の背後に回りこむことに成功した。

もともと足は速いほうだ。

特に逃げ足。

だが、戦闘中に一人で行動しているせいか、心臓は破裂しそうだし、手汗でレンチが滑る。

かといって、忍び寄る死の恐怖に対して、残念ながら技能が発動しているせいで、発狂するというほどでもない。

私は瞳を凝らして、彼らを見つめる。

【ゴブリン兵士】　Ｌｖ３．

ＨＰ：４７／８０

ＭＰ：２１／２１

【ゴブリン兵士】　Ｌｖ２．

ＨＰ：６７／６７

ＭＰ：１９／１９

【ゴブリン兵士】　Ｌｖ２．
ＨＰ：４０／６３
ＭＰ：２６／２６

幸い兄が最初に退治したゴブリンよりはレベルが低いものの、盗賊ＬＶ１（なってから数分）の私には３人を同時に相手にするのは、いくら弓兵相手に接近戦でも難しいものがある。

はっきりいって、ぼこぼこにされるのは間違いない。

解毒剤を奪って、さっと逃げる。

目標は死なないこと。

つつがなく彼らを見つめていると、レベル３のゴブリンが腰からぶら下がってる小瓶に目がいく。

中には黒緑色の怪しい液体が並々入っていた。

小さな矢印がそれを指しているが、表示は【？？？】。

あからさまに怪しいのだが、残念ながら私のレベルでは、簡易ステータスを表示させれても、敵の持ち物まで表示させることはできないらしい。

小瓶は細い麻紐のようなものでくくられており、簡単に引きちぎれるものではなさそうだ。

かといって、レンチは役に立たないだろう。

当初の目的通り、スリのように、こっそり奪ってくるのは難しい。

倒して奪うか――せめて、カッターナイフでももってくればはよかったと思ったが、こんな事態になると誰が想像しただろうか。

わかっていたなら、まず人間じゃないだろう。

瞳を伏せて、静かにため息をつく。

そこで、不意に目が入ったゴブリンの死体にはっとする。

その懐からは、あまり大きくないナイフが目に留まったからだ。

これを拝借して、あの麻縄を切るのはどうだろう。

死体を漁るなんて、不道徳的だが、人を救うためなのだから、この際、私の良心には目を瞑ってもらうとしよう。

【鉄の短剣（ショートソード）】

普通の鉄で出来た鉄製のナイフ。切れ味は普通。重量普通。

販売可能：６００　Ｂ（ビル）

安っ！

さっき、王家の秘宝をみたせいか、全然ありがたみがわかない。
販売の値段が６００ってなんだ、６００って――これが平均的な価値だとすると、王子が兄に渡した王家の品って…うん、よし、考えないことにしよう。
私はゴブリンの懐から拝借する。
う、意外に重い――――刃渡りは手を伸ばしたぐらいしかないのだけど、ずっしりとしている。
一キロはないだろうけど、想像してたより重い。
刃の部分を鞘から抜く。
両刃とも切れるように研がれているが、包丁よりも分厚い。
これで普通の表記がされているということは、これよりも重いものも軽い物も存在する、ということだ。
鉄の成分が違うのだろうか？
ともかく、今は時間が惜しいので好奇心を止める。
レンチを腰の後ろのベルトに挟んで、手に持つ。
攻撃力は当然レンチよりも上だろう。
これで、弓ゴブリンの腰からぶら下がっている小瓶を括り付けている紐を切ることが出来る。
だけど、違和感に小首をかしげる。

意思を改めて、弓の部隊に突っ込む寸前で、私は新事実に気がついた。

ゴブリンの死体を漁る。
←
【鉄の短剣】を手に入れた。

うん、まさにナイフを手にした――本当に盗賊のような真似事しているが――ってことは、だ。

ゴブリンの死体を漁る。
←
【毒消し】を手に入れられる可能性がある。

うぉおおおお、あぶなーーーーーいい！！！！！

思わず転げまわりそうになった。
勿論、死屍累々となったゴブリンのいる大地に転がらず、想像だけに留める。

あそこでつっこんでったら、無駄骨だったんじゃない？

実に、危なかった。

これ、絶対、兄は気がついていたはずだ。

こんだけ死体があるのだから、誰か一人くらい持っていても可笑しくはない。

まぁ、戦闘中にビンが壊れていなければだけど。

とすると、戦士になったことを、からかったやつの報復か、最初から私を盗賊以外にさせるきはさらさらなかったのだろう。

くっ、こんな苦境で、やり返さなくたっていいのに！！

人畜無害な振りして、ドＳめ！

お人好しそうな顔つきのせいで、一層、タチが悪いわい。

ふははは、私がいつまでも、お前の手の中で躍っていると思うなよ――って、実際、めちゃくちゃ踊らされてたけど。

はい、作戦変更。

作戦名：ハゲタカ参上。

死者の死肉を啄ばむがごとく、ゴブリンとかの死体から、解毒剤を探すことに。

うむ、割れていない小瓶を探すべし。

数十体という転がったゴブリンを前に、私はいそいそと浮かびあがる小さな矢印を手がかりに死体を漁りだした。

背後ではより一層、戦火が音を立てて激しくなっていた――が、

私は死体を漁る事に専念した。

なんか小気味よいテンポでレベルアップ音が響いているのが、ある意味恐ろしい。

兄、お前、職種変更してから、一時間もしないうちに、どれだけ強くなる気だ。

ともかく、目の前のゴブリン（死体）に集中だ。

気持ちはすこぶる悪いが、背に腹は変えられないのである。

ようやく3体目で、小瓶発見。

でも、どろ、っとしてて色が青いんですけど。

【体力回復薬（ポーション）】

リーズとハッタクルの薬草から作られた体力回復薬。効力は普通。

販売価格：１０００　Ｂ（ビル）

ちがっ！ノット体力！

でも、ないよりはましか。拝借しておこう。

さしたる重さもないので私は面倒なので、パーカーの帽子の部分に突っ込んだ。

ちっちゃい魔石も何個か落ちてるから回収。
これは、ポケットでいいか。

はい、次。

鉄の短剣、青銅の短剣、魔石、体力回復薬、魔石、魔石――――う～ん、普通の剣とか、斧は要らない。重いから。

移動速度が落ちら、簡単に死ねる自信があるよ。

8体目で、短剣二本と回復薬。

でも、これじゃないんだよな。もう。

ちゃっかり、魔石も大量に落ちてるので拝借してるけど。軽い、し小さいから。

腰のペンチの横に短剣を鞘のまま、さしておく。

しかし、パーカーの帽子にあんまり入れると、瓶同士でぶつかって割れるかもしれない。

仕方がない。
汚れるから使いたくなかったのだけど。

私は、ポケットから唐草模様の風呂敷を取り出して、二つをたてに並べてくるくると巻き込むと、そのまま背中に背負い、前で落ちないようにきゅっと結んだ。

ちらり、と腕時計を見やる。

すでに、時間は5分ほど経過している。
ここにくるまでに2分、帰りに3分を考慮しても、１０分。
漁れる死体は5分で8体。
ってことは、あと１４～6体の死体を漁ることになるが――――そうだ。弓が近くに落ちているゴブリンの死体を探せばいいのか。
体力回復薬、魔石、魔石、鉄の短剣。
レベルには微々たる差があるものの、内容は変わらない。
ん？これは？

【風と大地の腕輪】

二つの魔石のはめ込まれた銀の鎖でできた腕輪。防御力を僅かに上昇させる。
販売可能：１７１００　Ｂ（ビル）

はい、即、装備。
防御力があがるなら、それに越したことはない。
次、次。
道具に出てくる矢印を目掛けて、さくさく這う私。

ふと、弓矢を手にした死体のゴブリンに視線を送ると、その腰から、お目当ての黒緑色の液体の入った小瓶がぶら下がっていた。

【毒消し】

様々な毒を消してくれる効果のある。

販売可能：１４００　Ｂ（ビル）

「よし」

思わず、片手でガッツポーズしてしまう。

しゃがんで手にした瞬間だった。

びぃいいん。

張り詰めた糸を弾いた音と共に、背後にあった木に矢が刺さっていた。

まさに、頭があったその場所に。

放たれた方向を見ると、二体のゴブリンが、私に気がついたらしく、弓を構えていた。

しかも他のゴブリンに声をかけているらしい。

あれ？これって、絶対絶命？

Ａｃｔ　１０．　妹ですから

やば～…。

激ヤヴァなんですけども～。

なんだか、異世界数時間で戦いに放り込まれた真実子と申します。

かろうじて、木の幹に隠れたのだけれど、ちらりと顔を出そうものなら、びゅんびゅん、矢が飛んでくるんですけど――――死ぬんじゃない？私？？

なんか、銃撃戦で映画で弾のない主人公が、敵から身を隠してるっぽいんですけど。

あのイギリスの諜報的スパイの勇敢さが今、理解できる。

映画を見てるときは主人公は銃弾に当たんないだから、はやくやっつけろや、ヴぉっけ、とか思って本当にごめんなさい。

弓でもこれだけ怖いんだから、さらに速度の速い銃弾ならば、どれほど恐ろしいことか。

それはさておき、すでに、木の幹にバンバン弓が刺さってきており、剣を手にしたゴブリンがじりじりと2体も近づいてきております。

しかも、どちらもレベル3――――ＨＰは低いとはいえ、無理だ。

こっち、レベル1だし。

私も拾った短剣を投げて応戦するも、距離数メートルでは時間の問題。

短剣は最低でも、一本は手元に残しておきたい。

「――――魔石っ」

回復薬は投げるわけにはいかないので、ポケットを探せば、拝借した魔石が。

たしか最初に見たときは地系の魔法的効力があったはず。

どれくらいあるのかわからないけど、ためにしに小粒なのを一個をゴブリンに投げつけてみる。

「えいっ」

さすが私、野球好きの叔父に鍛えられたコントロールで、見事にヒット。

速度はさほどないが、審判もストライク判定をだ――――ぎゃぁあ！

めきゃ

そんな音と、耳をつんざくような悲鳴が聞こえたと思ったら、ゴブリンの足元から氷柱の逆バージョンの形をした――円錐っていうんだったけ？――石が大量に生えていた。

なんていうのだろう。

石器時代に作られた槍の先端のような歪さである。

ゴブリンは大地に臥せってしまった。

そして、ばき、と砕けるような音がして、歪な円錐は、風に吹かれ砂埃のように舞って消えた。

驚いて、戦闘ログをみる。

ゴブリンからの一方的な弓の攻撃の最後に流れるように表示されている。

＝＝＝　道具使用≪緑の魔石≫

＝＝＝　真実子の攻撃　ダメージ２８

＝＝＝　ゴブリンＢＸを倒した

よっし、なんとかなるかも。

気合を入れて、私は怯んだもう一体のゴブリンに魔石を投げつけると、同じようにゴブリンの足元から、歪な円錐が先ほどよりも大量に出現した。

たぶん、敵認識された人物の周辺無差別。
距離は敵一メートル以内。
砂になるまでの時間は約四秒ぐらい。

外側に行くにつれて、石の円錐は小さく、多分外すとダメージは小さいのだろう。

＝＝＝　道具使用≪緑の魔石≫
＝＝＝　真実子の攻撃　ダメージ３７
＝＝＝　クリティカルヒット

しかし、クリティカルヒットにもかかわらず、倒すに至らずに、私はもうひとつ小粒の魔石を投げつけると、通常ダメージであったが、倒すことができた。

そして、唐突に短いファンファーレが聞こえてくる。

＝＝＝　真美子のレベルが上がりました
＝＝＝　真美子盗賊ＬＶ１→Ｌｖ２

う、嬉しくないよ、馬鹿！と、ツンデレを発動させつつ、さっと

みれば、パラメータも少し上昇している。

しかし、多分アイテムを使ったせいなのだろうか、少しＭＰが減っている。

鉄の短剣を投げたときは減ってなかった気がするから、魔石かな？

１５減っているってことは、一回につき、５ＭＰ。

少しＭＰに余裕があるので大丈夫だろう。

え～と…今、レベルが上がって１３７－１５なので……１２２ね。

だから、えーと、えーっと…使用回数の上限は、１０回で５０だから２０回で１００。

残りが２２で、４回で、２余り。

２２以上投げつけると危ないということだ。

ＲＰＧの中には、ＨＰと同じように、ＭＰを消費すると、死亡するパターンもあるのだ。

大きさで違うかもしれないから２０回以上は投げないほうがいいだろう。

方針が決まると、私は打って出ることにした。

ゴブリンと真っ向から勝負をする気はないが、兄の元――否、騎士の所へ行かなければならないだろう。

懐から出した懐中時計を見れば、あと7分。
弓で集中攻撃されて、足止めされたのが痛かった。
しかも、直線で走り抜ければ2分の場所を、弓を交わしつつ進まなければいけない。
急がねば。
「よし」
魔石で弓ゴブリン2体と、増えた斧ゴブリンをけん制しつつ、効力が発動している4秒間の間に隣の木の陰に猛ダッシュ。
安全第一ですから、はい。
至るところに、死体が積みあがってるわけですから、隠れている間に矢印を探して、魔石を探す。
さらにレベルが上がった成果なのか、矢印が少し大きくなっている。
小指サイズが薬指サイズぐらいに…て、びみょー、だけど小さいよりはまぁいいや。

ついでにやっぱり、盗れ――取れそうなやつから短剣も回復薬もゲット。

優秀だな、私。

って、盗賊的に優秀でも嬉かないし。

盗んでない、盗んでないよぉ～、母親流にいうなら、長時間拝借しているだけで、後で返すんですからぁって感じなんですが。

相手は死んでいるので、無用の長物と、目を瞑って。なむなむ。

倍以上の時間がかかったが、さらに弓ゴブリンを1体倒し、さらに2体増えてるような感じで兄と別れた場所までたどり着く。

叫びやら、金属音の聞こえる激戦区の方向に走って、思わず足を止めた。

えっと…5…10、動いてるから数えずらい…15――あれ、いや嘘だよね??

さっきより、増えてない?増えてるよね?足元にそれなりに死体が倒れてんのに、1，5倍になってない??

「無理っ」

あのゴブリンの密集地帯を走り抜けて、辿りつけってか！

完全に兄も、毒に犯されている人も囲まれちゃってるじゃんか！！

うぉ、って弓また来た！！

背後から追ってきてるのも、しつこいなっ、もう一個、魔石食らっとけ！！

「おう――っ、遅い、ぞっ！ミコ！！っと！！」

こちらに視線すら向けず兄は、周囲を囲む3体のゴブリンの攻撃を交わしつつ、合間を縫って、必中必殺の一撃を繰り出しているあたり、尋常ではない。

ほぼ、一撃必殺。

多くて3撃以内に、1体が倒れていく。

そして、仕留めそこなったゴブリンは背後の騎士が絶妙なタイミングで仕留めていく。

彼らも必中必殺といってかまわないぐらいだろう。

騎士たちのＨＰが黄色になっているというのに、さすが剣戟は乱れることはない。

とはいっても、傷を負っている兄もＨＰは半分近く削られている――って、異様にＨＰが増えて――うわぁ！！兄、レベル上がってるし！

さっきまで、レベル４の戦士だったのに、レベル９になってるよ。

化け物か、お前は！

「待て！こっちには来るな！逃げろ！！」

ＨＰ１２１しかない若い騎士は、ゴブリンを屠りながら叫ぶ。
地面に倒れこんだ騎士に至っては、あとＨＰは４１――４０となり、死亡は時間の問題だ。

とはいえ、私、その密集地帯に行きたくない。

できることなら、バックステップして、反転したまま逃げ出したい。

そうしないのは、単純に目の前に兄がいるからだ。

あまりの激戦区に躊躇した私に、やはり聞きなれた声が、一言が投げつけられた。

「来い！」

背を向けているにもかかわらず、いつもの笑顔を浮かべているのがわかるぐらい、声も笑っていた。

つい数時間前まで、普通に平和の現代日本で生きていたはずの私の兄は、戦場のど真ん中で、確かに笑っていた。

それが、私を鼓舞するためであることは、分かっていた。

だから、私も笑っていたに違いない。

仕方がない、と。

兄が言ったのだから、仕方ないのだ。

兄がどんな時も私の味方であるように、私もまた絶対的に兄の味方なのだ。

左手に複数の魔石を手にして、右手にひとつ握り締める。

私は駆け出した。

ゴブリンの密集した、兄の側へと。

Ａｃｔ　１１．　元気、ハツラつってる？

額に刃が掠りかけた時は死ぬかと思いました。
兄が蹴りで刃の軌道を変えなかったら死んでただろうけどさ。

額が切れて、だらだら血が流れてるんだけど、痛いから生きているんだろう、私。

無我夢中で何とかやってきました。

なんとか魔石を駆使しながら、走ってきたのだが、ＭＰがごっそり半分以上も使い切ってしまった為か、なんか妙に頭がくらくらする。

しいていうなら、貧血だろうか。

騎士二人の横を抜けて、矢を受けた騎士の元へはせ参じることに成功した。
おかげで、ここに来るときよりも、ずっと安全になって、半径一メートル以内に敵はやってこない。

髑髏マークの騎士は、気絶しているらしい。
彼の頭の周りに幾つかの星が回っているエフェクトが浮かんでいる。

だが、ＨＰは１７。
なんとか、間に合ったらしい。

「面白い事、してるなっ――魔法っ、かぁ？」

この死地に殴りこんできたというのに、兄の関心はまったく別のことだった。

もう少し、労ってくれてもいいんじゃないかい？

だが、自身だってギリギリで戦ってるであろうはずなのに、よくも他人の事を盗み見できるものだと、関心すらしちゃうよ。

私は風呂敷を下ろすと、担いできた回復薬と毒消しを地面に下ろす。

背後の兄の様子は分からないが、レベルアップのファンファーレがなっているので、元気いっぱいらしい。

「魔石。範囲一メートル。効果四秒。消費ＭＰ５――――死ぬかと思った！！」

「おうっ――ご苦労さん…っと…それだけ文句がっ――言えればっ…怪我もなさそう、だなっ」

「おかげさまでねっ！」

とりあえず鼻を摘んで髑髏付騎士の口に、毒消しを流し込む。

咽ながらも三度の嚥下を終えて、髑髏マークは消え、ＨＰは１６で停止したが、文字の表示は赤くなっているところを見ると瀕死なのだろう。

うっすらと、騎士が目を開けたので、回復薬を口に突っ込む。
一本を嚥下して、口を開いた。

「うっ……あ、なた、がた、は」
「後。これ飲んで、さっさとゴブリン倒して」

飲んで、元気がハツラツになればいいさ。

きっと彼らにはわからないであろうネタを腹に抱えて、上半身を起こした騎士に、まるでわんこ蕎麦を注いでくれるおばちゃん並みの合いの手で、次々と渡していく。

いまだ戦いの最中であることは察しているようだ。
茫洋とした表情が、すぐに引き締まった。

３本目で、ようやくＨＰが１００を超えて、戦っている騎士よりも体力だけは勝った。

ようやく私は息を吐いて、額から流れる血をパーカーで拭った。
めっちゃ痛い。痛い、痛い。

兄のせいだ。後で、覚えてろよ！とりあえず、私のパーカー弁償しろ！

「失礼、お借りする――――っ」

騎士は手早く肩口の鎧を外すし、腕に刺さった矢を乱暴に抜くと、膝におきっぱの風呂敷で、器用に傷を縛り付けた。

ゴブリンの死体よりも、生々しい人間の朱色の血のほうが、リアルだった。

めくれあがった肉と、伝う血のほうがよっぽど、私を恐怖させる。

「チャイラ、ハーン、交代で下がれ」

「はっ！」

「了解で～す、と、お先」

軽い返事の騎士がゴブリンとの剣戟を弾き、バレリーナのようにターンした。

そして、まるで最初から打ち合わせされていたかのように、隊長格らしい騎士（毒抜き）が同じゴブリンの2撃目を弾いた。

凄い。熟練のなせる技だろう。

滑らかな動きに、呆けてしまった。

騎士（軽め）が剣を地面にさして、そのまま片膝を付く。

鎧を中心に淡い光が収束し、よく分からない模様が騎士（軽い）を中心に広がった。

切れていた息が徐々に整えられて――なんと、少しだけとはいえ体力が回復した。

＝＝＝　チャイラが【騎士の黄昏】を発動しました
＝＝＝　ＨＰの回復速度が上昇します

戦闘ログにそう流れて、思わずポツリと呟く。

「騎士の黄昏？」
「ん～～？知ってるの？博学だねぇ。さっきの走りも見事だったよ～」
「あ、はぁ……一本、いっときます？」

と地面に転がってた回復薬を差し出すと、元々笑っていたが、さらに、にこ～と笑顔を浮かべる。

あ、なんかこの人、苦手なタイプ、その２だ。
チャラい感じに鳥肌が。

名前もチャラチャラしてる感じだ。

「あ～よかった、実は狙ってたんだぁ。ありがとう――ハーン」

ＨＰが１５ほど回復したところで、騎士（チャラい）は立ち上がる時間に飲み干して、ＨＰが３０回復されると、ハーンと呼ばれた騎士が、ゴブ

リンを蹴り上げると同時に、場所が入れ替わる。

「失礼する」

ざしゅ、とやはり剣を地面に刺すと、片膝をついて、じっとしている。

＝＝＝　ハーンが【騎士の黄昏】を発動しました
＝＝＝　ＨＰの回復速度が上昇します

やっぱり、騎士専用のスキルなのだろう。
騎士（固め）を中心に魔方陣っぽいものが展開される。

戦闘では使っていた様子がないが、この体制になると回復補助をしてくれるらしい。

転がっている回復薬を地面から拾い上げて「どうぞ」と差し出すと、かなり鋭いまなざしで睨まれた。

怖っ！目つき悪！

思わず、びくついてしまったのだが……

「感謝する」

と呟いて、立ち上がりながら飲むと、ゴブリンの群れに突っ込んでいく。

今まで完全に押されぎみだった体制が、逆転を始めていた。

思うに、一人の騎士を庇いながら、戦い続けたせいで、消耗が激しかったのだろう。

毒を受けていた騎士が、素人目にも一番の剣の使い手であり、レベルが高かった分、ゴブリンの量よりも、上回っているようだ。

私を庇いながらも、なお倒す数は激増している。

いやぁ、突っ込んできたと気楽だ。

かがんでるだけでいいし。

「ミコっ、お兄ちゃんっ、にはっ？」

「あ～…うん」

地面に転がる回復薬を手にすると、ポケットから、魔石を3つ取り出して、兄の頭上を越えさせると、敵対しているゴブリンらへんで発動させる。

そうして怯んだ隙に兄は振り返り、私の投げた回復薬を受け取って一気に煽った。

「ふぁいとー」

気の抜けた声をかけてやると、兄が肩を揺らして笑った。

「いっぱーつ！！」

うむ、どんな時でも、兄は兄だ。

４秒きっかりに魔石の効果が切れて、突進してくるゴブリンをいなして撃退を始めていく。

兄も騎士（毒抜き）が加わったことで、相手にしている人数が減ったようだ。

私も、時々弓ゴブリン目掛けて、魔石を投げる。

何体目だが分からぬゴブリンを打ちのめすと、再びファンファーレが鳴り響く。

＝＝＝　ゴブリンＤＹを倒した
＝＝＝　雅美のレベルが上がった
＝＝＝　雅美　戦士ＬＶ１０→Ｌｖ１１

続いて、ファファーとさらに短いファンファーレが鳴り、戦闘ログに、一文が加わった。

＝＝＝　雅美はスキル　【クロスエッジ】　を覚えた。

「クロスエッジ？」

魔石を投げる手を止めて、兄のステータスを表示させると、新たにできたスキル欄を表示させる。

よく見ると【クロスエッジ】の前に、ひとつスキルを覚えているようだ。

【剣修練度向上】と書いてあるところを見ると、こっちは戦闘用のスキルではない。

たぶん、戦士を選択したら必然的に貰えるスキルみたいなものだろう。

【クロスエッジ】を選択する。

「雅兄」

「っ、なんだ？忙しいからっ…3時のおやつなら、後にしろっ！」

「今日はワッフルがいい――って、違っ！」

無駄口の多いやつだ、まったく。

っつーか、こっちの言葉数を倍で返すくらいなら、きりきり働け。

「スキル覚えてる。剣で十字を切る、だって。ＭＰ消費は――」

バシュっ

空気を切り裂くような音。

説明が終わる前に兄が一瞬の空白にバックステップすると、正面のゴブリンに向かって、ぼこぼこにへこんでいる金属バットで十字を切っていた。

撲殺系の武器であるはずなのに、発動されたらしい【クロスエッジ】を食らったゴブリンは紫色の血飛沫を上げていた。

「…――３０だって」

「こりゃいいっ――後っ、何発だっ」

えーと、兄の今のＭＰの残りが、２７６だから、１００で3回で――…っていっている間に一発撃ってるし！

あぁ、まって、計算できな――。

「質問がっ、悪かったな！俺の残りの、ＭＰはっ？」

「２４６」

「後、７回か！」

といっている間にも、一発。

戦闘ログを確認すると、一発でなんと６６、６９である。
レベルの高いゴブリンも、ほぼ一撃である。

ＨＰの削りあいの拮抗状態でもあっさりと、兄は覆しつつある。

つーか、騎士たちも専属スキルがあるのに【騎士の黄昏】以外、まったく使っていない。
なんか、コダワリみたいなものがあるのだろうか？

まぁ、さておき。

ファンファーレが響き、戦闘ログを確認する。
お、私も魔石投げていたから、地味にレベルが３になりましたよ。

まぁ…盗賊なんですけども。

Ａｃｔ　１２．　戦闘終了

「あ～…年には堪える」

あんた、まだ２５歳でしょうが。

地面に座り込んだ兄に突っ込みを入れたかったが、人目があることを思い出して自重する。

つっこみ的な視線だけ送っとくと、兄は気が付いたらしく、ヒラヒラと手を振った。

「いやそうだけど、マジで疲れてんだよ。へろへろ――ミコ、お前は怪我ないのか？」

こくり、と頷く。

ＭＰを使ったせいか、ちょっと頭が重くて、ふらふらするが。

肉体的なダメージはせいぜい、掠り傷で、兄ほどの大きな怪我はない。

兄はボロシャツがところどころ切れているし、紫色の血で奇妙な斑模様を描いているようだ。

「ん、よろしい。じゃ、兄さん背負って帰ってくれ」

「野たれ死ね」

誰が背負うか。私が、潰れるだろうが。

だがＨＰ表示が黄色くなってるのは事実だ。

まぁ、散々レベルが上がったので、元々の体力が尋常じゃなくなってるけど。

仕方なしに、パーカーの帽子の部分にストックしていた最後の一本である回復薬を投げると、「ほんと、不味いんだよな、これ」とぼやきながらも、飲み干した。

兄のＨＰ３０が回復する。

それでも気休めでしかなかったようで、黄色のままだ。

「まずーい、もう一杯」

お決まりの台詞に、無視を決め込んで、回復薬を探す。

最終的に、レベルが１３になった兄のＨＰは９００近くあり、当初の倍以上ある。

ちょろちょろと、ゴブリンの死体の山を散策しながら、見つけた戦利品である【体力回復薬（ポーション）】をぽいぽい投げる。

うーむ、血の海というのはこういうことだろうか。

紫の血だけど。

しかも、臭い。血の匂いではないが、臭い。

兄ほどではないが、私もレベルが最終的に5になったためか、矢印も親指なみの太さがある。

うん、微妙な変化だなー。

「ん、オッケー」

連続6本近く飲み干して、３００近くなる。

黄色からは脱出したようだ。

私はもう少しちょろちょろして、回復薬を拾うと、まだ周囲を警戒していた騎士（毒抜き）と目が合った。

兄には強めに投げつけていたが、騎士には取りやすいように弧を描くように投げる。

騎士（毒抜き）は少し驚いたように受け取った。

「――よいのか？」

「あぁ、いいんじゃないのか？ゴブリンは、もう必要ないだろうしな。俺は岸田雅美。ファーストネームが雅美で、ファミリーネームが岸田。あっちが真実子」

「リシギャー殿」

だから、誰だよそれ。

さすがに兄が、苦笑を浮かべる。

「すみません、サミィでいいです。サミィ＝キィシガ」
「では、サミィ殿」

って、サミィだと一発で言えるんだ。
どうゆう翻訳機能がついているんだろう、私たちって。

「私はジークホーク＝アルケルト。イシュルスの騎士だ。赤毛がチャイラ。茶毛がハーン。このたびは、ご助力感謝する」

ジークホークと名乗った一番偉いらしい騎士（毒抜き）が礼儀正しく頭を下げる。
それに対して、兄は気にしていないと、ヒラヒラ手を振る。

「ま、困ったときはお互い様だ」

と、出来立ての岸田家訓を口にして茶を濁す。

よっこらしょ、と相変わらず爺くさい掛け声で兄は起き上がると、私は二本目を騎士（目つき悪い）に投げると、ほかの方向を向いていたのにもかかわらず迅速に受け取った。

騎士（毒抜き）を困った様子で見ている。
なんだろ？死体から奪った回復薬なぞ、飲めるかヴォッケとか言うきか？
さっき飲んでなかった？緊急事態のみ飲む、とか？

「あ、はいは～い、俺も欲しい――って、あぶなっ！」

拾った回復薬を騎士（チャラい）には強めで投げつけるが、あっさりと受け取りやがった。
ちっ。勢いで、割ればよかったのに。

「ありがと～。でも、なんか俺だけ扱い悪くない？」

その礼に頷いて、ちょっと探す範囲を広げて、物色を続ける。
騎士（チャラい）はまるでコーヒー牛乳でも飲むかのように、腰に手を当てて一気に飲み干した。

「悪いなぁ、ミコは人の好き嫌いが激しくてな。回復薬寄越してるから、感謝してるはずだ」
「そーなんだぁ。お兄さんの剣の腕も、荒削りだけど凄かったね。途中で、なんだっけ、くろすえっじ？だっけ、威力が半端ななないねぇ。冒険者かな？」

思わず、私は噴出す。

荒削りどころか、数時間前まで、戦士ですらなかった人間なのだから、仕方がないだろう。

これで冒険者なら、誰でも今日から冒険者である。

「笑うな、ミコ。仕方がないだろ、剣なんて握ったことないんだ――俺は、冒険者じゃない」

「ま、まて、お前、剣を握ったことがないのか！？」

これには、無言を貫いていた騎士（目つき悪い）が声を荒げる。

兄はヒラヒラと手を振って応える。

「ないない。俺の国は平和だから、あんまり命のやり取りなんてしない。真剣なんて手にとる機会すらないぞ。ここに来る前に襲われたんで、仕方なく応戦したのが初めてだ――金属バットで応戦したから、剣は握ってないことになるのか？」

「――……今日が、初めて、ということか」

「なんという、規格外な」

あ～…兄チートだからね。よく聞くよ、その台詞。

「えーと、冒険者じゃないってことは、なんでここら辺に来たの？

ザーロ神殿目当て？」
「ざーろ神殿？」
「違う、みたいだね？」

兄が眉根を寄せると、騎士（チャラい）は察したようで小首をかしげた。

「俺たちは、あんた達を探していたんだ」

兄は首から下げていた弟王子から譲り受けた【イシュ加護の純銀羽の一枚】を取り出した。
騎士（目つき悪）が過敏な反応をしてみせる。

「そ、それは！！」
「王子の？」
「ん、ゼルスター王子が怪我して」
「王子、王子は無事か！」
「足に怪我して動けないが、命に別状はないと思うが、手当てはした」
「そ、うか」

声を荒げた騎士（目つき悪）は、詰めた息を吐き出して、額に手を当てた。
騎士（チャラい）も騎士（毒抜き）も安堵の色をみせたのだから、よほど慕われている王子なのだろう。

まぁ、悪い子には見えなかったが。

「俺の家の車で保護してるんだが、あんた達に場所を伝えて欲しいといわれてなぁ――――まさか、まだ戦闘中だとは思わなかったが、ははは」

ははは、じゃない！死ぬかと思ったよ！！

レンチ投げたろか。この兄。

今なら、戦闘の傷と偽装できるんじゃないのか？

「じゃ、王子の所に案内してもらってもいいかい？」

「あぁ、ミコ――レンチは止めろ、レンチは――何本か、王子に」

私はくるり、と背中を向けて、すでにパーカーの帽子に五つほど突っ込んだ回復薬を見せる。

ちょっと重みで首が絞まるけどね。

というか、ポケットがすでに魔石と戦利品でパンパンなのだ。

よしよし、といわんばかりに、頭をポンポンと撫でるが、むかつくので腹に一発拳を入れようとしたが、すげなく兄に受け止められてしまった。

くっ、無駄に能力が高くなりすぎて、こんな至近距離でも、あた

らないなんて。

仕方なしに、ゲシゲシと足を蹴ってみるが、ＨＰが減る様子はない。

むぅっ…頑丈すぎやしないか？

「よし、じゃぁ、いきますか」

それを合図に、一番最初に兄が進み、その後を私、騎士達と続いた。

Ａｃｔ　１３．　異邦人と騎士

一番前を歩きながら、兄が事情をさっくりと説明する。

道に飛び出してきた王子にびっくりして追っていたらしいゴブリンを跳ねて倒したこと。

王子は全身傷だらけで、足を怪我したこと。

医者ではないが、看護婦が手当てをしたので、多少は安心してほしいということ。

剣は折れているし、動けないのでワゴン車においてきて、逸れた仲間を探す役目をかってでたこと。

命を救ったお礼に【イシュ加護の純銀羽の一枚】を貰ったこと。

騎士たちの所まで来るときは、２０分ぐらいかかったから、帰り道も時間がかかるだろう。

「あのさ、色々、聞きたいことあるんだけど…」

おおむね間違いのない話を沈黙して三人は聞いていたが、背後で騎士（チャラい）が少し困惑を滲ませた音で疑問を発した。

「まず、『くるま』ってなに？『わごんしゃ』って、馬車、なのかな？」

え。と私は目を丸くして振り返った兄と顔を見合わせた。
そして、兄は「あ～」と間抜けな一音を発しながら、指先で顎を撫でる。

そう。あまりの事態に、自分たちが異世界に来ている（らしい）ということを、私たちはすっかり失念して、自分たちの感覚で話を進めていた。

当然、騎士が徘徊する時代に、ハイテクノロジーである車が存在するはずもない。

世界でも自動車が発明されたのは１９世紀末という話だから、この世界の文明は以前のものとなる。
ここが地球と同じ発達をとげている可能性としての話で、正確ではないだろう。

「自動車、といってもわかんないよなぁ…」

兄が困ったように、説明のために、頭を回転させているようだ。
当たり前にあるもののほうが、説明が難しい。

「馬を使わない、鉄製の荷馬車なんだ。自動で動く荷馬車、半自立型の移動手段…というか。ワゴン車は、その車の種類だ」

うん、よくわからん。
なんだよ、半自立型の移動手段って。鉄製の荷馬車ってどーよ。

やっぱり、騎士（チャラい）が興味深々で食いついてくる。

「馬を使わない荷馬車なのに、人を乗せて走るってこと？牛とか狼とかでもなく？」

むしろ、牛とか狼も馬車にしてるんだ。

そっちのほうが凄いよ。

馬車はどっかのテーマパークとかでしか乗ったことがない。

それも、物凄い遅いやつしか。

「まぁ、大まかにいうとな。馬の代わりにエンジンっていう、原動力があるんだが、そいつにガソリンを入れて、こちらで操縦して走らせるんだ――見たほうが、早いだろうし、それは後々説明するよ」

納得がいかないようで、その話を引っ込めたが、騎士（毒抜き）が、根本的な質問をする。

「見たところ、ここらの出身ではないようですが、貴殿らは、どちらからいらしたのだ？」

顔立ちが完全に違うしね。

外人と日本人ぐらいの差があるよ。

「日本ってところからだ」

「に、ほん？」

あっさりと、兄は答えたが、騎士（毒抜き）は、たどたどしく鸚鵡返しする。

やはり、この場所には日本がないのだろう。

パターンとしては和国とかで、侍の時代が存在するとかかな？

逡巡した騎士（毒抜き）は、すぐさま聞きなれない呪文の羅列を口に出した。

「――……ハムビラ、ショーディス、タクラ、コエーフチリア、チナ、ロローズのこのどれかに聞き覚えは？」

兄も私も、小首を傾げて、騎士（毒抜き）を振り返る。

呆けた表情の私たちが理解していないことを察すると騎士たちは困惑げな顔を返してきた。

それに、兄が察したのか口を開く。

「その様子だと、普通なら誰もが知っていること――話の流れからすると、国か？」

「近隣の大国と、この大陸の名前です」

そりゃ、私たちが知るわけがない。

今、自分たちが、いるのがどこなのかも分かっていないのだから。

「逆に聞くが、アメリカ、イギリス、フランス、中国、ロシア、オーストラリア、地球、とこの何かに聞き覚え、あるか？」

誰もが首を横に振る。

分かっていたとはいえ、がっくりと肩を落としてしまった。

兄も、小さく息を吐いた。

「そっか。というか、そもそも、ここはどこなんだ？」

「チナ大陸の西方のイシュルス国付近の、静かなるイシュルスの森です」

「イシュルスの森、か」

「いえ、静かなるイシュルスの森です。街道の反対側が叫ぶイシュルスの森となってます」

……どっちも変わんなくない？っつーかなんで、似たような名前付けるわけ。

静かでも叫んでも、どっちでもよくない？ってか、街道で左右に別けないで纏めてイシュルスの森でいいんじゃない？

「あ、うん、静かなるイシュルスの森ね」

兄も、どっちでもいい、と思ったようで、かなり投げやりに答える。

「で、街道をいけば、国に入るということか」
「王国には続いていますが、この辺りからでしたら徒歩では、最低でも丸二日はかかります。女子供がいるのでしたら、三日。馬を休ませながら走って、一日と半日いったところでしょうか」
「ん～…車で3時間かかるぐらいか」

理数系である兄が、どうやら頭の中で計算したのなら、間違いないだろう。

しかし、今まで6時間近く走ってきたのに、さらに3時間移動となると、体に堪えるものがある。
私は寝てただけだけど、彼ら車に乗るなら、絶対寝れない。

「さ、3時間？その『くるま』とやらで3時間で着くのですか？」
「距離で１８０キロぐらいだろう？時速６０キロで走れば、そのくらいでつくはずだ。道が悪いから、もう少しかかるかもしれないが」
「3時間…3時間で…」

ぶつぶつと騎士（目つき悪）は青い顔をして呟いている。

親切にも彼らを新幹線に乗せてあげたい、と思ったのは私だけだろうか？

きっと、面白い反応が返ってくるだろう。

私も、ロープウェイにはじめて乗ったときは、こんな風に青ざめて、うろたえていたのだろう。

姉が楽しそうに私を無理やり乗せた気持ちがわかった。

「その、失礼だと思うのですが、リョケンはお持ちか？」

「リョケン？なんだそれ？」

数秒の沈黙の後、困った様子で騎士（チャラい）が代わりに答える。

「リョケンってのは、自国で発行されて書類で、ほかの国に入国の際に必要な書類なんだけど、そんなの持ってない？？」

「リョケン、あぁ、旅券か。パスポートだな。持ってない――というか、俺たちも事情を把握してるわけじゃないが、この大陸のものじゃない。俺たちは迷子、なんだろうな」

ふぅ、と気だるそうなため息と共に、兄が『どうしたもんか』と珍しく弱弱しく吐き出した。

きっと、両親と姉の説明に骨が折れるだろう。

私たちだって、ゴブリンとの戦闘に、巻き込まれていなければ、完全に理解するのは、だいぶ後になったはずだ。

「ま、お前さんらは国まで送り届けるから安心してくれ。そこらは後で家族会議だな」

その弱弱しさを霧散させて、兄がカラッと答える。

まぁ、考えてもしょうがないし、どちらにせよ、後々考えなければならないけど。

「は、はぁ…ありがとうございます」

それよりも、怪我人が優先だ。

いくら、回復薬で体力が回復しても、怪我が完治したわけではないのだ。

王子もそうだし、騎士達もゴブリンとの長期戦で、みるからにボロボロである。

先ほどの矢が刺さっていたところだって、姉に見せないと。

んん??…あれ、なんか、忘れてるような?

なんか、こう、大事なことだったような気もしなくもなく――…

……、……。
……？
……！

「あっ」

ポン、と私は手のひらに拳で打つ。
自分には見えないだけで、頭の上に電球マークに光ったエフェクトがあるかもしれない。

「雅兄、熊」
「あっ！ヤベ…完全に忘れてたな」

兄の頭上には、黄色の巨大な『！』マークのエフェクトが出現する。
珍しいことに兄も、気が抜けて完全に忘れていたようだ。
まぁ、激戦だったからなぁ。

「――――っ熊、ですか？」

急に背後の騎士たちの気配が変わった。
なんだか、妙に殺気立っているような感じがして、私たちは振り返る。

騎士達も足を止め、騎士（目つき悪）に至っては、警戒が増して、剣の柄に手までかけている。

「そうそう。お前さんらに突っ込むまで一緒にいたんだが、馬鹿でかい狼が出てきてな。そいつに突っ込んでったまま、置いてきちまった」

うん、完全に記憶から消え去っていたね。

だが、勘だが、ビックウルフよりは、熊のほうが強いような気がする。

なにせ、ゴブリンに、熊手一撃で撃沈させてたから。

「お前さんらの所の王子だろ、カルム＝フォン＝イシュルスってのは――なんで、熊なんだ？」

「「「は？？」」」

びゅうぅぅ、と強烈な風が吹いて、目が点となったような間抜け

面で、騎士達が固まった。

Ａｃｔ　１４．　滑らかな舌

「――ま、待ってくれ」

小首をかしげる兄と私。
アホ面の騎士達。

長い沈黙を破ったのは、騎士（毒抜き）で、片手を挙げて、兄を制する。

「カルム第一王子が黒熊だと、幻聴が聞こえたのだが？」
「僭越ながら、私にも聞こえました」
「俺もです～」

私と兄はお互いの顔を見合わせて、なんだか噛み合わない会話に挑むことになった――というか、兄（単体）がね。

私のコミュニケーション能力の低さを舐めるなよ…って、自慢にもなりませんが。

「いや、貴方の耳は正常だぞ。事情を聞いたのは、俺なんだが？」

兄は片方の眉根を器用に寄せると、顎を指でなぞる。

「あ～…お前さんら、もしかして、カルム王子が、熊になっていることを知らないのか？」
「何を言うっ！その黒熊は、カルム王子を殺した張本人ではないか！！」

激昂した騎士（目つき悪）に驚いて、私は思わず兄の後ろに下がる。

まだ剣を抜いていないだけ、理性が残っているようだが、騎士に初心者盗賊が適うはずもない。

こわ～…超、こわ～。
むやみやたらに怒鳴る人、苦手だし。

「ハーンさん、悪いんだが、落ち着いてくれるか。ミコが怒声に驚いてる」

っつーか、びびってるんですけど。
自分、小心者ですから。

「ハーン、下がれ」
「っ、く」

ぎり、と唇をかみ締めると、騎士（毒抜き）の言葉に忌々しそう

に最後尾へと戻った。

んん～…話を整理すると、その第一王子が死んでいることが前提であり、黒熊が殺害した犯人の有力候補ということなのだろう。

「ちょーっと、いい？」
「なんだ？」
「なんで、黒熊が王子だって思ったの～？」

先ほどの騎士（チャラい）も笑みを潜めて、真面目な顔で兄と向き合う。

どうやら本当に、彼らは熊が王子だとは知らなかったみたいだ。
というか、ファンタジー世界だから何でもありだよね、っていう考えが、違ったのだろうか？

獣人とか普通にいそうでしょ？
魔石あるんだから、魔法あるんじゃないの？

なかったら職業一覧にはのらんでしょ。

「いや、順を追って話そう。俺が、お前さんらの所に突っ込む前にゴブリンと一戦したというのはいったな？」
「うん、きーたよ」
「その時に、2体同時に相手をすることになって、一撃くらいそうになったところを助けてもらった。実際、俺は普通の熊だと思って、戦闘体制だったんだ」

見た目には普通の熊だったしね。
戦いになってたら、戦士レベル5だった兄は、熊手で撃沈していただろうけど。

「だが、熊は襲ってこなかった。睨みあいになったんだが、こいつが意思の疎通を試みたら、普通にこっちの言葉が通じたんだ。まぁ、さすがに熊語は分からなかったが」

いや、普通の人は分からないから。
分かったら、軽くひく。

怖いよ、兄がうがうが言って、普通に熊と喋ったら。

騎士達と、兄がこちらを振り返り、僅かに目配せ。
黙っていろという合図だが、他人と会話するのはしんどいので大歓迎である。

っつーか、さっきから私、ほとんど喋ってないし、あははは、ダメダメ人間……ふぅ。

「んで、俺が王子から貰ったネックレスと、熊のネックレスが同じだったから疑問に思って、色々質問したってところかな」

どうやら、眼鏡の件はハショッたらしい。

まぁ、いいものだしね。くれーとか言われても、やだーっていうけど。

「では名前は？なぜ、この国を知らない貴方が、王子の名を？」

おっと、鋭い突っ込みです。

兄、大ダメージ。

爽やかな笑顔のままで、顔にはほとんどでてないけど、困っているらしい。

「それは、こいつのちょっとした特技をもっているからさ」

ぽん、と兄が無責任にも私の頭を叩いた。

完全なる責任転換である。

「特技、っていうと？」

「人様の名前と年齢を当てられる程度のな」

私が睨みつけると、兄が仕方がないだろとでもいいたげに、軽く肩を竦めてみせて、傍観者の私を巻き込みやがった。

つまり、聞かれても、名前と年齢以上は答えるなということだろうか。

私は慌てて、３人のステータスを表示させる。

「ならば、私の年齢は。二人の苗字と年齢を言えるのかね」
「３２才。チャイラ＝アマデウス、２６才。ハーン、苗字なし、２２才」

兄の背中から少し顔を出して、ステータスを読上げると、騎士（チャラい&目つき悪）が驚きの顔をして、目を見張っている騎士（毒抜き）を見つめる。

「……ジークの旦那、意外と若かったんですね」

ごほん、と咳払いで茶を濁したが、騎士（毒抜き）は、どう考えても四十台の貫禄がある。
一応、正解はしたが、全面的に信頼した、というわけではなさそうだ。

そりゃそうだ。

信頼したら、したで、逆にこっちが色々疑っちゃうって。

「仮にそうだとして、なぜ呪われている、と？」
「え？あんたらの世界じゃ、人が熊に簡単になるのか？」
「獣人ならば、稀にいると聞きますが、王子は違います。だから聞いているのです」

「いや、人から熊になるんだから、全面的に呪われているのかと思っただけで、他意はないんだが……」

はい、嘘ー。

さも、俺の思い込みだったんだ、という空気を漂わせているのだが、嘘ですよ。

兄はもっと美形だったら、アカデミー賞とってたかもね～、ぐらいの俳優ばりの演技力である。

人の良さそうな好青年風だから、信じちゃうんだよね、普通の人は。

誰に似たんだかわからないけど。

彼らも、戸惑いつつ信じかけているし。

あぁ、ここに口三寸で丸め込まれてる犠牲者が、増えていく。

身内ですら、時々丸め込まれるから。う、うぅ。

「きっと最初から俺らのことを知っていたんですよっ」

「だが、旦那の名前は、知っててもも、年齢、俺らですら知らない情報だよねぇ。たぶん、団長くらいしか知らないだろうし」

ぐ、とつまった騎士（目つき悪）。

「俺は、こいつを、信じない」

って、何故か睨まれる私。
だから、怖いんだって、その目つきが。

それにさ〜、胡散臭いのは、どう見たって兄でしょうが。失敬な。
後は別に信じられなくても、赤の他人なので、痛くも痒くもないのですけどね〜。怖いけど。

「ハーン」
「ですがっ」

どうやら、騎士（毒抜き）に、騎士（目つき悪）は、頭が上がらないらしい。
やーい、やーい、もっと言ってやれ騎士（毒抜き）。

「もし、彼らの言うことが本当ならば、我らは、最初から思い違いをしていたのかもしれない。ゼルスター王子にもう一度話を聞く必要がある」
「そういや、王子、殺された場面は見てないっていってたね」
「あぁ、遺留品から、我らが勝手に推測しただけだ――言われてみれば、王子の純銀羽の一枚は、見つかっていない。熊が、我らを襲ってこなかった理由も納得がいく」

なんか、やや込み入った事情があるらしい。
私達としては、ただ拾った怪我人の保護者に引き取ってもらおうと、呼びに来ただけだから。
赤の他人のお家の事情まで、面倒なので別に深入りしようとは思わな――――

「ふぅむ、聞く限り、込み入ったじじょっ、いて、いたたっ」

――って、一歩踏み込んじゃった、兄！！
慌てて背中をバンバン、叩いてとめる。
うち今、異世界来たって大変なんだよねの、真っ最中でしょ。
家族会議連発の緊急事態なんだよ？
わかってるんですか、この兄め。
これから、両親と姉に事情を説明して、帰還に向けて皆頑張ろうね～的な流れになって、大変なことになるんでしょ！
姉は現代っ子だから、スルーするかもしれないけど、両親は説明するのも難しいんだよ？！
んでもって、なんかこう試練とかクリアーして、帰るんでしょ？！
王道のパターン的に。

いや、家族全員って時点で、王道じゃないなぁ……うん。

ともかく、忙しくなるでしょ！

私、二週間後にも学校始まってるから！

騎士達（あっち）もゴチャゴチャしてるけど、こっちも大変でしょうに。

という思いを込めて、さらに叩くと、兄が一歩下がって、私にアイアンクローで距離をとる。

「ぎゃっ！」

前よりもずっと馬鹿力になったせいで、めちゃめちゃ痛いんですけど。

割れる！頭蓋骨割れるから！！

「いや～でも、ほら、なんとなーく、関わっちゃたし」

何度も言うが、その場の勢いとか、ノリで、家族を巻き込むんじゃないよ！

あーた、忘れたとはいわせんぞ！

そのノリのせいで、地元の暴走族４０人ｖｓ岸田家一家５人、みたいなデスマッチ的な空気になって、死にかけたんだぞ…そう、主に私が！

それに、あっちは緊急事態で、生死にかかわるほどじゃないでしょ？
うち、明日の生活も大ピンチって感じなんだからね。

「ほうっておくと目覚めが悪いだろ――――って、まぁお前はいつも寝起き悪いけど、あっはは」

あっはは、じゃないわい！話逸らすなっつーの。

姉に説明しようものなら『死ね』って、止められなかった私の眼鏡に指紋つけるに決まってるよ！
油脂つけて、嫌がらせするんだよ！

がたがた、ぶるぶる。

眼鏡拭きすら与えられず、視野に常に指紋がちらついている。

あぁ、考えただけで恐ろしい。

って、あれ、なんか見覚えのある形が遥か彼方に見えるような、見えないような――…黒の塊が。

「そんなに睨んでも――――？どうした？」

観客がいても主役たちがいないのでは話にならない。

私は、影の方向に指を刺す。

「本人に、聞けば…いいんじゃ、ないですか？」

やば、年上だった。

敬語が遅れちゃったけど、まぁ、いいか。

はっとした様子で、騎士達が私のさした指の方向に視線を送り、兄も同様に目を凝らす。

そこには、遥かな木陰から顔を覗かせる黒熊の姿があった。

Ａｃｔ　１５．　熊王子とクイズ大会

「え？」

間抜けな一音を発したのは騎士（チャラい）だった。
視力を凝らしているらしく、指の指した方向に、目を細めている。
そうか――そういえば、私、さっき五感強化したから、普通よりも視力がよくなっているのかもしれないんだったけ。
太い幹に手をついて、顔だけ、ちらちら、と伺うように覗き込む黒熊の姿がある。
うん、体はまったく隠れてない。
隠れてないよ、熊。

「あ、いた」

先に兄が見つけたらしい。
のんびりした顔なのに、頭の上に黄色い！が浮かんだ。
視線があうと、まずっといった感じで顔を引っ込める――うん、熊じゃなかったらストーカー認定しているけど、熊なのでカワユス。

この意味は、可愛いから許すの略だ。

全員見つけたらしく、騎士たちの頭の上には黄色の！！の浮かんだまま、固まって動かない。

だめじゃん、確認しろよ。

っつーか、動け。

「ミコ」

ほら、兄が痺れきらして、私に面倒ごと擦り付けてくるし。

「……呼びますか？」

「あ、え？あぁ、そう、ですね。お願い、できますか？」

「……斬ったり、しません？」

騎士（毒抜き）を見つめると、彼は茫洋と頷いた。

とはいえ、驚いているだけで、嘘をついているようにはみえない。

「あちらから攻撃がない限りは、お約束いたします」

ちら、と兄を見ると、肩を竦めてた。

行く気はないらしい。

仕方なしに、茂みを掻き分けて進む。
たどり着くと、黒熊は木の幹から、ちらちらと出しながら、待っていたようだ。

「あっちの話、聞こえてた？」

耳がピコピコしてるから、多分聞こえていたのだろうと思う。
と、一応確認すると、うが、と黒熊は静かに頷いた。
やっぱり、野生なので、耳がいいらしい。

「嘘ついてるようには思えないけど……どうする？話し通じるかわかんないけど、行くんだったら1回、行きたくないなら2回返事してくれる」

うが、と一度返事。
だが、気分は優れないようで、ひどく動きがノロノロしてる――と、思ったらわき腹辺りに、怪我してるし。
熊のＨＰをみると、黄色になっているし。
そういや、ビックウルフと戦ってたんだっけ。
そして生き残るって、どれだけ強いんだよ、この熊は。

「ごめん。怪我治療できないけど、上向いて、口あけて？体力回復薬、不味いけど、飲まないよりマシでしょ」

私はパーカーの帽子から二本ほど、回復薬を取り出すと、おずおずと上を向いて口をあけた黒熊に液体を流し込んだ。

すると、ＨＰは黄色から脱出したようで、３分の１程度になった。

やはり不味かったようで、鼻の頭に皺を寄せている。

その顔は恐ろしいのに、不味くて顔を顰めるなんて、人間らしくて、なんか和む。

「よしよし。よくがんばったね。口直しに飴あげるから、機嫌直して？はい、あーん」

私はポケットから、飴玉を取り出して、包装紙を剥く。

中から出てきたオレンジ味の飴を、あー、と大人しく口を開けた熊の分厚い舌の上に乗せてやる。

うが、と驚いたように瞳を丸くしたかどうかはわからないが、一唸りして、ころころと、口の中で小さな飴玉を転がして、数秒。

がり、ばりばり、と小気味よい篭った音が響く。

……。

……。

うん、しょうがないよね、相手熊だから。

「じゃ、行こう」

私が促すと、熊は先ほどよりは軽快な足取り。

歩みだした私の背後を、まるで桃太郎に仕える犬のように従順に追ってきた。

「おかえり」

兄の労い？に対して『ただいま』と、その背中に張り付こうと思ったのだが、くん、と背中が引っ張られて、振り返ると、黒熊が私のパーカーを引っ張っていた。

首を小さく横に振って、某ＣＭのチワワ並みの潤んだ瞳で上目遣い。

くっ！可愛いじゃないか！

多分、心細いから近くにいてってことなんだろうけど――――メン

ドイなぁと、思いながらその場所に留まると、黒熊はほっとしたように、パーカーを放す。

なんか、騎士、熊と、間に挟まれるのて微妙。

背後で熊が、私越しに、ちらちら、と顔を出したり引っ込めたりしている。

姿だけは、ライオンや、トラと並ぶ、百獣の王の姿というのだから、物凄い違和感だ。

「意思の疎通ができるんですよね」

こくり、と私が頷く。

その背後で、肯定するように一唸り。

「単刀直入に聞きますが、この方の話どおり、貴方は王子なんですか？」

肯定の一唸り。

どよどよ、といっても三人だけの騎士があからさまに動揺を見せる。

なにか、小声で話しあっているが、耳がぴくぴくしてるから、熊には聞こえているようだ。

「では、【イシュ加護の純銀羽の一枚】を見せていただいてもよろしいですか」

熊は喉元の毛並みに埋もれている【イシュ加護の純銀羽の一枚】を爪で慎重に取り出した。

ざわざわ、といっても騎士三人だが、動揺を隠さない。

また、三人で頭をつき合わせて、相談中。

「本当に王子なら、質問に答えられるよね。正しかったら一鳴き、違うと思ったら二鳴き――王子が、屋根に上って、うっかり落ちたのは、１４歳の誕生日である」

うが、うが、と否定の二鳴き。

っつーか、屋根に上って、落ちたって、どこかで聞いたことのあるフレーズだな。兄。なぁ、兄！

下敷きになった可愛そうな妹がいたよね。妹！

恨めしい瞳を兄にぶつけると、口笛吹いて、明後日の方向に視線を彷徨わせる。

「正解。正しくは１３歳。そのせいで、どれだけ騎士団長に扱かれたか……」

「では、第二問だ！王子がうっかり壊した庭の石像は太陽王アシュ

フレッシュ様である」

うが。と肯定の一鳴き。

つーか、舌噛みそう名前だな、太陽王。

「む、正解だ」

庭の石像って、どうやって壊すんだ。

ってか、うっかり、ってどれだけうっかりしなんだよ王子。

しかも、テレビのクイズ番組みたいなノリになってきちゃってるけど。

「次は私か。そうだな……王子が寝ぼけて、うっかり刺したのは、フェリックスである」

うが、と一鳴き。声も弱弱しくなってきてるぞ、黒熊。

切りかかったんだ。うっかり、刺した。

王子……なんて、恐ろしい人。

てか、お前は八兵衛か！うっかりしすぎだろう！うちの兄なら、二時間ぐらい突っ込みいれてるぞ！

「正解です。では、こっそり出て行った下町で、うっかり誘拐されたのは、１３歳である」

ぅ、が…最早、黒熊の声は、消え入りそうである。

「やりますね…全員倒して、街中引きずってきたんですよね、七人――では、スティア王に向けられた暗殺者を、つまみ食いの途中で、うっかり素手で倒したのは、謁見室だ」

うが、うが…力のない二鳴き。

王子…１３で誘拐されたら、大人しく、助け待ってようよ。

なぜに、倒して、引きずる？

「ええ、あれは、廊下でしたね…」

うっかり――…？

なんか、もう話の内容が、うっかりを通り越して、あふぉ？もしくはアホ？

完全なる人事だけど、大丈夫なんですか、あなた方の未来の王様って……私なら、早急に引越しを考えているところである。

あからさまに怪訝そうに熊を眺めると、何かいいたげに、うがうがと横に首を振って、身振り手振りで弁明しようとしているらしいが、まったく分からない。

首を横に振ると、がっくりと肩を落とす、項垂れる熊。

「たしかに、確認した限りは、王子のような、気も」
「本当に王子なんですかね？」
「この獣が王子であるはずがない！呪われて熊になったということを認めても、中身は違うに違いない！」

あれだけ他人様の前で恥をかかされておいて、上がった信頼度は微々たるものらしい。

項垂れる哀愁漂う黒熊の肩を、慰めるように叩く。
泣いてはいなかったが、ぐったりと私の腹の辺りに顔をうずめているので、よしよしと撫でてやった。

うん、こんな部下だったら、オー●ンジ、オー●ンジーとかに電話かけちゃうよね。

上司も上司なら、部下も部下だな。
総合判断で、どっちもどっちって感じですよね。

「あ～とりあえず、納得がいったら、日が沈む前に、車に戻りたい

んだが」

兄が促して、帰還することとなったが、その間中、王子の恥ずかしい話暴露クイズ大会が恙無く、続いていた。

Ａｃｔ　１６．　感動の再会とレッドフォックス

もう、お腹いっぱいです。

王子がおねしょを１１歳までしてて、うっかり変質者と間違って貴族をぶん殴って、うっかり騎士団長の鳩尾に膝蹴りをかましてて、牢獄入れられたんだよね。

うっかり、３歳の弟王子をあやす為に、高い高いをしたら、天井にぶつけちゃったんだよね。

お母さんに怒られて、花瓶で殴られたのも、わかったから。

お父さんと剣の稽古で殺されかけたり、女装した男に惚れられて虎視眈々と尻を狙われ――――エトセトラ、エトセトラ。

人事ながら、同情を禁じえないよ。

涙なくしては語れないというか…うん。

ハンカチ必須だわ。話題の感動超大作でも、こんなに泣かなかったぞ、私は。

その上、現在進行形で呪われて熊になっちゃって、それを部下に疑われまくっているなんて。

波乱万丈の人生だね。

時々、兄の大爆笑の合いの手が入り、一層不憫に感じる。

この人は、フランダー●の犬だろうが、人情映画だろうが、お構いなしに大爆笑だけど。

「いや～…久々に笑った。素敵な部下を持ったな、熊王子」

追い討ちをかけるように、半笑いの兄（一般市民）に慰められる熊王子。

よろよろと、私の背後で項垂れてる熊。

かわいそうに。

あ、うっすら涙にじんでるのかい熊。

ごめん、生憎ハンカチ代わりの手拭は騎士（毒抜き）の腕に巻かれているから。

さらに15分ほど歩いて、たどり着いたワゴン車。

すでに私たちが出発してから、1時間以上経過しているので、心配――姉はしてないか――を両親がしているので安心させてやりたい。

うちは若干、家族みんなが過保護な気質があるからね。

末っ子としては、両親を――――ん？すごく車と距離が遠いんだけど、こっちが風下のせいか、風に混ざって、いい匂いするんですけど。

なんか、こう、出汁的な？食欲をそそる様な？

「どうした？」

私の異変に気がついた兄が眉間に皺をよせて、声をかけるが、それに答える余裕もなく、ワゴン車に向かって、私は走り出した。

まて、という兄の言葉もそっちのけである。

この匂い！五感が鋭くなっている私に感じたのは――――非常食の赤いき●ね！！

「おお、ミコ、おかえり。遅かっ――まさかのスルー？！」

なんか、私に気がついたらしく、ゴチャゴチャ横から話しかけてきた父も黙殺。

即効でドアを開くと、其処には前代未聞！

私が自腹で買ってきた赤いき●ねをプラスチックフォークで啜る王子の姿が！！

美形は、麺すすってても美形だなおい！

王子はびっくりした顔で、縮れ麺を啜るのをやめて、目をパチクリしている。

よろり、と足元から力が抜けて、地面に座り込む。

「あぁ…私の、赤いキ●ネが……」

追いついた兄が事情を察したらしく、ぽんぽん、と肩を叩く。

「まぁ、諦めろ。たかが1つじゃないか、まだあるんだろう？」

ほかのカップラーメンはあるけど、赤いキ●ネはストックが後1つしかないんだよ！

八つ当たりに、立ち上がって兄の胸をぼこぼこに殴るが、にやにやという顔つきをやめない。

く、くそう！私のカップラーメン！！

「え、あの、ミィコさん？」

てめぇに、名前なんざ、呼ばれたくないわい！怪我人じゃなかったら、筋力最大値まであげて、ジャイアントスイングで、木に叩きつけんぞ、ごうぅら！！

「お―ミコ、待て待て！ステイ！」

犬かっ、私は！

せっかく重い思いをして持ってきた回復薬を、パーカーのフードから取り出して、そこらに叩きつけようとするのを兄が背後から羽交い絞めにして止められた。

くっ、こんな奴に誰が、回復薬（死体漁りした）を渡すか！

といいたかったが、手に持ってたのも、フードに入ってたのも兄に、すげなく回収された。

忌々しい！兄の戦士としての能力が、ここでは心底、恨めしい！

くっ、私たちは、三時のおやつを食べないで、お前のために仲間を連れ帰ってやったというのに！（主に頑張ったのは兄だけど）

王子を睨みつけると、怯んだように身を引く。

が、次に背後にいる騎士たちが目に入ったのか、子供のように――事実彼は子供だろうけど――無邪気な笑みを浮かべた。

「っ、よかった！ありがとうございます！サミィさん！」

「いいってことよ」

「王子！ご無事で！」

「皆も無事――――無事、か？」

王子は思わず、聞きなおしてしまっている。

よく考えると、騎士たちは全身ぼろぼろで、大量のゴブリンの返り血を浴びているらしく、紫色の液体が固まって、グロイ状態になっている。

うん、ちょっとホラー的な要素も入ってるかな。

母が見かねて、騎士たちにタオルを差し出した――――それ、もう洗っても使えないと思うよ。

ってか、私と兄の格好もひどいけど、兄がざっくりタオルで体を拭いて、シャツを着なおしているので、私はお絞りで軽く手を拭いて終わった。

至近距離でゴブリンの血を浴びてる兄ほどひどくはない。

「はっ！無事であります」

「そうか！よかった…本当に、よかった」

王子は安堵の息を吐き出しながら、騎士三人に声をかけている。

私はイライラしながら、荷台を底上げして作った四つの収納ボックスの中の一つの食料庫と化している一角を空けると、少し減っているものの、大体無事だった。

他のは知らないが、とりあえず自分が名前を書いてる奴は、残っている。

「あ、そうだ――ついでに、お前さんの兄貴も拾ってきたぞ」

ひと段落するところを、見計らって兄が、声をかける。
きょとんとした王子は、横から聞こえる父の絶叫に、肩を揺らした。

「うぉおおおった！！！熊がぁあああっ！！」
「あら、おっきい」

ついで、母さんが口に手を当てて笑いながら、父の背後から、熊を観察している。

珍しく姉も息を詰めて、驚いた様子だったが、私や兄を一瞥して、一瞬止めた爪の甘皮の手入れを再開していた。

姉、さすが豪胆ですね。

「あ、兄の仇っ！！」
「お待ちください、王子」

超シリアスモードで、巨大な黒熊を発見した王子が起き上がろうとするのを、騎士たちが制する。

とりあえず、赤いき●ねとフォークを手放せ王子。
仇討ちには必要ないぞ。

そして、車内に充満する、出汁のいい匂いがより一層、殺意を増加させる。

食い物の恨みが恐ろしい、って、知ってるんだろうか？

「なぜ、止めるのだ！兄の仇を討つのが我らが悲願！」
「その熊こそが、カルム王子なのです」
「そうだ！熊こそが――……」

そう叫んで、数秒の間を置いて、王子はでっかい瞳をぱちくりさせている。

「え？」
「王子、もう一度確認したいのですが、カルム王子が殺害された場面は見ていないのですよね？」
「あ、え、うん…僕は、気絶してたから、起きたら、巨大な熊が鎧を弄ってて――…」

呪われた瞬間を見てない。
←
起きたら熊がいて、兄がいない。
←
熊しきりに兄の鎧を弄る。
←
熊が兄を殺した。

とかいう4段活用で、思い込んで、切りかかったとか、そういうオチなのだろう。

「――本当に、兄、なのですか？」
「はい、残念ながら、先ほど確認しましたが、私たちが知る王子の記憶と照らし合わせましたが、間違いは御座いませんでした。王子と同じ、【イシュ加護の純銀羽の一枚】もお持ちでした」
「兄が…っ、熊……――」

放心している王子を哀れむ騎士たちを横目に、父と母が何かの相談をしてる。

はん、同情などしてやらないぜ！
お前の胃袋の成分が赤いき●ねであるうちはな！

「ねぇ、お父さん」
「なんだい、ハニー？」
「あれ、熊鍋にすると、何人分かしら？」

無垢な少女のような、きらきらとした目で、黒熊を見つめている。
彼らは私たちの話を全く聞いていなかったらしい。

うん、ごめんね、熊王子――母さん、中国人じゃないけど、机と椅子以外、足が四本あるやつは基本的に何でも食べるから。

イナゴとか、イナゴとか、イナゴとか。
口から足が出てるのを見た私は１３歳の時に寝込んだ記憶があるよ……。

両親の会話が聞こえていたらしい熊は、兄の後ろで自分の両耳を押さえて、ガタガタと震えていた。
人間だったら、青ざめていただろう。

Ａｃｔ　１７．　熊は食べられません

目の前の熊が元人間であるということを両親に理解させるのに、兄は苦労しているようだ。

母のために熊に挑もうとしていたらしい父は後部座席から、鉈の準備とかしちゃってるから、熊王子はすっかりと両親に怯えきっていた。

ご愁傷様です、なむなむ。

ちなみに姉に、ここが異世界で熊は呪われているらしいよ。と説明したところ――

「あっそ」

――の一言で終わった。

もしかしたら、私と兄がいつものように冗談を言っていると思ってスルーしたような気がするが、母や父のように、なかなか納得されないのも困る。

「だから、ここは元の世界じゃないんだって…」

「んだったら、尚更、熊を刈って食料を溜め込んでおいたほうがいいんじゃないの？お腹すくのはだけは嫌よ、お母さん」

異世界じゃなくたって、そうでしょうが。

騎士たちの怪我を簡単に手当てし終わっていたが、しばらく車が動かないと踏んだのか、ネイルを塗りなおしている。

私の怪我もさっとだけど、消毒してくれた。

というか、本当にかすり傷だったから、放置しておいてもよかったのだけど。

王子も騎士たちの介抱で、放心状態から抜け出していたが、熊が兄だとは信じられないらしい。

うん、わかるけど、事実だから、受け入れとけ。

両親だけでも十分、めんどくさいから。

特にぽややーんとした外見の割りに母は、頑固な所もあるしね。

もう一度、汚れた手と顔を拭ってから私はポテチを食べ――時折、ネイルで忙しい姉が「一枚」というので、口に放り込みながら――疲れた体に栄養を取り込む。

学生時代のマラソン大会と同じくらい疲れた。

できれば、このまま眠ってしまいたいのだけど、弟王子と、熊王子と、騎士たちで、なにやら、ごにょごにょと話し込んでいて、煩い。

つーか、弟王子、お前、赤いき●ねの汁まで飲んだのか…車内の

換気をしなければ殺意が沸きそうなのでドアを開けた。
ワゴンは停車したまま、時間だけが流れていく。
さすがの飄々とした兄も両親を説得するのだけは、骨が折れているらしい。
なんだか、うとうとしてきてしまうが、完全に寝ることはできない。
なんてうっと惜しい体だ。
集団生活には、適さないだろう。

「眠いなら寝れば？」
「ん」

と生返事して、騎士たちを見ると、姉は息を吹きかけてネイルを乾かすのをやめた。
他人の気配があるところでは、上手く眠れないことを察したのだろう。

「繊細なのか、そうじゃないのか、微妙ね。嵐が来たって寝てるくせに、他人がいるだけで眠れないなんで」

だって、と口を尖らせる私に、姉が綺麗な顔でくすくすと笑った。

開けっ放しのドアから、風が吹いて、綺麗に染められたキャラメルブラウンのパーマの当てられた髪の毛がフワフワと揺れている。

姉のいつもと変わらない様子――まぁ、姉とて、騎士たちの対応は猫かぶりではあるが――に安堵する。

これが仕事なら、さらに好感触を掴む、キャバ嬢並の社交術を行使していただろうが。

縁はないと思うが、社交界のサロンにでたならば、私と違ってきっと壁の花であることはないだろう。

金さえ握らせとけば、姉は天性の悪女か、詐欺師になるだろうに。

説明から十分ほどで、兄は諦めたらしい。

「……あの熊は、あの人たちの飼ってる熊だから鍋禁止。唐揚げも、姿煮も禁止。多分、右手で蜂蜜とか食べてないから。お裾分けもしてくれないの」

所々話聞いてなかったけど、異世界って所より、熊の方が重要なの！？

本来なら、つっこみを入れているところだが、生憎、騎士たちがいるので、自重する。

「蜂蜜、ってなんの話してたのかしら…？」

「わかんない――多分、熊って右手で蜂蜜とって食べるから、ほか

の場所より甘みがあって美味しいって、母さん前いった様な気がする」
「……本気で熊食べる気だったのね。ってか、食べたこと、あるのかしら？」

うん、レシピが具体的過ぎるから、多分ね。
さっきまで目がマジだったし。

「だったら、仕方がないわねぇ」

ようやく諦めたらしい。

ふうう、と心底残念そうにため息をついて、未練他らしく熊をちらちら、見つめている。
熊王子は、視線が向くたびにびくびく、と体を震わせている。

「そうか、お父さんも、パチンコの試作品を試し――――げふん、げふんっ」

試作品という言葉に、兄弟全員の睨みが集まり、父は慌ててわざとらしい堰で誤魔化した。

その単語が出たときは、完成していないモノであることは間違いない。
被害が身内に出る可能性大である。

「悪いなぁ、うちの両親ちょっと、天然なところがあって……」

ぐったりとした兄が、痛むのか頭を抑えて、騎士たちに話しかけると、呆れたような愛想笑いでねぎらわれていた。

「ま、とにかく話は済んだから、国まで送る。乗ってくれ」

と、後方のドアを開けると、躊躇いながらも、騎士たちが王子の近くに座り込み、最後に車をギシギシ、と揺らしながら熊が乗り込む。

でかい熊なので、こんな小さい空間に閉じ込めると、非常に圧迫感が半端ない。

タイヤパンクしないでよかった。

絶対重量オーバーだよね。

まぁ、車がちょっと後ろに傾いているような気もするけど。

兄が荷台のドアを占めると、開けっ放しのドアから入ってきて、反対側の扉も閉める。

両サイド開くようになっているが、姉はど真ん中に座ったまま、動かないは重々承知しているのだろう。

お互いに軽い自己紹介を終えて、兄が前を向く。

うん、キィシガファミリーとして。微妙。

「とりあえず、この道、真っ直ぐでいいんだよな？」
「ええ、ですが、本当に今日中に、城に戻れるのですか？」

と、王子が小首を傾げた。

ゴブリン轢いたとき、王子反対側の茂みに突っ込んでたから、動いてたの分からなかったのか。

「まあ、二百キロ以内なら、夜にはつくんじゃないのか？父さん、ガソリンは？」
「間に合うさ。途中で一回入れたし――だけど、あんまり速度だせんぞ」
「う～ん、ちょっと熊が乗るのは予想外だったからな」

いや、熊が乗ることまで予測できていたら、預言者と呼んでやろう。

普通の人はこんな状況になるってわかんないから――ってか、家族皆、普通に熊受け入れちゃったよ。
なんかこう、もっとビックリするとか、怯えるとかないの？

って、いっつも驚くのは私か？

「…３０〜４０キロだと、５時間はかるかもなぁ」
「まぁまぁ、とりあえず出発しましょう」

と、鶴の一声ならぬ、母の一声で、眉根を寄せていた父が、ころ、と表情を変えて、目じりをさげて「そうだよね〜」とエンジンをかけた。

その振動で騎士たちの悲鳴が上がる。

「う、動いた！」

身を強張らせた騎士たちが落ち着くよりも早く、車が加速し、さらに荷台は騒がしくなる。

軽い揺れに騎士たちが、手足で踏ん張るのが可笑しい。
思わず、ちょっと噴出すと、姉の笑いのつぼにも入っているようで、僅かに肩を揺らして笑いを堪えている。

「う、馬もいないのに動いてる！これは魔法ですか？」

王子が目を輝かせて、兄に尋ねて、問われた兄は苦笑するしかない。

若者は適応能力が早いが、一番年長者であろう騎士（毒抜き）の

顔色は優れない。
というか、騎士（目つき悪）にいたっては完全に真っ青である。
まだ、３０キロでてないと思うけど。

「いや、魔法じゃない。科学だ。ちゃんとした原理があって動いてるんだ――俺は免許持ってるけど、詳しくないからわからんが」
「わ、分からないのに、動かすのですか？」
「ちゃんと使えば、危なくないからな――と、俺からも質問があるんだが」

兄は少し躊躇ったように、眉根を寄せてる。
無遠慮かなと思っているようだが、好奇心が勝った自分に嫌悪を見せる。
父と同じような血が流れているせいか、その強い好奇心に振り回されるのが好きじゃないらしい。

「俺たちの国に魔法はないんだが、お前さんらの世界にも魔法はないのか？」
「んー……あることはあるよぉ。ただ、使える人間はちょー極少数でねぇ、中には才能があるのも知らないで一生を過ごすこともあるくらいだから」
「ほぉ～…そうか。となると、正攻法で学ぶとなると、難しいのか」
ため息と共に、兄が呟く。

「そうだねぇ～…魔法は、弟子以外、門外不出って所も多いから、魔道書で覚えれる人もいるけど、高価すぎて身を滅ぼすと思うよ」
「魔道書に、師弟制度か――学校はあるわけないか」

そんな、超白ひげの長い気のいい校長がいるような映画みたいな話はないから。

額に雷マークもある人物もいないだろうし――って、ゴブリンわんさか出てきて、目の前にリアル騎士と呪われた王子がいるのだから、十分にファンタジーか。

「学校…？」

騎士（毒抜き）が、驚いたように目を見張る。
彼だけかと思ったが、他の騎士も王子もなにか、驚いた様子である。

「魔術を学ぶ、学校…という意味ですか？」
「あるのか？」
「いえ」

だめもとで兄が聞くと、どこか焦ったに騎士（毒抜き）が首を横に振った。

「申し訳ありません。古代から魔法が一子相伝の術とされており、それが普通だと思っておりました。そういう、発想自体がなかったものですから……」
「ですが、それだと、今みたいに、流派が廃れていくことはありませんね。そうか、それだったら…」

喜びの声を上げる王子に対して、騎士（チャラい）は首を横に振る。

「でも王子、習得する人間が多いということは、悪用する人間も増えるということです」
「あ…では、少数精鋭というのは、騎士学校のように１クラス２０の編成ではなく、４、５名程度に絞り込むというのは」
「元々、素質のある人間は少ないですからね。少なければ教師役の目も届きやすい――ですが、問題はそれだけではありません」
「え？」

騎士（毒抜き）は、困ったように眉根を寄せる。

「あのプライドの高い魔法使いたちが、他の人間に自分が人生をかけて学んだ流派を容易に教えたりはしないでしょうね――それも、複数の人間に同時になど」

なんだかよく分からないが、魔術を学ぶのはよほどのことらしい。
伝統工芸みたいなもんだろうか。

というか、なんだか、普通の日常会話というよりは、お偉いさん方の会談みたいだ。

ひどく、他人事だ。

ポテチを食べ終わり、私は棒つきキャンディーを座席の下の収納から出した。

ふ、一週間も人里離れるから、超買いだめしちゃったよ。
とりあえず、フルーツパラダイスキャンディからメロンソーダデラックスにしておこう。

「金、かかるだろうねぇ」
「体資本の兵士と違い、魔術は元より金のかかる学問ですから、国庫を直撃するでしょう」

おーい、魔術で国庫直撃、ってどれだけ金食うんだよ。

プライドの高い魔術師って――聡明とかならいいけど、学校の教師とかで見下されたりしてると激しく反発したくなるもんねぇ。

純真な学生も、性格ゆがむっちゅーねん。

「そう、ですね。上等な魔石を揃えるだけでも、随分かかりますし

ね」

魔石って、そんなにいい値段するのか――って、魔石？

兄も話を聞いていて同じことを思っていたらしく、私を見ている。

うん、密かに回収しまくって、ポケットにパンパンになってるのを知っているようだ。

当然のように、手を出す兄。

泣く泣く差し出す私――て、別に、1，2ならいいんだけどさ。

はい、どうぞ。

「えっと、魔石って、こいつか？」

灰緑色のビー球のようなやつを兄が、見せると、王子が「わっ！」と大声を上げる。

食い入るように見入って、こくこく、と頷いている。

「そうです！これです！これをどこで！」

「さっきのゴブリン戦で」

私が拾って投げてたんですよ――すみませんね、戦えなくて。

「そうです！聞かねばと思っていたことが！！」

騎士（毒抜き）がはっとしたように、「ミィコ殿！」と声をかけてきたので、驚いて、恥ずかしながら数センチ浮き上がってしまった。

Ａｃｔ　１８．　魔石と金

後部座席から身を乗り出してきた騎士（毒抜き）に、私は同じぐらい下がる。

その場所がなくなったので、父の座席の後ろの所に座る。

あまりにも過敏な反応に、姉が笑った。

「びっくりしすぎ、サ●エさん並に体浮き上がってたし」

うっせ！本当にビックリしたんだよ。

ドラマ中の人間が、いきなり自分の名前を呼んだら、ビックリするでしょうが！

登場人物の名前と、自分の名前がかぶっただけでも怖いんだから。

「あ、申し訳ない…その、先ほど、なんというか、ゴブリンを倒していたのは、地系統の攻撃魔法ではなかろうか？もしかして、ミィコ殿は魔法使いなのだろうか？だとしたら、今の話のように、魔術を学問として、広める考えには賛同していただけるだろうか？もし教師として、教壇に立つとしたらどのような条件を求められるだろうか？」

鼻息荒く、矢継ぎ早に言われても…怖いから。

前提からして間違ってるし、とりあえず後部座席から乗り出した

身を引っ込めやがれ。

後、下の名前で呼ぶことを誰が許可したんじゃい！

「だ、旦那…ちょっと落ち着いて、目血走って怖いから」

その私の不愉快さに気がついたのか、騎士（チャラい）が騎士（毒抜き）を背後から引っ張って、戻す。

私は畳んでおいたトラの毛皮を模した化学繊維を手にして、身を包む。

兄は、ぽん、と拳を手のひらに打ち付けている。

頭に！マークがついている。

「そういえば、なんかそんな事もしてたな。まさかお前、俺に内緒で――」

ぶんぶん、と大きく首を横に振る。

さすがに、勝手に魔法使いとかになってないし、元々、職種に魔法系の仕事なかったから！

あったら速攻でなってたと思うけど。

「だよなぁ～…となると、こいつか？」

と、魔石を人差し指と親指で摘みあげて、不思議そうに眺め、視線をこちらに戻した。
どうやら、説明を要求されているようだった。
眼鏡のことに触れず、説明するために、頭を回転させる。
「……投げるものなかったから、投げたら…ぶしゃ、って勝手になった」
「なにぶしゃって、ぶしゃって効果音おかしくない？」
いや、怪訝そうにするな姉よ。
本当に地面から槍みたいに尖った石が、ぶしゃってなって、ゴブリン倒れていたんだってば。
ちら、と荷台の騎士たちを見ると、おっかない顔で、ワナワナと震えていた。
あれ？目血走ってる人、増えてない？？
「な、投げたっ――待ってください！この魔石を投げたんですか！！言っておきますが、それはサミィ殿が持っている大きさですら、上手く売れば小金貨ですよ！？」
「……なに、しょーきんか、って？」

小首を傾げる姉の最もな質問に――相変わらず、金の事となると、無意識に反応してるよ。

多分、お金の単位だと思うけどもしかして、でも結構なお値段なの？

そういえば、さっきのステータスので販売可能とかいってたけど、金額はB（ビル）だったような気がするんですけど。

「え？」

後部座席が、微妙な沈黙が訪れる。

兄は自分たちが異世界人であることを言ってはいるが、彼らも頭から信じてもいなかっただろう。

旅人か、商人にだと、思っていたに違いない。

車だって、他の国の文明とかで解釈したんじゃないだろうか。

「っと…金貨ってことは金の単位か？悪いな俺たちのところは金の単位は『円』だからなぁ」

「えん？？」

察した兄が苦笑を浮かべ、騎士たちがありえない、と首を横に振っている。

「一応、世界共通金銭単位…なのですが」
「お――…じゃ、これひとつ売れば、家族で2、3日、食べていけるか？」
「2、3日どころか半月は余裕で食べていけるよ――これ、みて？」
と、騎士（チャラい）がごそごそと鎧の隙間から手を突っ込んで、硬貨みたいなものを取り出して、身を乗り出すと、私の座っていた場所にいくつか並べた。
兄弟三人で、頭をつき合わせて覗きこむ。
数は五枚。
大きいものが五百円玉ぐらい、小さいのが百円玉ぐらい。
表面と裏には、細工がされているらしく、やや傷ついて磨耗してるが、人の顔のようなものと、ミミズののたくったような文字っぽいものが書かれている。
「これが『B（ビル）』。小銅貨。一番小さな金額ね。これがひとつあると、パン一切れが買えるかな。五枚くらいあると、お店で軽い食事ができるよ」
百円玉の大きさの銅のコインで、おっさんの横顔が彫られたコインを指差す。
ぷぷぷっ。
ちょっと、父に似てるし。強面具合が。

へー、とか、ほー、とか兄と姉が関心しているが、気がついていないらしい。
真面目に騎士（チャラい）の金銭講座を受けているので、控えるか。
パン一切れってことは、１０５円――いや、めんどくさいから頭の中で１００円でいいか。
きっと私の能力じゃあ計算できないし。
基本、文系だし――高校時代から、５教科以外は得意なんだけど。
美術とか、音楽とか、体育とか。
「この小銅貨が１０枚集まって、大銅貨」
指でつつかれたのが、五百円玉の大きさの銅のコインで、桜の花みたいなものが彫られている。
つまり、千円札みたいな役割？？
「で、次。銀貨は大きさが１つだけ。これも大銅貨が１０枚分」
百円玉の大きさで、銀のコインで、髪の長い綺麗な女の人の横顔が掘られている。

えーと、千円が１０枚ってことだから、一万円札代わりかな。

「この銀貨が１０枚で、小金貨１枚」

つまり、金貨は…じゅ、１０万円！？

この、ちょっと、変わった模様の入った金色の百円玉もどきが……？

「で、小金貨１０枚で大金貨１枚」

き、きたぁあああ～～～～～大金貨が、１００万円！！

うわ、うわ、この金色の五百円玉もどきが、１００万円……あれ、ん？ちょっと、お待ちなさいな。

「ひゃ、ひゃく……これが？１００万円分なの！？」

「こいつが…う～む」

どうやら姉も兄も小銅貨＝１００円に換算したようだ。

「一応、これより、もうひとつ上で、水晶貨っていう透明な硬貨があるんだけど、さすがに俺も持ってないんだよね。大金貨１０枚分で１枚」

えぇえええ、まだ上あり――ってことは、い、いっせんまんえん！？？

さすがに、兄も姉も引きつって沈黙してしまった。

コイン1枚で、1千万って、新感覚ね。ひぃえ～…一生、使うことはないだろうけど、持って歩く人の気がしれないんですけど。

「……いや、大金貨を普通にもって歩いてるだけで、十分だろう」

呆れたように、騎士（毒抜き）は首を横に振り、さっとこちらに視線を戻して、真剣な顔をする。

「その『ひゃくまんえん』ってのは、わかんないけど、魔石が高価ということを察していただけましたか？」

猛烈に首を立てにふる、私達。

この目の前にある5枚のコインで、えーと、えーと……ひゃく、いや、え、えええ～～～！！

さらっと、目の前に出しちゃう騎士（チャラい）は、もしかしてお金持ち！？

兄は手のひらの、指の先程度の魔石を凝視している。

そりゃ、手の中に１０万円が、ころり、と転がっている――って、私のポケットは、どのぐらい入っているの感じなの??

こう、財布に１万円以上入ってると、意味もなくソワソワする小心者だぞ、私は。

もしかしなくても、尋常ではない金額はポケットに入っている…??

こわっ！やべぇ、冷や汗出てきた。

ゴブリンと退治したときと同じぐらい、手汗も物凄いんですけど！

「ミコｖ」

姉がにっこりと、日頃見せない満面の笑顔を見せて、私に手を差し出した。

うわ、眩しい！！

なぜ今、後光のエフェクト！！??

天使のように愛らしく、美しい笑顔だというのに、瞳は猛禽類の輝き。

「私にもちょうだいw」

あっさりと言ってのけた姉に、騎士が驚愕の顔を見せたが、私はポケットから一掴み、４個の大小の違いはあるが、ビー球のような緑の魔石を姉の手に乗せた。

うん、私、命惜しいから。

「やったーv　これで、４０万ねv」

うっとりとした表情で、姉が魔石を眺めている。

その背後には、ハートマークのエフェクトが乱舞しているが、私はそれどころではない。

それでもポケットに残る重みに、私はうろたえるまま、コンビニの袋を探す。

小さな袋に、がっつがつ、魔石を突っ込んでいく。

数は分からないが、コンビニ袋は、半分ほど魔石で満ちていた。

だって、ゴブリンの死体…数が半端じゃなかったから。

うん、パーカーの両方のポケットと、ズボンの2箇所のポケットにかなり入れたよ。

その口を二重に縛ると、兄の顔に無理やり押し付ける。

家族の中では、金銭感覚はまともなほうだし、多分、襲われても奪われたりはしないだろう。

兄、チートだし。

戦士レベルすごいし。

今になって思ったが、私、１０万相当の高価なものをバンバン、ゴブリンに投げつけてたんだ――総額いくら使ったんだろう。

……。

……、……。

……おっかなくて、思い出したくない。忘れろ、潔く忘れるんだ私！がんばれ、私！！

がたがた、ぶるぶる、する私に兄が、大爆笑する。

１８年と短くはない人生を送っているが、これほど散財した記憶はない。

お年玉を溜め込んで、思い切ってパソコンを買った時だって、一式で１２万ぐらいだったはずだ。

「ははは、預かっておく。こっちは返すぞ。何個か持ってろ。なんかあった時には使えばいい」

１０万だよ、１０万！
私のバイトの二ヶ月分と、ほとんど変わらないんだよ！

「命の方が大事だろ？つかっちまえ。江戸っ子は宵越しの金をもたないっていうし」

いや、江戸っ子じゃないんですけど――――首を横に振ると、兄は姉を指差す。

「ほら、由唯なんて、即効換金して、ウィンドウショッピングする気、満々だぞ？宝くじでも当たった気分で、湯水のようにつかっとけ。自分で稼いでない金は、さして自分の身にならんだろうし」

うふふふ、とトリップする姉を、微妙に尊敬をしていいか悩みつつ、とりあえず3個だけ、受け取った。

こんだけ大金があったら、即貯金派なんで――もしくはゲーム買い捲り。

でも、金額が大きすぎる。
臨時のボーナス1、2万という話ではないのだ。

唸りながら、ポケットにしぶしぶしまいながら――――はっと、更なる問題を思い出した。

兄が座席の下の貴重品入れに突っ込もうとしてたのを止める。

「なんだ、もう、2、3個持っとくか」

ぶんぶん、と首を横に振り、全力で拒否する。

そして、尻側のポケットから、最後にもうひとつ。

最初に拾ったボスゴブリンの近くに落ちてた、魔石を取り出した。

複数の後部座席の騎士たちが、悲鳴を上げる。

「み、見たことありません、こんな大きな魔石っ！」

「王子もですか？わ、私もです――…これひとつで、質素に暮らせば、一人、一生暮らせます」

「魔石成金って言葉もあるくらいだからねぇ～」

ぎゃっ！恐ろしいこといわないで！

普通の魔石の二倍ぐらいだろうか、赤子の拳ほど、というのだろうか。

ともかく普通の魔石よりも、大きくて色も濃い気がする。

「こ、れは……」

受け取る兄の様子が、わずかにおかしい。
どうしたのだろう??

ぽつり、と兄が真顔でつぶやく。

「いや、これって、俺でも使えるのか……これだと魔法効果って、どれくらい続くんだろうな。範囲は大きさに合わせてか？それとも時間がながくなるのだろうか…」

と不吉なことを呟いており、騎士たちが懸命に実験しないでくれと、長々説得を続けていた。

Ａｃｔ　１９．　自称・トレジャーハンター

「ですから、魔石を投げつけるという、概念すらありませんでしたので」

暫し、兄と騎士たちのやり取りが続き、騎士たちの説得が功をそうして――私的には使っちゃってほしかったけど――兄は実験に使うのを止めたらしい。

がっかりしている兄は珍しい。

絶対、自分でも使えるのか何個か試す気だったよ、あの顔は。

私の長年の勘からいくと、兄は虎視眈々と魔法剣士のポジションを狙っているはずだ。

「そうか、高価もんなんだな」

確かに、戦いの度に１０万円をポンポン投げるわけにもいかない。危機的状況ならまだしも、知ってたら絶対投げなかった。

その場合は死んでるけどな、私。

魔法使いを目指すなら、加工して杖にできるし、全部売ったら一等地でも小さな家が一つ買えるらしい。

そして、売るなら、是非王家に売ってほしいとのこと――どうやら、この大きさで良質なものは、流通もさほどないようだ。

って、良質なのかどうか、まったくわからないけどね。

兄は考えておく、と頷いていた。

まぁ、初対面の人間よりも、戦に手を貸して、負い目のある人間に売ったほうが安全である。

うむ、清々しいぐらい、外道だな、兄。

それでなくとも、異世界に放り出された私たちは、田舎者よりも、たちが悪い。

だが魔石を彼らが欲しているわけではないようだ。

話を推測するに、騎士（毒抜き）の友人か、王子たちの叔父さんの分野らしく、目の色を変えるので、言うこと聞かせるためには、褒美としてちらつかせるらしい。

「俺も、かじっただけだからあれだけど～、魔石ってのはね。カットしてつかうのが普通なんだよ～？」

「じゃ、市場に回っている魔石は、限られた人間のものってことか」

？？　一瞬、騎士（チャラい）が微かに眉根を寄せ、苦笑した。

なんだ？兄が変なことといったのだろうか？

「……まーね。それに、綺麗だからって、単純に宝石とかお守りで買っちゃう、女性が多いからねぇ――魔術師と高貴なご婦人方が競り合うってのも珍しくないんだよ～」

騎士（チャラい）の説明によると、魔石というのは、魔法道具として使用されるのが基本。

んでもって、驚いたことに、様々なカット方法で、能力を高めたり、集中させたりすることができるらしい。

後、他の特殊な金属製品で力を倍増させたりする。

魔法の杖しかり。

大きさは勿論、魔力の濃度や、属性によっても値段が変わる。

しかし、魔石は他の鉱物と違い鉱山から発掘されることは殆どなく、基本的には魔物と呼ばれる魔力を溜め込んだ動物を倒さないと出てこない。

それは騎士たちが詳しくないので、割愛されたが、話は大体分かった。

ま、十分、長かったけど。

「えー、加工したのもみたいｖｖ」

お前は鴉か！どんだけ光もの好きなんだよ。今、魔石を四つ（時

価４０万相当）もポケットに入ってるでしょうが！

って、そういえば、さっきお守り拾ってつけてたけど、あれも宝石がついていたような…？？

一応防御力が上がればいいと思って身に着けていたけど、完全に忘れてた。

「加工したのっていうのは、原石よりも割高だよ～。サミィ殿が欲しいのは武器屋か、道具屋だろうし、ユイ嬢のは宝石店のガラスケースの中だねぇ」

「これ売ったら、速攻でいかなくちゃ」

すぽ、と腕から抜き取って凝視すると、小さくはあるけど、緑というよりは黄色に近い、カットされた宝石が二つ銀のチェーンに嵌め込まれている。

「どうしたんですか、サミィ殿」

「いや、ミコがな…あいつ、あんなにお洒落さんじゃないんだがなぁ」

なるほど、いわれてみれば、加工されているのかもしれない。

緑色のやつしかみてなかったけど、よく見ると、中心と端の色がグラデーションになってる。

黄色いのも中々綺麗かもしれない。

ん？なんか静かになったと思ったら、全員私の手元を見ていた。

「……拾った」

ひぃ、視線を集中させないで――チキンハートには厳しいから。

「か、風の魔石！地の魔石も！！」
「うわぁー…二つもついてるってことは、そこそこ値打ちものだね」

慌てて姉に無言で投げつけると、手にした第一声は嬉しげに甲高くなった。

「やだーありがとｖｖミコ、愛してる～ｖこれ、けっこう可愛ゆぃーｖｖ」

可愛ゆぃーって。

眩しい！眩しいから後光のエフェクトやめて、切実に（涙）

完全に自分の物にして、腕に巻きつけてると、ぐりぐり、と抱きしめると私の頭を撫で回している。

アクセサリーには興味ないから、どうでもいいけど。
そこそこ、デザインもシンプルだから、姉の衣装にもよく似合う。

っていうか、ゴブリンの死体から剥ぎ取ったと知っても、眼鏡に指紋つけないでね。

「真実、他になに拾ったんだ――兄ちゃんには？兄ちゃんにはないのか？由唯ばっかり、ずるーい。ミコの男卑女尊～」

ずるーいってあーた。いくつなの。

もともと、アクセサリーも私あげたつもりはなかっただけどさ。

あと、拾ったものっていったら――……あ、短剣、ベルトに差したままだった。

二本ほど、短剣を取り出して手渡すと、がっかりされた。

「俺、短剣使わないし」

まぁ、戦士だしね。

でも使えないことはないじゃん。

普通の初期ステータスの人間は、こういうのつかうでしょ……金属バットじゃなくて。

っていうか、金属バット異臭するから、洗おうよ？

紫色の血が乾いて黒く染みに……うん、悲しくなってくるから、スルー。

「剣もあったけど……邪魔、だった」

あの状況下で、剣とか斧とか背負ってたら、私間違いなく死んでたよ。

だって、それだけで、素早さが格段に落ちて、弓の標的になるのは、目に見えている。

最初から、選択権など私になかった。

「え～…じゃ、眼鏡くれ」

誰がやるか！ステータス見えなくなるじゃん！

自分の使え、自分の――――と電波を飛ばすと、兄は気がついたようで、あっと思い出したように自分の鞄から、眼鏡出した。

「お、見える見える」

「？　でしょうね――眼鏡なんだから」

会話の本質を知らない姉は、兄に呆れたような視線を送る。

多分、ステータス画面がはっきりと見えるだろう。

四方八方を眺めた後、兄は手に持ったままの巨大な魔石に見入る。

そのまま、どこか陰鬱そうに眉根をよせた。

「雅兄？」

「……いや、くっきり、はっきりしてる。これで暫く俺も、眼鏡キャラだな。だが戦闘中は逆に近距離だと危険かもしれ――あ」

己の首からぶら下がっている、馬鹿高いネックレスに気がついたらしい。

いつもと変わらない笑顔だが、かなり焦っていると思う。

命を助けたのは実際は車を運転していた父だし、それB（ビル）の『0』の桁数が半端ないから、兄も引きつったのだろう。

「悪い悪い。これ、返すの忘れてた」

「え？ですが、僕の命はあなた方に救われて――」

「いいんだ。お前さんが呼んでるっていっても、こういう物がないと相手に信用してもらえないと思ったから、借りただけだったんだ」

「そ、そうだったのですか！さすがですっ、サミィ殿！」

はい、嘘ー。

俺って謙虚ですから、見たいな顔で人のよさそうな笑顔浮かべてるけど、嘘ですから。

絶対、売る気だったよ。

王家の国宝を。

多分、生活費にしようとしたんだろうけどさ。

若干、命を助けた割には貰いすぎだよねって、さっき私言ったときは、スルーしたのに。

「――やはり、ミィコ殿も魔術師ではないのですね」

唐突に呟いて、聊か肩を落とした騎士（毒抜き）は、小さくため息を吐き出した。

だから、最初から違うっての。

勝手に期待されて、関係ないことで、がっかりされるとムカつくんですけど。

チキンハートだからー、いわないけどー。

「そうだな。真実は盗賊系だから」

「……あぁ」

納得した！しかも、盗賊系で納得しやがりましたよ！

きぃーっ、むかつくぅー！

あんねー、苦肉の策だったんだよ！

あんた生かすために、こっちは成りたくない盗賊になったんでご

ざいますよ！こんちきしょう！

第一志望は、弓使いだったんですからね！

あとで、魔術師になって、びっくりさせてやるんだから！！

やっぱり、チキンハートだからー、いわないけどー。ひっそりと殺意は送るよー。

「……トレジャーハンターだから」

って、この台詞昔やってたゲームのキャラクターが言っていたような…？

同世代で分かるやつは少ないだろうなぁ、兄の世代のＲＰＧだから。

兄も思い出したらしく、苦笑を浮かべた。

「なんの遺跡にも入ったことないんだから、自称だろう」

ブーイング、ブーイング。

いいじゃん、盗賊よりは、まともな職業じゃない？

私は、一度、兄を睨みつけて、体の向きを変えると、窓を全快にして、外の向こうを眺める。

頭から、パーカーの帽子と、トラの頭の部分を被った。

風がびゅんびゅん入ってきて、気持ちがいいが、ちょっと風が冷たい。

「あ、ふてくされた」

恨めしく姉を睨みつけるも、楽しそうに笑ってる。

「うぁ、どうした?!」
「ハーン?!」

と、思ったら、車が出発してから、まったく言葉を発していなかった騎士（目つき悪）が、ギュウギュウの荷台から、強引に後部座席へと乗り込んできた。

「な、なに?この人っ?」

そして、開け放たれた窓から、頭を外にだす。

「おぇえええっ」

体が震えたかと思うと、胃の内容物を吐瀉した。

あ、車酔いしてたんだ。

どうりで、先ほどまで、ぎすぎすしていたのに、大人しくなったーとか思ってたら――いや、騎士（チャラい）の背後にいたから、まったく気がつかなかったけど。

父が背後の騒動に気がついたらしく、車が速度を落とし、停止した。

「そうか～…お前、馬以外だめだったんだっけ」

騎士（チャラい）が呆れたように、前に身を乗り出して、騎士（目つき悪い）の背中を撫でている。

……鎧越しだから、意味ないと思うけど。

Ａｃｔ　２０．　外出時は、家の人に声をかけましょう

静かだとは思ったが、あんさん、車酔いしてたんだ。
車が止まり、姉の救急箱から酔い止めを与えてから、若干の一悶着が起きることとなる。

「――俺は、降りる！！」

神妙な顔で、騎士（目つき悪）が、乗車を拒否。
まだ、一時間もしていないのに、狭い道のど真ん中で、立ち往生することとなった。

一応、寝てればいいと兄が言ったのだが。

「王子の前で寝顔を晒すなど！騎士にあるまじき行為だ！」

え～…めんどくさーい。この人。
王族としてちやほやされて育ったであろう、呪われた熊王子と天然王子よりもめんどくさーい。

つーか、王子の前での嘔吐はどうよ？

王子はいいっていってるのに、騎士の自尊心って、それ美味しいのって話だ。

我侭しろー。我慢してまた乗れー。
もしくは、説得を諦めて、騎士たち放り出せー。

どっちでもいいから、早く～…と言いつつ、私は座りっぱなしで、硬くなった体を解すように、背伸び。
退屈はしないけど、楽しいわけでもないので、欠伸がでてくる。

「ほら、こんな子供ですら、我慢して乗ってるんだぞ。お前ができないはずないじゃないか」

さっきから、どれだけ、私の純情なハートを嬲れば気が済むんだ。

騎士（毒抜き）、私見るな……さっき、貰った魔石投げつけたろか。

誰が子供だ。おまえんとこの弟王子より年上だ。というか、熊王子と同い年だ。
騎士（チャラい）お前の身長五センチくれ。

魔石あげるから。超切実。

「あー待て待て、俺がとっておきのおまじないを――」
「「だめだめだめっ！」」

私と姉で、手刀をぶんぶん振り回して車外へと飛び出した兄を、

2人で止める。

「一発だぞ」
「気絶方面でね」
「場所が悪いと、マジ地獄」
「え～…？」

自分で食らったことないから、わかんないんでしょ。

漫画とかでよくやる、首の後ろに手刀を入れて、気絶させるってやつがあるけど、兄の場合は、普通に鞭打ちになりそうなほどので、気を失ったというよりは失神したというほうが正しい。

幼い頃に、我侭をいうたびに、気絶させられたよ、私も。

姉は学習能力が高いから、我侭を言うときは、兄を背後に立たせたりはしないから一度しか食らったことがないらしい。

しかも、あんた、さっき戦士レベル上がって、筋力すごいことになってるでしょ。

今だって、私たち二人引きずって、地味に騎士（目つき悪）に近づくのやめようよ。

なんだか、兄は、微妙に焦っている……ような気もする。
なんでだろう？？

異世界にきたかもって、確信したときだって、へらへらしてたくせに。

「しゃねー、話つけるかー」

ようやく諦めて、説得の輪に加わったらしい。

「ったく、軽く事故った感覚だっての、わからないのかしら」

まったくである。

私は何度事故ったことか。

姉は、騎士と兄を眺めて、車内へと戻った。

「ん？」

私は、ふと――視界に入った橙色の物体に目が釘付けだった。

さすが、目がよくなっただけある。

数メートル先の木に生っているオレンジである。

「だから、後で行きます！！」

「それでは、お前は一人で何時帰ってくるというのか？せっかく『

くるま』に乗せていただいているのだから、そちらのほうが早いだろう？」
「しかし！もうこんなものには乗れません！」

まだ喧々してるから、かかるだろう。
薬貰ったんだから、そのうち効いてくるって――馬乗れるのに、なんで車駄目なんだろうね。

私はさくさくと、森の中に入った。

オレンジがなってるのは、かなりの大木だ。
樹齢百年とかそんな感じの。

見たところ二つほどオレンジ――近くでみると、小ぶりだったので、蜜柑だろうか――がひとつの木に生っている。

「よっ――のわっ」

届きそうな範囲のやつを、ジャンプして手にする。

辛うじてゲットすることはできたが、いつもよりも、高くジャンプすることができて、逆に驚いてしまった。
盗賊としてのレベルが上がった成果なのだろうか、体が軽い気がする。

皮は薄そうで、手のひらにすっぽりと収まるような、本当に小さなものだった。

枇杷くらいの大きさだろうか。ハウス蜜柑とか。

上から見ると、オレンジ色の皮に、まるで☆マークのような模様が白く浮かんでいる。

ファンタジー世界特有の面白果実なのだろうか？

遅れてステータスが表示される。

そういえば、矢印ついてなかったなぁ。

【イシュタルの祝福のオレンジ】

イシュタルから溢れた慈愛が注がれた、シュルルの木になる柑橘。

滋養強壮。栄養満点。薬としても重宝されている。

販売価格：５４０００　Ｂ（ビル）

ん～…【イシュタルの祝福のオレンジ】かぁ。

なんで画面が、キラキラ光っているように見えるんですけど？？

ひぃいっ！！

ってか！オレンジで５４０００Ｂって！！

もしかしてレア食材？？

でも、母好きだからなー柑橘系…よし、親孝行として、全部とっ

ていくか。
ふははは、根こそぎもらっちゃうぜ！
５４万円のオレンジだから、美味しいに違いない。
私はパーカーの帽子部分に、オレンジをつっこむ。

「よいしょっと」

絶対成長している跳躍力で、枝に手をかけ、近くの幹に手をかけて、木に登る。
割と、がっしりとしていて、私が乗っても折れなさそうだ。
インドア派の私だが、兄に付き合って、この時期には死ぬほど山遊びはさせらた――ついでに、迷子になって二日ほど彷徨った――記憶もある。
木登りは、割と得意なほうだ。
先ほど見えた一つをもぎり、パーカーの帽子に入れながら、さっと見渡すが、あと二つしか生っていなかった。
がっかりだ。
その二つも回収して、地面に飛び降りると、にっこにこの姉の顔が目の前にあった。
目、目が笑ってないんですけど…？

たら～と、本能的に冷や汗。

「みぃい～～こぉ～～…」

ひぃ！猫なで声の姉ほど恐ろしいものが、この世にあろうか？――いやない！

多分、悪魔と対じしても、これほどの恐怖を感じないだろう。

伸びてきた手が私の額を鷲掴みにする――アイアンクローである。

＝＝＝　由唯が現れた。
＝＝＝　バックアタック。相手の先制攻撃
＝＝＝　アイアンクロー、ダメージ７

ってか、なんで戦闘ログが発生してるんですか！

しかも、バックアタックって！！

せめて、ゴブリンと対峙した時のように発生しろ、我が技能！

＝＝＝　真実子のステータス異常【恐怖（強）】
＝＝＝　真実子の全ステータス１０％ダウン

え？むしろ【恐怖】状態で全能力低下って！！

いやいや、いやいや、なに、このゴブリンと退治した時よりも、めちゃ危険度が高くありませんか、ねぇ、おい、このステータス表示しているやつ、っつーか、責任者出て来い！

どどどど、どうする？

右か、左か、いや、ジャンプして、逃げ、無理、姉、死ぬ、私死ぬから！

＝＝＝　真実子のステータス異常【混乱】
＝＝＝　真実子の精神が、５％ダウン
＝＝＝　由唯の必殺技発動

「ぎゃっ！」

一瞬の隙を突いて、背後に回る姉の足と手が絡んで、体を折るような体制へと持っていかれる。
もう、気がついたときにはコブラツイストの体制であった。

「ぐはぁっ！！」
「お出かけするときは、なにするんだったっけ～？」
「うっ！」

痛みのあまり、声が出なかった。

っつーか、あんた角度のよっては絶対パンツ見えてるよ！！大丈夫か、乙女――むしろ漢女（おとめ）！

誰か助けて――――ってか、兄、なぜ拝む！！

両親、なぜ微笑ましそう！？

遠巻きにするのやめて、騎士たちよ！ヘルプミー！！

「ミコっ！」

「家族にっ、声っ、かけますっ！」

って、私は小学生か！

そういってやりたいけど、実際、しないから怒られているわけで――――あたたたたっ！！

前科ものは何をやっても疑われるのです。

でも、私がうろついたのは、近くじゃん？すぐそこら辺でしょ！

「お家に、人がいなかったら？」

「書置き、しますっ！」

ギブ、ギブっ、わかりましたから！

ひぃいいっ！！ごめんなさい、もうしませーんっ！！

お代官様お許しをっ！！

死ぬぅっ！！

背骨折れるっ！！

・・・・・・

どれくらい、そうして攻め続けられていたのか、気がついた時には私は車に乗っていた。

多分兄が運んだのだろう。

くぅううっ！これも、騎士（目つき悪）が我侭言うからだぞ！（責任転換）

Ａｃｔ　２１．　花柄と、レースと、血塗れの騎士

えぐえぐ、と半泣きの私。

走り出した車の中で助手席と運転席の間に、両腕を置いた上で顔を伏せた状態だ。

頭の上には、掌の感触があり、母がよしよしと慰めている。

鼻水がたれているらしく、ティッシュも差し出してくれた。

母、ラブ。

かみ終わったティッシュを姉に投げつけ――てやりたいのだが、睨まれた。

「でも、ミコも悪いのよ？ちゃんと、誰かに声かけなさいっていわれてるでしょう？」

「あう…うううぅ、でもコブラツイストはないよぅ」

鼻を啜りながら、自分でも甘ったれた声を出すと、困ったように微笑む。

わかっちゃいるんですよ。

わかっちゃいるけど、ちょっとだけ～とか、気がつかないだろ～とか、思いまして、はい。

「そうねぇ……お母さんも、由唯のプロレス好きはなんにもいわないけど、スカートの時は、アイアンクローとラリアットだけにしておいたほうがいいと思うわぁ」

いや、勘弁してください。

なんか、全部私が食らうの前提っぽい感じがするので。

ちらり、と母は荷台の方向に視線を向ける。

そこには王子の横で、ティッシュで鼻に詰め込まれた純情な若造（目つき悪）のとてつもなく情けない姿が横たわっていた。

私に姉がコブラツイストをかけている時、騎士（目つき悪）は調度よい所にいたらしい。

視野の中に花柄とレースの布地が入ったらしい。

茹でタコのように真っ赤になって、鼻血を噴出しながら、ぶっ倒れてしまった――――というか、私も意識が半分なかったので、知らないけど。

なんつー純情な。

同じところにいた兄は無関心（兄弟だしね）だし、騎士（チャラい）は予想通り。

『いや～…いいもんみちゃたぁｖｖ』

と、背後でハートのエフェクトを乱舞させていた。

「そうですぞ、ユイ嬢。そもそも、そんな短いスカートで足を出すなど……母君ぐらい、着込んで下され」
「僕も、そうしたほうがよいかと」

熊も同意らしく、珍しく頷いている。
大人しいから、彫刻のようだよ、あーた。

騎士（毒抜き）よ。母の長袖、踝までのスカートは、年のせいでUV対策とかだから。
ちなみに姉のワンピースも、脹脛ぐらいまであるのだが、彼らの感覚ではどうも、母のスカートの丈で当然といった様子である。

タイツ越しの足が見えるだけで、王子も頬が赤い。

「おかげで俺、天国味わっちゃったぁ」
「変態」
「死ね」
「やぁね。ああいうは乙女の敵っていうのよぅ」

姉、私、母からの辛らつなコンボに「え～」と騎士（チャラい）の抗議の声を上げたが、私と姉の多分、母の中では『初対面のチャラい騎士』から『死んでもいい変態』まで格が下がっている。

実に分かりやすい評価である。

いや、車から放り出さなかっただけ、感謝してほしいぐらいだ。

ちなみに騎士（目つき悪）は『愛想と目つきの悪い初対面の騎士』から『乗り物に弱いむっつり助平で、目つきと愛想の悪い初対面の騎士』という、やや不名誉な位置づけとなっている。

「まぁ、いいじゃないか、減るもんでもなし」
「減る。心の何かが確実に減るわ。初対面じゃなかったら、訴えて、慰謝料請求してる所よ」
「そーですかー」

なぜか騎士たちの援護に回った兄だが、即撃沈。
そのまま、あっさりと引き下がった。

姉を敵にしてしまうと、兄の場合は普通にピンヒールでドロップキックとかかましてくるから、死活問題になってしまうだろうに。

姉は男に容赦ないからね。

「だが、ハーンさんを説得する手間は省けたな。グッジョブ」

爽やかな笑顔で、親指を立てる兄に、なんだか騎士（目つき悪）が哀れに感じなくもない。
やっぱり、兄も駄々っ子のように騒ぐ彼にイライラしてたんだろう。

にしても、コブラツイストはないよ。コブラツイストは。

「真実、お姉ちゃんは、お前を心配してくれたんだぞ」
「うぅ」

父は前を見て運転しながら、少し真面目な声色で言った。

わかってるよ――――わかってるから、姉には文句言ってな――――
ご心配かけました！ごめんなさい！だから睨まないで姉よ！

「どっか、落ち着いたら父さんが遊んでやるから、な？機嫌直せ？」

と、運転席と助手席の間で顔を伏せる私の頭を撫でようと、速度を落として左手を伸ばした――

ガブっ

――のだが、父のくせに、上から目線がむかついたので、伸びた手に噛み付いた。

誰が遊んであげる、だ。
失敬な。私もう、１８ですから。

ふ、まぁ、大人だから、遊んでくださいっていうなら、遊んであげるけど。

「うぉあ！」

さすがに、不意打ちで手を噛まれて、びっくりしたらしく、車が蛇行した。

背後の荷台で騎士たちの叫びが響く。

ち、母の目があるから、面白いけど、ぺっと、父の手を吐き出した。

「もー、お父さんたら、ちゃんと走ってくれないとぉ、危ないでしょ？」

「いや、ミコがっ！」

「めっ、お父さん」

「う、うぅ、ごめんなさい」

と、年の割には可愛く窘められて、父は泣き寝入りである。

母にメロメロだな、おい、父。

かわいそーに。

うぷぷぷ。

「ミコ、悪魔的笑顔になってるぞ」

兄がバックミラー越しに苦笑を浮かべる。
おっと、うっかり笑っておりました。うっかり、うっかり。
私も修行が足りませんな。

さておき、父を苛めて気分も晴れたので、母にオレンジ剥いてあげよう。

５４万オレンジかぁ。
さぞかし、美味しいんだろうなぁ～…幸い、姉のコブラツイスト時はぐっちゃりと潰れなかったようで、全部無事であった。

「で、えーとハーンさんを締め上げる話の前に何の話してたんでしたっけ？」
「なんだったけなぁ～…」

っつーか、騎士（目つき悪）を締め上げる気だったんかい。
騎士二人と、兄にかかれば、多分負けるな騎士（目つき悪）は。
レベル的にも、騎士二人に劣るし。

「ほら、天国みたから、忘れちゃったよ～…」
「変態」
「死ね」

完全なる、ループである。

私は背を向けてオレンジを剥いていたが、しっかりと反応してしまった。

これも多分、姉の教育の賜物だろう。

「もう、だめよぅ。貴方たちったら、誰に似たのかしらぁ」

「え、俺？」

って、父をジト目で見ても、間違いなく貴方の血筋ですよ。母。

父も突然話し振られて、びっくりしちゃってるじゃん。

「口が悪いんだからぁ。お母さんの教育が悪いっていわれちゃうでしょ～？」

「いやだわ、私ったら。性的にお盛んで、それを胸に隠しておけない紳士は、生物学上、人類に分類してなかったものですから」

「生きているのをやめればいいと思います」

あぁ、なんて、私たち姉妹は母親の言葉を忠実に守るいい子なのでしょう。

オブラートに三十枚ぐらい包んであげました。

わざとらしい猫撫で声の姉の笑顔が、あまりに恐ろしかったのか、兄ですらちょっと引いてるけど――うん、騎士と王子も引いてるか。

「俺…これでも…色男で通ってるんですけど…普通なら『いやんｖチャイロ様ｖｖ』とかなのに…」

なにか、ぶつぶつ騎士（チャラい）がブツブツいってるけど、騎士（毒抜き）が苦笑を浮かべて、ぽんぽん、と慰める様に肩を叩いている。

「え～…と、た、たしか、俺が魔法のこと聞いてたんだっけか」
「そ、そうでしたね」

多分、違うとおもうけど。

「そーいや、なんで、騎士三人だけで、王子連れて入ってたんだ？ゴブリンの事を考えれば、もっと多い数でくるんだろう」

そらぁ、ゴブリンが大量にでてくると分かっている森を、撃退できない数で入るはずがない。
近い森なのに、知らない、ということはないだろう。

つまり、今回のゴブリンの襲撃は全くの予想外の出来事だろう。

バックミラー越しに、いつもと変わらないマイペースな兄は人の良さそうな爽やかな顔つきだが、世間話をしているつもりで、瞳に剣呑ならぬ光が宿っている。

なんか、微妙にいつもと違う気がする。

騎士たちはオブラートに包まれた兄の不穏な気配に気がついた様子はない。

「元々、ゴブリンというのは、４～７体程度の群れで行動しております。今回は異常な数でしたが、本来は正騎士２名、平騎士２０名ほどで巡回をしているのですが……」

ちらり、と騎士（毒抜き）が言葉を濁して王子を見る。

話すべきか、どうか、迷っているようだ。

「――――僕が城を飛び出したせいです」

「家出か？」

「いえ、兄が熊に殺されたと思っていたので、せめて仇だけでも、と」

大人しく体育座りしている、至極大人しい巨大な黒熊を、なんともいえない表情で弟王子が眺めていた。

Ａｃｔ　２２．　オレンジ（※５４０万円）

――――ザーロ神殿内部。

隆盛期であったなら目を見張るほど美しかったのだろうと思わせる壁画や調度品は、何百年の月日を経て、風化と破損、絡まる蔓状の植物で、見る影もなかった。

誰もが、この神殿の本当の意味は知ることはない。

僕も生まれる前から、見放された聖域であり、放置されて数百年は経過している。

もしかすると、数千年かもしれない。

本当は神殿かもわかっておらず、ただ研究者の話によると柱と壁に彫られた古語には幾度も『ザーロ』と『神殿』という文字があったために、便宜上、命名されただけだった。

大広間らしい場所で兄であるカルムが、祈りを捧げるように緋色の瞳を閉じていた。

きつく握り絞められた拳は胸に添えられ、騎士として教えられた忠節を守るように、神々に敬意を払っているように思えた。

天窓から差し込む、割れた薔薇窓越しの光が、祝福するように兄を彩る。

その姿は騎士でもあり、王子でもある。

しかし、彼がここに足を運ぶのは、兄一個人の――そして、僕の

一個人の意思であった。

「兄上」

悲しげな緋色の双眸が、ゆっくりと此方を向いた。

・　・　・　・　・

って、長！！
王子の口上、長っ！！

「あ～…ゼルスター君、申し訳ないが、こう、簡潔にお願いできないか？？」

まだ、熊王子が呪われてるところまでいってないけど、始まりからして、すご〜〜〜〜く、長い話になりそうなのを兄は察したようだ。

いくら鈍い私でもわかるよ！

こいつは校長先生とかになったら、全校集会で貧血の生徒を多く出しちゃうタイプだよ！

悪気がまったくない分、手に負えねぇ！！

熊王子が振り返るだけで、どんだけ時間かかるんだい！

あ〜〜……もう、あまりの長さに、オレンジの皮むき終わっちゃったよ。

もういいや、後ろの話は我関せずってことのして、兄、がんばって、ながーーーい、弟王子の話、聞いてやりなさい。うむ。

「母」

白い部分は全くなくなったオレンジの果肉を誇らしげに、母に見せる。

今回はまだ季節には早いので、オレンジは缶詰がデザート用に二つあるだけだ。

生のオレンジがあることで、母は、あぁ、と納得した様子であった。

「さっきのお出かけは蜜柑狩りだったの？」
「ん…」

こくり、と頷き、割った3分の1を母に差し出す。

「あら、お母さんに……ありがとう」

こくこく、頷く私に満面の笑みを浮かべ――母は花と食料の差し入れを好むし、柑橘系は好きらしいので気に入ってくれたようだ――母は、欠片を受け取る。

コブラツイストを食らった甲斐が……本来そこは食らわなくてよかった気がするけど。

「ん～、いい香り」

確かに、匂いは甘くはないけど、清涼感があるね。オレンジ。

「なに、ミコ。お母さんになに上げたの？私には」

ぶーぶー、誰がやるか。
可愛い妹（まぁ、自分で言ってる時点で終わってるけど）にコブ

ラツイストをかける奴に上げるものなんてないんだからね。

どうやら姉も弟王子の話は、聞くに堪えなかったらしい。

私は、ありったけの勇気を持って、叛旗を翻し、オレンジの皮を姉に投げつけた。

が、あっさりと避けられ、勢いのまま飛んでいった。

騎士（目つき悪・鼻血つき）の顔の辺りに不時着したが、まあいいか。

「あぶな、なによ。ひとつくらい、いーじゃない」

「あら、酸っぱいわ…種も入ってるし」

あれ、母？酸っぱいの？

口をむにゅむにゅと変な動かし方をして、母はジュースホルダーに入ってたペットボトルのお茶で流し込む。

備え付けのティッシュに種を丸め込むと、ギアーに通したゴミ袋に投げ捨てた。

え～柑橘系に強い母が、酸っぱいってぐらいだから、凄いの？

５４万のオレンジだよ？

絶対甘くておいしいと思ったんだけどなぁ。

一欠片を千切る。

「〜〜〜〜っ！！」

酸っぱすぎて声も出ない私に、姉がはん、と鼻を鳴らして笑う。
うぅっ、七転八倒したいぐらいだ。

「……食べなくてよかった」

くそうっ！しかも私のにも種入ってるし！

吐き出しティッシュで丸めて捨てると、私も母のお茶を奪う。
ごめん、母、緊急事態だから、許して。

舌が…舌がヒリヒリする。

でも、捨てるにはあまりにも、もったいない———よし、父、食え。

「ミコ、待て！お父さん、苦いのも、辛いのも平気だけど、酸っぱいのは———むぐっ！」
「ま、まって———」

口を開いた隙に、全部突っ込んでくれるわ！

きっとこれから起こることを予測して、騒がしくなった背後で、熊がウガウガ煩くなったがかまわず、私は父の口に放り込んだ。

予想通り、車が急激に蛇行を始め、私は父の口と鼻を塞ぐ。

ふはは、食え！

飲み込めばいいよ、父！

暫しの蛇行を終えて、嚥下する音が聞こえると、私は手を離した。

「っ！っ！！～～～～っ！！」

苦悶後、父は瀕死の重傷のような顔をしているが、ＨＰは回復してるし、なんかステータス光ってるし――って、母と私のステータスも光っている。

んん…人体に影響はないはず、だよね？

ただの、オレンジだよね??

「～～～～、っ、母さん、お茶」

「はい。食料を無駄にしないお父さんは立派ですよ」

「か、母さん。うん」

まぁ、イナゴでも食べる母さんも絶対、食べる気はないぐらいの酸っぱさだったけどね。

しゃあない、残りは砂糖入れて煮立ててジャムにしよう。

とてもじゃないけど、酸っぱいし、加工しないと食べれない部類だ。

「ごめんなさい、母さん」

「いいのよ。味はあれだったけど、嬉しいわ。お母さんのために、採ってきてくれたんでしょう？」

「ん」

味見してから渡せばよかった。

母が柑橘類好きだから、一番に食べて欲しかったのが裏目にでた。

くすくす、と笑っているけど、尋常じゃない酸っぱさで、口の中にもまだ残っている。

「と、父さんにはなにかいうことないのか、ミコ？」

「あ―…父、メンゴ、メンゴ」

「軽っ！父さんへの謝罪、軽っ！」

しゃーね、おじさんの家の裏庭で取れる木苺でジャムを毎年作っているので、空瓶だけ持ってきてたのだが、それに突っ込むか。

空瓶を探そうと振り返ると、なぜか王子と騎士（毒抜き）が、こちらに手を伸ばした体勢で固まっている。
その顔は、なぜか呆然としている。
しかも弟王子、手にオレンジの皮握り締めてるし。
なに？
なんかあったの？
小首を傾げる私に、姉が肩を竦めた。
「しらない。蜜柑食べたかったんじゃないの？」
ふーん。剥いたやつならあげてもよかったけど――――ものすっごく酸っぱくていいなら。
私は座席の下の収納にある鞄から、手のひらに収まる瓶を手にする。
あまり大きくはないけど、蜜柑は後三つしかないから、半分にもならないだろう。
残念だが、この調子だと、木苺は無理そうだから。
人生妥協も必要だよね。
料理は格段に母の方が上手だが、お菓子なら私もそこそこ自信がある。
母の作ってくれた焼き立てのパンで、自分好みの甘さのオレンジ

ジャムを塗って食べる…じゅるり。
今から、想像だけでも、涎が出ちゃうぜ。

「コーチィ殿っ、お願いしますっ！先ほど止まった場所に戻ってください！！」

コーチィ…あぁ、幸一、父か。
一瞬誰を呼んでるか分からなかったよ。

「ま、まさか、これが本当にあるなんて！」
「え、だいぶ前だけど？」

うがうが！と熊まで興奮した様子で、車を揺らしている。

やめてー。
なんか車のタイヤパンクしそうで怖いからー。

うん、しかも、物凄い鼻息荒いし、おっかないんですけど――――
そこで、何かを察したらしい兄が、口を開いた。

「さっきのオレンジが欲しいのか？」
「そうですっ！！あれがあれば！」

王子は口を噤んで、なにか言いかけたことを飲み込んだ。

なんで、荷台は、みんなヒートアップしてるのよ。

「まだあるぞ――――ミコ」

やだよー。

もうオレンジジャムにするって決めたんだもん。

べー、と舌を出すと、それで意思は伝わったらしく、兄は困ったように、コメカミを指で掻いた。

さっき、コブラツイストで大爆笑してたの、誰だよー。助けろよー。

「ミィコ殿は、まだ持っていると!?」

「あぁ、持ってる。しかも奴は、残りを自分でオレンジジャムにして、母さんの作った焼きたてのパンにつけて食べる気だ」

「じゃ、ジャムに」

瓶を持っているだけで、そこまで見破るとは――さすが、我が兄。やるな。

そのうち、十人が同時に話しかけても、すべての内容を理解するようになるんじゃね？

聖徳太子系の人間になれるよ。兄。

その時点で、私の中で、兄の立ち位置は、人外決定だけど。

「ミィコ殿！それを僕に売ってください！言い値で買わせていただきます！」

「あちゃ～…言っちゃったよ」

「え～、王族だし、王子はちゃんと払うよ～？まぁ、あれだけ魔石があると魅力感じないかもしれないけど、あるに越したこと、ないでしょ～？」

「いや、金で釣るって、真実の禁句ワード、ベスト１０に入ってるし」

まったくもって、そのとおり。なんか、かちん、てきたよね。

魔石成金だから、大金は要らないし。

っつーか、自分で拾ってこい王子。金に物言わせて、すべてのものが上手くいくと思うな、ボンボンが。

けっ。こうなったら、ムキになって、オレンジジャムったら、オレンジジャム。

貧乏人の反骨精神を舐めんなー。

「えー…ミィコ殿はなんと？」

「聞かないほうがいいと思うが……」

無言を通す私に、王子が兄に視線を向ける。

「『金で買うってなにそれ？すべての物事が金で決着がつくと思ったら大間違いだぜ、自力で金も稼いだことのないボンボンが。貧乏人舐めんな。もうこうなったら、絶対にオレンジジャムじゃい、ヴォケ！三回死んでろ、あほんだらぁ。つーか、自分でとってこいやぁ』、みたいなことを……」

内容に間違いはなさそうだけど、さらに口が悪くなってるし。

言ってないよ、兄。

そこまで、恐ろしいこと、言ってない。

「た、たしかに、自力で稼いだことはありませんが……」

私が言ってるって納得しちゃった！

子ども扱いと合わせて……王子、お前は何処まで失礼なやつなんだ。私が本当にそんなこと言ったと思っているのだろうか。

なんか、がっくりと床に手をついて、王子は肩を落としているし。

いや、がっくりと肩を落としたいのは私なんですが？

「なんにも聞かずに、相手に譲ってやるのも男だぞ」

いや、女だし。
どうして、兄は私を弟にしたいのか？
真剣な顔しているから、なにか本当に必要なのかもしれないけどさー、ちょっと唐突だし、横暴じゃないかなーと思うんだよ。
だって、初対面だよ、私達？
お弁当の交換だって、お友達一ヵ月後ぐらいでしょ？

「どうか――どうか、ミィコ殿…」

涙を流しそうな王子に、良心が傷む反面、がんばるオレンジジャムへの執着。
母と一緒に食べたいんですけどー。

どっこいどっこいぐらいのびみょーな。

王子のテンプレ的イベント発生中ってなら、やっぱ自力のほうがいいんじゃない？

できることなら、下手に王族とか権力の渦中に家族を巻き込まれたくない、というか。
いや、逆に渡したほうが、巻き込まれないですむのか？

「簡単じゃない、ミコ」

ん？姉よ、今、第三十八回自分脳内会議で忙しいんだけど？

答えが出るまで、天使と悪魔が、武装して激突しまくりなんだけど――後、三ヶ月先まで答えは出ないから、その間にオレンジジャムだろうし。

「王子に蜜柑あげたら、熊、もふもふしていいって」

「いっ、いたっ！」

私は瞬時に、パーカーの帽子に手をつっこんで、残りの三つのオレンジを王子に投げつける。

クリティカルヒットと同時に、私は荷台に乗り込むと、がばり、と熊に抱きついた。

「ぐぁっ！！」

ごめん、なんか踏んだけど、まあいいや。

もふもふ、素敵。

毛並み最高。

ちょっと獣くさいけど、黒い毛並みに顔を埋める。

むむ、ちょっとゴブリンの血の匂いが気持ちわるいし、ごわごわしてるけど、生毛皮いいよね！

もふもふ、最高。最高です。

もしかしたら、鼻血でるかもしれないけどー、後でちゃんと洗うからねー。

もふ、もふ。

Ａｃｔ　２２．　オレンジ（※５４０万円）（後書き）

真実子は、お金の計算が苦手です（苦笑）
実際のオレンジの値段は５４０万だが、勘違いしている模様…

Ａｃｔ　２３．　不穏

「……裏技だな」
「だって、あの子、昔から動物には弱いじゃない」
「そーだけど、反則っつーか」

なんか、兄と姉がゴチャゴチャいってるけど、どーでもいいよね。

艶やかな黒の毛並み。

触るとふさふさで最高だよねー。
ちょっと汚れてるから、綺麗に拭いてあげるねー。

十二分に熊の胸に顔を埋めて楽しんだ私だったが、ちょっと見た目より、固くてゴワゴワしているのがちょっと、だめだよね。

ちょっと好みじゃないけど…大丈夫！

ウエットティッシュで汚れを拭うのだが、黒い汚れが取れるのに、時間がかかった。
かなり、前の染みが固まってしまったものなのだろうか？

動物専用の細かい櫛で綺麗に毛並みを整える。

「なんでミコ、動物用の櫛もってんだ？」
「叔父さんちの家の裏にウサギ飼ってるじゃない。あれ、隙を見て

毛並みを整えてるのよ」

ふぅー、毛抜けの季節じゃないのが残念だ。
猫とか犬の場合は、超、毛が取れて、楽しんだけどー、絡まった毛並みを解くだけに留める。

よしよし、サバイバル生活が長かったんだね。

普通は、相手との信頼関係がないとブラッシングさせてくれないんだけど、よく考えたら、熊、元は人間なんだから、それくらい我慢してくれるよね。

熊なんだけど、中身が温厚な人間だから、いいよねー。

少し驚いたところに、お腹の所にあった傷がほとんど塞がってるんだよね。

姉はちゃんと縫合して消毒してくれたけど。

ステータス表示させたら、すでに7割くらいまで回復していた。

う～ん…獣化して自然治癒能力が上がっているとか、そんな感じだろうか。
よくゲームの中だと獣人は回復比率が高いよね。

「城に戻りましたら、必ずお支払いいたしますので」
「いや、いいんだ――対価はちゃんと支払ってもらってるだろ？」

兄が私を指差しているが視界に入るが、無視だ、無視――いま、すごく忙しいから。

指先で顎の辺りを撫でる。

すでに絡まった部分もすくなく、さらさらと、指先の通りもよい。

くぅーん、と鼻を鳴らして、熊が擽ったそうに身を捩る。

「ペットカフェに行った時のテンションの高さね」

「熊王子を勝手に売ったお前さんがいうな――ミコは気にするな。元々、そこら辺の木からもぎ取ってきたものだろうし」

「そ、そんな、それでは兄はともかく、私の気がすみません」

弟王子は大事そうに、檸檬並みに酸っぱいオレンジを、皮袋に入れて抱えている。

事情は分からないが、よっぽどのことなのだろう。

まぁ、早々に譲っといてよかった。

あの執着っぷりを見ると、月のない夜に襲撃されても、頷けるし。

え、変わり身早いなって？

そら、自分の身の安全を守るっていうか～…熊がもふもふさせてくれるなら、どうでもいいっていうか。

もしかして、これも帰還イベントって可能性もあるしなー。

ゲームが現実になると、微妙に感情と己に対する被害を考えたり、実際は楽しいわけでもない。

「私と、この国の宝である騎士の命を救い、兄を見つけてくださった貴方達に何もせずに、礼だけをいうなど、きっと、我が母も許さないでしょう」
「ですね」
「だよね～」

と、何故か騎士たちが、困ったように同意する。

かなりの猛者である騎士たちにそんな顔をさせるのだから、よほどの豪傑な女王??
まぁ、会うことないから関係ないけど。

「どうぞ、私の城で客人として、もてなさせてください」

願ってもないことだ。

正直、私たちは、左右どころか、上下も分からない状態だ。
期待していなかったといえば嘘になるが、そういってくれるのは有難い事である。

宿泊については、幸い車に乗ってるんだから、野宿ということにはならないだろうし、魔石がお金になりそうなので、兄が何とかするだろうと思ってた。

基本、他力本願だから。

「城って、城？」

「は、はぁ、一般的な城だとは思いますけど」

姉が瞳を輝かせて――ハートのエフェクトが背中から出てるよ――豪華絢爛な空想にぶっ飛んでいる様子である。

それともただ、車の中で宿泊が取りやめになったのが嬉しいのか？

「いいじゃないｖ　私たち、とめ――」

「いや」

姉が決めようとしていた声に、兄が被せる。

ん？私も、流れ的に泊まる気でいたので、小首をかしげて、兄の声に視線を向ける。

もしかして、オレンジのイベント的なものかもしれないし。

「遠慮しよう」

完全なる否定的な言葉に「え～」と姉の猛抗議の声も聞かずに、苦笑を浮かべた。

自分では上手くいっていると思っているのだろう。
にこにこと、いつものように笑ってはいるが、眼鏡越しの瞳が、なんとも言えない息の詰まりそうというか、苦々しい色をしていた。
自嘲気味な――――不の感情が入り混じるが、それも一瞬だった。
「俺たちは異邦人だから、この世界のことには不自由するだろうが、来てしまったのはしょうがない。だろう？」
「まぁ、そういわれれば…仕方ないといえば、ないけど」
「な？お前さんらに迷惑はかけんさ」

だけど、圧倒的に現在のこの世界の情報量が少ない。
危険を冒してまで、断る理由にはならない。
兄は強い――精神的にも肉体的にも、タフな人間で適応能力もあるしチートだ。
一人でいたなら、そうかもしれない。
そこらを歩くだけで、周囲から情報を吸収して、適応していくだろう。
正直、私は思ってた。
この世界にテンプレ的に召還されたというなら『勇者』は兄だ、

と。

ちょっと年はいってるけど、絶対的な物語の主人公で、いうならば私や家族は『モブ』ないし『おまけ』か手違いなのだろう。

しかし、そんなチート兄でも嫌がることがある。

――――家族の危険だ。

それを何より、嫌がるのだ。

本来なら、城にいれば、家族は外で何も知らない状態でいるよりは、ずっと安全であるはずだ。

精神的な磨耗はあるかもしれないが、肉体的危機にさらされることはない、はず。

なにせよ、王子や騎士達から、探るような意思は感じるが、兄が命を二度に渡って救ったことが功をそうしているのか、怪しい私たちに対して、敵意や悪意は感じない。

「でも城よ、城。一般が立ち入ることのできない秘境よ」

いや、一般人は確かに入れないけど、秘境ではないと思う。

まぁまぁ、といきり立つ姉を説得しながら、やはり時折、我慢す

るように奥歯を噛み締めたのか、こめかみが僅かに動いたのを私は見逃さなかった。

なんだ。

兄は、何を迷ってるの??

「え〜、お城で客人ってことはぁ、しばらくの衣食住は安心できると思うけど〜?」

「異世界からきたというのなら、慣れるまでは、ご滞在されよ」

っていうか、実は私も城の滞在賛成なんだよねー。

なにせ、熊の毛並みを綺麗にするなんて、長い人生でそうそうあるものじゃないしねー。

滞在するなら、その機会もあるだろうし。

「ん〜…でもな、んん」

兄は私に視線を送ってくるが、櫛をブラブラさせると、困ったように言い淀む。

私の人が苦手なのを理由に断る気だったようだ。

だが、熊が毛並みを整えさせてくれるなら、別にそこでもいい。

妥協しよう。

人の言葉に甘えまくりの兄だから、よっぽど泊まりたくない理由

があるのだろう。

兄の視線が父と母に向かう。

「父さん、母さん」

「あら、私は食いっぱぐれないなら、宿でも、城でも、車でも、いいわよ？」

「ん、父さんは、母さんがいいなら、どこでもいいぞ」

はいはい、ご馳走様。

決定的に断る理由がなくなったようで兄は、小さくため息をついた。

「じゃあ、一日だけ。装備をそろえる時間だけ、置いてもらおう」

「は、はい！一日とはいわず、ゆっくりなさってください」

「いや、一日だけでいいんだ。それ以上は」

と、無邪気に笑う王子に、決定的に苦々しいものを浮かべた。

さすがの王子たちも不思議そうにしている。

「もし、俺たちに恩義を感じてるんだったら、難しいと思うんだが旅券を発行してほしいんだ――できるだけ早めにお願いしたい」

「すぐに旅立たれるのですか？」

「あぁ、まあ。早ければ早いだけいい――できれば、二日以内で」

「ふ、二日以内ですか？」

ぶーぶー、そんなに急がずとも観光名所回ろうよー。

私、お菓子食べたい。

異世界のお菓子を食べる機会なんて、人生で――――以下略。

きっとファンタジー果実をつかった、奇妙な感じのが出てくるに違いない。

紫色のスープとか、青いお菓子とか……想像するだけで、よだれが出てきそうである。

ってか、なんで、そんなに長期間の滞在を拒むんだろう。

彼らが嫌いだから、という理由ではない。

まだ見ぬ都市を恐れているわけでもなく、私たちに政治的な事情に巻き込まれるわけでもない。

だって、実際は『勇者』として召還されたわけじゃない。

そうだったら、きっと周囲に召喚者がいて、そう告げるに違いない。

――――だとしたら、なんだ？

バラバラのパズルのピースが、上から振ってくる奇妙な感覚がある。

兄が教えてくれた方法で、私も活用している。

ピースごとに、形と一部の情報が載っており、それをひとつひとつ収集することで、大きな答えを導き出すのだ。

兄は、王子たちの町に留まるのを嫌がっている。

それは間違いない。

なぜ？

並大抵のことが些事である剛毅な兄が嫌がることはひとつ――家族だ。

家族が傷つけたり、嫌がることはしない。

だったら、町に留まらないのは、家族のためとも言える。

確かに、文明も時代も人も違う町で突如、生活しろと言われても、なんとなく現状を察している私でも、難しい。

だが、おかれている状況も分からずに、転々とするもの危険だろう。

私たちに、この世界に対する予備知識などない。

元の世界に帰るにしても、何故ここにいるかがわからなければ、分かるはずもない。

「ミコ」

兄の呼びかけに、思考がぶっつりと途切れる。
基本的、私を放置している兄が困ったような顔で、考えを遮った。

Ａｃｔ　２４．　ホットサンドって、美味しいよね

兄と、私の睨みあい。

家族も滅多にあることのない私たちの意見の衝突？に、車の中は緊迫を孕んでいた。

思考が中断されて、集まりかけていたピースが、ばらばらと散らばっていく。

残念だが、完全に集中力が失われていく。

絶対何かある。

兄が何か隠している気がする。

私の勘はそう告げている。

べつに全てを曝け出せといってるわけじゃない、兄が家族に秘密があったっていい、私だって家族に秘密がひとつやふたつぐらいある。

え、中身？そりゃ、むにゃむにゃ～～…言えない。

言えるわけがないっス。

顔から火が出るっつーか、末代までの恥っていうか、うん。秘密は秘密。

だけど、私には兄が、なにかに苦しんでいるように――

ぐうううううう〜〜〜〜〜〜

ようにみえて……うん、なんだっけ??

思考をさらに何か妙な音が遮る。
岸田家に訪れたシリアスムードは一気に霧散していく。

ぐぅうおおおお〜〜〜〜〜〜

私、ずっこけかけたよ、今?!!よりによって今!?誰!?つーか、なに??

「ん?なんのかしら?」

そうだね、なんか変な音するんだけど。

狼が遠吠えしているような――でも、車内で聞こえてるので、耳を澄ますと、すごく近い。

……うん？熊？？

熊は素知らぬ顔――ってか、表情は変わんないんだけどさ――をしているので、お腹（またの名を生毛皮）顔面ダイブをしてみると、遠吠えていた。

そして顔を上げると、熊は恥ずかしげに、凝視すると、両手で顔を隠す。

初心な娘が『きゃ、やだっ』と言わんばかりの仕草である。

「っ！！！！」

可愛いっ！お前さん、可愛いよ！

おぢさんが、いいことしてあげるからね！！

兄の方を見ると、すっかり気が削がれたらしく、肩をすくめる。

「たしか、熊は雑食だったぞ」

だよね。だよね。
基本的に何でも食べちゃうんだよね。
好き嫌いのない子、大好きじゃよ。

「母」

呼んだだけで、察したようで母も振り返って、ぴ、と人差し指を立てている。
数量はひとつという意味なのだろう。

「いいわよ〜、お母さん、チーズとベーコン、レタスね〜」

とりあえず、櫛を置いて、手をふいてから、うろうろ〜、車内うろうろ〜、お前邪魔だよ。
騎士（目つき悪）！！どけ、お前の下には、宝が埋まっておるのじゃよ！

ごろごろと、鎧で重い騎士を転がす。

「あたし、レタス、チーズで、さらにレタス」
「俺、ツナと目玉」
「父、レタス以外」

と最後の父のリクエストで、母と姉は声を上げる。

「「「だめ」」」
「え～??」
「お父さん、だめよ～。野菜も食べないと、メタボちゃううから」
「腹回りが百センチ越えたら口利かないから」
「ええぇ～～～！！」

姉、すごいな。
太っただけで口利かないのか。

父、涙目である。

うーん、確かにこのごろ、父の腹回りは…げふん、げふん。

騎士（目つき悪）の、真下の収納ボックスから、ホットサンドメーカーを出す。
プレートを取り替えれば、ワッフル、タイヤキ、焼きおにぎり、たこ焼き、ホットプレートにもなるし、一つ六役もこなしちゃうけど、今は腹にたまるほうがいいよね。

こっそり父が改造したため、車体の上にはソーラーパネルがついている。

なぜか、車内は電化製品が使えるようにコンセントがぶらぶらしているのだ。
それに差し込み、スイッチを入れて、暖めておく。

もっと、手を綺麗に拭いておこう。
流石に、熊毛がついていたのでは、食欲をなくすし。
その隣の収納ボックスは食料庫を開く。
すっぽりと荷台の底上げされた床に、嵌っているクールボックスを開けると、母がチーズ、ベーコン、卵、レタスを取り出す。
あと積み上げられた缶詰からツナ、ゲット。
横から、母拘りの七ミリ間隔で切られた一斤のパン。
サンドイッチ専用の耳を切り落としたやつがあるので、それを使いますよ。
パンの耳はすでに、自宅で揚げパン風味におやつになって、バックに入っております。
マグカップの中に2個ほど卵を落とし、フォークでかき混ぜ、温まったプレートの中に流し込んで、軽く半熟のスクランブルエッグ。
それを皿に避けて、パンを敷いて、千切ったレタス、スライスされて分けられているベーコン、スライスチーズ、スクランブルエッグ、レタスの順番で乗っけて、パンを上に乗せる。
二つ並べたら、ふたをして、待つこと五分。
その間に、ツナ缶詰……許せ、大自然。
いつもは汁も使って違う料理に出汁的な存在で使うが、お前の役目は今ない！

全開の窓から、ツナ汁、不法投棄。

さらばツナ汁。お前の勇姿は忘れない――あと、十五秒ぐらいは。

マヨネーズ入れて、缶の中でミックス。

車内で、玉ねぎのスライスはメンドイので却下。

あ、てか、騎士と王子は、飲み物どうしようか…紅茶か、コーヒーか、ココアぐらいなら、インスタントで持ってきたけど、家族のマグカップぐらいしかない。

他人が車内で食事をすることなど、まったく考えていなかったので、紙コップ的なものはない。

「いいんじゃないか？後で洗えば問題ないだろ？」

げ、やっぱり、私が洗うのか。

う～…しゃあないか。べ、別にあんたらのためじゃないからね（つんでれ発動）！ホットサンドには飲み物必要なんだからね！（うわー自分でやっててひくわぁー）

電気ケトルに、ペットボトルからミネラルウォーターを注いで、こっちもスイッチオン。

ん～…紅茶かな。お変わり自由だし。

そこまで、面倒みきれんし。

さらに、騎士（目つき悪）を移動させて――弟王子も邪魔なので移動させて――コップと、茶葉と、ポットを用意する。

ちーん。

お、ホットサンド完成したじゃないですかい。

蓋を開けると、チーズとベーコンの焼けた匂いが充満する。

気がつかなかったけど、私もお腹が空いていたらしく、ぐーと、控えめに音がなった。

とりあえず、獣の唸り――獣だけど――をしている熊だな。

「熊」

二つのホットサンドは斜めに切断されており、三角形のサンドが四つできている。

一つ摘んで、熊の口に突っ込んだ。

ちょっと熱いかもしんないけど、お食べ。

おずおず、と言った感じで、咀嚼するがなにか驚いたように、うがうが言ってるが――うん、分からないんだって、熊よ。

そして、はしゃぐな。車揺れるから。

まぁ、吐き出さなかったから、食べられるものだったのだろう。

皿に残りの三つをより分ける。

騎士と王子の視線は皿に集中しており、わずらわしく思いながらも、差し出す。

ごん、と騎士（目つき悪）をテーブル代わりに、皿を置いた。

微動だにしないから、丁度いいよね。

え～と、なんていえばいいかな、とりあえず――

「お先にどうぞ。御代わりは一度だけ、熊については二度まで許可する、具材のリクエスト不可、ただでくれてやるから、食え、だそうだ」

――そうそう、そんな感じでって、兄。だから、人の心を読むのをやめろって。怖いから。

私、口開いてないよね？言ってないよね？？

次のホットサンドを準備しつつ、兄を化け物のような目で見つめる。

母のだから、チーズと、ベーコンと、レタス。

姉がチーズとレタス……大目だな。ダイエット中だから、食物繊

維必要だし。

「あ、ありがとうございます。ミィコ殿！」
「うまいよぅ――」
「いただきます」

あ、騎士（目つき悪）の分ないけど、気絶してるから、まあいいか。

電気ケルトから、茶葉を入れたポットにお湯を注ぎ、コップに注ぐと、爽やかなアールグレーの香りがホットサンドの間に彷徨う。

そのまま飲め。砂糖を出すのめんどくさい。

「粗茶ですが、どうぞ。後はお湯沸かしておくから、勝手に自分で入れて飲め。砂糖はめんどくさいから、だしたくない、だそうだ」

兄。悟りなの？むしろ、私は悟られなの？？

そして、一気に食い終わるな騎士（チャラい）！指舐めるのやめなさい！王子、サンドイッチごときで、目をキラキラさせない！その純真な目が、罪悪感をそそるから！

ふぅ、唯一静かに食べてるのは騎士（毒抜き）だけか――――って、男泣き！？

なんで、土下座してるの！！

「ミィコ殿……私の妹は未婚ですゆえ。どうぞ、貰ってやってください」

殴るぞ、騎士（毒抜き）！！！！

Ａｃｔ　２５．　精霊は見えませんが…??

殺意を覚えたり覚えなかったりで、丸１日分の食料を使った。

ホットサンドという軽い食事ではあるが、プラス４人――熊も人でよかったんだっけ?――のお陰で、食料は、カップラーメンを抜けば、３日間ぐらいは食いつなげるか。

節約しても、生ものがあるから、いくら母でも５日も賄えないだろう。

別に兄以外は並みの食欲だが、兄の胃袋は、時と場合によって、尋常じゃない量を食べるからなぁ。

いや、一般的な男はそんなものなのだろうか??

私も、２つのホットサンドを平らげて、魔法瓶に残る紅茶を啜り、息をついた。

３０分近く、ずっとホットサンドを焼き続けていた。

自分で言い出した事ながら、面倒な。

あとで食器類も洗わなければいけないので、汚れ物のコーナーに纏めて突っ込んでおく。

ホットサンドメーカーは拭いておけばいいか。

「あの道具に挟めるだけでパンの柔らかさ、カリカリ感がでると?その『さんどいっち』とやらは、具材がシンプルなのにあれほどと

は」
「それに〜、あの酸味の利いたクリーム色のソースみたいなのって、食べたことないよ〜」
「ええ、凄く白い鶏肉のようなものと相性がいいですね」

背後で凄いホットサンド論争が起きてる。

クリーム色のジャム？マヨネーズ？なのか？というか、食ったことないって…あまり食事関係に期待はしないでおこう。

白い鶏肉っぽいのって、シーチキンのことだろうか。

弟王子ですら、興奮気味ってどうよ？
大体、お城とかって、毎食、満漢全席――偏見ですけど――がでてきたりするんじゃないのかいな。

「パンは元々買ってきたものだからわからないが、クリーム色のソースのようなやつはマヨネーズだな」
「まよねーず？」
「あ〜…えと、卵と酢で作った調味料みたいなものか？」

正確には、卵、酢、油、塩だけどね。

うちは、姉が少しだけどアトピーがあるから食事には気を使ってるし、マヨネーズとかケチャップくらいなら平気で作っちゃうもんね。結構時間かかるけど。

でも、母の作るマヨネーズの方が美味しい気がする。
ジャムは匹敵するくらいまで入ったと思うんだけど、甘さは好みが分かれるから微妙。

「あと、白い鶏肉ってのは、ツナだな。え～…海の魚を保存食用に加工したやつだ」

さすがに兄も、当たり前のようにあるものを、説明するのはひどく難しいものだ。
それでも、分かる範囲で丁重に説明していく。

「『つな』は魚なんですか…川と湖がありますが、海、となると…ふぅ」

がっくりと、肩を落とした王子がため息をつくほどなのだから、魚介系の心配もしよう。
魚は川魚とか、ばっかりだろう。

まちがっても、タコ、イカ類が店頭に並んでいないようだ。

あ～がっかり。
たこ焼きが食べたくなったらどうするんだよ。

「べつに、鶏肉でもホットサンドはいけるぞ？まぁ、誰かさんの気が向けば、だが」

いや、お前も作れるだろ？朝自分で作って食べてってるし。

王子、期待された目で見られても、私、家族と動物と女子供以外のためには、動かない主義だから。

んん？王子は１４歳だから子供…いや、カップラーメンの恨みがあるからな。駄目。

食べ物の恨みは恐ろしいんだからね。

ちなみに、でかい野郎どもを労う気持ちは欠片もないぞ。

熊がどうしてもって、材料用意するんだったら、一回ぐらい作ってもいいけど――って、言葉通じないけど。

だが、熊以外は断る！

「――…母のほうが美味い」

ぼそり、と呟くと、背中に集中していた視線は、助手席へと向かう。

半開きの熊の口の中に半分にしたエクレアを突っ込む。

残念だが、自腹なのでコンビニで買ってきたこれは自分の分しかないのだよ。野郎ども。

いまや、コンビニとはいえ、クオリティーが高い。

うまいか？うむ、当然だ。
美食の（自称）私の舌をうならせるぐらいのものなのだよ。熊君。
私は母に詰め寄りそうな雰囲気で会話をしている皆に背を向けたまま、デザートを食しつつ、横を見ると、熊も口を両手で押さえて、もっしゃもっしゃと租借しながら、視線だけで私を見た。
指を一本立てて、口に当てて『秘密』だと伝えると、こくこく頷いている。
というか、このジェスチャーで秘密の意思表示が一緒だなんて、異世界なのに凄いな。
どちらにしても、熊はしゃべれないけど。
あんまり暴れられたら、ばれる。
ん？カスタードクリームがついてたのか、熊が私の頬をペロペロしてくる。
可愛いなぁ。
よしよし。もう大丈夫かな？
じゃ、私、自分の席に戻るから。
よしよし、後生の別れじゃないが、熊毛とはおさらばせねば。
後部座席――は、騎士が身を乗り出すとびっくりするので、足置き場の窪みに体をはめ込んで、体育座り。
このフット感がいいよね。
狭いところ、最高。逆に広いと落ち着かないし。

トラの敷物に一層掻き寄せて、包まる。

異世界にきたってことで、興奮しすぎていたせいか、テンションがようやく落ち着いた。

やっぱり、母がいつも言っているように、空腹ってのはよくない。

兄が何に苦しんでいるのか理解できないけど、何が起こるかわからないので、不測の事態に備えて、いろいろやっておこうと思う。

主にステータスを弄りたい。

いや、ただ自分のステータスを眺めて、うっとりしたいだけだけど。

レベルが連続してアップしたから、ボーナスポイントが増えているし、職業欄もちょっと増えていたので、思いきって――こっそり、サブ職業を変えてみようかなぁ。

兄も、騎士たちと話しこんでいて、私のコミュニケーション能力ではぶっちゃけ入っていけない。

己のステータスを表示させる。

【岸田　真実子（１８）】　職業：盗賊（Ｌｖ５）　サブ職業：専門学生（Ｌｖ１２．）

ＨＰ：１１２／２４２
ＭＰ：３４／１４９

【筋力】　２２
【俊敏】　７８（＋５）
【知性】　１９
【直感】　１３１
【器用】　２６（＋３）
【意思】　１８
【魅力】　２１
【幸運】　８７（＋１１）

【技能】　［悪運］（グットラック）　［調査］（サーチ）　［一枚の壁］（クール）
［集中］（コンティッド）　［虫の知らせ（シェバ・ティーユ）］（サーチ）
［五感強化］（ファイブセンス）　［俊足］（ファーストラン）

【補正】　母の慈愛　父の加護　パティカ神の加護

【ＥＸＰ：４７６１】　【次のレベルアップまで：１１】

【ボーナスポイント】　３７１Ｐ

おお～～～。

なんか、私、ちょっと強くなったよね。きっと。

ＨＰもＭＰも倍とはいわないけど、結構あがったし、ステータスも、ちょびっとずつあがってるし。

たぶん、盗賊の特殊技能だと思うんだけど、［俊足］（ファーストラン）ってのが増

えてるし。

あと、ちょっとだけ、ステータスの補正も入ってるし、これがパティカ神の加護とかのせいだろう。

なんだろう――素早さと、運があがっているって、碌な神様じゃない気もしなくもない。

聞きたいけど、騎士と兄が話しこんでるから、今は無理だな。

あ、必殺技使えるようになってる。

【スマッシュ】　消費ＭＰ　１０

連続２回攻撃をすると、クリティカルヒットになる。

中距離系の職業だし、まぁ、こんなもんかぁ。

近距離戦向きの戦士の『クロスエッジ』に比べるのが悪いか。

レベル５だし。

後、習得できる技能が増えたのはいいね。

【集中Ｌｖ２】　２０Ｐ

【五感強化Ｌｖ２】　３５Ｐ

【虫の知らせＬｖ２】　３５Ｐ

【敵索Ｌｖ２】　６０Ｐ

【調査Ｌｖ２】　５０Ｐ
ＮＥＷ　【盗みＬｖ１】　１５Ｐ
ＮＥＷ　【気配遮断ＬＶ１】　４０Ｐ
ＮＥＷ　【必中ＬＶ１】　３０Ｐ
ＮＥＷ　【鍵開けＬｖ１】　２０Ｐ

あー、うん。ちょっと期待した私が馬鹿だった。

完全に盗賊スキルじゃない？

この最後の三つを選択すると、盗賊か暗殺者系、一直線のような気がするんだけど。

うん、保留しよう。保留。

あれ、ステータス一部光ってるけど、なにこれ――あぁ、そっか、さっきの蜜柑っぽいな。

そういや、父と母のステータスも光ってたっけ。

神託と書かれているけど…新しいウィンドウ画面が開かれる。

ＮＥＷ　【イシュタル神からのお知らせです】　必読　☆三

なに、この迷惑メールみたいなやつ。

すごく開ける気うせるけど、なんか見ないと見ないで気になるな。

【タイトル】イシュタル神からのお知らせです。

このたびは、【イシュタルの祝福のオレンジ】をご試食いただきましてありがとうございます。

シュルルの木を見つけた貴方。なんて幸運な方でしょう！

栄養満点、滋養強壮。病気知らずですよ？今流行の魔枯病なんて、い・ち・こ・ろ☆

よろしければ感想くださいｖ

今後の生産に反映させていただきます。

祈祷を送りますか　ＹＥＳ　ＯＲ　ＮＯ

……。

……。

なんか、こう、久々にイラっとさせられたというか。

なに、あのオレンジは、実験的な感じなの？イシュタル神、神なのにアフォ的な存在なの？

っつーか、母さんに食べさせちゃったでしょうが！

母に謝れ、母にとは神相手にかけずに、控えめに一言。

「……殺意を覚えるほど、酸っぱい」

以下の分を送りますかという続けての文面に、私は迷わずＹＥＳボタンを押した。

落ち着くために、ステータスを放置。

しようと思ったのだが、ものの数秒で、ちゃららーんと嫌な音がする。

みれば、光るウィンドウ画面が出現し【返信】と書いてある。

ＮＥＷ　【返信：イシュタル神からのお知らせです】　必読☆三

くっ、神め！は、早い！お前、どれだけ暇人なんなんだよ――いや暇神なんだよ。

それとも自動なのかいな？

私は苛立ちに任せて、ボタンを押す。

【タイトル】返信：イシュタル神からのお知らせです。

やだぁ～☆味じゃなくて効果ですよー。
あれ、なんで、生で食べる人、多いんですかね？
ちょー不思議です（＝０＝；）
でも返信ありがとうございましたー。
初めての返信の記念と通常返信ボーナス送っておきますｖ
ｖ有効につかってねぇｖ

か、顔文字使ってきやがった。
っつーか、なにボーナスって！嫌な予感がするんですけど。
慌てて全体ログを立ち上げると、イシュタル神の加護という項目で、プラスされている。

――――　ボーナスポイントが、１００加算されました。

よかった。なんか、特に変なのはない。
安堵に胸を下ろすも、全体ログがまだ続いていた。

――― 補正［イシュタル神の加護］ が与えられました。
――― 技能［精霊ホイホイ（マナ・ゲット）］ を覚えました。

せ、精霊ホイホイ？！なにこれ！よからぬ名前に戦慄が走る。

なに？このゴキ●リホイホイ的な感じで名前付けちゃってるんですかい！？

すごーく気になるんですけど！！

くっ、これが神のなせる業なのか―――この、すごい好奇心をそそる感じが。

［精霊ホイホイ（マナ・ゲット）］

精霊と契約を結ぶ際に、多くの種類の精霊が集まる。

自然と精霊の加護が与えられる。

ん。名前のわりに、普通だ。

よかった。

うっかり、精霊を集めて倒しちゃう的な要素が入ってなくて――人知れず、精霊が周囲で倒されているのなんて、なんか目覚め悪いし。

つーか、名前変えろよ。普通に吃驚するから。
しかも、マナゲットってロゴ悪いね。

「ん？」

うん？――なんか、蝿が飛んでいるような音がするんですけど、注意深く周囲を見渡すも、なにもない。

ちゃんと、虫除けスプレーはつけてきたんだけどな。おかしいなぁ。

とりあえず、スプレー出すか。

鳥肌。

なんだ――――今、誰か私の髪の毛を触ったような？？

気のせいかなぁ。気持ち悪い。

ん？どうした熊、荷台から両手を振ってるけど。
ごめんな。うがうがじゃわからないんだ――つーか、ファンタジーなんだから、人語しゃべれ。
いや、無茶か。

小首を傾げると、結局あきらめたらしい。

兄との話しに夢中の騎士（チャラい）をゆさゆさと背後から揺さぶる。

「ん??どうしたの、王子―――うぉわっ?!!!!」

なんですか?
人の顔を見て、あからさまに驚くってマナー違反じゃありませんか。

っつーか、さっき何度も見たでしょうが。

「どうした、チャイラ」
「ど、どうしたのって、すごいことになってるけど!?」

ありえないと言わんばかりに、首を左右に振っている。

「すごい、チカチカしてるよ!多分、色んな精霊が集まってるんだと思うんだけど!?」

……精霊ホイホイか。

そんなに集まってたのかぁ…まったく、分からないんだけど。

もしかして、この虫の羽音というか、耳鳴りみたいなのは精霊の仕業ですか?
まったく見えないんですけど、音だけって気持ち悪いなぁ。

他の人には見えないらしく、慌てているのは、騎士（チャラい）だけなのだが。
あと、熊。

「ミコ？」

いや、私は何も。兄よ。そんな呆れた顔をされても、困る。
文句なら、イシュタル神に言ってくれませんか。

先ほどのメールっぽいを表示させて、全体ログを表示させて［精霊ホイホイ（マナ・ゲット）］を指差す。

「――――お茶目な神様だな」

兄の顔が笑っているけど、目が笑ってないよ。

Ａｃｔ　２５．　精霊は見えませんが…？？（後書き）

たぶん、チャイラは精霊の光をぼんやりと感じれたりします。
あと、熊王子も。

Ａｃｔ　２６．　一発殴れますか？

とりあえず、周囲に虫除けスプレーを撒き散らす。

基本的に煩い。

つーか、時折頭触ったり、肩に乗っかってないか？

なんか感触があるんだよね。怖い…怖すぎる…小さな手の感触がいたるところに…透明人間に体を触られて――――セクハラ！セクハラ禁止！

こう幽霊に取り付かれた人の感じがなんとなく分かる。

いずれ肩こりが起こるであろう重みだ。

やだー。すげー、やだー。

あと、耳の奥が山頂にいるみたいにキーンってなるんだけど。

私がホラー好きじゃないって知っててての狼藉？？

「ヴぉはっ！！だめ！そんなことしたら、精霊遠ざかってるし！」

いや、遠ざけてるんですけど。

煩いんですけど。

怖いんですけど。

慌てる騎士（チャラい）はガン無視して、音のする方向にシューと一吹き。

後々、このスキルが、役立つかもしれないが、とりあえず今はいい。

見えないから、私には恐怖しかないよ。
っていうか、みえたらみえたで、恐怖だけども。

始終、誰かに触られたり乗っかられたり、ほっぺをつんつんされる生活なんてやだ。

臭くなってきたので窓を開けておくか。

姉に殺されそうだし、うん、ごめん。

あ～…無言で睨まないで、恐怖死するから、臆病者私。
私のせいじゃないよ！文句なら、神様にいってくれ！神様に！

「ミコは見えてないのか？」

精霊どころか、幽霊すら見たことないから、私。
てか、兄、見えてるのかいな？

凄いな。チート、チートと思っていたけど、実は幽霊まで見えていたんだよね。みたいな。

いたこ――あれ、男の霊媒師ってなんていうんだっけ？

「いや、俺も見えてない……あぁ、そうか、確かに煩いな。っつか、言われてみれば、耳の奥がキーンってなるな。や、虫除けスプレーじゃ撃退できないと思うが」

「いや、その虫避けすぷれーとかで、すごい遠ざかってるんだけど！？」

そうか…精霊って、虫だったんだ。

知らなかった。ってか、私の世界に精霊なんていないから、知って方がすごいか。

異世界、新発見だね。

「ミコ、多分だが精霊は昆虫類に分類されないとおもうぞ」

「……精霊は昆虫ではありません」

騎士（毒抜き）が青ざめた様子で、がっくりと肩を落としている。

「ご自分の命が惜しいのでしたら、神官の前で、そのようなことを言わないでください」

私言ってないから。

兄が勝手に、人の心を読んでいってるだけだから。

殺されるのは兄のみだな。

「精霊は、一部の魔力の高い人間にしか見えませんし、教会で神聖視されておりますので」

「すまんすまん。でも思ってたのは、ミコだから。殺されるとしたらミコだけだな」

同じ事思ってるよ。

兄と同じこと思ってるなんて、私なんて嫌なやつなのだろう。

あんなおっかない思考の兄と一緒だなんて。う、うぅ。

あれ、もしかして、騎士（チャラい）は実家がお金持ちな上に、魔力が高い？？

それはさておき、耳がキーンとしなくなってきたところで、もう一度、ステータス表示。

【岸田　真実子（１８）】　職業：盗賊（Ｌｖ５）　サブ職業：専門学生（Ｌｖ１２．）

ＨＰ：１１２／２４２

ＭＰ：３４／１５４（＋５）

【筋力】　２２
【俊敏】　７８（＋５）
【知性】　１９
【直感】　１３４（＋３）
【器用】　２６（＋３）
【意思】　１８
【魅力】　２１
【幸運】　８７（＋１１）

【技能】　［悪運（グットラック）］　［調査（サーチ）］　［一枚の壁（クール）］
［集中（コンティッド）］　［虫の知らせ（シェバ・ティーユ）］　［敵索（サーチ）］
［五感強化（ファイブセンス）］　［俊足（ファーストラン）］
［精霊ホイホイ（マナ・ゲット）］

【補正】　母の慈愛　父の加護　パティカ神の加護　イシュタル神の加護

【ＥＸＰ：４７６１】　【次のレベルアップまで：１１】

【ボーナスポイント】　４７１Ｐ

なんか、技能が３行もあると強そうだ。
しかも、イシュタル神の加護のせいなのか、直感、ＭＰにポイント加算されてるし。
てか、技能のオンオフとかないのかな。

精霊ホイホイいらないんだけど。

まぁ、でも、ふふふ、この数時間で、ステータス倍ぐらいになってない？

直感だけだけど、３桁超えてるし…にやり。

兄を倒すのは無理そうだけど、王子に王家の秘宝を返したから、私だって一発殴るぐらいは――……

【岸田　雅美（２５）】　職業：戦士（Ｌｖ１３）　サブ職業：ゲーマー（Ｌｖ３７）

ＨＰ：５４１／１４５５　（＋５０）（＋２％）
ＭＰ：３７／３１１　（＋２％）

【筋力】　１３２　（＋５）（＋２％）
【俊敏】　１０４　（＋５）（＋２％）
【知性】　１２１　（＋２％）
【直感】　７９　（＋２％）
【器用】　５１　（＋３）（＋２％）
【精神】　１０８　（＋２％）
【魅力】　１１２　（＋２％）
【幸運】　４２　（＋７）（＋２％）

【技能】　［策略（アティッフス）］　［不幸中の幸い（ピンポイントラック）］

［一枚の壁］（クール）　［剣技］（ソードガレ）　［守護盾］（ドウシールド）
［底力］（クライアッパー）　［慧眼］（ハイアイ）　［調査］（サーチ）
［五感強化］（ファイブセンス）

【補正】　母の慈愛　父の加護　マルス神の寵愛　天才補正

【ＥＸＰ：７９２８】　【次のレベルアップまで：３１９】

【ボーナスポイント】　９７　Ｐ

無理。
絶対、無理。

てか、天才補正ってなに！？
ゴブリンとの戦闘終わったとき、そんなのなかったよね？ね？

私がみてなかっただけ？
ざくっとしかみてなかったけどさ。

私、使えるか使えないかよく分からない技能が８個になって喜んでいる場合じゃないよ！？
兄も技能が増えてる上に、直感と器用と幸運以外、三桁超えてるし――ってか、頭でっかちムキムキマッチョかいな！

ＨＰにいたっては、まさかの千越え！
騎士（目つき悪）のＨＰを、完全に勝っちゃってるし！

騎士たちだって、さっきレベル上がって最高でも騎士（毒抜き）がレベル２６とかなのに、兄、初期職業とはいえもうＬｖ１３だよ。

鬼だ。チートだ。なんて羨ましい。

無理だ…兄の本気の一撃で、死ねる自信がある。

くどい様だが、私は盗賊レベル５だから……。

「ははは、気にするな。ミコ。精霊ホイホイも、技能っちゃ、技能だからな」

そう思うなら、爽やかな笑い声を止めろ――――ってか、せめて「マナ・ゲット」って呼んでよ！

ロゴ悪いけど。

「なに、そのゴ●ブリホイホイみたいなの？」

「あぁ、話すと長いんだがなぁ――ミコ、魔石を振り上げるのはやめなさい。お兄ちゃん、逃げ場ないし周囲に被害被るから」

大丈夫、私のコントロールならば、兄のみを抹殺できるから！

超テンション下がるよね。やる気でない。

あ、でも待てよ？

私、まだボーナスポイントあるんだし、それ使えばいいんじゃな

いの？

よし、兄に魔石を放り投げるのは、後にして――……

ＮＥＷ　【盗みＬｖ１】　１５Ｐ
ＮＥＷ　【気配遮断ＬＶ１】　４０Ｐ
ＮＥＷ　【必中ＬＶ１】　３０Ｐ
ＮＥＷ　【鍵開けＬｖ１】　２０Ｐ

ふははは、全部、技能を修得してくれるわ～～！！！

なんとなく技能の豪華さ…いや、豪華じゃないけど、多さで兄に勝っておこう。うん。

そこ以外に勝るところないし。

ボーナスポイントは４７１Ｐあるから、ドカンと俊敏に２２入れてぴったり、１００にしよう。

「っていうか、ミコ」

ん、なにかね、姉。

私今忙しいんですけど？

兄を倒すのはあきらめましたが、一発殴るための下準備で――そ

して、そのまま逃走するという輝かしい未来に向かって。

「なにかぶつぶついいながら、百面相してるわよ？」

え、えええ～～～！！！！！

まぢで？？独り言いってるの？百面相してるの、私。

「……気がついてなかったの？っていうのか、今まで自覚なかったの」

全然。

にやにや、ぐらいはしてたかもしれないけど、それ以外の表情は顔には出してないと思ったんですけど、なに、じゃあ、ずっとぶつぶつ言い続けてたのか？

「さっきも、3行とか、兄、殴るとか…」

「お～…？？喧嘩なら、ネット販売でも買うぞー？兄弟喧嘩で殴り合いとかも楽しそうだな」

こわっ！！

兄、こわっ！！

にっこりと、人の良さそうな顔をして、目が輝いてるよ。
胡散くさい！胡散くさすぎ！！
楽しそうとかいうなっ！絶対一方的にサンドバックされて終わりだっちゅーねん。
天才補正の持つ戦士レベル１３に対して、私――しつこいようだが、レベル５だからね？普通の盗賊の――が喧嘩を売るはずもない。
自分、なんかむかつくんで、兄、殴りたいだけですから。
応戦されたら、３回ぐらい死ぬし。

「やめなさい。ミコ死ぬから」

うん、うん。
姉はわかってるね。

「大体ね、その『ごぶりん』ってのと戦うのは兄さんの勝手だけど、それにミコを巻き込まないでよ」

そうそう、兄は勝手だよね。私、大変迷惑して――って、あんたがレンチ渡して、外に放り出したんだろうが！！誰だよ！兄と一緒に行けっていったやつ！！
元凶はお前だ！

「顔に傷が残ったらどうするのよ。お婿にいけなくなるじゃない」

そうだね、顔に傷は男の勲章――って、え、婿？お嫁にいけない、じゃないの？？

姉、何度も言うけど、私、妹だよ。

口は悪いし、家族好きだし、ゲーム好きだし、時々やんちゃもしちゃうけど、股間の間に、ゾウさんはブラブラしてないんだよ？

しかも、なんで、婿入り限定なんですか？

いや、騎士（毒抜き）よ。

そこで嬉しそうに、目を輝かされても。

よしよし、って額の擦り傷を優しくナデナデされても、なんか納得いかないのは私だけですか……？

「いやぁ～…あんなに出てくるとは。別にたいしたことなかったよな、ミコ」

あったよ！！

たいしたことあったよ！

レベル1の盗賊を、弓兵のゴブリン3体と戦わせようとしてたで

しょ！

あ、これ、死んだな――って思ったのは、４，５回どころじゃないし、魔石なかったら死んでたよ！

体力回復薬（ポーション）とか、あんなに大量にゴブリンが持ってなかったら、兄だって死んで――

……。

……。

――んん、私死んでも、兄は普通に生き残ってるような気もするけど。

ともかく、騎士（毒抜き）は確実に死んでたよ。

まったく。

行き当たりばったりとか、その場のノリとかで、突っ走るのやめなさーい、って父に前言われたんでしょ？

まぁ、兄なら、それでもチート能力で乗り切っちゃうだろうけどさー。

はぁああ、チートな兄を持つと苦労するねー。

しかし、なんでゴブリンは、あんなに大量に体力回復薬（ポーション）持ってたんだろう。

ゴブリン、準備よすぎだろ。
これが兄のチート能力の付属というのなら、殴るということを考え直さないといけないかなぁ。
いや、あれほどの集団でゴブリンはみかけないっていうし。
もしかすると、どっかの村でも襲う気で、準備して森の中をうろうろしてたんだろうか？
数えてないけど、３０体以上の死体はあったよね？
騎士クラスでも、ゴブリン２，３体でも倒すのが難しい――うん、兄はぼこぼこ倒しておりましたけど――んだから、普通の村人じゃかなわないだろう。
この世界では意外に、ゴブリンは強いらしいし。
子供程度に頭は回るんだって。
スライムと同じくらいの雑魚キャラかと思ってたけど、違ったのね。
…？
あれ…？
いま、なんか、すごく引っかかった。
さらっと、流していい考えじゃ、ない、気がする――――な、んだろ？

すごく、不安になってきた。

ゴブリンはどこかの村を襲う気だとしても、全部、兄と騎士が倒したから大丈夫なはずなのに、不安がとまらない。

これが水に墨を垂らすようにというのだろうか。

もしかして、兄が苦しそうに、してたのに、関係がある……？

家族が城に滞在するのに、快くない原因？

「――――っ！！！」

私は立ち上がり、兄が仕舞った魔石の入ったコンビニの袋に手をかけた。

Act 27. 予言

「み、ミコ！？あんた、どうしたの？」

私の予想が正しければ、最初に手に入れたゴブリンの魔石が。

兄に手渡した魔石の入ったコンビニの袋を、座席の下から取り出すと、一番でかい魔石を取り出して、情報を表示させる。

やっぱり、そうだった――予測どおりだった。

【緑の魔石（みどりのませき）】

グリーンゴブリンの先行隊長を倒して入手。
敵に投げつけると地魔法『轟く緑の大地（アリゴレスト）』を発動。
武器改造に素材使用可能。地系魔法２０％アップ。
販売価格：２４０００　Ｂ（ビル）

王子を追っていたのは、兄が戦ったゴブリンよりも体格がよかった。

隊長格だったのだ。

そう、先行隊長。

つまりは、この後に続く、ゴブリンの部隊がある、ということだ。
３０以上の亡骸があったということは、本隊は、それを遥かに上回る、倍以上の数がいるということ。

ぐ、と兄が、私が悟ったことに気がついてか、奥歯を強く噛んだのがわかった。

兄は、いつから気がついていたのだろう。
そして、それを胸の内に秘めたまま沈黙を守ることで、その良心を殺していたのだろう。

よく考えてみれば、ゴブリンのステータス表示は全部『ゴブリン』ではなく、『ゴブリン兵士』だった。

「雅、に――」
「ミコ！！」
「っ」

兄の荒げられた声は、悲鳴にも似ていた。

全身が金縛りでもあったかのように硬直する。

先ほど、騎士（目つき悪）が声を荒げたよりも、ずっと怖かった。

……ずっと、悲しかった。

いつもマイペースな兄が私の言葉を遮ったということは、兄は彼らに言う気がないのだ。

私にも言わせる気がない。

車内が一気に、ぎこちない空気となり、急に車が止まった。

「どうしたんだ、雅美。お前らしくもない――ミコは何もしてないだろう？」

さすがの父も驚いたらしく、眉根を寄せて、振り返った。

兄が意味もなく、怒鳴る人ではないことは、父が誰よりもよく分かっているだろう。

少し前まで、父は我関せずという顔で運転していたが、常に私たちに気配を配っていたのかもしれない。

兄は詰めた息を吐き出して、ぎこちなく笑った。

「――……ごめん、父さん。車、出して」

「だが、」

「頼むよ、父さん」

急いでいる。
兄は急ぎ、旅の装備を揃えて、町を出て行こうとしている。
そうでなくては、いけないほどの、距離。
あれが、最前線だとすると、仲間の死体を見つければ、隠れることをやめて、向かってくる。
やっぱり目的地は、彼らの国だろう。
先ほど兄が、珍しく初対面の人間の首に手刀を入れようとしたのは、別に面倒だったからではないのだろうということが、いまさらながら、気がついた。
父が一瞬、困ったような顔をしたが「ミコに謝りなさい」と言ったまま、車を発進させた。
「ま、さ兄っ」
からからに渇いた喉の奥から、かろうじて兄を呼ぶ。
兄は悲しそうに「怒鳴って、ごめんな」と呟いた。
後部座席の騎士たちは、兄の突然の豹変に、驚きを隠せないようだ。

「言うな、といった兄ちゃんが悪い――――だから、お前は、何も考えなくていい」
「でもっ――」
「兄ちゃんは、家族が大事だ」
「私だって！――私だって、父さんも、母さんも、由唯姉も、雅兄も大事だよ！！」
「――っミコ」

むしろ私は、残酷な人間だから、他人がどうなろうと関係ない。
でも雅兄は苦しそうな顔してるよ？罪悪感、あるんでしょう？言わなければ、後悔するってわかってるんでしょう？兄の良心は沈黙を咎めているんでしょう？？
兄は自分を殺している。
湧き上がるような激しい衝動に、私は立ち上がった。

「私は、他人がどうなろうと関係ない！勝手に死ねばいい！顔も知らない誰が死んだって、雅兄が心配するほど、私はなんにも感じないよ！――――でも、雅兄は違うでしょ？自分で思ってるほど、ちゃんと隠せてない！」
「いいんだっ！もういいっ……」
「よくない！自分を騙して、罪悪感で一杯だって顔してる！命が危ないかもしれない、助けられるかもしれない人間を放っておくのが嫌だって顔してるよ！」

こんなに、声を張り上げたのいつ振りだろう。

馬鹿みたい。

こんな風に、感情的になるのは好きじゃない――でも、結局自分も感情に振り回されてる。

なんで私、兄の胸倉掴んでるんだろう。

どこか冷静な自分を感じながらも、その衝動を止められずに感情を吐露した。

「そんなことよりも、私は雅兄が悲しい顔してるほうがよっぽど嫌だ！自分の中に溜め込むのやめろっていったの雅兄じゃん！関わらないで後悔するそんなくらいなら、最初から関わって後悔しなよ！いつもみたいに馬鹿みたいに正義感振りかざしてっ、いつもみたいに突っ込んでけ！それが、あんたのやりたいことなんでしょ！一人、二人が、百人、千人になったくらいで、家族を言い訳に、尻込みするな！私の兄は世界で一番カッコいいんだ！！」

イライラする。

そう、これはきっと純然たる怒りだった。

兄が、なんでもできるチートな兄の唯一の弱点が私達であることが、否、私であることが――――悔しい。

目を逸らすな。

戦え。
負けてもいい、後悔するなって言ったの誰だよ。

「私たち家族を舐めるな――――岸田雅美っ！！！」

言い切って、荒い呼吸を繰り返す私に、静まり返った車内。
エンジン音だけが、響き渡る。

私は嫌だ。
兄が、そんな顔するのは嫌だ。

姉も、父も、母も、大好きで――彼らも、同じことを思っているはずだ。

「父さん、な」

その沈黙を破って、真っ直ぐ前を向いたまま父が静かに口を開いた。

「雅美が何をしたいか、さっぱりわからん――だが、俺たちのせいで、諦めることはない。前にも言ったが、お前たち兄弟はしたいことをしてくれればいい。本当に、お前たちがしたいことなら、父さんはそれを反対などしない」

「うん、応援するわよ。お母さんは、お父さんに守ってもらうから、平気だしね」

助手席から顔を出して、綺麗に母が笑う。

苦笑を浮かべた姉が拳を作って、こつん、と兄の頬を形だけ殴る。

「あんたは、ミコの『正義の味方』でしょ？だったら、最後までやり抜きなさいよ。それが兄さんのやりたいことなんでしょ？」

「頭ばっかりよくって……それ以外は誰に似たのかしら」

「まー、俺の子だからなぁ」

父の苦い苦笑が零れ落ちて――――唐突に、兄の大爆笑が響き渡る。

「ははっ、駄目だなっ！俺って奴は！」

「馬鹿ね」
「馬鹿な息子よ」
「ばーか」
「うん、それでこそ、俺の息子だ」

呆然としている騎士の面々は、何が起きたか分からないままらしい。

私は兄の襟を離すと、急に恥ずかしくなってきた。

あんなに叫んだのは、久々だ。
喉が痛い。

昔は、あんなふうに大声で、なんでも話していたような気もするが、よく思い出せもしない。

怒ったのも。
兄に詰め寄ったのも――そうして、兄が決めたことを覆そうとするのも。

兄はいつだって正しい。
多分、今回だって兄が正しいに違いない。

家族を守るために、家族以外のものを見殺しにするしかないのだと――――唯一兄は、自分の心をだましてしまう結果になるが、安全ではあった。

「にしたって、ミコ、あれ全部、兄ちゃんがお前に言ったことじゃ

ないか」
「最初の部分は私が前にミコに言ったことだわ」
うぅ。だって、一生懸命だったから、わかんないよ。
私はトラの敷物に包まって、しゃがみ込み、座席の下の隙間を探すが、荷物で埋まり、あるはずもなく、そのままごろりと足元に転がった。
この心境ってあれじゃない？
「なに、穴があったら入りたいの？」
そうです。後悔はしておりませんが、すごく恥ずかしいです。
いじらないで、ほうっておいてよ。
もー、泣きたい。
おーほほほ、と高笑いして、姉が足元にトドのように転がる私を踏んで、前後に揺らして遊んでいる。
ついでに兄も一緒になって、笑いながら転がしている。
ちら、っと顔だけ上げて、兄に視線を送る。
「いつ、から？」
「ん～…薄々ってんなら、熊の時、か？確信したのは、さっきの魔

石な」

うへぇ。

なんで、その時点で大群の予兆がわかったのだろう。

一緒にいたけど――というか、ずっと眼鏡かけていた私は、まったく気づかなかった。

兄の様子がいつもと変わらないなら、絶対、気がつかなかった。

やっぱり、ダメダメ人だな、私。

「さておき、通りすがりの異世界人である俺がいっても、お前さんらを困らせるだけなんだろうが――言っておいたほうがいいだろうな」

「は、はぁ。な、なんでしょうか??」

と、兄は苦笑を浮かべて、荷台を振り返った。

兄弟喧嘩――もしくは、一方的に私が兄を詰った??――の成り行きを見守っていた騎士たちと王子たちが、急に話を振られて、きょとん、とした顔をしている。

珍しく兄は、至極真面目な顔で継げた。

「お前さんらの国にゴブリンの軍勢が、押し寄せる――先ほどのゴ

ブリンの集団を捨て駒に使えるほどの数だ」

顔色を変えた騎士たちが訝しげに、兄を凝視した。

それは、疑問でも、勘でもない。

兄の中には、私以上の確信があるのだろう。

「それが5日以内に、お前たちの国を襲うだろう」

彼らからは、予言めいた言葉ではあった。

しかし、あの顔をした兄の言葉に、間違いなどあるはずもなかった。

Ａｃｔ　２８．　わりと丸投げ

「黙っていてすまない」

明らかに動揺した後部座席の面子に、兄は困ったような――それでいて、まったく揺るぎのない瞳で、まるで未来が見えているかのように告げた。

兄の言葉も、初対面の異邦人であるがゆえに信憑性は薄いのだろう。

騎士たちの戸惑いの表情。

出会ってから、数時間の他人である。

当然の反応だ。

「……サミィ殿、ご冗談にしては笑えません」

「冗談ならよかったんだがな――――確率は高いと思う」

騎士（毒抜き）と兄は、見合ったまま。

少しだけ、騎士（目つき悪）が寝ててくれてよかったと考える。

起きてたら、煩そうだし。

どうやら結構な距離を走っていたようで、だいぶ日が傾いて、空

に赤みが混じりだした。
兄の真摯な気配に押し負けたように、騎士（毒抜き）が静かに首を横に振る。
「たしかに、異常な魔物の発生は年々増加しています。先ほどのゴブリンも、複数の群れがまとまるなど異例の事です。だからといって、そのような極論になるのはどうかと――――…カルム様？」
瞳を細めた熊が、騎士（毒抜き）の腕を掴んでいた。
その瞳は何かを訴えるように、真っ直ぐに騎士（毒抜き）を貫いている。
「まさか、信じられるのですか？！」
熊は鼻の頭に皺を寄せて、頷いた。
兄はため息をついて『やっぱりか』と小さく呟いた。
「どーゆう意味？」
「俺の予測だが、カルム王子は、ゴブリンの軍隊に遭遇した。そして、国への進軍を阻止するために軍隊に何度か単身で突っ込んだ――――そうだろう？」

驚いた様子の熊が、頷いた。

「なっ――――王子！？」

「全身に浴びたゴブリンの紫の血が乾いて、黒く変色するほどだ。一度や二度ではない」

はっとして、私は自分の服を見ると、パーカーに染み込んだ袖口のゴブリンの紫色の血が、黒味を増している。

先ほど、熊を拭ったときに、ウェットティッシュ凄い真っ黒になったのは、そのせいだったのか。

いまさらながら納得する。

近距離で１０体以上はゴブリンを倒したであろう兄のシャツ以外は、返り血はそんなに浴びてはいない。

それを全身に浴びるほどとなると、一体どれくらいの数を屠ったのだろう。

そして、一体いつから？

「怒り狂ったゴブリンの部隊は、軍の一部を厄介な熊の討伐に割いたんだろう。大事の前に小事を片付けようとな。それにゴブリンの装備はあれほど完全じゃないといったのはお前さんたちだ。攻め込むことを前提にしていたなら、頷ける」

兄はつらつらと、淀みなく告げる。
それはまるで、彼らに言い聞かせているというよりは自分の確認作業のようだった。

「はい」
「なんだね、ミコ生徒」

足置き場に座り込みながら、右手で挙手する。
兄は講義に参加した頭の悪い生徒に、哀れむように教師のように、促した。

うぅ、結構疑問があるんですけど。

「進行速度は、どのくらいですか？」

時間によっては、先回りして罠にかけられるかもしれない。
先ほど彼らがいったように、馬で二日。徒歩で三日。女、子供がいればもう少しかかるかもしれないとはいわれたが、大群に関してはどのくらいかはどうだろう。

「大群であればあるほど、進行は愚鈍になる。後方が追いつく前に仕掛けてくるなら、早がけで最低三日。全軍が足並みをそろえてい

るのなら、遅くても五日」

大群を陥れるだけの罠を作るのには、時間がかかるし、仕掛けるのは大変だ。

基本、戦力を大々的に殺ぐのは難しいか。

たしか、昔見た映画でゲリラ戦であれば少人数でも、軍に勝てるという話だったが、もし開けた台地であったなら、罠を作っても引っかかってくれる可能性も低い。

「罠、か――んん。いいかもしれないが、今から準備して、軍の一割も避けないだろう。防衛線をどこに張るかで差はあるが。そもそも、地形がはっきりしないと、なんともいえない」

まるで軍師みたいなこというんだな、兄。

でも、確かに場所を見てみないと、作戦の立てようがない。

ゲームの中だって、相手の先方をみて、決めるほうが圧倒的に勝利につながる。

チェスや将棋だって、戦力が互角でも、戦術で勝敗が決まるのだから。

「それに相手にしたって、常識が通じる相手じゃないだろうしなぁ」

ゴブリンじゃ、人間の常識が通じないから、相手の先手を打ちづらいってところかなぁ。

見た感じ、完全なるゴリ押しだと思うけど、ゲームの中と一緒とは限らないし。

下手に博打して、自滅するのも考え物だ。

コンテニューはない。

うむむむ、あ―メンドイから兄、任せた。

いや、兄はもう晴れ晴れとした顔をしているから――――…

「まぁ、これで俺の胸のつかえは取れた。後はお前さんらの仕事だ」

はい、きたー、兄が爽やかに無理難題の丸投げ。

これから、難題を投げつけられた彼らが、大変な思いをするの分かってるけど、我関せずだ。

さすが、兄の難題スルーは特殊技能でもいいくらいだよ。

ってか、迫る危機に対して、警告できなかったのが、心の痞えだったのか。

「――――それを、我らに信じろ、と？」

「信じるか信じないかは別として、可能性がある、とだけ思ってもらえばいい」

さっぱりした顔しやがって。
逆にあんまりにもあっさり、べらべら告げるから、騎士、王子は戸惑い気味だ。
熊は両目を瞑り、胸のネックレスを掴んでいる。

「ってわけで、俺は俺の言葉を信じてるので、三日以内に家族全員の旅券を発行頼むよ。さすがに軍勢の対決じゃ、俺の出る幕はないからな」

兄、戦士レベル13だしね。
ここにいる騎士たちに比べると、完全に戦力的に多少は劣るぐらいだから、即戦力ではるけど、連携は期待できないし。
せいぜい能力的に勝てるのは、騎士（目つき悪）か、弟王子くらいだろうし。

「どーするんです、旦那」
「……とにかく帰って、アガットの偵察を飛ばす。私一任で軍を動かせる話ではない」
「彼らの話を信じるんですかー」

一瞬の困惑げな表情で、騎士（毒抜き）は私たち全員を眺める。

「彼らが、出会ったばかりの私たちをからかっているとは思えん」
「僕も――サミィ殿が嘘をついているようには」
「勘違いである、という証明をする～ということですかー」

騎士（チャラい）は、目の鋭さを引っ込めて、困ったとでもいうように肩をすくめて見せた。

あー、なんか分かるよ。
騎士（毒抜き）はお人よしそうだもんね。

周りの人間は苦労するや。

ま、関係ないけど――っつーか、兄でいっぱいいっぱいですから。

「帰ったら、僕が父上に報告します。兄の件も含めて」
「お願いします」

弟王子の言葉に、騎士（毒抜き）が頷き、兄に向き直った。

「私は出会ったばかりの貴方たちを全面的に信頼はできません。ですが、我が国に害がおよぶ可能性がわずかにでもあるのならば、私は確認する義務がある」

兄が頷く。

「確認が取れるまで、拘束されることは覚悟してる」

僅かな危機感も感じさせず、兄は、からっと、いつものように笑った。

ってか、拘束されるんだ。

大変だな、兄。

うぷぷっ。

牢屋とか1回突っ込まれて、反省するがよい。

「ご理解、感謝いたします。責任をもって部屋を用意させていただきますので」

「まぁ、いざとなったら車でも寝泊りできるんだが」

いや、狭くなるから、牢屋に宿泊させてもらえばいいさ。

その分、私の寝床が広くなるし？

にや、と密かに笑うが、そんな私を見て、兄もまた、にやり、と似たような顔で笑っていることは気がつくこともなかった。

Ａｃｔ　２８．　わりと丸投げ（後書き）

ふぅぅぅ…なんとか、落ち着いてきたかなぁ。

Ａｃｔ　２９．　門前の忠犬（※凶暴）

「でかっ！」

言葉を失った我が家族に代わり、私は声を上げた。

私たち家族が自宅を、朝の７時に出発したというのに、もう７時を回っていた。

本来だったら、昼過ぎには叔父の家で、まったり寛いでただろう――――追い回される兄、以外は。

それが、異世界の都市にきちゃってるよ。

ほんのすこーし、怜二叔父さん心配しているかなーとしんみりしかけたが、よく考えるとあの人がそんなことを考えるはずもない。

なにせ、電話も繋がってない辺鄙な場所だから、行くとは連絡していない。

自由気ままに、修行僧並みの生活を送っているだろう。

常々嫌がらせをされている兄に関しては、叔父の家よりも異世界の方が案外、ラッキーとか思っているかもしれない。

――そろそろ怜二が心配だから行くぞ。

父の言葉を聞いた時の兄の嫌そうな顔といったら……ぷくくく。

すぐに帰れないとなると、現実の世界では『一家謎の失踪？！』とか『神隠し！消えた家族！』とか三流情報誌にデカデカと見出しを書かれているのだろうか。

帰っても、実は時間が経過していないってパターンもあるかもしんないけど。

それは、さておき。

兄のリクエストで、早めの夕食を全員で――あ、騎士（目つき悪）が、まだ起きてないけど――食べ、森を抜けて平地を走った。

日が沈んで、夜になり、暫し後に、眼前に広がったのは灰色の壁だった。

そう、物凄い壁である。

夜空に浮かぶ半分の月と松明みたいなもので、うっすら見えていたが、車のヘッドライトに照らし出された時は正直、びびった。

圧巻の一言に尽きる。

運転席と助手席の両親は直接。

私達兄弟は閉められたカーテンの隙間から、外を覗く。

うん、一応着替えとかの為にカーテンがついてるので、外からは両親以外は外の人たちに見えないだろう。

荷台に熊乗ってるし。
普通に目に入ったら、失神するだろうな。

よく映画のセットとかで使われているような、トラックだって出入りが出来そうなほど巨大で、ゆうに４メートル以上はあろうかと思われる。

よし、上ろう――なんて、馬鹿はまずいないだろう。

石のブロックで積み上げられた城壁。

暗くて見えない状態も手伝ってか、果てしなく左右に続いているように見える。

多くの松明を灯しているのは城壁の上だけで、下には――私達が入ろうとしている――門の左右に大きなものが１つずつついているだけだった。

なんて場所だ。

うっすらとではあるが、この都市の強大さを思い知る。

てっきり、領地みたいなところだと……正直言えば、弟王子のぼやぼやっぷりと、騎士Ｓの話から、こんなでかい所に勤めてるなんて、思わなかった。

こう牧歌的なイメージがあったせいかだろうか？？

あんまり、威厳とか感じないし。

門の数メートル手前で車を止めて、騎士（毒抜き）と、騎士（チャラい）が降りて、二人いた門番となにやら揉めている。

すんなり通れないところを考えると、彼らは偉い騎士というわけではないようだ。

すでに立ち往生してから、２０分は経過してるだろうか。

「どうしたの？はいれないの？」

ずっと座りっぱなしで、苛々している姉の言葉に、弟王子が苦笑を零した。

姉はカーテンの外の現状に髪の毛をかきあげた。

時々、親指の爪を噛もうとする自分に気がついてはため息をついていた。

どうやら異世界だということを認識した、といったところだろうか。

何度か話しかけて気を紛らわせようとしたが、いいから好きなことしてなさい、と逆に気を使われてしまった。

頼りにならない、妹ですみません。

とりあえず、温かいお茶を入れたら、落ち着いたようだけど。

私と兄は『要塞都市』とか『リアルＲＰＧ』とか、若干興奮気味だがゲームをさほどしない姉には魅力的ではなかったようだ。

まぁ、暗いし、ただの壁っていえば、壁だけど。

ただの城壁は、姉は興味をあっさりと失ったらしい。

ってか、母も父も「へ～」とか「すごいわね」とか言ってたのが聞こえたが、それだけだった。

なんだよ、母も。

家族旅行で京都行ったときは、凄い狂喜乱舞してたじゃんかー。

それにつられて父もテンションマックスって感じだった。

周囲の人間にぶつかりまくりだし、気がついたら見知らぬ外人と仲良くなってるし、英語しゃべれないくせに、意気投合ってどうよ？

そのせいで、我ら兄弟は引き気味だったけどね。

二泊三日の旅行で、写真がアルバム一冊埋まったってどうなんだろうね。

いや、楽しかったし、料理美味しかったし、迷子になったけど、悪くなかったじゃん？

そんな風になるかなーと思ったんだけど、予想外に静かだ。

母的には京都＞＞＞異世界ってこと？

「日が沈んだ後は、門の開閉をしない規則なのです。無論、翌朝ま

で一般人も出入りできません。騎士たちだけなら、入門できますが、この『くるま』と、旅券のないルエ…いや皆さんも入るとなると、規則をいくつか破ることになります」

ん？

なんか知らないけど、私達を言い直したね。

『いや皆さん』の前になんと言おうとしたんだろ？

『ルエ…』なんとか――――まぁ、興味ないけど、でも伝説の勇者的な件だったら、嫌だなー。

「そーなの？時間かかりそうね」

「ええ。僕が行けば、さらに話はややこしくなるでしょうし」

そういえば、さっきこっそり出てきたとか、出てこなかったとか話してたような。

すでに日が沈んで、一時間は軽く経過してる。

当たり前らしいが、この世界は、日が沈むと本当に真っ暗であった。

星と月の明かりだけが頼り。

幸い半月ぐらいだが、新月が近かったらなら、何も見えなかっただろう。

ヘッドライトがついていても、いつ木々に突っ込むか分からないほどで、結局父の判断でスピードを落とした。

そのせいで、入門時間には間に合わなかった。

「荷馬車の中も確認せずに通すほど、甘くないか。関心関心」

いや、関心するところじゃないし。

窓に備え付けのカーテンと、運転席助手席の後ろにあるカーテンを引いたので、門番に見えるのは、父と母の上半身だけだろう。

弟王子と気絶した騎士はまだいい。

だが熊王子にプラス、身分も分からず、衣服も替わった人間が乗ってるのだから、怪しむなというほうが、おかしいであろう。

最初から隠そうとしたのも頷ける。

ついに、責任者対応になったのか、騎士たちと同じ格好をしたおっさんが出てきた。

門番と話し込んでいた時とうって変わって、騎士2人がびしぃっ、と姿勢を正す。

彼らよりも身分が上のものなのだろう。

こちらの人間は、東洋人というより西洋人に近く、炎に照らし出

された面立ちが、深い陰影を落とすが、その男は表情を窺わせないほど、影が落ちている。

つまり、怖くみえるんだけど。

そう考えると、弟王子はちょっとハーフっぽい感じだ。

整ってるから、そう感じさせないだけってか。

幾つか言葉を交わしてるようだ。

それから、騎士（偉い）を伴い、騎士（毒抜き）と騎士（チャラい）が車に戻ってくる。

うん、騎士ばっかりで分からなくなるよ。

「う、うがぁっ」

「ひっ！」

何故か、弟王子と熊王子が小さく悲鳴を上げて、体を浮き上がらせた。

なに??

やっぱり、偉い人――って王子たちより偉い人なの??

んな、馬鹿な。
いきなり王様とかじゃないよね？
背後に回りこむと、ノックが響き、開けてくれと合図があったので、兄が荷台に向かった。

「ヴぇ、ヴェルクスタ団長」

団長と呼ばれた中年の騎士は、弟王子を一瞥して、軽く頷いた。
ごくりと、弟王子と熊王子が固唾を呑む音が聞こえた。
どうやら、超偉い人らしい。
王様の息子である王子たちが、視線を受けて妙にそわそわしてみせる。

「ゼルスター王子。お帰りなさいませ」
「は、はい…む、無断で国兵である優秀な騎士を三名もお借りし、も、もうしわけ」
「結構」

しどろもどろの弟王子の言葉をびしゃり、と遮ると、さして大きな音量でもないのに、弟王子はおびえた様子で、雷にでも打たれたかのように肩をすくめた状態で固まった。

なんか、うん、こっちも凄い緊張するんですけど。

「後ほど」
「は、はい」
「カルム王子」

視線を泳がせながら、がう、と熊が返事をすると、ちらり、と胸のネックレスを眺めた。
熊もまた緊張しているのが見て取れる。
次の瞬間。

ごっ

と、鈍い音がしたかと思うと、ぎゃいん、と熊の悲鳴が響いた。
まるで、子犬が叩かれたような声である。
こっちは声を発する暇もなかった。
その団長は、熊の鼻っ柱に拳を放った――――ような気がするのだが、あまりの拳の速さに残像しか見えなかった。

た、たぶん、五感が強化されてなかったら、それすらわからなかった……うん。

ただわかるのは、たった一撃で八割まで回復していた熊のＨＰがごっそりと半分以上が失われて、黄色い表示になっているということだけだ。

上半身をよろめかせる熊。

涙目で、鼻の頭を抑えて、耳をぺたりとたらしたプリチーな――哀れともいうが――熊を団長は研究者のようにじっと、眺めた後、数度頷いた。

「……ふむ、野生、ではないようですな」

あまりの出来事に、呆然とする我が家族。

私も声がでないよ――って、他人がいるところでは無口だけど。

第一印象でいうのなら、『超、おっかねぇ～』の一言が、家族一同の感想だろう。

熊を食おうとしていた母が、まだ可愛らしい。

だから、運転席の後ろに引いたカーテン越しに覗いていた両親と、後部座席の姉と私と、後ろの荷台にいる兄に視線が向けられた時には、みんなビクついてしまった。

さすがの兄も、笑顔が引きつっている。

突然、殴りつけてくるものなど、知り合いにはいるはずもない。
あ、いや、兄はしょっちゅう叔父さんと出くわすと、殴り合いの喧嘩に発展するけど、私はそんなことがない。

それになんともいえない威圧感が、その原因だ。

なにより、団長のレベル57だから……うん、熊じゃなかったら、あのパンチで、一般市民が一撃で死んでるレベルだから。

あまりにも凄いレベルのため、視線を泳がせてしまった。

っつーか、殴っておいて、確かめられたのは野性じゃないということだけ??
なんつーか、凄く可哀想になってきたよ、熊。

「よろしい」

なにが??
なにがよろしいの!?

熊殴っといて――あ、鼻血でてるし、熊。

怖くても、突っ込めないし!

ちらり、と巡った視線を兄に戻すと、ひとつ頷いた。

なんだかよく分からないが、引きつった顔から、いつもの爽やか

な兄スマイルになってる。

「……この件は、自分が王に直接掛け合おう。しばし待たれよ」

淡々と告げて、また城門へと戻っていった。

ばたんと、荷台をしめて、ようやく車の中が一息ついた。

熊王子の耳は姿が見えなくなっても、よほど痛かったのか、耳が伏せてある。

微かに震えているようないないような。

ほら、ティッシュあげるから、これでとりあえず鼻血拭いて。

鼻に詰め込んで…ぷぷっ、笑っちゃいけないけど、大爆笑ものの顔だ。

熊の鼻からティッシュが出てるし。

「な、なんだったの？あのおっさん？」

さすがの姉も驚いた様子である。

「あの方は、イシュルス騎士団の第1団長のヴェルクスタ卿です……三百年も続く騎士の家系で、僕たちの武術の教師なのです」

どうりで、騎士たちも、王子たちも、まったく頭が上がらない感じである。

やり手の空気がバンバン発せられていた。

後、威圧感が半端なくて、家族は誰一人、声を発することもできなかった。

先ほどまでの鰻上りのテンションは、がた落ちして、私たちは再び団長が戻ってくるまで、もの静かに待っていた。

っつーか、異世界は恐ろしい所でした。

『団長おっかない』というイメージが脳裏にこびりついたというか。

くぅーん、と熊の声が聞こえて、振り返る。

でかい熊手が――否、弾力のある肉球がぽむぽむ、と私の頭を撫でるのだが、力加減間違ってるらしく、結構痛いよ、熊。

お前は見えないかもしれないけど、ぽむぽむするたびに、私のHPが5ずつ減っているんだよ。

子供扱いだが、父のように噛み付くのも躊躇われた。

心配されているのはわかるし。

――熊だし。熊だから。熊許す。可愛いから。つまり、カワユ

ス。

私は、鼻からティッシュを出している熊の姿に、また小さく噴出した。

Ａｃｔ　２９．　門前の忠犬（※凶暴）（後書き）

時々、もふもふ成分が欲しくなる……熊、癒されるけど、主人公は地味にダメージを受けている様子。
早く門が開かないと、瀕死の重症まで放置だろう。

Ａｃｔ　３０．　城壁都市イシュルス

私たちが、門を潜るったのは、さらに３０分ほどしてからだった。

ごごごご、と効果音を発しながら、開いたが、開放しきるまいにぴたり、と門は動きを止める。

本当に車が通れるかどうかのスペースしか開いていない。

狭っ。

その隙間から、さきほどの第１団長と、複数の騎士たちが、完全なる戦闘態勢で、馬にまたがった状態で数名でてくる。

緊迫した空気が流れた。

第１団長の人差し指と中指を立て、上下に振る手合図で進んだ。

言葉は交わしてないが、軍隊とかでも隠密行動の最中に、あんな手話みたいのするのを前に戦争映画で見たことがあるような気がする。

あんな感じだ。

「すみませんが、極力音を立てぬように、迅速にお願いします」

どっちか、かたっぽだけにしとけよ。

父が反比例する言葉に、わずかにう、と喉を詰まらせたのが分かる。

しかし、その反論も許さぬほど、騎士，Ｓの顔は切迫しているようで、父は困った様子だったが、頷いた。

そのまま父が、一速にいれた。

人と歩くような同じ速度ぐらいなのは、多分、開いた門が異常に狭かったためだろう。

車のエンジン音に驚き馬が嘶く。

カーテンの隙間から、ちらりと外を覗くと、ごつい顔したスキンヘッドの騎士が、音に反応してうろたえる馬を御しながら、私を見下ろしていた。

鈍い私でも友好的ではないことがわかる。

というか、ほかの騎士の視線も似たり寄ったりである。

びっくりして、勢いよくカーテンを閉める。

「超アウェイ？」

振り返ると、反対側のカーテンから外を覗いていた兄が振り返る。

相変わらず、嫌味なほど清清しい笑みを浮かべた。

「まー、人それぞれだろ。客人でもなく、旅人でもない奴が、法律破ったんだ。お前だって自分の町に宇宙人が円盤乗ってきて、銃刀法違反してたら、まずひくだろ？」

私たち、宇宙人的な扱いなの？

なに？銃刀法違反って、レーザービームとか、そんな感じですかいな。

円盤から突如として、頭でっかちで黒目のくりっとした体の細い銀色の宇宙人が、大通りのど真ん中に光臨しているところを想像する。

……ひくっていうか、シュールな映像であった。

ん～…でもまぁ、害がなければ、多分普通に通り過ぎるけどね。

宇宙人だって、なんの前触れもなく大衆の前に立てば、遠巻きになるだろうし、好奇の視線にさらされるか。そりゃそうだ。

一応なんとなくは理解し、兄に頷き、カーテンの隙間から、外の世界に戻る。

城壁の門のアーチを潜り、少し開けた場所から、町――都市というか、都かな？――に入った。

幸い、なのか分からないが、夜なので門が閉まっているため出入りはなかったようで、付近は人が少なかった。

前座席に来ていた騎士が、父を指差しで、方向案内している。
車が入門すると、今度は門から外に出ていた騎士たちが戻ってくると、門が閉められた。

ゆっくりと馬の速度に合わせ、道を走る。

少しいけば、人々の姿がぽつら、ぽつら、と見えてきた。

ヘッドライトだけのあかりなのでハッキリはしないが、やはり現代的な洋服を着ている人間はおらず、中世にでてくるような姿だった。

男はシャツにベストにズボン。時々帽子をかぶってるものがいる。
女は踝までのスカートに、袖までのブラウスのようなものか、やはりスカートの丈の長いワンピースのようなものを着ていた。

騎士たちの誘導（護送？）がきいているのか、ちらほらいた人も避けていく様子だ。

馬がきたら普通は避けるか。
それが国を守ってる騎士なら尚更だろう。

それにど真ん中には、馬をつかってない馬車が通ってるわけだから、ちょっとした好奇心がそそられるというわけだろう。

ちら、ちら、と人の視線も感じる。

「町、すご。本物っぽい」
「えーと、本物ですが…？？」

とりあえず、無言の家族を代表して、声を上げると、王子が横槍。

そうなんだけどさ。

実感がわいてこなかったが、やはり目の前の出来事は現実なのだろうと印象付ける。

数多の人が住んでるとわかる生活感。

自分の意思で身勝手に動く人々。

たった一つの台詞のために永遠に、動かないゲームの人間のような人なんで実際は独りもいない。

当然といえば当然だ。

ゲームは主人公のための、物語なのだ。

ヒントキャラクターにいちいち生活されてたら、永遠にエンディングはやってこない。

「ってか、騎士邪魔」

ぶーぶー。

外から見たときよりずっと多くの松明があり明るいのだが、馬上の騎士が邪魔くさく、あまり町並みを見ることはできない。

というか、馬上の騎士、前を向け。

こちらにちらちら視線を送るんじゃないってば。緊張するじゃん。

都は、かなりの広さがあるのか、道幅が広い。

二階建て、三階建ての三角屋根の建物が密集していて、通りに面している家は、一階が殆ど、店らしく多くの看板がぶら下がっていた。

ひとつひとつの店は大きくはなく、夜なので、ほとんどがやってなかった。

街灯のようなものもあるが、都も心なしか薄暗い。

幾つかの大きな道と、小さな道があり、途中で大きな銅像がある広場のような場所に出て、銅像を曲がって、ひたすらまっすぐに進んでいく。

綺麗に碁盤の目、というわけではなさそうだ。

うん、迷うな。

映画とかのセットにはない質感である。

画面越しと、現実というやつなのだろうか??

でも、この世界はまるで――…

「モロRPGっぽいね」

「魔法もあるって話だからなぁ」

「中世ヨーロッパ?」

「まぁ、古代じゃないだろうな。馬の蹄鉄が開発されたのが、２、３世紀だったはずだし、時間の概念が細かくないことを考えると、１０世紀未満って所だな。うろ覚えだが」

超、アバウトだな、兄。

かなりの開きがあるけど、たしかに中世ってどんな時代なのか、私は知らず、兄が『５世紀かから１５世紀の間』ぐらいだと加えてくれた。

あ、あっちの方に、城がある。

うわー、でかー。

暗くてはっきりとみえないのに、月夜に浮かび上がるシルエットが巨大だというのはわかる。

「だが、魔法があるから文明的に俺たちの世界のヨーロッパの中世とは、地形のぐあいからも風土が発展して、似て異なる文化が根付いているだろうし…もしかすると、部分的に発達している所もあるかもしれないなぁ」

こともなさげに告げるけど、結構すごい事だね。

緩やかに流れていく景色を眺めながら、私は首をひねった。

「……兄？」
「ん？」
「そういえば、何処行くの？」

宿場とかじゃないの？
なんか、ひたすら真直ぐに進んでいるような気がするんですけど？

兄は城においてくとしても。

ずいぶん前に、噴水らしき場所を通り過ぎてから、どんどん、店っぽかったのが減っていって、ついには高級住宅街っぽいところに入っている……気がする。

家の良し悪しはわからないけど、若干ごちゃごちゃしていたような町並みが、庭付きの豪邸がチラホラ見えているんでございますが。

「いわれてみれば、そうね？ホテルとかじゃないの？兄さんを城においてから？」
「ええと、宿にはむかってないよ。というか、君達、無一文でしょ？」
「たしか、円は使えないって、いってたわね～」

と母の相槌にそういえば、と思い出す。

ふふふ、おじさんの家にいくだけだもん、お菓子とか、調味料とか買いだめがほとんどで、金もってないし、持ってても必要ない山奥だからな。

どっちにしても、四千円も財布に入ってないと思う。使えないけど。

「一応、僕の家に向かってるんですが」

と、弟王子が、困ったように小首をかしげている。

「僕の」
「家？」

姉の呟きに、私が続いて呟く。

僕＝王子。
王子の家＝お城。

「はぁ？城？本当に城にいくわけ？そんなに簡単に、一般人いれていいわけ？」

さすがに先ほどのやりとりは冗談だと思っていたらしい姉が、戸惑いを持って声を荒げる。

っつーか、私も宿だと。

そうか、それでこの物々しい警備体制っていうか、騎士の集団。
これは護衛ってか、一緒にお城に帰ってるのね。

うーわー、気がつきもせず、普通に観光気分だったよ。

「え～と、皆様は僕の命の恩人、ですから」
「気がついていなかったのか？」

兄は外を眺めていて顔は見えないが、声は苦笑しているのか、呆れた音を含んでいる。

悪かったな、それどころじゃなかったよ。観光で。
だってさー、私海外いったことないし。

うちの高校、しょぼかったから、修学旅行は国内だったしー。しかも近場。

「最初に言ってよね」

姉の最もな言葉に、珍しく母も頷いていた。

改めて外を眺めると、眼前に迫ってきた壁――――ん？壁？？城壁？？

「おー、二重城壁か……」

再び、高い城壁がどどーん、と現れるが、最初の城壁よりもやや低く、距離も大してないようだ。
にしても、城壁の中に城壁ってすごい。

またしても城壁のアーチを潜る。

開けた道から見えるのは、古城の尖鋭と、厳重な警備体制。

ひどく物々しい空気を醸し出している。
ぴりぴりしてるっていうか……あと１０分ぐらいいたら、胃に穴が開きそうだ。

「この都は、伝説によると古代では魔法技術を駆使して、空を飛んでいた空中都市だったと伝わってるんですよ。それが落下して、多くが地下に埋まってしまったので、残った壁だけを修復して城壁として住むようになったらしいんです」

王子が満面の笑顔で答えた。

よっぽど、この都が好きなのだろう。そう思わせる顔だった。
故郷となるわけだから、嫌いな人間は少ないとは思うけど…誇りに思うのもちょっとわかる。

しかし、空中都市かぁ……ちょっとしたロマンだね。

「へぇ～…すごいわねぇ」
「ほほう、歴史ある魔法都市ってわけか……遺跡が残ってる、と地面を掘る阿呆がいそうだな」
「ははは、実は結構昔に、一獲千金を狙った冒険者たちが穴を掘って大変だったと言われたます。勿論、王宮の調べでは、地下５メートルまでなにもなかったんですけどね」

兄が子供のように目を輝かせて、王子の話に耳を傾ける。

姉も少しは興味がわいてきたのか？
ちゃんと聞いているようだ。

「僕たちの祖先がその空中都市の住人だったという話ですが、残念ながら前に大火に見舞われて、文献は消失してしまったので、たしか、というわけではないんですけどね」
「伝説の空中都市の子孫ってわけか」
「はい…僕は、そう信じてます」

うわ～、いい笑顔しちゃうね。若いって素晴らしいね。

「ん？」

って、あれ？？
なんだろう、あれ。

城の庭と思しきところに、なんか骨組みの塔みたいのが立ってるけど……??

その天辺に、何かがくるくる回っている。
まるで、鳥みたいな形の……暗いからハッキリしないけど、なんか見覚えがあるような、ないような。

すぐに城の影に隠れちゃった。

「どうした?」
「……なんでもない」

気のせい、かな?
まぁ、いいや。

先頭を走っていた騎士達が道を開けた。

「あ、あそこですね。馬車を収納している納屋なんですが、そこに入れてもらえれば」

と、扉が開けられた馬鹿でかい倉庫のようなところに、車を進入させて、開いてる場所にバックしていれた。

すると、車がバックすることに王子は一々驚いていた。

するだろう。車だから。

バックしなかったら、故障してるよ、それ。

まぁ、馬が自らバックしたりしないから…いやしないと思うから、珍しいのかもしれないが。

近くには厩舎があるのか、エンジン音に驚いて嘶いているのが聞こえる。

そうして暫くぶりに、私たちは外にでる。

体を伸ばしていると、兄は荷台の後ろを開けてできて、続いて弟王子、熊王子が――近くにやってきてた騎士が硬直する姿が笑える――降りていく。

まだ転がっている騎士（目つき悪）は、同僚の騎士らしい男たちに担がれて城に消えていった。

それから倉庫のような場所からでると、騎士たちの集団が出迎えた。

勿論…大歓迎という空気はない。

出迎えや、警護というよりは、完全なる護送だ。

うう～ん、怖いよね。

私は、ささっと姉の背後に隠れてみた。

「――――ようこそ、我がイシュ城へ」

ぴりぴりとした空気を感じながら……弟王子はまったく気がついていないのか、にっこりと微笑を浮かべていた。

Ａｃｔ　３０．　城壁都市イシュルス（後書き）

読みやすくなってるかなー。
なってるといいなー。

Ａｃｔ　３１．　流離人（ルエイト）

「……イシュ城」

王子の家、でかっ。

わー、絶対迷子になる自信ある。

トイレにたどり着けなくて、漏らすとかないんだろうか、王族……あ、部屋にトイレついてるか。

家族の部屋まで歩いて一時間とかだったら洒落にならないな。

ＣＤの貸し借りで、往復二時間とか――うわー、って、家族の部屋は比較的近くにするか。

食事はどうするんだろう…って、誰か運ぶのか？メイド？？執事？？

でもそれって冷めてない？

まさか食堂で王家一家が食事をしているとは思わないけどさ――なんか、スケールが違うね。

ほう、と誰かのため息が聞こえ、顔を向けると、父がうっとりと城を眺めていた。

「父？」

「ん、あぁ、いや…すごい建築物だな。夜であるのが、もどかしいぐらいだ」

珍しく、子供のように目をきらきらさせて、父は巨大なイシュ城を眺めている。
この建築マニアめ。

「イシュタルは地方都市ですから、中央都市ほどではありませんよ」
「そうか？十分に凄いぞ」
「そうですが、ありがとうございます」

にっこりと無邪気に笑う王子に、父が猛禽類の目で笑う。

「あぁ、設計図が見てみたい…いや、設計図が駄目なら解体して、組みなおせば、その建築の真髄を垣間見ることが…どこかに設計士がいるはずだ。攫って…」

声が小さくて王子には聞こえていないだろうが、目がマジなので、とりあえず母出動。

「なに？ミィコ、どうしたのぅ？」

離れていた母をぐいぐいと無言で押して、父にぶつける。

びく、とした父が正気に戻ったらしい――――ていうか、母、父の足踏んでるよ。踏みっぱなしだよ。

「あら、お父さんが心配だったの？」

私は小首を傾げる。

もっぱら、父が――勝手に人様の家を解体しないかどうかが――心配である。

「素敵なお城ね、お父さん」
「もちろん、お母さんにはかなわないけどね」
「もう、お父さんたら」

さらりと、日本人にあるまじき歯の浮くような台詞に、母は少女のように微笑んだ。

あー、熱い。
夜なのに、あっついよね～。
熱帯夜かな～。

あれ、そういえば、夜なのに暖かいよね？
たしか季節的には秋だったはずなのに、夏の終わりみたいな暑さである。

いや、寒いよりはいいけど。

そこのいちゃいちゃする両親を兄弟でスルー。
両親ラブラブのスルー技能は完全に極まっちゃってるよね。
もともと、二人の間に割り込めるツワモノなど、存在しないのだろう。

「後は、団長についていっていただければ」
「ああ、わかった。怪我、大事にな」

弟王子は足の怪我のため、騎士たちにストップをかけられたらしく、医者の所にいくらしい。

スキンヘッドの騎士におんぶされていってしまった。
熊王子に至っては、なにやら物々しい警護に囲まれたまま、城に入っていった。

残される岸田一家。

……なんだろう。この若干険悪な雰囲気というか、ギスギスしているのは。
見たこともない乗り物に乗ってきて、服装も普通じゃない奴らがきたら排出的になってしまうのは普通の反応だと思うが、尋常じゃなくない？

「では、こちらへ」

居心地の悪さを感じながら、団長に促されるまま、後に続く。
背後には彼の部下らしい数名の人間。

無言のまま、裏口らしき場所から入っていくと、やはり現代のように明るくはなかった。

団長が持つ角灯（ランタン）を頼りに、赤い絨毯の敷かれた豪華な調度品の並ぶ廊下を進む。
誰もいないせいか、やけに寒々しい。

日ごろの運動不足か、四階に上がったあたりで、姉が息切れしている。
いつもなら、引きこもりである私も同じように息切れしているはずだが、体力がアップしているせいか、さして苦痛でもなかった。

五階に上り、わずかに光の漏れる場所に、進んでいく。

・　・　・

・　・

長いこと行ったり来たりしたようだが、ようやくゴールらしく。
団長が扉をノックをする。
なに、テロに備えてテレビ局が複雑なように、城も防衛のために、いろいろ迷路みたいにしちゃってるのだろうか??

「はいれ」

男の野太い声が返ってくる。
ん??あれ、私たち、泊まる所に案内されてるんじゃないの?
なんで、人がいるんだ?
団長は入り口を開いて、全員を入るように進めると、団長は頭を下げて、何処かに行ってしまった。
部屋の中に足を踏み入れる。
門の左右に一人ずつ、フルフェイスの全身甲冑をつけた兵士が槍を持って立っていることをのぞけば、いたって普通の書斎だった。

自宅の居間は１２畳ぐらいあるけど、それの倍くらいの広さ、ということ以外。

さすが城というべきか??

本棚がなければもっと広いのだろう。

古紙の独特のにおいがするが、なんと表現していいのか分からない。

おーい、本当に案内だけなんですか?

まったく……一緒に車に乗ってた騎士たちも付き添ってくれないんだな。

ぶーぶー、薄情なやつらだ。

いや、もしかしたら、彼らもゴブリンと対戦して疲労していたのかもしれないが、ピンピンしている兄が隣にいるので、感覚が麻痺しているんだろうか。

王子達はしかたないか。

弟王子は足怪我してるし、兄は熊だし。

ってか、なんで、私たち書斎につっこまれたの??

場所がないから、書斎で寝ろってことじゃないよね??

どうする、どうするの私たち――否、兄は。

背を向けていた椅子が、くるりと回転して、本を眺めていた男が顔を上げる。

波を打つような鮮やかなの茜色の髪に、同じような色の目をしており、先ほどの団長並みに威圧的なごついおっさんが座っていた。

多分、父と同い年ぐらいだと思うが、異様に若々しい感じがする。

椅子ちっちゃすぎない？ってぐらい体がでけぇ。

座っている状態でもでかいが、立ち上がったら、二メートルはあるんじゃなかろうか？

服の上からも筋肉むきむきなのがわかるくらいだし。

こえー、街中で肩で風切って、正面から歩いてきたら、速攻で視線を逸らして、道の端に避けるね。

この顔なら『ヤ』のつくご職業の方に違いない。

父も顔だけは怖いけど、このおっさんには負けるぜ。

え??もしかして、お偉いさん??

なんで家族全員でお偉いさんに会いに来ちゃってるの??

兄だけじゃないの？

「お前さんらが、ルエイト、か」
「る――？？？」

私が小首を傾げると、おっさんは喉元で笑った。

てか、さっき弟王子も似たようなこと、いってたような、なかったような。

「この世界ではない場所からやってきた人のことだ。流れる、離れる、人といういう意味で『流離人（ルエイト）』と纏めて呼ばれておる」
「その言葉を聴く限り、この世界ではよくあること、なんですか？」

兄の言葉に、おっさんは肯定する。

「稀に、な――大人数というと俺も昔話程度だな…っと、すまん。俺の名前はアドルフ＝アマデウス。聖職者であり、イシュルスの宰相を任されている」
「アマデウス…」

大人数は稀にって、少ない人数なら、茜色――いや、赤毛の宰相でいいか――は見たことがあるのだろうか？日本人？大穴でロシア人とか。

あれ、そういえば、なんか、モーツアルトの苗字みたいなのって、

どっかで聞いたな。
いや、みたような――――？？

「もしかして、チャイラさんのご家族の方ですか？」
「ん、まぁ……一応、父親だが、な」

兄の言葉にきれ悪い口調で、アドルフと名乗った騎士（チャライ）のお父さんは、苦笑を浮かべた。

どうやら、込み入った事情のようだ。

深く触れずに、兄も薄々察したようで、それ以上は踏み込まなかった。

赤毛であるということ以外、まったく似てない。
騎士（チャライ）顔はお母さん似なのだろうか――よかったね、お父さん似じゃなくて。

というか、イシュルスの宰相って。

ラスボスとまではいかないが、サブボスぐらいの権力の持ち主がでてきたな、おい。

その『流離人（ルエイト）』というのは、よっぽど何かあるらしい。

さすがに、一般市民においそれとお偉いさんが会うとは思えない

し。

あと関係ないけど、どう考えてもぱっとみ宰相には見えないよ。

歴戦の戦士とか、傭兵とかいうなら、納得いくけど。

「私の名前は雅美です。家名が、岸田。長男です。こちらが父の幸一。母の理恵。俺の妹で、由唯と、真実子です」

兄が代表して、全員分の挨拶をする。

いつもの、夏はパンツ一丁の兄でぐうたらしてる姿からは、想像もつかないほど、しゃん、とした大人の対応だった。

礼儀をわきまえているというか、隙のない対応をしてみせる。

私たち一家は、礼儀…こっちの世界のはよく分からないが、兄に名前を呼ばれて一応会釈をする。

「ギシアーファミリー…？」

だから、ギシアーって。

やはり、王子や騎士同様に、宰相も聞き取れないようで眉根を寄せた。

兄は一瞬苦笑を浮かべて、言い直す。

「キィシガ、でございます」

あぁ、もう、兄は名前に関して諦めたらしい。
改めて名乗る。

「私は、サミィ、と。こちらが父のコゥーチ。母のリエ。俺の妹で、ユイと、ミィコです」

だからっ！私の名前が！猫みたいになってるから！！
くそっ、絶対わざとだよ。

Ａｃｔ　３２．　迷子です

赤毛の宰相の話し合いは、さしたる長いものではなかった。

すでに彼のところに報告がいっているのか、大凡は把握しているらしい。

先に口火を切ったのは宰相で、まずは騎士達と王子たちを救出したことに対する短い感謝。

どのような経緯で、来たのか簡単に確認をした。

もちろん、対応は兄がすべてを担っており、父は放任のままであった。

よっぽどのことがない限り、自主性を重んじる――というか、母に被害が行かない限りは、さして行動を起こしたり、口を挟んだりはしない人だ。

兄は相変わらず簡潔ではあるが、嘘もなく理性的に言葉を発していた。

だが、最初の二つの話が、会話を滑らかにするための白々しい口上だったのは、私でも分かった。

まー、だいたい狸と狐どもの化かしあいだよ。

主に兄が、狐――宰相は、ゴリラって感じだけど、言葉を聞く限りは、頭も回るような感じだ。

すぐに、本題へ入った。

「さて、最後に数日後にゴブリンの群れが到達するという話だが」
「可能性の話ですが。確率は高いかと。私どもが信用に足りないのは自覚していますが、せめて確認だけをお願いします」
「すでに、実行済みだ」

どうやら、国の危険が迫っている可能性があって放置するほどアホな奴ではないようだ。

そういった後、宰相は口元に手を当てて暫し考え込んでいる。

「近年…いや、今年に入っての魔物の増加は、目に余るものがある。だが、ゴブリンが群れを成すとは信じがたい。ましてや我が国は、強固な城壁と少数とはいえ精鋭の騎士は誉れ高い」

いや、それゴブリンが知ってるのかい。
人間同士の話じゃないの。

それにその精鋭の騎士たちは、３０以上のゴブリンに3人で苦戦していましたけども？

精鋭っていうぐらいだから、一騎当千は必須じゃない？

まぁ、この国の人口がどのくらいいるのかは知らないけどさ。
あ、もしかして、まだまだ強い騎士が……え、さっきの団長クラスがうじゃうじゃと？？

こ、こわい。
それは是非ともやめてほしい。

でも、あんだけ立派な城壁があれば、大丈夫、か？
うーん、耐久性があっても、長期戦に持ち込まれたらどっちが不利なんだろう。

「その点は先ほど、確認できましたが、数にはかなわないでしょう。戦争は数が基本です。万が一、城壁が壊されれば、騎士たちは、市民を守りながら戦うことになる。籠城戦となった場合ですが、たとえば同盟国に支援要請するとしても、時間がかかる。兵糧も多く失うでしょうし、混乱した国民が暴動を起こす可能性とてある」

1人3体の敵がいて、後ろに守る人2人、とかだったら、絶対無理。
私なら自分の命を守るのも精一杯ってところか、庇って戦ってたら全滅の可能性もあるけど。

難しいところだよね。

籠城戦って、篭るってことだよね。
国民全員の食事がまかなえるかどうか……まぁ、国庫から出すんだろうけど、持久戦は先が見えないから、最善とは言いがたいだろうし。

「…数は」
「最低でも2千以上」

2千以上かぁ。
うーむ。学校二つ分ぐらいのゴブリンが押し寄せてくるということだろうか。

でも、ここも小さい町ってわけじゃないからねぇ。

意外と余裕なんじゃないの？
別にわざわざ警告する必要もなかったんじゃなかろうか。

「君の根拠は」
「逆算です。私が人並みの将軍なら、隠密で行動している部隊に人為的な被害がでた場合、出た被害の倍を宛がいます。騎士達と私が倒した数は４０強。元々６０近く送りこまれたとして、その数を振り分けられるほどの大軍ということになる。定石です」
「ふむ…」

……多分、ゴブリンと戦って数数えながら計算、してたんだろうな。

やっぱりチートかこの男。
この理系は…いや、これだから兄は、のほうがいいか。

「考えられる予測日数は」
「仲間の死骸を見つけて、こちらが完全に対応する前に攻め込む意思があるなら、5日以内には到着するでしょう。全軍の足並みをそろえなければ、もっと早い」

宰相は僅かに、想定しているのか、沈黙が続く。

兄の凄さがようやく分かったらしく――というか、両親と姉は今更ながら、剣呑な雰囲気を感じ取ったのか、困ったような様子である。

本当に戦争が起こるのだろうか、といった様子である。

現代日本人には危機感が足りないというが、まったくもって、私にもない。

早く逃げないと、とか、なぜか、そこまで思わない。

多分、それは家族がいるからだろうけど。

それにゴブリンにしたって、生きて襲ってきた所を体感したのは、兄と私だけなのだ。

両親も姉も、現実味も欠けることだろう。

それはさておき、私的には、この国がどうなろうと知ったこっちゃない。

どうせ、縁も所縁もないないところだ。

ましては兄は恩を売ったらしいが、兄が恩があるわけじゃない。

さっさと、魔石をお金に交換して、旅の準備をしたら、比較的安全な場へと避難。

途中で、ゴブリンの群れを通ることになっても、時速百キロで走る鉄の塊をゴブリンが防げるともおもえないし、兄がそんな道を通るとは思えない。

すぐに兄が抜け穴をみつけるだろう。

ゴチャゴチャと話し込んではいるが、早く終わらないかなー。

両親も姉も異世界に来たことで、いっぱいいっぱいの感じだし、私は口出しするほど頭よくないし、別にこれなら、やっぱ、兄一人でよかったんじゃないですかね。

早く、お風呂に入って、眠りたい。

希望を込めて、ちらり、と扉を眺め――――あれ？

扉に何故か、いつもより小さい矢印がついている。

取得可能な物についていたのとは色が違うので、見落としていたようだが、なぜ矢印が『赤い』？

兄と宰相も、こっちには気がついていない。

両親も姉も、その成り行きを眺めているらしい。

う〜ん……なんだろう。

じぃー、とちょっと近寄って扉を眺めてみる。

別に何かポスター的なものが貼っているわけでもなく、黒味がかった木製の重厚な扉ではあるが、なんの変哲もない感じ。

まさか、この扉がアイテムってわけじゃなさそうだし。

とりあえず、近寄ってみる。

そうであったとしても、持ち運びはできんし――あ、あれか？城は王様の持ち物だから、とったら犯罪者になるよ、という意味合いの『赤』の矢印か？

いや、でもそれなら最初から、矢印つけなければいいんじゃない？

手を伸ばして、矢印の部分に触れた――――んだけど、凄く、冷たくない？この扉？？

ぱしゅん。

なんか、缶のプルタブ――あの指入れる輪の部分ね――を開けたような音。

それが響いたな、とか、思ったら、光。

溢れるような光の帯が足元から一瞬に、目の前を覆った。

あまりの強さに、目を細めた。んで。

――――薄暗い部屋。

先ほどの書斎よりも4倍ほどデカイ上に、天井が尋常ならざる高さだ。

二階建ての吹き抜け並みの天井だ。

そこに額縁が多く並んでいて――――――まぁ、ここは書斎じゃないわけだ。書斎じゃないのね。書斎どこいったんでございましょうか??

大事な事なので、3回言いました。

試験にでるので、赤丸チェック…じゃないってっ!!

拝啓、数秒前まで一緒にいた我が愛しの岸田ファミリーよ。

どうやら、もしかしなくても、これって、魔法世界じゃよくある瞬間移動(テレポート)魔法とかってやつですかね??

手を伸ばして、驚いて肩をすくめたままの間抜けな格好で、低く低く呻いた。

ここ、どこやねん……

Ａｃｔ　３２．　迷子です（後書き）

基本的に何事兄任せ的な岸田一家…迷子になるのは、いっつも末っ子だよね。

Ａｃｔ　３３．　黒甲冑の肖像

寒い。

さきほどまで、暖かかったせいか、肌寒さが際立つ。
吐き出す息も、白くなってるような気がする。

本当に何処だろう、此処は。

学校の体育館とまではいかないが、広々としていて、天井も高い。
声を発したら、響きそうな場所だ。

外の城壁と同じように石畳の壁には、大小多くの高そうな額縁だけが貼り付けられており、窓がひとつもない。

部屋の中央には円柱の台座のようなものがある。
その上に飴玉サイズの黒い宝石が乗っているが、部屋の光源がそれらしい。

書斎ではない。

分かってますけど、出口が見当たりません。

やっぱ、パターン的に瞬間移動（テレポート）魔法とか？
足元をみると、魔方陣のようなものが刻まれているし、ちょっと光ってるようだし。

あの赤い矢印って、移動とかだったのか？？

んん、入ってきたのだから、出口がないはずないと思うけど、この部屋から小さな矢印を探すとなると面倒には違いない。

台座の上の黒い宝石が怪しいが、矢印はついてない。

というか、一生ここから出れないと、餓死確実だけど…でるのに時間がかかって、姉が気がついたら仕置き確実だ。

一日に二度も、コブラツイストを食らえと？

『……ここに誰か来るなど、何百年ぶりかのぅ？』

何百年ぶりか、って聞かれても知らない――ってか、誰！？陽気な老人的な声が聞こえるんですけども。幻聴とかってオチじゃないよね。

キョロキョロ周囲を見渡すも、誰もいない。

『こっちじゃ、ワシはこっちじゃ……向かって、左手の方じゃ』

人影はないが、何かが動いているのが見える。
よく見ると、上の方の大きな額縁の中で何かが動いていた。

鈍い輝きの黒いフルフェイスの甲冑。
本来なら目元や口元から人の顔の部分が覗いていてもいいような気がするが、黒く塗りつぶされており、目の部分だけ赤く光ったように描かれている。

その絵の甲冑が、ヒラヒラと、無骨な鎧に包まれた手を振っている。

絵、が喋った。

ふぁ、ファンタジー！魔法ですか、魔法！

『おぉう、魔法も知らんのか…それに、この部屋にやってくる割には若いのぉ。１０歳ぐらいかの？？』

これでも、１８歳ですから！？
そりゃ、背が小さいとかっ、童顔とか、ありますけども！！それが何か！！

っていうか、落ち着け自分。

絵が動いたって、テレビの方が百倍動いてるし。うんうん。
あの滑らかさからいくと、絵の中の甲冑は、動きが妙にコマ送りといった感じである。

『じゅ、じゅうはち……竜人やら、魔人やらの成長の遅さじゃ。微かに魔物臭いのぅ』

乙女に向かって臭いとかいうなっ。

数時間前まで、ゴブリンの軍勢の群れの中にいたからしかたな……ん？言葉にしてないよね？もしかして、独り言、言ってないよね私？

『あぁ、お主の思考筒抜けじゃ。ワシが精神感応魔法を発動させたんじゃ――騎士ならば、心の閉じ方を覚えにゃ、じゃ』

いや、騎士じゃないし。

むしろ、盗賊にされたし、レベル5だよ、私。

そんな高等技術を学んでいるとおもいますか、否、思いません。

心なんて閉じれません。

人様に口は閉ざしておりますが。

それに一方的に人の心を読むなんて、セクハラだ。セクハラ。

『せ、せくはら……むむ、お主、王族じゃないのか？』

……ちがいますけど。

黒い甲冑は絵の中で自分の顎の辺りを撫でながら、考え事をしているようだ。

というか、また怒られるから帰りたいんですけど。

姉にジャイアントスイングに食らっちゃうよ。

『まいったのぅ。てっきり、大きな戦が始まる前に、あれ（・・）取りにきたのかとおもうたが……お主、ただの迷子か？』

はい、迷子です。

間違いなく。

できれば、帰りたいんですけど。

てか、やっぱり戦になるんだ。

絵の中の甲冑は胡散臭く『そうじゃそうじゃ』と頷いている。

なんで、甲冑わかってるんだ？

『ここの騎士で守れんこともないが不安じゃ……やつらから奪ったあれ（・・）を守るために――――おぉ、そうじゃ、ワシは名案を閃いたぞぃ』

絵の中から、甲冑の手が出てきた。
額縁を掴むと、そのまま足、頭―――結局、甲冑が全部、絵の中から出てきた。

ひ、ひぃいい！！

額縁をひょいと、超えて出てきたよ！

お爺ちゃんぽい喋りの癖に、めちゃくちゃ軽快な動きですな、おい。

てか、絵じゃなかったのかい！！

３Ｄ??眼鏡をかけると立体映像に見えちゃう感じですか！?

『失敬な。これでも、まだピッチピチの３１９歳じゃ』

ピッチピチで３１９歳って、どんだけ長生きする気っていうか、十分お爺ちゃんじゃん！

ってか、私の思考で拾うところのチョイスが微妙だな、おい。

うわー、しかも、ステータスも表示されない。

そしてなぜ近づいてくる。

ていうか、甲冑がちゃがちゃさせながら、にじり寄ってくるんですか。

その分、私は下がる。
悪意も敵意も感じられない。
だからといって、私に１００％害がない、とは言い切れない。
『お主こそ、なぜ逃げる――――ほーら、なーんにも怖いことないぞぃー』
逆に、怖っ！！
なぜ姿勢を低くするのっ！
ってか、その変質者的手つき、違う意味で怖っ！
よし、逃げるが勝ち――って、出口ないんだったよ、この部屋！
何処に逃げれば……
一瞬の躊躇い。
『大丈夫じゃよー、ワシが外にだしてやるぞぃ……用事が終わったらじゃが』
「ヴぁっ！」
気がつけば、背後から甲冑に羽交い絞めを食らっていた。

って「ヴぁっ」て悲鳴、自分でもおっさんぽいな。
間違っても年頃の乙女の悲鳴じゃないや。

そして、甲冑の中から、何かを取り出すと、私の目の前に取り出したのは――――コインだった。

年季を感じさせるボロボロさがあり、大きさも親指の先ぐらい。
色は濃い黒紫色の金属なのか、でも半透明で水晶のようでもある。

よく分からん物体で作られたコインは、紋章のようなものが入っているようだ。

これもステータス表示がされない。

視線を逸らせないほど目を奪われるのに、脳裏で激しい警告音。

ヤバー…、絶対ヤバーーい！

兄のせいで、ある種の修羅場を潜り抜けた私の本能が警告するのだから、これは間違いなく、危険な物体です。鑑定するまでもありません。

私は大暴れである。

とりあえず、離してほしい。切実に。

だが、甲冑の爺さんはびくともしなかった。
一応、金的を食らわせましたが、鎧越しじゃ、ノーダメージだっ

たようです。うう。

しかたなく、これだけは、後々相手に後遺症が残るし、手にも感触が残って気持ち悪いので、ちょっとやりたくなかったんだけど、しかたない。

私は自分の安全が、最優先ですから！

岸田家秘儀・目潰し！！

赤く光って見える目の部分に、人差し指と中指を突っ込んだ――――のだけど、すか、と指にはなんの感触もない。

もう一度試してみるが、スカスカと通り抜けるだけだった。

あ、あれ？

私の予想だと『ぎゃー』と叫んでお爺ちゃんがのた打ち回るような気がしていたんだけど？

『お、恐ろしい子供じゃな……目潰しって、普通は躊躇してもよいもんだが…ともかく、説明は面倒じゃ――――お主。とりえず、飲むんじゃ』

ええええ～～～！！

飲めって飲むってこと！

こんなわけの分からないものを口の中に突っ込むって――――ちょ、まっ、やめ！

『旨いじゃろうー？』

口の中に甘みが広がって、それでいてまったりとして、溶けるような味わい――――違っ、まじ、やめて！鼻と口をつまむんじゃない！！

ごくん。

……。

……。

……飲んじゃった。

あ、あぁ……こんな怪しい場所の、怪しい甲冑老人の、怪しいコインを丸呑みしてしまった……。

私は甲冑老人に手を離され、その場に土下座するような形で、し

ゃがみこむ。

父よ、母よ、我が兄弟よ…先立つ不幸をお許しください。

『いや、死なんよ？』

腸閉塞になったら如何するんだ！

死ぬかもしれん。

この時代の文明で医者は―――はっ！神官なら、魔法的な感じで治してくれるんじゃないだろうか。

いや、でもさっきの赤毛には頼みたくない…あ、聖職者系の職業について治癒魔法を…

『まぁ、人体に影響はないから安心せい』

いや、でも、コインだよ？

腸閉塞じゃない？

喉に残るコインの詰まるような感触に、胸を叩く。

『そのちょー……なんとかは、よくわからんが、ともかく体内に溶けるから、平気じゃ！』

びし、と親指を立てる、甲冑老人。

ああ、それなら安心って――それなら自分で飲め！自分で！
人を実験台にするな、この鬼っ！悪魔！

『ふぉっふぉっふぉっ、それができるなら、すぐにしとる。ほれ、
ワシはこのとおり――』

甲冑老人は、両手で己のフルフェイスの部分を持ち上げた。

『――人でなし（・・・・）でな』

持ち上げた頭部の部分は、何もない。
その首から下の中身も、ただ鎧の内部の空洞が、覗くだけだった。

Ａｃｔ　３３．　黒甲冑の肖像（後書き）

真実子……ある種因果応報？？
父親に何をしたかは忘れております（笑）

Ａｃｔ　３４．　話の終わり

ぱしゅん。

なんか、缶のプルタブ――あの指入れる輪の部分ね――を開けたような音。

それが響いたな、とか、思ったら、光。

溢れるような光の帯が足元から一瞬に、目の前を覆った。

って、私さっきと同じこと思ってない？

つまり、は。

扉。本棚。本棚。兄。姉。母。父。

まだ兄と宰相はごちゃごちゃ話し合っているあたりで、一番後ろの私がよく分からないところに吹っ飛んでたのは気がついていない様子だった。

よかったぁ、戻ってきたよぅ。

う、うぅぅぅっ、謎の爺甲冑（人でなし）に変なもの飲まされたよー。

土下座の状態から、よろよろと立ちあがる。

近場にいた父―――をすり抜けて、姉に抱きつく。

「冷っ…あんた、どうしたの？」

姉の体がびくっと跳ね上がる。

後ろから抱きついた私を改めて前から抱きつくように促され、私は素直に従った。

ぎゅうぎゅうと、私が抱きつくと、姉は冷え切った体を擦った。

ありがとうごぜーますだー。

温い。温い。

「具合悪いの？」

いえいえ、ちょっと変な甲冑老人（空）にコインは飲まされましたが。

それを説明すると、姉にジャイアントスイング食らう覚悟をせねばならないので、やめておこう。

迷子になってませんよー。

あれは、不可抗力ですよー。

私は首を横に振って、違うとアピールしておく。

「そう、なの……まぁ、いいけど、なんかあったら、あたしにちゃんというのよ？」

あい、ご迷惑をおかけしておりやす。

というか、どうやって帰ってきたのか、さっぱりなんですけど。あの甲冑老人が、私の気がつかない間に、帰してくれたんだろうか？？

変なイベントにかかわってしまったような気がする。

あんまり、かかわりたくないんですけども――――まあいいや、何か起きても兄がどうにかするだろう。がんばれ、兄。

「ミコ、どうした？疲れたのか？」

父も気がついて、姉と同じように小声で話しかけてくるが、首を横に振って誤魔化す。

そうか、と父が私の頭をぽんぽんと叩いた。

いつもなら『子ども扱いするな、このたーこ』と噛み付く手を、今日は甘んじて受け入れよう。

あの部屋は肌寒かった…という、大義名分もあるし。

ち、違うからね。別に不安になったとかじゃないからね、と密かにつんでれも発動しておこう。

半泣きになっていたのか、姉が涙を親指で拭って、頭をナデナデする。

今更ながら恥ずかしくなったが、姉に顔を埋めて誤魔化した。

あー本当にびっくらこいた。

あれって、多分財宝とか守ってる『彷徨える鎧』系統の奴だよね??

魔力で半永久的に動くとか、死んだ人間の魂が入ってるとか、入ってないとか。

ゲームの画面上では見たことがあるだろうけど、実際目の前に現れたのとは全然違ったし、絵の中から出てきパターンは初めてだよ。

ゴブリンは意思も通じないし、襲ってくるから獣的な感じが最初からしたけど。

……ていうか、ホラー系でしかないよ。あやつは。

駄目だ。

そっち系統は、拒絶反応が。

見よ、この鳥肌！いや、袖まくってないけど。

言葉が通じなかったら、即モンスター……あれ??ちょっとまてよ?普通『彷徨える鎧』って喋んないんじゃない??

しかも、自分の意思があったというか、妙にお爺ちゃん的な方向で、人間臭かったというか。

後、危害も加えてこなかった――いや、コインは飲まされたけど。何がしたかったんだ？嫌がらせ？？

「ふぅ…少し話が脱線したな」

「失礼しました」

「いや、それはお前のせいではない。私の好奇心のためだ」

静寂が落ちて、どうやら話が纏まったのか、終わったのか、赤毛の宰相は瞼を閉じた。

どうやら、ゴブリンいっぱいくるよー的な話は伝わったらしい。うむ、頑張ったな。兄が。

「お前は、ゴブリンの大群がくるという意見を変える気はないのだな」

「ええ、残念ながら」

「わかった…今日はここまでにしておこう」

頷く兄に、宰相は瞳を開けると、薄く自嘲を浮かべた。

ようやく話は終わり、どっかの部屋に案内してくれるらしい。

実は強がっておりますが、異世界、ゴブリン対決、姉のアイアンクロー、コブラツイスト、コブラツイスト、長時間のドライブ、コイン、ぐらいの比率で疲労が蓄積しております。

特に姉で。

たぶん、今振り返っても直接のダメージを受けたのって、あれじゃないか。

かすり傷とかは別としても。

ともかく、さばっと、一風呂浴びて、ベットにダイブしたい気分であります。

ふっかふかのベットを用意しろとは言わないけど、せめて熊の腹並に心地のよいベットでお願いします。

枕は猫の形の低反発枕があるので、結構です。

というか、それがないと寝れません。

いや、でもこの疲労ぐあいなら、どこでも寝れそうな気もしなくもないが。

宰相が己の眉を撫で、ため息をつく。

「――――では、お前たちを部屋に案内させよう」

と、厳かな声で、宰相は言った。

・　・　・　・　・

「な、なんでやねんっ！？」

兄に対し、私は両親と姉の心の声を代弁して、叫んだ。

牢屋越しに（・・・・・）。

Ａｃｔ　３４．　話の終わり（後書き）

短っ！なんか、短いよね話！

Ａｃｔ　３５．　一日の終わり

「いきなり牢屋って、おかしいじゃん！！」

案内いたします、と下へ降りて、降りて、降りる。

複数の王宮騎士に囲まれ、辿り着いたのは、非常にボロボロの地下の牢屋であった。

辛うじて、清掃はされているかな程度で、王宮の地下牢獄なので光も差さないし、ジメジメしてる。

松明が殆ど消えてて、２つしかついてない。

かび臭いー。

暗いー。

一室に区切りがあるだけで、トイレが一緒って……最悪。

当然だけど、水洗じゃないし、ぼっとんでもないし、おまる的なものがおいてあるだけだし……あー、もうやだ。

宰相の野郎！許すまじ！！

「本当に最悪！！肉体的にも精神的にもよくないわ、こんなところ！」

「まぁ、牢屋が快適だったら、犯罪者増えると思うが……」

いや、そーだけど、そーゆー意味でいったんじゃないよ、姉は。

さすがに姉は大いに反抗的だったが、自由を奪われなかっただけましだ、と兄。

十分に自由を奪われない？ねえってば？

驚いた両親と姉を宥めて、彼らの言うとおりにしようと兄は、相手に対して譲歩の姿勢を見せた。

彼らにもそれなりの理由がある、と。

誠実であるといえば、そうだが、納得はいかない。

もしかして明日、死刑とかいわれたらどうすんのさ。

逃げとかなくていいんだろうか？

自分、鍵空けのスキルゲットしておりますけど、開けちゃう？開けちゃう？？

弟王子はぽやや～ん、としてるけど、ちゃんとしてたので、王様もマトモだと思ってたけど、実は暴君か、暗君の治める、荒れに荒れた都市だったのだろうか？？

だから、宰相も極悪人だった、とか？

でも、町は夜だから人がいないだけで、不信な点はなかった…ような気がする。

ぶーぶー。

とりあえず、不満たらたらなんですけどー。

ゴブリンが襲来すると分かれば、開放されると兄はいっているが、王子と騎士を助けて、尚且つこれから大変だよ、準備して、と親切に言ったにもかかわらず、理不尽。

相手からすれば、不審者かもしんないけどさ。

兄、超頑張ったんだから、褒美をもらってもいいくらいじゃない??

ぶち切れかけて、魔石投げつけたろうかと思ったが、その兄に素気無く制された。

ああいう輩は、1回痛い目見たほうがいい。

「よし、暇になったから、岸田家集合ー」

ぱんぱん、とマイペースに兄が手を叩いて、家族の集合をかける。

「集合も何も、全員牢屋じゃないの」

「そうだが、いつもやってることだから、とりあえず」

姉の突っ込みにめげない兄。

いや、隣の牢屋だけど、兄の姿はちらちらとしか見えないので、わかんないけど。

皆仲良く、牢屋から顔を出してる家族って……微妙。

「じゃ、第５７回岸田首脳会議を始めるぞー」

ただの家族会議だけどね。

このわりと緊急事態に、ちょっと遅いぐらいじゃない？

なんかもう、騎士たち助けところあたりで、会議しててもよかった気がするけど。

「大体察してると思うけど、よくわからんが、うっかり皆で仲良く異世界に来た、というのはいいな」

「あら～…やっぱり、ドッキリじゃなかったのねぇ」

「母さん、この城はセットじゃあ作れないぞ。父さん、西洋建築は専門外だが――」

「それで、なに？」

父の長くなりそうな説明を黙殺する姉。

うん、もういいよ。この城が優れた建築物で、異世界っぽいんだよね。

わーった。わーった。

よし、黙れ父。

それにドッキリのためのエキストラにしたって、日本語ぺらぺらの外人を集めて、よく分からん異世界設定を覚えさせるのは難しくない？

もし、これがドッキリなら城を建てたことも含めて億単位の金が動いている？？

しかし、それをタレントでもない一介の家族にするメリットは？

ない。あるわけない。

なにかの復讐にしたって、もうちょっと億単位の金は、違う使い道があるだろう。

叔父は兄並みに恐ろしい人だが、悪戯を仕掛けてくることは滅多にない。

めんどくさがりなところもあるから、自分から動かない。

こう、ついでに悪戯みたいなのはあるけど。

後は、兄のやんちゃのせいで、報復されたことはあったが、短絡的なものだった。

お礼参りとか、待ち伏せとか、闇討ちとか、誘拐とか――主に、被害が私に――された場合は、兄がさらに三倍返しというホワイトデー並みの報復をするので、最近は殆どない。

とりあえず、全員が異世界に来たことは認識してる。
意外な事に一番暴れそうな姉が、冷静であることが救いである。
絶対に最後まで信じないと思ったんだけどなー。

「んん、普通なら召還された場合ってのはいくつかパターンがあるんだが。何か使命的なものが存在するんだが、誰かに何してくれ、ってお願いされた人――」

無論、誰も声を上げない。
てっきり、一番冷静かつ、ちゃきちゃき仕事？してる兄かと思ってたけど。
チート兄も違うらしい。

「――は、いないか。となると、殆どの可能性が消えて、現時点で考えられるのは偶発的な要素できちゃったということになる」
「…はぁ？偶然ってこと？」
「そうなる」

それにしても、イベント目一杯って感じだし…悪意っつーか、作為を感じます、はい。
後は、異世界突っ込んでおけば、兄がどうかするんじゃね？とか、そんな大雑把――……まさか、イシュタル神とかじゃないよね。

神託（メール）しか見てないけど、やばい感じの軽さだったよ？
判断材料がないから、推測でしかないけど――そうだったら、ものすっごくヤだな。

「ちょっとまってよ！だったら、帰る方法とか！」

姉の言葉に兄は数秒沈黙したが、すぐに声を上げた。

「今のところは、な。だが俺たちが召還する方法があるってことは、また逆もあるってことだ――限りなく可能性は低いけどな」
「ど、どどど、どーすんのよ！私っ」

滅茶苦茶動揺した声を上げる姉に、泣くのかと身構えた。
姉の泣いたところなんて、小学生以来見ていないが、異世界、帰れそうにない、となると、泣き出してもなんら不思議はない。
がしゃん、と姉が乱暴に鉄柵を叩くか蹴ったような音がする。
「月９のドラマ、録画してないのよ！来週、最終回なのに！！」
ってか、心残りが月９かよ！！

残してきた患者を気にしろよ、ナース！

「……うん、そうだな……月9、な」

顔が見えてたら、兄はきっと遠い眼してるよね。

多分、私も同じような感じだけど。

「あら…糠漬け（ぬかづけ）、もってきてよかったわぁ」

え、えぇ～～この期に及んで、漬物ですか、母。

確かに自分で一から糠床（ぬかどこ）につけてるから、長期間混ぜないと痛んじゃうけどさ――って、どこに入れの??車のどこ入れたの！私の鞄の近くじゃないよね??

糠臭い服は勘弁して！

「うーん、父さんも、再来週から仕事入れちゃったんだけどなぁ」

なんか普通。

姉と母の後に聞くと、父って常識人だな。

母と建築物さえ関わらなければ。

そうだよね、私も学校があるし、あふぉだから、授業についてけなくなるんですけどー。

「俺もそんなに長期間休みなんてとれないんだが……うーむ。とりあえず、第一希望は、日本に皆で帰るぞーで、いいか？」
「さんせー」
「いいわよ、勿論。リアルタイムで愛と陰謀の月９の最終回よ」
「母さんは、おいしいものがあるところー」

たしかにここは、ホットサンドで感動する王子がいるくらいだから、なんか期待できないね。

「うーん、父さんは、母さんがいれば、どこでもいいけどな」
「もう、お父さんったらー」

はい、そこ、子供の前でいちゃいちゃしない！あ、横か。どうでもいいけど。

なんだかな―…緊張感ない。

結局、一番テンパッってたのって、私…なんだろうなぁ。
きっと一人だったら泣いてたし。

あんまり関係ないけど、ゆるいっていうのか、いつもどおりっていうか。

突然、異世界にきてゴブリンと轢いて、兄はゴブリンと戦って、ワゴン車で王子と騎士と熊と相乗りして、一国の宰相にあって、牢屋に突っ込まれてー、私にいたっては甲冑老人にコイン飲まされてー…他にも色々あって、目まぐるしい一日だった。

しかも、この先が何があるか、わかんない状態。

本来だったら、もっと混乱したり、現実逃避してもいいと思うけど、良くも悪くも私の家はどこに行っても、そのまんまの家族なんだなぁ。

やっぱり、図太いというか、肝が据わっているっていうか…。一番しっくりくるのが適当？

「……とりあえず、我慢するけど、私の自慢の肌がダニに食われたら、兄処刑ね」

うわ、軽い調子で処刑宣告されてるよ、兄。

「ははは、とりあえず、買い物の荷物持ちぐらいで許してくれ」
「死ぬほど買ってやるから覚悟しなさいよ」

最初から嫌がらせモードのウィンドウショッピング…おっかな。

きっと早起きして、開店から閉店まで、回るつもりだよ。

がんばれ、兄。

「お父さん、おなか出して寝たら駄目ですからね。夜は冷えますから」
「お、お母さん。うん。シャツは中に入れて寝るよ」

ださっ！我が父よ。ズボンの中にシャツいれたら、完全にダサいよ。
ってか、母、わかってて言ってない？
おほほほ、って笑い声が聞こえるけど、おちょくられているか、八つ当たりだと思うよ。
反対側の隣も大変だな。

「一応、Bプランとして、帰れなさそうだったら、どっかで金稼いで、一戸建てでも買って、移住できるところでも探すか」
「あらー、それも悪くないわね――でも、お母さん」
「「「「「料理が美味しい所がいいわ」」」」」

母の言葉に、全員の声が重なる。

家族全員、母の食い意地がはってるの知ってるから、次の言葉ぐらいわかった。

兄の爽やかな苦笑。
父の満面の笑み。
鼻で笑う姉。
「あら」と、驚いた様子の母が、手に取るように分かる。

ぷぷぷ、と私も偲び笑いしてた。

長い異世界生活一日目が終わり、その夜は牢屋の使うのも躊躇うような、襤褸(ぼろ)切れのような布に包まって就寝した。

宰相にはムカつくし、王子も騎士も恩知らずだし、帰れる見込みなんて、まっったくないのに、全然怖くなかった。

ともかく、父がいて、母がいて、姉がいて、兄がいて、私は一人じゃなくって。

不思議と家族がいると思うと、なにが起きたって平気って感じだった。

――――ま、きっと、大丈夫、なんじゃない？

あまりにも疲れていたせいで、私はいつもの枕じゃなくてもぐっすり眠った。

こうして、私たち岸田家の冒険は幕を上げた。

Ａｃｔ　３５．　一日の終わり（後書き）

前の話が短かったんで、勢いで、第一章終了です。
突然の削除や、名前の変更と色々ありましたが、ここまで、お読みいただき、ありがとうございますｖｖ
考えてみれば、ここの所、毎日小説を書いていたような気がします。
嬉しかったり、悩んだりで、部屋を転がる日々ですが、なんか小説書くの楽しいなーとしみじみ思います。
誤字脱字の多い小説ですが、最後までお付き合いいただけると幸いです。

次から閑話挟んで、二章に……いきたいけど、まだ書き終わらない（涙）
濃ゆいのが…濃ゆい奴がぁ…うーん、うーん。

冬の黒猫亭

閑話　【とある騎士の不運】

すっかり胃が空っぽになった。

前に馬車の倍は早いという狼車（ろうしゃ）というものに乗ったことがあるが、その時もハーンは、こうして仲間に背中を摩ってもらっていた記憶がおぼろげながらある。

……鎧越しにだが。

狼車よりも揺れは少ないものの、速度はもっと速い時があるほどだ。

もともと自分で操る馬以外に受け付けない体質の自分には合わないのだ。

ならば、元の場所においてきた馬を探せばいい。

他の者の馬はゴブリンにやられたが、逃がした己の馬は、口笛で呼びかければ、すぐに戻ってくる。

後から追いかける、乗る気はないと何度行っても伝わらない。

そういった討論をしていると『くるま』の持ち主家族の無口な弟が、見当たらないと言い出して、長女はひどく慌てた様子だった。

『くるま』の中では素っ気無い感じだったが、騒ぐ様子が年相応に見えた。

５人の流離人（ルエイト）。

本当であれ、偽者であれ、これらがイシュルスに入れば、王宮内は騒ぎになるだろう。

そうでなくとも、両親は大人しいようだが、長男は武術経験がないというのに、ゴブリンを倒せるほどの恐ろしい才を秘めており、長女の異国の顔立ちだは整っており、華やかな美貌と呼んでも差し支えないほどで、人目を引き――ごほんっ、一般論だが――困っている表情に何とかしてやりたい、と思わせる。

い、いや、この家族は怪しい！

信じてはいけない！！

きっと王子を助けたのだって、裏があるはずだ！

そうしている合間に、騎士たちが動き出そうとするまでもなく、弟は戻ってきた。

その姿に、にっこりと、長女が満面の笑った。

……なぜかわからないが、背筋が凍る。

一昔前に、第一騎士団の鍛錬に参加したことがあったが、その団長と手合わせをする寸前のような強烈な恐怖を感じた。

一瞬にして、弟に見たこともない武術の技をかけた。

背後から、弟の体を横に折り曲げて、さらに追い討ちをかけるように――――っ！！！

捲れあがった裾の短いスカート。

露になる肌色の薄い布越しの踝、脹脛、太もも――――淡いピンクの花柄と白レース。

「へ、へぶぅううっ」

ハーンは奇妙な奇声を上げて、真後ろに倒れこむ。

その軌跡に沿って、ゴブリンとは違う朱色の血液が飛び散った。

・　・　・　・　・

「っ…ぅ…」

横たえる俺の視界には、低い天井が見える。

ついでに左右に人の気配があり、王子と、仲間と、熊……そうか、俺は鼻血を出して気絶したのか。

そして、やはり『くるま』とやらに寝かされているのだろう。

なんと、情けない姿だ。

この助けられた人生を王子に捧げると決めてたという――――……

「王子に蜜柑あげたら、熊、もふもふしていいって」

「ぐぁっ！！」

長女の声が聞こえたと思ったら、視野に影が過ぎる。
頭に激痛が走り、意識が遠ざかった。

・　・　・　・　・

「…ぅ…」

目が覚めた途端に、頭が痛み、触れるとコブになっていた。

木目調の天井。
見覚えのある調度品。

どうやら、騎士寮に戻されたようだ。

だが、なぜ、玄関先の廊下に転がされているのかが分からない？

多分だが、適当に放り出されたのだろう。

コブを作り、鼻血を出した程度の致命的な怪我のない騎士――不本意ながら、無口な弟の回復薬を飲んだためだろう――が医務室に運ばれるとは、思ってなどいない。

辺りはずいぶん暗く、随分時間が経過しているのだろう。

あぁ……王子、王子は無事なのだろうか。

なぜかわからないが騎士寮は妙に慌しく、頭を抑えながら、廊下でゆっくりと体を起こした。

「やべーぞ、やべーぞ！緊急召集なんて、聞いてねぇよ！！」

聞きなれた声。

がちゃがちゃと、鎧に身を包む人間が走る音。

振り返れば、眼前には鎧に包まれた膝。

ごきゃっ

そんな音を聞きながら、ハーンは、本日三度目の意識を飛ばした。

閑話　【とある騎士の不運】（後書き）

ハーンよ。永遠に…って、死んでないけど。

閑話　【魔術師の悪夢】（前書き）

話の都合上、兄→義理兄となりました。
なぜかって…それは、第二章で（笑）

閑話　【魔術師の悪夢】

とある魔術師の悪夢

悪夢――――それは、とある魔術師にとって、義兄を抱える苦労だった。

義兄のおかげで、魔術師は自由な時間が与えられたことだけは感謝するが、それ以外には、苦労ばかりかけられていた。

幼いころより魔力の強かった魔術師は、制御するために王宮魔術師に師事することとなった。

才能もあった魔術師は、砂が水を吸収するが如く魔術の道を歩む。気がつけば、魔術の奥の深さに、すっかりと嵌ってしまい、一日中研究に没頭する日も少なくなかった。

そこで、必ず来るのだ。

悪魔（義兄）が。

様々な難題を抱えて、扉を叩く義兄に殺意を殺意を覚えない日はない。

かといって、王政の采配であるがゆえに、無碍にもできずにストレスを溜め込みながら、それに答えた。

魔術師も、母親は平民の出身ではあるが、王族なのだ。

こうして、魔術に没頭させてもらえるだけでもありがたい状況であることは理解しているつもりだ。

それは分かってる、が――――……

ようやく義兄が、王としてひとり立ちをして、魔術師は実に優雅な魔術ライフが待っていると思ったのもつかの間……さらなる悪魔（甥）が出現した。

それも、二人。

悪魔（義兄）が、二人いるような錯覚すら覚える。

なぜ、甥どもは、父親の悪い部分だけ引き継いでいるのだろう……いや、素晴らしい能力に恵まれてはいるものの、父親から受け継ぐ悪い部分をより一層引き立てるとはどういった了見だ。

いや、そう、現実逃避はよくない。

研究室の扉が乱暴に何度も叩かれているために、少し思いに耽ってしまった。

「入れ」

そういった途端、雪崩れ込むように若い騎士が入ってくる。

「イヴェール様っ！カルム王子が生きて発見されました」

だろうな。

甥は、殺しても死なないようなタイプだ。
何度か苛立ちのままに、本気で魔法を放ったことはあるが、いつも紙一重で交わし、致命傷を避ける術には長けている。

そこらのゴブリン程度は蹴散らして帰ってくるだろう。

その報告のためだけに、こんな遅くに扉を叩いたというのなら、燃やしてしまおうか。

やや不穏なことを考えながら、眉根を寄せる。

「こ、こちらにお連れせよと、ヴェルクスタ団長から仰せつかりました」

「なに？ここに？」

深夜に、この魔術研究室に甥を連れてくるというのは、どうゆう了見だ。

第一騎士団のヴェルクスタが、そうそう判断を間違うことはない。あの国の忠実な下僕は、押し付けられた難題に対し、最善の判断をしようとしているし、また今まではそうしてきたはずだ。

その判断は、今夜、鈍ったのだろうか。

もう、あいつも年か。これで、国の良心がひとつ失われた――――魔術師が、痛む頭を抑えるよりも先に、若い騎士の背後には、巨大な影。

忘れてはいけなかった。

悪魔（甥）は何時だって、魔術師の斜め上をゆく、ということを。

「……なんだ。それ（・・）は」

扉から入ってくることもままならない巨大な黒熊が、鼻に詰まった白い布を揺らしながら、緋色の双眸で魔術師を見下ろしていた。

閑話　【魔術師の悪夢】（後書き）

不幸な騎士が短かったので、短いのもうひとつ。

閑話　【降格の中年騎士】

イシュルスでは、騎士には大きく二つに分けられる。

聖騎士（ホーリーナイト）と、騎士（ナイト）。

この２つは戦力差は大きい。

普通の騎士が長い月日をかけて――無論、一生騎士のままの者もいるほどだ――力をつけて聖騎士となるが、その聖騎士の中でも３つのランクがある。

最初は準騎士（ガーディアンナイト）。次に正騎士（ハイナイト）。最後に七騎士（セブンナイト）。

ただの騎士ならば、３人ほどで、ゴブリン１体を倒す。

しかし、準騎士はゴブリン１体と対峙して生き残り、正騎士はゴブリンの群れ１つを相手にしても生き残り、最後に七騎士（セブンナイト）は５つの群れを相手にして生き残るという。

そう、騎士の中でも、聖騎士は群を抜いている。

しかし、カルム王子の仇をとるために、城を抜け出した王子と一人の準騎士の意思を止めることすらかなわず、もう一人の準騎士と共に森へ入ったのは軽率だった。

本当は神殿に向かっても、熊などいなければ帰るだろうと思っていたし、いつもと比較にならない魔物に遭遇するとは想定外だった。

正騎士のジークホークは、己の判断に、すぐに後悔することとなった。

本来ならゴブリンは、４～６体、多くても２桁になることは滅多にない。

が、現れた数は、視野に入るだけで１５体前後。

すぐに戦闘態勢になり、圧倒的な数の前に、瞬く間に劣勢に追い込まれた。

２人の準騎士はボロボロになり、自分も王子を庇って矢を受けたが、それが即効性の毒矢だったのか、すぐに足元が覚束なくなる。

せめて、王子だけでも生きて逃がさなければ――……

「――っ僕が、囮になりますっ！」

「王子っ！いけませんっ！」

ゼルスター王子が叫ぶ。

制するより先に、隙をついて王子は走り出していた。

人間としては良心に従った行動だが、王族としては判断ミスであった。

彼の剣は第一騎士団のヴェルクスタ団長に師事しているとはいえ、

その技量は準騎士になるかどうか程度のものである。

他のゴブリンよりも1．5倍は体格のいい――指示もだしていたので、隊長格らしい――ゴブリンが4体ほどを引き連れて、王子を追った。

ゴブリンは、人間を殺すと装備を奪う。

一番いい装備をしているものを、一番強いものが手に入れるという習性を持っているのだ。

相手も無傷ではないが、王子1人で何とかできる人数ではない。

だが、ゴブリンは力はあるが素早いわけではない。

純粋に逃げ回るだけなら、王子の足の速さを考えれば、そうそう追いつかれはしないだろう。

たったの数秒にゴブリンの相手をしている間に、木々に隠れて見えなくなった。

無謀にも、駆け出そうとする準騎士。

「焦るな、ハーン！冷静になれ！王子を追うのは、ここにいっ――――……」

「ジークホークの旦那っ！！」

その言葉に自分でも納得はできなかったが、言い終わるよりも先に、体が大きく揺らいで、気がつけば膝をついていた。

すぐに立ち上がって、ゴブリンに刃を向けるも、全身が徐々に鈍くなっていくのがわかる。

振るわれる刃は、もはや本能であった。

何百回、何千回と鍛錬で繰り返された型が、殺気に反応して、反射的に出ているだけであった。

どれくらい――――王子が走り出してから、どれくらいたったのか？

自分は時間の感覚すらもなく、意識が遠のきだしてきた。眼前の騎士は大きな怪我はないが、もう長くは持つまい。

――――もう、駄目だ。

そう思った刹那、突如として右前方から、咆哮と共に、金属の棒を手にした男が飛び出してきた。

剣筋は滅茶苦茶で、武器は金属の棒。

だが男の出現で、劣勢が徐々に覆されつつある。

先天性なのか力、反射速度、決断力が別格。

それも、戦いの最中で研ぎ澄まされるように、男の躍動は増して、あっという間に私たちが倒した程度の数を叩きのめしていた。

騎士(ナイト)以上の働きである。

なにより、複数のゴブリンを目の前に、普通の男は竦みあがるといわれている。

男は、笑っていた———それも、嬉々と。

戦士としての本能が、ぞくり、と背筋を凍らせる。

男がいるだけで、その場所には魔力でも働いているかのように、強烈な存在感。

まるで、王を前にしているかのように、目を逸らせない。

この男は、危険だ。

脳裏は反射的に答えを出していたのに、それでも鮮烈さに目を奪われたも事実だった。

人としての生存本能か、ハーンとチャイラも、男の出現に勝機を垣間見たようだった。

相手の方が数が多いというのに、ゴブリン達が怯みだした。

「待て！こっちには来るな！逃げろ！！」

ハーンの叫び声に体は動かなかったが、眼球を動かす。

子供だ。

妙な格好をした、少年。

ゴブリンとの激戦の中で、竦みあがっているのか、顔を歪ませ、固まったまま動かない。

まずい――あのままでは。

少年が、一歩下がった。

そのまま、走り去ることを祈るも、たった一声で、少年の顔色が変わる。

「来い！」

男の声だった。

一歩下がった足が踏みとどまる。

驚いたように両目を見開いた少年は、いや、少年もまた――――笑った。

まるで、しょうがないととでもいうように。

この、戦いの最中に。

毒消しを与えられ、回復薬を少年から手渡される。

この者達が何者なのか気になるところだが、今はそれどころではない。

無言のまま渡される回復薬を飲み続けて、ようやく立ち上がるほどまでに体が回復した。

止血しないと、体力が奪われるので、少年の手にしていた布を借りる。

チャイラとハーンを交代で休ませて――――少年が男に叫んでいた。

内容はよくわからないが、その後、男は『クロスエッジ』と呼ばれた技を発動させ、チャイラとハーンにも回復薬を少年がくれた。

そして、少年も時々何かをゴブリンに投げつけて、魔法のようなものを発動させていた。

一気に形勢は逆転した。

戦闘の終了後。

兄弟であるらしい彼らのやり取りは、虚脱を誘う。

さきほどまでの戦闘での脅威はまるで垣間見えず、よろよろとしていた。

こうしてみると、異国の顔立ちをし、妙な服装ではあるが、どうやら言葉は通じるようで、町で歩いていたなら、さして気にもとめないだろう、普通の兄弟だった。

ふとこちらに気がついた弟は、手にした回復薬を無言で投げてくる。

どうやら、飲めということらしい。

饒舌な兄に比べて、弟は戦闘の時とはうって変わって口数が少ない。

だが、それが会話のきっかけとなり、挨拶を終える。

チャイラの『冒険者』かという質問には一笑されてしまった。

毛色が変わっているとは思ったが、やはり冒険者ではなかった。

剣を握ったことがなかったという彼・サミィの言葉には、驚かされたが、王子の【イシュ加護の純銀羽の一枚】を見て、はっとした。

（イシュタル神よ……貴方の加護に感謝いたします）

王子と再会を果たし、ようやく私たちは安堵の息を吐いた。

だが、王子は何か考えがあるのか、熊のことで彼の両親が騒いだいる間、彼らが『流離人（ルエイト）』かもしれない、ということを内緒にしてほしいといわれた。

それを口にするな、と。

わけの分からない申し出であったが、乞われてしまえば、私たちは頷くしかない。

ついでにいうと『流離人（ルエイト）』と信用していたわけではなかったが、『くるま』という馬のいらない馬車は、魔法であれ、技術であれ、素人の自分でも、凄まじい革新であるということがわかった。

関係ないが、無口な弟は料理人なのか、驚くほど料理が美味かった。

考えてみれば、自分たちは朝方から食事をしていなかったことを引き抜いても、美味かった。

実家は貴族ではあるが、貴族だと威張るのも恥ずかしいほどの、市民と大差のない下級貴族である。

家長である自分は騎士で安定しているし、問題ないだろう。

だから、あの『つなほっとさんど』を食べ終わった後、年の離れた妹の婿に来てくれないか、と本気で思った。

これなら寮ではなく、実家に帰り、妹や家族と共に食事をしたくなるだろう。

弟には無言で睨み付けられたが。

・　・　・　・　・

私の『流離人（ルエイト）』の家族に対する印象は悪くない。

まったく無関係であるというのに、王子の命を救い、自分を含め、ハーンとチャイラの命を救い、熊とはなっているが、カルム王子を見つけ出したのだ。

彼らの出現にわずかな疑念も残る。

長兄が言い出した、ゴブリンの話は不確定であり、正直、鵜呑みにすることはできないという判断は分かる。

あの長兄の凄まじい成長は、恐ろしくもある。

だとしても、彼らは恩人なのだから、貴賓室を宛がわれてもいい程の働きである。

報告を終えた後、叱責と降格を受け、暫しの謹慎となり自室に戻った後だ。

一部が慌しくなり、知人に声をかけたところ、宰相と対面後『流離人（エイト）』の家族が、地下牢に収容されたというのだ。

「なぜ！なぜですか！彼らを投獄するなど！！」

直訴に第二騎士団長は、重く口を閉ざすだけだった。

私は拳をきつく握り、不敬だと冷静に考えながらも、頭も下げずに、室内を飛び出していた。

閑話　【降格の中年騎士】（後書き）

ハーンがお笑いと不幸担当だとすると、ジークホークは苦労性だと思う。

チャイラ？え？えーと、うーん。お色気？

閑話　【笑う悪魔】

『流離人（ルエイト）』と思しき人物たちの背を見送り、アドルフは暫くしてから階層の違う部屋へと向かった。

部屋には直立不動のヴェルクスタと、ソファーに凭れた白髪交じりの王の姿がある。

王の表情は、にやにや、と不愉快さを与える人の悪そうな笑みを浮かべており、実に楽しそうだった。

今年で六十歳になるというのに、皺のある顔立ちには、子供のように無邪気さが伺える。

「――――これで本当によかったのか？」

アドルフは豪奢であるが動きづらい法衣の襟元を崩す。

宰相であり、聖職者でもあるが、そうとは思えぬ戦闘を知る無骨な指で、自慢の赤毛を撫で上げ、まだ笑う王を嗜めた。

赤子の頭ほどの巨大な魔法水晶球が書斎の状況を転写していたのだろう。

特定通信魔術を付与された小指の指輪を抜く。

本来は人差し指にはめるものだが、アドルフには小さすぎた。

隣室の男からの指輪を通して、『流離人（ルエイト）』に対する指示を受けていたが、まさか最終的に牢屋に入れてしまうなど、思いもしなかった。

しかし、この男に、現在まで間違いを犯したことはない。

一度だけだった。

それも、間違いを自ら犯したのは。

「ゴブリンの話はともかく、あいつら『流離人（ルエイト）』じゃあ、なかったのか？」

「問題はゴブリンやないし――――それに、あいつらは本物やで」

げらげらと、品のない笑い声を上げて、至極愉快そうに笑う王に対して、ヴェルクスタはため息を零した。

「陛下」

王は悪びれたようすもなく、肩をすくめた。

「野蛮な育ちだやさかい。しゃーないやんなぁ」

ここに現れたときから、商業都市オボエスの商人のような言葉遣いは直っておらず、時々彼が何を言っているかすら分からないこと

があった。

ヴェルクスタとアドルフは矯正させようと試みたが、無駄であった。

それでも、公務では一切ぼろが出ていないので、今ではアドルフは諦めてしまった。

というか、あまりにも長いこと聞いていたので、逆にアドルフは、表情、ニアンス、雰囲気、で大体何を言っているか分かってきたの、口を閉ざすことにした。

それ以外の、王として――そうたとえ、人格が崩壊しているような気もするが――の能力は文句のつけようがない。

最低限の分別もある――――と信じてる。いや、信じたい。

が、今回の判断は間違っているのではないか。

アドルフは脳裏に不安を過ぎらせる。

『流離人（ルエイト）』が齎すのは、多くが恩恵である。

なぜきたか、どう戻るかなどしりはしないが、二十年ほど前にも一人やってきた男がいた。

その男もまた、イシュルスに大いなる革命を起こしたのである。

まったく発想のなかった思考や、新たな進んだ技術は、イシュルスの拙い技術がもどかしいほどだ。

なにより、この都は『流離人(ルエイト)』が光臨する町として有名であり、そのおかげで地方の田舎の小国のひとつでしかなかったイシュルスは、諸国と対等な立場になるまでになったといわれている。

三百年ほど前には、魔王と呼ばれる存在とて倒したのだ。

投獄で少なくとも五人の『流離人(ルエイト)』は、対応した自分ないし、この処遇に対して不信感を募らせるだろう。

敵意を抱いてもおかしくはない状況である。

その状況で、彼らから恩恵を与えるかといったら無論、否。

望まないことではあるが、脅してという可能性も考慮せねばなるまいし、はぐらかされても、真実を口にしても、我らには判別の材料がない。

ただ一人の男を、のぞいては。

「あのまま投獄しといたらええ。どうせそろそろ、聞きつけたゼルスターが――――…」

絶妙なタイミングで、激しく書斎の扉が開かれて、少年が僅かに足を引きずりながら飛び込んできた。

王家の次男のゼルスターだ。

父親にはまったく似ず、常日頃は気性が穏やかで一歩人に譲るような性格の子供が、息を切らせて魔人(ディーゼ)のような形相で、ソファーの

父親を見つけると、その横っ面に拳を叩き込んだ。

鈍い音が響く。

近くにいたヴェルクスタは止めれただろうが、王子を止めることはなかった。

足に怪我を負ったといっていたが、治療の途中で出てきたのだろう。

背後にはアドルフの子飼いである神官が青ざめた顔で、息を切らせている。

他言しないように下れと合図を送ると、一礼して背を向け、ヴェルクスタは書斎の扉を閉めた。

「父上！！見損ないました！！」

口唇を切った王は、顎を伝う血を手の甲で拭いながら、ゆっくりと息子に向き直った。

ゼルスターの二度目に放たれた拳をあっさりと手のひらで受けた。

「彼らは、五人の『流離人（ルエイト）』である」

先ほどまで、子供のように無邪気な表情をしていたが、それが一切削ぎ落とされ、王としての顔を覗かせるかのように、鋭い眼差しを向けた。

この視線に、いつものゼルスターなら、身を怯ませていたはずだ。

「分かっております！！僕も王族の一員！彼らが五人の『流離人（ルエイト）』であることは、すぐに分かりました！父上もそうでしょう！！だが、彼らはまったく関係ない僕たちを助けてくれた！報告を受けたでしょう！！オリヴィアだって、治るかもしれない！！」

アドルフは、憤慨する少年を羽交い絞めにして、引き剥がす。

「ゼル坊、おちつけよ」

「落ち着いてなどいられるかっ！僕は、友を見捨てない――！！」

それでも抵抗するゼルスターに、長年使えているアドルフですら、背筋を凍らせるような残虐さと威圧感を放ち、冷酷な目で、王は口元を悪魔のように歪めた。

閑話　【笑う悪魔】（後書き）

王様の性格革命編です。凶悪になりました。
本来なら後半に出そうと思ってた人ですが、あっさりと。
あと、皆様と岸田一家を代表して、やっぱりゼル坊に、決断した王様を殴ってもらいました。

Ａｃｔ　０１．　異世界生活二日目（前書き）

あー、ごほん、ごほん、お待たせいたしました！
第二章突入でございます――しかしまだ書き終わっていないんですが、大丈夫ですかね、自分。
見切り発車で勢いのまま、猪突猛進ですな。

Ａｃｔ　０１．　異世界生活二日目

闇、闇、闇――――自分すら不確かな暗澹とした暗黒。

そこで、浮かび上がる真っ白な蝶…いや、蛾だろうか？よく分からないが、ともかく淡い燐光を放って、闇の中を羽ばたいている。

煩いぐらいの数多の羽音がぶつかり合い、時に重なる。

起きているのか寝ているのか分からない狭間の意識に、僅かに、耳朶に届く音が、それが私の存在を辛うじて保っている。

そして、煩い羽音に混じって、音色が聞こえた。

音は緩やかで、弦を奏でたような音で聞き覚えたがあった。

ヴァイオリンだ。

子供の頃、近所の川原で、ヴァイオリンを練習している女の人がいて、子供心にとても印象に残った。

ＣＤや、テレビで聞いているよりも、ずっと美しく、体に直接、響くようで、虜になった。

元々音楽が好きだったこともある。

年の割には歌が上手いなんて、叔父が褒めてくれた。

歌は祈りであり、誓いなのだと――雅美ちゃんにはない才能だな、と笑っていた。

兄はチートだけど、音痴だから。

毎日のように川原に通っては、私は両親に誕生日にヴァイオリンを強請った。

子供には高価すぎて、買い与えられなかったが、それでも地道に小遣いを貯める私を見て、両親が折れて、小遣いの足りない部分を補って、中古のものを買い与えてくれた。

子供用の中古でもいい値段だったが、私は嬉しくて、女の人に、色々と習った。

単純に持ち方や、一音を鳴らすという基礎だけだったが、綺麗に音がなる度に、体の中から震え上がるような幸福が満ちた。

私は一通り音を繋げるようになり、音をはずさない様に緩やかに旋律を奏でた。

旋律というのもおこがましい、即興の単音。

子守唄のような静けさで。

内側から溢れる。

誰かが息を呑むような音が聞こえて、私は振り返る。

母が大きく両目を見開いて泣いていた。

――……突如として、暗闇に炎が灯って、意識が戻ってくる。

闇に浮かぶ蝶は、炎の中に飛び込んでいこうとする。
何十も、何百も、その身を燃やし、堕ちていくにも関わらず、迷いもなく、ただ吸い寄せられるように。

徐々に小さくなる炎。

どれよりも大きな灰色の蝶が、炎に向かっていく姿に、激しい焦燥を覚えた。

とめなければ、とめなければ――……

それを止めようと伸ばした手には、ヴァイオリンが握られていた。

・　・　・　・　・

「ミコ、ほらっ、起きなさいよ」

布団を引き剥がされ、私は身震いして、体を丸める。

なんか、変な夢見てたような気がするが、それよりも姉だ。

目覚まし時計はならなかったので、学校は休みのはずなのに、なんで姉の声がするんだろう。

茫洋と考えながら、もっと惰眠を貪るために反射的に、声とは逆の方向へ体を転がす。

ここで、お決まりの台詞だ。

「あと…ご、ふん」

「っていって、5分で起きたことないじゃない」

そらそーだけども。

いや、でも、まじ今日は眠いんですよ。

「じゃぁ、あと、ろく、じかん」

「殴るわよ」

元々、私が夜更かし大好きな上に、低血圧ってしってんじゃん？

なんか、だるいし、まだ体が６時間ぐらいしか寝てないよ、あと６時間は寝ないと駄目じゃん、と訴えかけてくるんでございますよ。

１日１２時間寝ないと、体が納得しないし。

「朝食、食べ損ねるわよ」

と姉がベットサイドから動く気配がする。

大丈夫ー。

母さんは、なにがあっても、私のー……あぁ、うん、時々私の朝食、食べちゃうけど。

仕方なしにパンにジャムとか塗って、ミルクと砂糖たっぷりの珈琲を飲んでると『朝からちゃんと食べないとお昼までもたないわよー』って、私のご飯食べながら言うんだよね。

って、あんたいうな、母！とか、耐え切れずに、つっこんじゃうんだよね、私は。

パターンだよ。パターン。

そうそう、猫と鼠が追いかけるアニメみたいに、典型的な――……

「…う、うぅ……ま…ぶしっ…」

唐突に瞼を閉じていても分かるほどの射す光に、思わず呻く。

今日もいい天気らしい。

うっすら目を開けると、姉が後光を受けながら、豪奢な赤いカーテンを一纏めにしている……あれ??

私の部屋、カーテンは緑のチェックですけども。

母さんが勝手に取り替えちゃった?

しかも、窓でけー。

ぼーっと、姉を見てると、視線に気がついたようで、振り返る。

てか、姉、服装が袖つきのロングワンピースみたいなのって珍しいね。

「寝ぼけてないの?叔父さんの家に行く途中で、変な緑の動物轢いて、コスプレ外人拾って、変な所にきたの、覚えてないの?」

えーと、えーと……たしか、そう…変な緑って、ゴブリンか。あれを轢いて、王子と騎士たちと、熊と車に乗って――――ぷぷぷ、重量オーバーだよね。

なんか城にいって、偉い人にあって――――――!!

「うぉおうう！！どこ此処！！牢屋に突っ込まれたんじゃなかったっけ？由唯姉、雅兄の隣ジャン！勝手に入ってきたら、看守になんか言われたりしないのってか、監獄って朝食付？！ベーコンエッグサラダついてる？？バイキング形式な――――ぐぁあ！」

あたりをキョロキョロしながら、背後に下がったせいで、ベットから落ちた。

う、うぅう、尻が痛い。背中も痛い。ちょっとＨＰ減った。

「……見事にパニックね」

尻を摩りながら、よろよろと起き上がると、周囲は結構な広さがある綺麗な部屋だった。

私は六畳間の一人部屋だが、そこよりも倍以上ある。

家の居間よりも広いだろう。

模様の刻まれた赤い絨毯に、アンティーク調の調度品は必要最低限といったところだが、一生縁が無さそうな高価そうなものばかりであった。

「なんで…牢屋じゃないの？」

てっきりベットで寝てたから、牢屋で寝てたのは夢だと思ったけ

ど、この様子だと昨日のすべてが現実だったのだろう。

っていうか、私の夢オチとかじゃなかったんだ、やっぱり。

はぁーと、思わず長いため息が出てくる。

「とりあえず、着替えて、凄い格好だし」

「あ、うん」

姉は車から私のカバンを持ってきてくれたらしく、素直に着替えることにする。

ってか、それって昨日言ってくれてもよくなかった？

ひどい格好だぞーとか。

まぁ、いいけど。

この部屋、浴室もついているらしく、中に入ったが、さすがに猫足のバスタブには水もお湯も入っておらず、お風呂は断念する。

仕方なしに、ドア越しに話を聞く。

体を軽くシャワーシートで拭いて、下着から全部取り替えることにした。

服も予想以上にパーカーがダメージを受けているので、新しいパーカーにしておこう。

「あんた寝てから、2時間もたってなかったと思うけどゼル君きたの」
「ぜ――あぁ、弟王子が？」

話を要約すると、その時点でゴブリンはまだ確認できていなかったのだが、牢屋に突っ込むという宰相のあまりの所業に、異議を唱えた弟王子が直談判して、まともな部屋を用意してくれたらしい。

勿論、外に宮廷騎士なるものが、入り口で立っているらしいが。

命の恩人の上に、国のためにゴブリンの襲来を警告した人間にする行いではないと、王子なのに謝ってくれた…らしい。

私はずっと寝てたけど。

あと、騎士（毒抜き）もやってきて、一緒に謝ってたそうだ。

「王子が謝るのお門違いじゃん――――決断した責任者、自分で来て謝れ」
「ったく、本当よ。一発殴ってやりたい、あの赤毛！で、今日は、正式な謝罪をかねて朝食に招かれてるってところ」

あー、むかつく。

腹の底から苛立ちが湧き上がってくるが、姉の怒り心頭状態に、溜飲が下がる。

そうか、でも姉の服装が中世ヨーロッパ的なロングワンピースみ

たいなのになったのは、服を貸してもらったのではないかと思う――ついでに言えば、よく似合ってる。

たしか、中世時代は、胸よりも足を出すのが駄目だって聞いたことがある。

だからか分からないが、姉は引きずりそうな裾だ。

踏んで転んでも助けられないからね、私。

「一応、個人個人の部屋用意されて、あんたは寝てたから、父さんが背負って運んできてくれたのよ。ちゃんとお礼言っておきなさいね」

「…うん？父？？」

兄じゃなくて、父？珍しいこともあるもんだ。

母以外に手間をかけて？

いや、ちっちゃいころは、結構父の方が過保護だったよう気もするけど。

「もしかして、兄が頼んだ？」

「え？あぁ、疲れたからとか、言ってたかもしれないけど」

「ふーん」

意味あるんだろうな、兄のことだから。

イベント乱立してないだろうな。

自分の手で負えないことは受けないでほしいんだけど、私の安息のために――――どうしてもやりたいってなら、家族に簡潔に百文字以内で説明して承認を得てくれってんだ。

まぁ、いいけど――いや、よくないか。

着替え終わって、寝室に戻るとベットに腰掛けていた姉はイライラしたように足を組み替えていた。

いつもよりも、声もトゲトゲしてたけどさ。

「由唯姉、大丈夫？」

「っ、大丈夫じゃないわよ」

ふぅーと、長い息を吐き出すと、首を横に振る。

「まさか、本当に異世界だなんてね。てっきり、ドッキリか、夢かと思ってたけど……ったく、いつまでもそうしてると！ひっぱたくわよ！」

姉は突然背後を向くと、空中に怒鳴りつけている。

ばちん、と何かが弾ける。

なんか、気泡が割れたような薄い音だった。

びく、と肩を竦ませる聞いてみるも答えずに、姉は髪を掻きあげて、だるそうに立ち上がった。

「ごめん、あんたじゃないから……まったく、どうなってるのよ、この世界は」

なに？なんかあったの？？
怖いんですけど！凄く怖いんですけど！

…も、もしかして、なんか見えてる？？

大丈夫？
本当に大丈夫？？

うろうろ、と気になって姉の周りをちょろちょろしてしみるのだが、でこピンされた。

「いいから。後で兄さんにどうにかしてもらう。先に朝食」
「……あい」

まぁ、兄に後で相談するならいいか。
解決方法が早く分かりそうだしね…でも、本当に大丈夫だろうか。
うーん。

ドアを一歩出ると、話の通り、またフルフェイスの門番がいたが、なんかよくわからないが、慌てているようで、右往左往している。

がちゃがちゃ煩いんですけど。

その元凶はすぐに分かった。

「せいっ！！」

聞き覚え掛け声と共に、視界を足が横切った。

何が起こったか一瞬わからないが———あぁ、どうやら兄が誰かを一本背負いしたらしい。

どしんっ、と受身も取れずに鎧をきた男が廊下に転がり、それでも反抗しようとしているのか、床に寝転んだ男を兄が羽交い絞めにしている。

こちらに気がついたようで、その体制のまま、笑っている。

「っと…由唯、ミコ、おはよう」

「……おはよう」

いつもなら『一本』と白い旗を揚げたくなる光景だが、私は寝起きで頭がそこまで回っていなかった。

「……なにしてんの、兄さん」

呆れた様子の姉の言葉が背後から投げかけられて、私は頷く。

本当、兄、朝っぱらからなにしてんの。

ってか、その羽交い絞めにしてる人って、昨日の騎士（目つき悪）じゃないかいな。

「ははは、個人的に友好を深めてるところ、だ」

これがＣＭならば、爽やかな笑顔で、きらっと並びのいい白い歯が光ったところだろうが、妹の私にとっては実に胡散臭い。

しかも「だ」のところで、いっそう強く首を絞めたようで、騎士（目つき悪）がぐったりと床に転がった。

どうやら、失神させたようだ。

どう見ても、友好を深めているってよりは喧嘩してるって感じなんだが。

何がおきたのか知らないが、兄は別に自分から意味もなく喧嘩を仕掛けるようなことはしない。

それも兄が一方的に勝者――よく考えると、本業騎士を羽交い絞めにして失神させる兄って、やっぱり只者ではないな。

ごろり、と騎士（目つき悪）を廊下に転がして立ち上がると、兄は平然と埃を掃っていた。

きら、と白い歯と眼鏡が光り、爽やかで笑顔を浮かべていた。
うーん、胡散臭い。

Ａｃｔ　０１．　異世界生活二日目（後書き）

あとは全体がはっきりしてから、ゆっくりと更新していきます。
一日一話という目標が脆くも崩れ去って、肩を落とす作者でございます。

Ａｃｔ　０２．　プレイボールとデットボール

騎士（目つき悪）は、他の騎士に担がれて消えた。

一体、なにがなんやら。

どうせまた、兄に因縁でもつけてきたのだろう。

ふははは、馬鹿だなぁ。

寝込みを襲わないと兄に勝てるわけない――いや、寝込みも無理か、時々部屋のドアが開けるだけで、起きるし。

それは、さておき。

残った数名の騎士が私たち兄弟を囲んで、案内してくれるらしい。

がっちゃ、がっちゃと煩いんだけど、うん、朝食を食べるまでは我慢するよ、私。

案内された部屋は、食堂かな、と思ったのだが、広い部屋に長い机がひとつあり、いうなればお偉いさん専用の食堂といったところだった。

王家専用なのだろう。

そこには両親と、赤毛の宰相――私と姉の視線は睨みに近かっただろう――と、弟王子の姿があった。

全員が食卓についているが、あと二十席ぐらい空いている。

端と端に座ったら、会話難しいね。

王様と王妃が座るであろう上座の二席だけが空席で、王子の隣も空いているが、熊王子が人間だったころに使っていたのだろう。

つまり、スカスカなんですが、適当にかけてくれということで、私は姉の隣に座った。

昨日の投獄から一転して、客人扱いということは、もしかすると、ゴブリンの偵察に向かっていた者が帰ってきたのかもしれない。

「昨晩は失礼した。王の命令とはいえ、投獄など」

「すみません、ほんとうに」

と、私と姉が席に近づくと、立ち上がり、宰相と弟王子が頭を下げた。

うぉいい！なおさら悪いわ！王の命令かい！

きっと魔法的な何かで、通信とかしてたんだろうな…あぁ、やだやだ。

考えると、腹がたって、腹がすくからやめよう。

「陛下からも直々に謝罪を、と朝食の席を賜りました。すぐにいらっしゃるとは思いますが――――サミィ殿。こちらを陛下から渡すように言い付かっております」

同じ列に座っていた兄に、宰相は何かを差し出した。
長い棒切れのような……しかし、とても見覚えのある金属――って、ただの金属バットかい！
車から勝手に持ち出したのか、兄が遠い目をしてみせる。
魂が口から出てるんじゃない？ってぐらい、遠い目だよ。
「予測は…してたが……」
あれ……でも、なんかすごいボロボロだな。
違うバットだ。
いや、兄の持っていた金属バットもゴブリンとの対戦で凹んでいたけど、それは痛んではなかった。
渡されたバットは年季が入ってるというか、相当古いもののように思える。
はて？？
もしかして、あれが兄の標準装備だと思われたのか？
装備を作ってあげたって感じでもない。
一日や二日でできる代物じゃないだろう、多分。

でも、なんだろう。
すごく、寒気が。嫌な予感がする。

なんだろう。この嫌な感じは、あぁ、そうか―――どこかで見覚え（・・・）があるから、本能的に危機感が増幅されるのだろう。

ぞわっと背筋に冷たいものが走り、毛穴が開く。

「兄さん??」

少し青ざめ、げんなりとした様子で項垂れている兄に、姉が小首をかしげる。

兄の態度はおかしなものだが、なんでかはわからない。

「レジィー陛下、こちらです」

第一騎士団長に連れられてやってきた王は、隣の騎士と比べると小柄で華奢なものだった。

年齢は６０歳ぐらいだろうか？

白髪が殆どの癖のついた黒髪は綺麗に撫で上げられており、覗く目はやや窪んでおり、タールのように重い黒目で、目元には年齢を感じさせる皺があった。

面立ちは整っているのだろうが、顎髭がすべてを晒してはいない。
が、頬が痩せこけているのはわかる。
立っているだけで威厳のようなものを放ち、見るものの意識を平伏させるような存在感。
よくＲＰＧとかで出てくる恰幅のいい感じではなかった。
王冠もかぶってないし、服装は高級そうではあるが、けして派手ではない。
だが覇王然としていて、瞳を惹きつけられる。
この人が元凶なんだな――――思考をめぐらすより先に、大きな音を立てて、兄が席を立つ。
王族が出てきたら立って迎えるのが礼儀なのかと、兄を見遣る。
が、驚いたことに、久しくみない焦燥した表情で兄は更に青ざめて、じりじり、とその場所から、後退しだしていた。
その手には、金属バットを握り締めて。
「悪夢だ…」
と、ぽつり、とうわ言のように呟いた兄の声は掠れている。
なにが悪夢だって??

その視線の先には、このイシュルスの王様がいる。
言葉を発さず、表情の読み取れぬ王様は長いローブの下に手を入れると、す、となにかを取り出した。

野球のボールだった。

一つではない――――大きく開かれた指の間に四つほど野球のボールが挟まっている。
白球は、兄が持っているバット同様に年季を感じさせるように黄ばんでいた。

こんなことをするのは、一人しかいない。
いや、一人しか知らない。

兄が拒絶するのも、もっともである。

「頼むから――――誰か、嘘だといってくれっ！！」
「さ、サミィ殿？？」

宰相の声に兄は余裕がないようで反応しなかった。

珍しく現実逃避をし、認めたくないというように首を横に振る兄に、無表情だった王は聞き覚えのある声で、悪魔のような凶悪な微笑を浮かべ返した。

父とよく似た面立ちなのに、まったく浮かべる表情は違っていた。

「まぁ・さぁ・みぃ・ちゅわぁぁぁんっ、ご無沙汰やでー」

下手な関西弁で、嫌がらせのように兄を「ちゃん」付けで呼ぶ人物は、一人しかいない。

ここが異世界というのなら、絶対にいなかったはずの男。
この世で、唯一兄が嫌がる敵対者。

兄の鬼門。

「げっ！」
「れ、怜二おじさんっ！」
「怜二？！」
「あらやだ」

なんで、こんなところにいるんですかい、あんたは！

父の弟である岸田怜二（きしだれいじ）が、極悪な笑みを浮かべたまま、野球ボールを振りかぶり、プレイボールと言わんばかりに、剛速球を兄に放っていた。

……球が、見えなかった。

ただ、叔父の手が動き、白い線が空間に描かれた…様な気がするだけで、見えなかったそれを、辛うじて兄が避けた。

反応が遅かったら激突してただろう。
当たった、というものではなく、激突が相応しい。

それは、兄の背後にあった巨大な窓と窓の間あたりの石壁に重々

しい音を上げてのめりこむと、表面を粉砕し、細かな欠片を床に散らばすほどの威力であった。

人間の骨であったと思うと、ぞっとする。

「今のは挨拶がわりや～」

「いやいやいや！当たり所悪ければ死ぬだろう！」

そうだな、兄。

だが叔父にそんな世間一般の正しい認識と常識を求めるのは間違っているよ。

今までやつが、そんなことに収まったか？

答えは、否――素手で川の中の魚を掴むようなやつだぞ！？リアルに箸で蝿つかむんだぞ？！そして、がっくりと肩を落として、箸を洗いにいくんだぞ？？

兄と同様に叔父も、チート的な存在だ。

だが、兄より長く生きている分、一枚も二枚も上手なのである。

しかし、どう見ても姿は父よりも年上のような感じになってしまっている気がする。

父の弟なのに、父より老けてるってどうよ？

たぶん、中肉中背だった容姿が、細身というか、ガリガリになっているせいか、別の人みたいに見えるし――――というか、一瞬ぱっ

と見、気がつかなかったし。

「おじ、さん??陛下！これは一体どういうことなのですか！」
「ち、父上！??」

と赤毛の宰相と弟王子が声を荒げたが、叔父さんは、ガン無視で、兄と睨みあっている。

「雅美ちゅわーん。叔父さんが、遊んであげるでー」

ひぃいいぃ！！

遊んであげるでーじゃない。
叔父の目はマジだ――肉食獣の目だよ。

たぶん、今の言葉を叔父さん翻訳すると――

『雅美ちゃーん。叔父さんが今日こそは確実に仕留めてあげるでー』

――となるのだろう。

思わず身震いしてしまった。

隣の姉も青ざめていたが、きっと私も青ざめていただろう。兄いたっては蒼白である。

怖い！怖すぎる！

ホラーは怖いけど、叔父さんはもっと怖い！

一昔前に流行った呪われたなんとかの、映像を見ても、これほど戦慄しないだろう。

この二人の対峙はそれ以上の恐怖であるが、幸い私にはまったく無関係という喜ぶべき事態であった。

「アデュー雅兄」

「兄さん、長生きしてね」

「怜二、ほどほどにな」

「先に朝食にしてるからねー」

家族の出した答えは叔父スルーである。

触らぬ叔父に祟りなしって、言葉知ってる？

詳しいことは知らないが、兄が幼いころは普通に接していたようだが、なんでもその時からチート能力全開だった兄が、うっかりと叔父の股間を蹴り上げたらしい。

それが、叔父の自尊心を傷つけたらしく、それ以来、二人は血で血を洗うような――――うん、忘れよ。

思い出すと、朝食がまずくなるから。

「う、裏切り者――――っ」

兄が断末路のような悲鳴を上げると、第二球が放たれた。

折れたら骨がただですまなさそうなデットボール狙いの悪球も金属バットで打ち返す――――金属バット、二十度ぐらい折れ曲がってるけど――と、兄は一瞬にして身を翻して、走り出した。

跳ね返ったボールは、一瞬にして高そうな壷を粉砕した。

唐突に兄が走りだす。

ドアを開ける時間すら惜しかったのか、勢いをつけて、兄は身を丸めると、窓ガラスを突き破った。

うぇえええっ!!?ここ2階じゃなかったっけ?

「へっ!甘いわ!王宮は、わての庭やでー!!」

ばさぁあ、と長いローブを脱ぎ捨てると、叔父もまた勢いをつけて、隣の窓ガラスを突き破って、兄の後を追っていってしまった。

いやだから、ここ2階だよね――――!!?

慌てて、窓の外を全員で覗いたが、庭には既に誰もおらず、ガラスの破片だけが散らばっていた。

驚いたことに王宮の庭らしき場所には、鉄骨むき出しの塔――電波塔が立っていた。

そう父が叔父の野球が見たいという我侭のために作ったあれである。

古びて蔓が絡まり、苔のようなものが生えて錆びているが見間違えるはずがない。

昨日の夜車の中から見たのは、これだったのか。

天辺には、最後に会ったとき叔父が盗まれたと大騒ぎしていた風見鶏が、ぎ、ぎぃ、と鈍くはあるが風任せに回転している。

なにより、その隣。

「あれ、叔父さんの家、だよね？」

「た、ぶん」

と、辛うじて、私は答えた。

ログハウスみたいな叔父の家に、下から土の柱のようなもので幾つも貫かれていた。

家の筈なのに、まるで巨大なハリネズミのようになっている。

昨日私がゴブリンに投げつけていた魔石で発動したあれに酷似し

ているが、大きさが半端ではない。

大き目の魔石で胸元まで土の柱が出たが、あれの比ではない。十倍以上あるだろう。

魔法だと思われるが、これを放てる魔法使いがここにいるということのなのだろう。

横では私たち兄弟が埋めたジャガイモの花やら、茄子の花や、向日葵やらの花が、風に揺れていた。

私たち一家は車ごと異世界に突っ込んできたが、叔父さんは家の土地ごと異世界に来たらしいことが、よく分かった。

遠くで兄の悲鳴と、叔父の雄たけびが聞こえる。

ちなみに、叔父さんのステータスは、こうだった。

【岸田　怜二（５９）】　職業：騎士（Ｌｖ６８）　サブ職業：イシュルス王（Ｌｖ５１）

ＨＰ：２８１０／７８１９　（＋１８２）
ＭＰ：７１／６１２　（＋４５）

【筋力】　４７４　（＋１５）
【俊敏】　３８７
【知性】　３１１　（＋４０）
【直感】　５０５
【器用】　１３９
【精神】　６０１　（＋２０）
【魅力】　４１８　（＋４０）
【幸運】　１１６

【技能】
［威圧］（ディープハイ）　［策略］（アティッフス）　［剣技］（ソードガレ）
［守護盾］（ドウシールド）　［狼の牙］（ウルフ・ファング）　［底力］（クライアッパー）
［慧眼］（ハイアイ）　［健康優良児］（ハッピーライフ）　［王家の剣］（クラウン・ソード）
［天恵］（ギフト）　［再生］（レイエネレ）　［兄弟の絆］（アガット）

【補正】　イシュタル神の寵愛　マルス神の寵愛　イシュルス男児の心意気　王補正　？
雷耐性　炎耐性　氷耐性　闇耐性　毒耐性　魔眼耐性　土耐性　下克上　英雄補正

【ＥＸＰ：７６４２９】　【次のレベルアップまで：９４８】

【ボーナスポイント】　１７２　Ｐ

……兄、死んだな。

Ａｃｔ　０２．　プレイボールとデットボール（後書き）

この話でいいか凄い悩んだけど…うん、ご都合主義万歳！岸田叔父参上！

岸田兄は薄々気がついていた模様ですが、信じたくなかったようだ。

Ａｃｔ　０３．　え、従兄弟ですか？！（前書き）

ええ、従兄弟です。

Ａｃｔ　０３．　え、従兄弟ですか？！

静寂に包まれた王室の食堂に、淡々と声を発したのは団長だった。

「――――レジィー陛下とお知り合い、ですか？」

レジィー……『怜二』が聞き取れなかったんだ。
お知り合いも何も、血縁者である。

呆然としていた、私たち岸田一家一（一２）は我に返り、窓の外から視線を戻して、頷いた。

「俺の、弟ですね…あの振る舞いは、間違いなく」
「残念ながら、私たちの叔父ね」

苦笑を浮かべる父の言葉に、姉が眉間に皺を寄せた。

「ったく、なんでこんなところにいるのかしら」

それをいわれると、私たちにも当てはまるんですけど。
なんで、こんなところにいるのかって――それを是非知りたいですね、はい。

「いや、それは百歩譲っていいけど。失礼ですけど、叔父さんはイシュルスの……」

といいかけて、嫌そうに顔を歪める姉。

いいたくないし、認めたくないと、言ったところだろうか。
まったく持って、私も同じ気持ちですけど。

実の兄弟である父にいたっては、自分の『弟が』と遠い目で、ぶつぶつと何度も呟いている。

「はっ！ということは、僕は皆さんの従兄弟ということで、しょうか？」

ボクハミナサンノイトコ？？

……。

……。

…え？

えぇえええっ！！！！？？？？

従兄弟だとぅうう！！

そんな、そんなはずはない――――って、いや、叔父さんがイシュルスの王だっていうのが本当なら、弟王子と熊王子の父親ってことで、義理じゃなくて本物の？

ってことは、やっぱ、従兄弟ジャン！！？

あの似非関西弁で、無駄に偉そうで、兄には卑劣な叔父が……あの野生児で、ブーメランで猪を倒しちゃうような男が、嫁を迎えただとぅ！

いや、まさか…叔父さんが結婚するなんて、ずぅえん、ずぅえん、思ってなかった。

一生独身でいるのかと思ったけど…ってことは、だ。

叔父さんのお嫁さんが、お姫様！？

あ、ありえねー……美女と野獣の想像しか思い浮かばないよ。

父が、父が王様の兄！？うわっ、ありえない。

王子がスルーできない爆弾発言に、なんともいえない長い沈黙が降りて、今度はそれを母の愛らしい声がさえぎった。

「長くなりそうねぇ。とりあえず、朝食にしましょう」

と、仕切ってしまっていたが、思考回路が停止している私たちは頷いて、各々席に着くこととなった。

特に宰相は混乱しているというか、青ざめている。

弟王子は複雑そうな顔で、ちらちら、と私たちに視線を送っている。

家族が増えて嬉しそうな母といつもどおりの父。

私は姉と顔を見合わせてから、弟王子に叔父の面影を探した。

窓が粉砕したせいで、室内に爽やかな風が通り抜けた。

・　・　・　・　・

生メイドと生執事が――日本では秋葉にしか生息していないレア職業――運ばれた朝食は、なんと銀食器のだった。

驚いたことに、フォークもスプーンも、である。
ガラスとかじゃないらしく、コップもとなると、かなり緊張が走る。

料理は見た目は豪華な盛り付けなのだが、こざっぱりとした味に、う、と喉を詰まらせた。

不味くはない、不味くはないけど……シンプルであった。

肉料理はまだいい。
ただ焼いてあるだけだが、噛み締めると肉汁が出てきて、塩味で十分においしい――――うん、牛なのか、羊なのか、よくわからないけどね。

問題は他だ。

見覚えのある野菜やら、まったく見たことがない色の鮮やかな野菜は、どうやら胡椒とかの香辛料がまったく使われていない塩をかけて食べるようだ。

最初は物珍しくてよかったが、マヨネーズやドレッシングにお世話になっている私の舌は、すぐに『飽きたよー』と訴えてくる。

勿体無いから、出されたものを残すような真似はしなけど。

パンは味はいいけど、バケットやフランスパンっぽい。
固さがあり、噛み切りづらい。

と、思ったら、弟王子が困った様子で、パンは一般的に一口サイ

ズに千切って食べるのだと、教えてくれた。

すみませんね、育ち悪くて…山賊みたいにかぶり食べちゃったよ。

あと、スープ。

凄いよこれ――――塩と野菜と肉のスープ、胡椒なし、味は薄め。

よくいえば、野菜の味が生きているけど……幸い塩で下味が肉が入っているけど、味はそれが溶け出したものだけだろうと予測できる。

異世界料理に好奇心はあるが、朝からはちょっと。

そこで、なんとなく料理状況を察して、私はひたすらに桃っぽいのを食べていた。

いや、果肉が真っ白なのは驚いたけど、もう桃でいいか、桃で。味もちょっとすっぱいけど、味は桃だし。

朝から、父のようにモリモリ肉ばっかりを食べられるほど、胃が丈夫じゃないし。

姉も朝はあんまり食べないので、ちょこちょこつまんだら、げんなりした様子で私と同じように果物…サクランボ（種無し）を選んで食べている。

食事が微妙なせいか、なんか食卓も静かなままだ。

かちゃかちゃ、と岸田家の銀食器の音だけが響く。

どうやら、団長も宰相も王子も、慣れた様子で音ひとつ聞こえない。すごいな。

実は王族は健康のために代々、精進料理で過ごしている、と言われても信じるかもしれない。

皿の上に綺麗に盛られていて、口の中が予想以上の期待をしたせいだろう。

ちょっぴりがっかりする。

はっ！叔父さんが痩せこけていたのは、このせい？

まさかなぁ…口に合わないから食わないとかって…うん、叔父に限ったらありそうだな。

しかも、叔父さん、あんまり脂っこいもの好きじゃないし、猪だって、ほとんど私たちが来たときぐらいしか狩りにいかない。

と、現実逃避をしながらも、ギクシャクとした空気が漂う。

誰もが、何を口にしていいか分からないといったところだろうか。

かくゆう私も分からずに、時間だけが流れていく。

だからといって、まさか、ここで『味微妙』なんて文句を言うわけにもいかず、大人しく――――

「全体的に、薄味ねぇ」

――――していたかったのだが、料理に手厳しい母が、兄と叔父が出て行ってから続いている、食卓の沈黙を破って口を開いた。

単純な感想で悪意はないのだが、今は口にしたら駄目じゃない？

私も食事で現実逃避しちゃ駄目か。

「も、もうしわけありません」

「お、王子？」

「わが領土では、キィシガーさんにいただいた『ほっとさんど』のようなモノは作っておらず…」

と、弟王子が、やや表情を曇らせて、小さく頭を下げる。

だから何であんたが、頭下げてるの。

でも、まぁ赤い●つねを汁まで飲んでたし、騎士（毒抜き）にいたってはホットサンドで男泣きしてたから、予想はしてたんだよね。

「やーねぇ、ごめんなさい。薄味だけど、悪くはないと思うわぁ…お肉料理とパンは美味しいし、見た目の華やかさは、料理人の腕だと思うのぅ」

どうやら母は全部一通り手を出したようだ。

凄い量食ってる。

そう、彼らも料理人も悪くない。

美味しい料理もあるけど、私たち家族の舌が、現代日本の豊かな食生活に甘やかされているせいだと推測される。

今やファミリーレストランもファーストフードもレベルが高く、しっかり味あるしね。

ちょっと濃いってのが難点だけど。

それに、現代ほど、料理のレシピが多くないだろうし、きっと交易の関係から、あんまし流通していない調味料もあるんだろう。

たしかアメリカを発見したコロンブスだって、香辛料を求めて船を出したって話だ。

あれ、ちがったっけ？

「いーんやで、義姉(ねえ)はん。はっきり、口に合わんていうたって。わしかて、あかんし…ってか、いまもあかんし」

兄みたいに雑食じゃないからね———って、叔父さん、いつもより早くない！？

いつもなら、あと二時間は兄と追いかけっこして、帰ってこないでしょ？

「あら、怜二君」

「くん、はやめてぇや、っていっつもいってるやん」

げんなり、とした顔で首を横に振りながら、扉から入ってきた叔父さん。

さすがに兄嫁には弱いのか、抗議は弱い。

ずるずる、と何か地面を引きずってると思ったら、ぐったりとしたうつ伏せになっている兄のベルトを片手で掴んで、軽々と引っ張っていた。

兄の掴んでいる金属バットが、『Z』の文字のような形で、二箇所も折れ曲がっているし、右の靴を履いていないし、服がカッターで切り裂いたみたいにボロボロなんですけど！！

泥まみれだし、赤い染みって、血ですよね！

ってか、ＨＰが７１しかないし！赤になってるよ！赤に！

いつもなら、兄も抵抗するので互角といったところだが、今日は叔父の圧勝のようだ。

なむなむ。成仏してくれ、兄。

「れ、怜二…やりすぎだぞ？」

失神しているズタボロの兄を見て、さすがに父が頬を引きつらせる。

あんまり叔父と兄のやり取りに――いやそれ以外もそうだけど――口を挟んでこないが、見るに見かねたといったところだろうか。

「しゃーないやん。３時間分の鬼ごっこを３０分で終わらせたんやで？無茶もするわ――おまけにこいつときたらなぁ。かわいい叔父さんを本気で撲殺する気だったでー」

ごろん、とそこら辺に兄を放り出して、僅かに切れた頬を拭う。

いっとくが、可愛い叔父さんはお小遣いをくれて甘やかしてくれる叔父さんだと思う。

間違っても、甥っ子をフルぼっこにはしないんじゃない？

唯一兄が一矢を報いたのだろう。

ってか、金属バットで頬に怪我させる――――って、兄、３０分ぐらいで、レベル１上がってるよ！？

どんだけ！どんだけがんばっちゃったの！？

「陛下！」

「ち、父上！大丈夫ですか」

「平気やで…自分に一矢報いたんは、こいつぐらいやなぁ」

うへー、この異世界にきて、ボロボロになった私と兄を考えれば、随分王家では待遇よろしかったんですねーとやっかみ半分で考えたが、すぐに思考を止める。

叔父は人付き合いが得意ではない、と思う。
常に気まぐれな態度を考えれば、気軽に近所付き合いなどできないタイプの人間だ。
まして、お偉いさんに傅く姿なんて想像できない。
他人の機微とか悪意に聡い所があり、人の裏というものに敏感。
おまけに無駄に優秀であるせいで、彼を利用しようとする人間は多かった、と父は酒を飲んで語ったことがあった――まぁ、それを利用して、痛い目みせてたらしいけど。
軽い人間不信だったのだろう。
己でもそう感じていたらしく、山奥に引っ込んで安住を得た叔父が、権謀術数めいた王宮なんて場所で気楽に楽しく過ごしていたはずもない。
それにステータスに関しても、かなりのハイレベルだ。
必要に迫られたのか、腹いせに魔物でも倒していたのか分からないが、兄のゴブリンとの対決を何度も繰り返しているのは容易に窺い知れた。
「由唯っちも、相変わらず、上手に化粧で化けてるやん」
「失礼ね。元がいいのよ、あたしは。それに『っち』っていうのもやめてよ。子供じゃないんだから。もう二十歳過ぎてるのよ」
「さよか。せやけど、わてからしたら、まだまだ子供やで」

睨みつける姉に、いつもとかわらずゲラゲラと下品な笑い声を上げる叔父。

叔父は年齢を重ねているようだが、いつものやり取りは変わらない。

薄々察しているであろう姉もなにもいわないのが、彼女なりの優しさなのだろう。

じゃれあうように、軽口の応酬。

隣の私は視線が合うと、ほろ苦い笑みを浮かべ、ぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜるように乱暴に撫でた。

いつもなら、噛み付くところだが、今日はそれもしたくなかった。

「なんや、ご機嫌斜めやな？」

私はポケットから、常備している飴玉を取り出すと叔父に差し出す。

受け取った叔父は一瞬、息を詰まらせたようだった。

やっぱり、予想はしていたけど、この反応を見る限りでは、食事をまともにしていないんじゃないだろうかと、不安になってくる。

まだ持ち込んだ材料も少ないといえあるし、後でなんか作ってあげよう。

懐かしげに瞳を細めて飴玉を眺めて、宝物のように優しく手で包むと『飴ちゃんや』と呟いた。

「ありがとう…ミィたん」

食卓はぼのぼのとした空気だったが『ミィたん』でぶち壊しである。

なぜ、叔父は人が嫌がるあだ名で呼ぶのかね！

もうやめろっていってるでしょうが！

「みぃたん言うなっ！」

「なにいうてん。ミィたんは、ミィたんやで。ほら、機嫌直しぃや」

そして、大切そうにポケットにしまうと、叔父さんは私の両脇を掴んで持ち上げるとにやり、と悪魔のような微笑を浮かべていた。

げ、なんか嫌な予感。

「――――お礼に、メリーゴーランドＤＸやで！」

ま、う、やめろぉぉう！！

私の抵抗などものともせず、大人が小さい子にやるみたいに、食卓から離れると、グルグルと叔父は回り始めた。

兄を片手で運べる筋力の叔父さんは、私など軽がるとである。

は、恥ずかしい！！

叔父さん！もう私、１８歳なんだぞ！？

それ以上に、騎士レベル６８に到達してる叔父では、回転どころの話ではない。

周りの景色が見えないほどの超高速回転だった。

し、しぬぅううううっ！！！！だ、誰か、誰か助け！！！

叫んでいたかいないかは定かではないが、無表情の団長と、びっくりしている宰相と弟王子と、微笑ましそうな両親と、引きつった姉の顔が見えた様な気がした。

気がしただけで、綺麗な花畑と川の向こうに老人が手招きしている光景に変わる。

あれって、私の祖父とか祖母とかかなぁ。

……会ったことないけど。

Ａｃｔ　０３．　え、従兄弟ですか？！（後書き）

たぶん、そうです。

Ａｃｔ　０４．　第５８回岸田家首脳会議＋α（前書き）

すみません、勘違いしていたせいで、投稿していたものを一度削除させていただきました。

時間の流れを逆にしてた……すみません（滝汗）

あと、早い段階でご指摘していただきまして、本当にありがとうございます。被害は…すくない、はず。

Ａｃｔ　０４．　第５８回岸田家首脳会議＋α

目を空けると、叔父さんと父ががっちりと抱きしめあっていた――いや、正確には嫌がる叔父を涙目の父がぎゅうぎゅうと暑苦しく抱きついていた。

二言、三言、小声で言葉を交わし合うと、ぽんぽん、と叔父が父の肩をタップをする。

普通男兄弟は反発するものだ、というけれど、叔父と父は例外らしい。

私たちが生まれる前は、取っ組み合いの喧嘩をしてたことが多かったらしいけど、仲がいいのだ。

なんかこう…絆みたいなものを垣間見る。

でも、暑苦しい所で意識が覚醒したな、と顔を逸らそうとするが、三半規管がシェイクされまくってて、くらくらと眩暈がする。

あと、涙と涎の感触がするが、まったくもって動きたくない。

というか、動けない。

吐かなかったのは奇跡に近い。

テーブルに突っ伏したまま、しばし茫洋と眺めていると、今度は母が叔父と数度言葉を交わして、にこやかに会話をしている。

「……死んだか、俺」

テーブルにしがみ付いて起き上がる兄。気がついたか。

うわー、生まれたての小鹿のように足がぶるぶるしてるよ。足が。こんなボロボロの兄を見るのは二年ぶりぐらい…つまり、前に叔父と追いかけっこしたときぐらいだろう。

そのときは叔父もボロボロだったが、今回はかすり傷しかないのはすごいことだ。

ってか、ゴブリンとの戦闘よりダメージが大きいって、どうよ。

叔父さん＞＞＞＞＞＞兄＞ゴブリンの群れ＞騎士（目つき悪）ぐらいの力関係って、なんか間違ってない？

なんとなくだけど、叔父一人でゴブリンの大群ぐらい追い払えそうな気がする。

別に、警告する必要なかったんじゃなかろうか？

「何とか生きてるよ。ＨＰ７１あるよ――赤判定だけど」

「……それ、瀕死ってことじゃないか？ん、ミコ、お前さんのＨＰも３９しかないぞ。赤判定」

「メリーゴーランドＤＸ」

呟くと、納得したように、『あれか』と兄は苦笑を浮かべた。

同類相憐れむような感じだが……あれ、私、なんで叔父から攻撃

受けてるんだろう。
仕方なく、行儀が悪いのは承知だが、机に臥せったまま、サクランボに口に入れて、体力回復を図る。
胃の中が気持ち悪いんだけど、死亡するよりはましだ。
兄も同じ考えに至ったのか、それとも単純に朝食抜きで腹がすいているのか、残り物の食事を引き寄せるが、一口目でぴた、と手が止まった。
宰相や団長の手前、顔をしかめるわけにはいかずに、いつもと変わらぬ素振りで食べだした。
背に腹は変えられないと思ったのだろう。

「肉と果物がいいよ」
「ん」

小声で忠告しておこう。
兄はスペアリブみたいなやつをナイフとフォークで優雅に食べ始めた。
叔父も両親も着席して、ようやくまともな――約二名瀕死の状態ですが――第５８回岸田家首脳会議の空気である。

「じゃ、きし――」
「岸田一族、集合。岸田家首脳会議ｉｎ異世界やで～」

はい、残念兄。
いじけない、いじけない。振り上げた肉つきフォークをとりあえず下ろしとけ。
集合の合図は叔父にぶんどられちゃったね――って、叔父さん。手を叩いて集合を呼びかけているけど、もう全員揃っているから。
叔父さん、やること兄と被って――あ、叔父さんのお嫁さんと、熊王子を呼んでるのか？
手叩いただけでくるのかなと思ったけど、予想通り誰も来なかった。
そうか。兄の仕事を奪いたかっただけか。

「陛下、お願いですから、まず説明をお願いします」
「なんや、今までのやり取りで分からんか？これが俺の兄や」
ひくひく、と頬を引きつらせた赤毛の宰相の叔父が父を指差した。
「お待ちください。彼が貴方の弟いうなら分かりますが、どう見たって、貴方の方が年上だろうが！ごぅらっ！」
後半は繕うことを止めたようで、驚きのまま叫ぶ。

あ、それは私も思った。

叔父は、叔父だけど、やっぱ、どうみても父の方が若いよね？父の若作りって範疇じゃないよね？？

「……叔父さん、なんで、５９歳になってるの？」

「ご、５９歳？？まって、怜二叔父さんは今年で４１歳になるんじゃ」

大きな目を見開いて驚く姉に、兄が長い息をついた。

そうだね、最後に会った二年前だから、本来ならそんなものか。

「あれから？」

「そや、すこししてからな」

「やっぱり。こっちが二年ってことは――大凡、比率は１：１０か」

「たぶんそうやろ、なぁ」

叔父が苦笑を浮かべ、兄は困ったように、くしゃり、と癖のついた黒髪を掻き毟る。

相変わらず、意味不明なやり取りで疎通が取れている兄と叔父は、絶対似たもの同士だ。

考えていることは、つーかーだし。阿吽、だったけ？

「レジィー！だから、いつもいってるだろうっ！わかるように説明しろ！」

どうやら、赤毛の宰相はいつも叔父さんに煮え湯を飲まされているタイプらしい。

団長はなにを考えてるかわからないが、弟王子は困った様子だ。

というか、これがいっつもだから、気にしないほうがいいよ。

ストレス溜まるだけだし。

「俺たちが最後に叔父さんに会ったのは、二年ぐらい前だったような？」

日にちまでは覚えてないが、大体そのくらいだ。

「それから、叔父が異世界にきて二十年ぐらい。ってことは、異世界の１０日が日本じゃ１日ってことだ。だから二年前ぐらいに異世界にきた叔父さんが父より１５歳ぐらい年上になってるということになる」

「……そ、んなっ」

兄の言葉に、大きく反応したのは、姉だった。

若干ズレはあるだろうけど異世界１０日＝日本１日、異世界１０年＝日本１年となるわけだ。

すでに異世界生活1日を終えているけど、あちらではちょびっとしか過ぎてない。
つまり、異世界一ヶ月過ごして、あっちで三日ぐらい？
異世界は予想以上にすごい速さで時間が流れていくのだろう。
あっはっはー、全然実感わかねー。
特に目の前に年食った叔父がいるのに、叔父が叔父のまんまだからかもしれないけど。

「ひどい…ひどいわ…あたし…」
「由唯姉……」

椅子を立ち上がっていた姉は、また再び力なく椅子に凭れた。
姉の戸惑いはわからないでもない。
こっちで三歳年齢を重ねても、戻ったら三ヶ月ぐらい？
叔父のように二十年近く年をとっても、戻ったら二年しかたってないって、どーよ。
私で想像するなら、もう体は３８歳なのに、もどったら２０歳扱いで成人式を向かえちゃってるわけだ。
あれ、成長期にまだ片足突っ込んでる私が一番ダメージ大きくない？

とりあえず、成人式は出れないな。

すぐに帰れればいいけど、叔父が二十年もここにいるということは望みが薄いような気がする。

根暗でインドアな私には友と呼べる存在はいなかったけども、姉はこうみえても、世話好きで、割と社交的なので、多くの友がいた。

私以外の多くの妹達。すごい美少女が『お姉さま』とかって、姉に擦り寄ってるのびっくりするよね。

ちなみに、姉の高校は女子高じゃなかったんだけど。

それにナースだから、多くの患者を抱えていた。

いくら不可抗力とはいえ、４２歳の肉体で、２５歳の扱いを受ける姉……そらー、想像したら落ち込むよね。

「大丈夫、由唯姉。まだ月９の最終回終わってないよ」

「あら、そうね。ならいいけど」

うなだれていた姉はあっさりと持ち直した。

うむ、あと二ヶ月ぐらいはこのネタで姉の気を紛らわせれるだろうか。

てか、友と患者はいいのか、姉よ。

「そ、そやな…月９…月９な…大変やなぁ……」

叔父よ。ここは突っ込むところだよ！
似非関西人としては「なんでやねん」って突っ込むところだよ！！
なんで月9で持ち直しているんだよって。
頬を引きつらせた叔父は気を取り直して、睨みつけている宰相に片手を振った。

「つまりや、たぶん流離人（ルエイト）の元の世界と、こっちの世界は時間の流れがずれてんねん。せやから、兄貴よりも、わてのほうが年上になっとるんやろ」
「……分かった…いや、分からないが、分かったことにする」

もう、言葉も繕う気もないのか、砕けた口調で宰相が赤毛を揺らして首を横に振る。
きっと規格外な叔父の言動に振り回されたんだろうな。
苦労がにじみ出てるよ、それが。
かわいそうに。

「本当にそうなら、これが『噂』の家族なのか？」
「噂、ですか？」
「凶悪で規格外な一家だと」

極悪非道の叔父さんに言われたかねぇ！

善良な一般市民の家族全員の冷ややかな視線が叔父に刺さる。

視線だけで人を抹殺できたら叔父は即死しているぐらいだ。特に姉のは痛いぞ。

「あることないこと吹き込んだな、怜二」

「なにいうてん。本当のことしかいっとらへんで～？」

珍しく反応した父が叔父さんを怒りを含む眼差しを向けた。

「子供たちはさておき、この純情可憐な母さんのどこが凶悪なんだ？こんなに可愛いのに！」

「もう、やだー、お父さんたらぁ。だ・い・す・きV」

いや、もう、いいから。両親よ。

朝からおなかいっぱいだよ。ご馳走様。

後、本当に私は、弟とか妹とかいりませんので――ただですら、生きている間に拝めないだろうなと思っていた従兄弟が目の前にいるだし。

自重してください、まじで切実に年齢考えて。

なんかもう、果実食べるのも止めようって気になるから。

ってか、さりげなく子供たちは凶悪で規格外って認めちゃったよ。

私？この平々凡々たる私もそこに入ってるんですか！？兄と姉は分かるにしても、私だよ、私！

どこをどーみたら、凶悪に見えるんだい！規格内の範疇だから。

「……なにいうてん…一番、義姉さんが凶悪な人やないか…」

ぽつり、と零す叔父の声が聞こえたのか、一瞬、父に抱き寄せられている母の瞳が細められた。

あー…その母の目の輝きが、ゴブリンの戦闘中に兄が見せたような野獣の輝きをしていたことを追記しておこう。親子デスネ、ヤッパリ。

それに気がつくと叔父は頬を引きつらせて、話を切り替える。

「ま、まぁ、ともかくや、俺も最初の半年ぐらいは帰る方法を探したんや。でもな～、途中から忙しくて、それどころやなくなって結局、きちんとは探してないんや」

「望みは」

「……薄い、限りなく、って言っとくわ」

叔父が半年探して、見つけられなかったものを、私たち家族が探し出せるかといわれれば、難しいだろう。

それだけ叔父の能力は高い。

年の分だけ、兄よりもチート的なものが研ぎ澄まされているっていうか、強くなっているというか――残念ながら、お好み焼き焼こうとして、粉塵爆発起こしたぐらいの、料理オンチだけど。

調子いいと、カップラーメン作れるけど。

限りなく薄いってことは別に帰れないってわけじゃなさそうだが、時間がかかるということだろうか。

叔父は探すのをやめたということは、きっと異世界で骨を埋める気だったんじゃないだろうか。

奥さんもいるみたいだし、子供が二人もいるし。

なんとなくそんな気がした。

もし可能性がないなら、叔父は「ないで～」と軽い調子であっさり言ってしまうだろうし。

「それになぁ。帰れたとしても、早くみつけへんと浦島太郎みたいになってまうで」

うわぁ～…１０年探して、見つかり、帰還したとしてもあっちでは１年ほどしかたっていない。でも、よぼよぼ、見たいな感じ？

微妙すぎる。２８歳で、専門学校に通い直すのか。それは、嫌だ。

あ、隣を見ると姉が、鬼のような顔で叔父を睨みつけている。姉は四十代になっても二十代扱いになってしまうのだろう。

老いた体が大変で、ギャップに若干周囲が違和感を感じるくらいだろうか。

でも別に叔父が元凶ってわけじゃないんじゃないか？

大体の現状は叔父だけど。

ていうのか、なんでこっちとあっちじゃ時間の流れが違うんだろうね。

「――期限を決めたほうがいいな」

「期限？」

兄の言葉に私は、のろのろと突っ伏していた顔を上げた。

「早いうちはいいぞ。うちは、ほかに親戚がいないといっても、俺の場合は上司が失踪者届けを出すかもしれない。警察官が失踪となれば、割と問題視されるだろうしな。そこから芋づる式に一家が失踪してることが判明するだろう。それに一年もいないとなれば、学校は金が払われてなければ、退学になっているだろうが、由唯や父さんの場合は会社をクビになってるだろうし」

つまり、あまり長いことといると、まずいんですね。

たしかに、一年もここにいたら、さすがに私の通っていた専門学校は授業料未納とかで、学校は退学になっていることだろう。

早めに戻っても、年齢詐称しているだろうと疑われるぐらいのことは起きるだろうけど。

同年代が、もう同年代に見えません、みたいな？

「こっちの生活に慣れてしまったら、あっちで社会復帰が難しい」

「現実的じゃあないってことね」

姉は、ひどく不満げだ。

美貌を保つことに執念を燃やす姉としては、年齢以上に年寄りに見られるなど、想像したくないのだろう。

ていうのか、両親も危険な。

今はまだ四十代だけど――いや、私母の年齢教えてもらったことないし、誕生日に蝋燭を立てたこともないのでたぶんだけど――二十年経って、六十歳になって戻ったとしよう。

すると、父にいたっては八十歳ぐらいまで働かないと、定年退職ではないので、年金も支給されない。

むむ、死活問題である。

って、私たちも八十まで――――よし、思考シャットアウト。考えないようにしよう。

「それでも故郷だしな。戻っても生活できないってわけじゃないし。帰りたいってんなら、まぁ、がんばるしかないが――それだったら、いっそ生活したほうがいいんじゃないか、と。生活習慣も違うし、一から全てを構築するってのは面倒だが、幸い戸籍を弄れそうな人もいるし」

ちら、と兄が叔父に視線を送る。

「あたりまえや。悪いようにはせーへん」

当然、といわんばかりに叔父が肩を竦めた。

不幸中の幸いっていうのか、叔父の存在のおかげで、苦労はしないかもしれない。

五十年かかって、かえっても五年後とかだったら、目も当てられない。

「だから、ある程度、目処を決めて、駄目ならきっぱりと諦めたほうがいい――と、兄ちゃんは思う」

言い聞かせるように、ゆっくりと言葉を切って継げた。

勿論、兄は全力で帰還方法を探すだろう。

だが、その確率は低い――少し悲しげな表情は言外に示唆していた。

「そや、お前たちに、聞かなあかんことがある――」

静まり返った食卓で叔父が真剣な顔をして、岸田家族を眺める。

「――俺のライアンツはどうなった？」

ライアンツ……叔父の好きな野球チームである。
調子のいいときは上位三位に入るときもあるのだが、悪いときは頗る悪いという微妙なチームだ。

そして、それが私たち家族が二年近く叔父の家に近づかなかった理由である。

叔父の機嫌が悪くて、兄どころか、私までボコボコにされるから。

あと、ライアンツは叔父のじゃないよ。
というか、空気読め。いま、絶対そんなの聞く雰囲気じゃなかっただろ！

「ここ二年、最下位争いだよ。んで今年が現在1位」
「っしゃぁああ！！ルアイメッツを抜いたんやな！さすが中島や」
「いや、中島怪我で二軍調整してるけど」
「じゃ、米倉やろっ！」

……そいつも、去年移籍してるよ。

叔父が大好きなライアンツの情報がわからないなんて、本当に異世界で生活してたんだだなぁ、としみじみ思ってしまった。

Ａｃｔ　０５．　短期アルバイト募集中

家族会議の結果、私たちは三年間で帰る方法を探す。
それで見つからなかったら、割り切って、この異世界で自活の方法を探すことになった。

なんで三年になったのか、明確に理由があるわけじゃないが、三年も頑張って駄目だったら、こっちで馴染む努力をしたほうが早いんじゃないという感じだろう。

それに五年も十年も経過すれば、あちらの記憶が薄れるという可能性も高いからだ。
戻ったはいいけど、こっちの生活に慣れすぎて、ギクシャクしてしまうかもしれないと、珍しく父が一言口を横から出してきた。

若いならともかく、両親はいい年だからな。

「そうねぇ、じゃ、三年たっても、日本が恋しくなったら、会議にすればいいんじゃないのぅ？」

の一言で、その時は家族会議を開こうという話で纏まった。

なんつーあっさりな家だろう、私の家族は。
これいいのか、本当に？

「そういえば、私たちって、なんで牢屋に突っ込まれたの、さっき王の命令で投獄したって言われたけど」

ふと、姉が思い出したように、叔父に尋ねた。

たしかに叔父が王様なら昨日の内に会うとか、ちょっとぐらいいい部屋用意してくれてもいいんじゃないかと思うんですけどー。

それは聞かなければよかったと思うほど、くだらない理由だった。

「え～…牢屋に入るなんて、滅多にできる体験やないで？」

え？そんな理由？ってか、別に入りたいなんて一言も言ってないんですけど！？

殺意を抱くよりも先に、姉の目の前にあった銀の皿が放物線を描いて、叔父の額に直撃していた。

「冗談やて」

「冗談でも、殺すわよっ！」

銀食器のコップを持った姉の威嚇に、叔父はわずかに気だるそうに笑った。

「この世界は、お前さんらが思ってるより、よっぽど酷いところなんやで？戦争してるところもあるし、ここだって、いつ戦禍に巻き込まれても、おかしゅうない。この国の揉め事なら、わてが何とかするわ。せやけど、ほかの国でやらかしたことは、わてでも、力が及ばん」

「侮辱罪でも首が飛ぶってことか」

「せや…反吐がでるほど、簡単にやで」

「レジィー……」

叔父は何かを思い出しているかのように瞳を細めて、宰相に頼りなく首を横に振った。

どうやら、この二十年間、よほど苦労したらしいことが伺えた。

そうあの叔父が、帰還方法を探すのをやめてしまったのにも、関係があるんじゃないだろうか。

牢獄は戒めの意味合いもあったのだろうか？

「せやから、あのひどい牢獄入りたくないんやったら、地位も名誉もないうちから、騒ぐなっちゅーことや」

にやり、と意味ありげな顔で悪魔のような笑顔を見せる。

それを兄が受けて、意味ありげな――おっと、キラキラのエフェクト無意識に使ってるよ――爽やかな笑顔を返した。

言葉の裏を返せば、地位も名誉もあるなら、騒いでもいい、ということだろう。

特に兄は『歩く悪人ホイホイ』なので――この世界でもどうかはわからないが――地位も名誉も必要になってくるんじゃないかと、私は推測する。

ただ単純に叔父が王として、岸田家族を庇うには限度があるはずだ。

叔父の手によって岸田家の衣食住を保障されましたが、これの対価として叔父から兄に対して、ひとつの提案が持ちかけられました。

「それでな、雅美ちゃん、すこーし働かへんか？」

身内なのに条件付というのが、叔父らしいといえば、叔父らしいけど。

こういう若干がめついところは、姉にそっくりだと思う――――あれ、姉が叔父に似たのか？

その提案に爽やかな笑顔を浮かべようとして失敗したのか、兄の頬が引きつらせた。

「バイトしろって？」

「せや、アルバイト。衣食住完備の上に、王宮図書館の裏書庫に入れる手続きに、金は魔石を上乗せして買い取ったるわ。それで軍資金になるやろしな――期間も、なんと短期集中の四日間」

にっこりと笑う悪魔――もとい、叔父に対して、兄はげんなりした様子で頭を抱えた。

「四日間じゃ、さすがに俺でも無理だって」
「雅美ちゃんなら大丈夫やて、若いんやし、ばっちりやん」
「……俺、もう２５だよ」
「それやったら、わてだって、もう５９歳やで。まぁ、叔父さんのお墨付きやから」

うわー、やなお墨付きだ。

しかも四日って…四日って…なんか嫌な予感しかしないんですけど、両親もそれを察したのか、兄と叔父から視線を逸らした。ついでに、私もそーっと、視線をあさっての方向に向ける。

姉がきょとんとした表情で、小首をかしげる。

「なによ、四日って」
「ゴブリン」

私が横から端的に言い放つと察したようで『はぁあ？』と姉が、素っ頓狂な声をあげた。

きっと、叔父のことだから、ゴブリンがくることは、兄が警告するまでもなく気がついていたんじゃないだろうかとすら思う。

四日と言い切ったということは、すでに分かってのだろう。

「まさか……怜二叔父さん、ゴブリンの大群と兄さんを戦わせる気なわけ？」

ええ、そのマサカですとも。
叔父さんに一般的な常識は———以下略。

「第一、第二、の騎士団もつけるし……多分、大丈夫やろ」

そういって、大丈夫だったときは数えるほどしかなくない？
その言葉が喉まででかかったが、とりあえず、巻き込まれたら困るんで、黙っておこう。

兄、ふぁいとー。

心の底から、応援だけはしておくからね。

「お、お待ちください！！父上！」
「待て、レジィー！！」

ここでようやく宰相も、弟王子も状態を察したようで、反論の声を上げる。

ついでに、騎士団長は無表情のままだ。
なにを考えてるかわからない。
父と母に至っては体を寄せ合って、ヒソヒソ内密な話を――って、いちゃいちゃして聞いてねぇ。
あんさんら、自分の息子が叔父の手で死地に放り込まれてるんですよー。
この様子だともうゴブリンが、この都市に向かっているのは間違いないようだ。
なのに暢気じゃない？裏では色々やってんのか？
っても、叔父一人で十分だよ。
一騎当千だよ。

「たしかに彼は騎士と共にゴブリンの群れを退けましたが、それとこれとは別でしょう！」
「そうだっ！これは国家の問題なんだぞ！」

そうだ、そうだ。
もっとガツンと叔父に言ってやってくださいよ……無駄だろうが。
その証拠に一瞬にして、テーブルの上に身を乗り出す叔父は、宰相にアイアンクロー。
なんちゃって王様だから、行儀悪いなー。

さすがに騎士団長は素早く自分の分の食事を華麗に避けて――って、この人まだ食事してたんかい！ペース、遅っ！

「あぁ～…アドルフくん、なんやいうたか？わて年やから、耳聞こえづらくなってもうての～」

と、聖人君子のような穏やかな微笑み。
でもテーブルの上で、ヤンキー座り。

しかも『くん』付けの時は、そこそこ危険度の高い証拠だ。
叔父の背後から醸し出されるエフェクトは、なぜか聖人君子の笑みに対して、暗雲と並ならぬ迫力のオーラである。

怖っ！姉の比ではなく怖っ！

これが赤の他人ならば、私は間違いなく犯罪者として通報するだろう。

脅しである。
パワーハラスメントである。

さっき権力者の思惑で人が裁けちゃうぐらいのことを言った後だから、凄みが違うね。
まぁ、叔父はしないだろうけどさ――――…多分。

「いや、しかし、だな…」

途端に目が泳ぐ宰相だが、それでも言い返そうとする姿勢が素晴らしいよ。
家族からは賞賛の眼差し――うん、誰も助け舟ださないけどね。
実の息子の弟王子は、完全に怯んだ。
こんな父親だったら、うちの『アイラブ嫁』な父の方がましだなー……いや、どっこいどっこいぐらい？
ってか、あんまりにてないなー、王子と叔父さん。
薄い唇の感じぐらいしか似てないような気もしなくもないけど、それくらいだし。
性格も似てない。似てたら今のうちから矯正するがな。
でもまー、兄は一日でレベル13上がったし、叔父さんと三十分の死闘――と、鬼ごっこでレベル1上がるぐらいだし、四日もあったら何とかなりそうな気もする。
「雅美ちゃんなら、魚鱗の陣の先頭でも死なへんって」
「いや、それ俺普通に死ぬって」
魚鱗の陣の先頭ってさ△みたいな陣で、頭の尖ったところだよね。
いや、無謀じゃね？叔父さん、あほじゃね？
兄戦士レベル14だよ？

そりゃ、叔父ぐらいのレベルがあれば、問題ないでしょうけど、まじ兄死ぬよ？
もしかして、間接的に叔父甥の戦いに決着をつける気か？

「あ、今なら、お得で便利な器用貧乏ミィたんもつけるで～」

ノリが夜中の通信販ば――――って、私！？

危うく白目になりそうなのを堪えて、ぶんぶん、と首を横振って拒否アピール。
眼鏡かけてないから、こっちのステータスが分からないのか？

「叔父さん、まだ私はトレジャーハンターのレベル５だから」
「盗賊だろ。いい加減認めろよ」

なんだよ。可愛い乙女心じゃないか。
盗賊よりも、トレジャーハンターの方がカッコいいし。

「俺だって、まだ戦士レベル１３だしなぁ」
「いや、１４になってるよ」
「……叔父さんとの鬼ごっこか」

自分のステータスを見て、げんなりした様子でため息をついている。

叔父は私の顔を意味分からんみたいな顔してみてるし。
いや、私の方が意味わからんよ。
か弱い少女を――という年でもないけどさ――戦場に放り出すなんて、外道のする所業。
いや、叔父なら本気でするかもしれないけど。
よし、頑張れ、私。
叔父の提案、全力で拒否だ。

「ボーナスポイントあるんだから、技能と能力を限界まで強化すれば、戦士なら十分にいけるけど、私の能力じゃ無理だよ。サブ職に魔法系統職業につけるなら、後方支援もできるけど。混戦状態だったら、残存体力を伝えたって兄はそれどころじゃないでし、敵索（サーチ）使えたって、基本的にバックアタックを防ぐ程度のものだし――私に加護をくれた神だって、なんの神だかわかんないし、精霊ホイホイだって、精霊煩いだけで、集まっても見えないし、無理」

どうだ！息継ぎなしで言ってやった！ぜーはー、ぜーはー……死にそうだ。
ふははは、どれだけ私が無能か理解したか、叔父よ！
ちょびーーっと、魔石投げれば戦えるけど、他の人でも出来るでしょ。
日常的にゴタゴタに巻き込まれ、拳を振るう兄と間違っても一緒

にしないでほしいものですよ。

久々に人様のいるところで、長いこと喋った気がする。

めちゃくちゃ、叔父さん驚いてるよ。

つーか、宰相も弟王子も驚いてるけど、やっぱ騎士団長はわからん。

ヤンキー座りで宰相にアイアンクローをかましていた叔父が、机の上を突っ切って歩いてくると、私の目の前でヤンキー座り&アイアンクロー。

な、なんで！？

反抗するんじゃねぇ、この野郎とか？？いや、野郎じゃないけど。

「ミィたん、一個ずつ聞くで？」

その殺気ともいえる威圧感は『嘘ついたら、ただじゃすまさへんで、人間大砲やー』と語っているので、思わず萎縮してしまう。

前に人間大砲されて、兄の腹に直角に頭突きするはめになったっけ……懐かしいわぁ。

私自身を、武器にされたんだよね七歳児の時。

「さっきはさらっと流したけどなぁ――どうして、わての年齢分かったんや？」

口元に微笑を称えている様子の叔父だが、タールのような光のない黒瞳が片目だけ閉じられる。

これは、ウィンクではない。

本人は気がついていないらしいが叔父の本気の合図である。

何度かしか見たことがないが、恐怖の威圧感で、誰一人口挟まない。

いつも助け船を出す兄も、まさかの沈黙である。

「……書いてある」

「なにに？」

「ステータス画面」

「…？　ゲームの中にある、あれか？見えるのか？人や、自分の分が」

こくこく、頷く青ざめたであろう私に、叔父はちら、と何故か両親に視線を送る。

なに？両親の教育が悪いせいで、私がヤヴァァイ電波系の乙女になってしまったとでも思っているのか！

それならお門違いだ！私は自分の力で電波系になったのさーって、なってないけど。たぶん。

とにかく両親は無関係だろう。

情操教育が悪かったとするなら、叔父と兄がいる空間に一緒に放り込まれたことだ。まず、１００％間違いなく。

ともかく眼鏡をかけると、ステータス画面が表示されることを告げ、叔父に眼鏡を渡す――が、驚いたことに、叔父にはステータスが見えなかった。

え、眼鏡の力じゃないの？

驚いて、私が掛けなおすが、普通にステータスが表示された。

兄を向くと、兄も驚いたよう様子だった。

「な、なんで？」

「分からない――だが、俺たちに共通するのは、職業がゲーマーだったってことぐらいか？ちょっとまて」

兄がステータス画面をいろいろ眺めている間、叔父は姉にも掛けさせたが、姉も見えなかった。

どうやら、ゲーマー職業特有のものらしい。

ステータス画面に視線を流していた兄が［表示（インディケイション）］という私と共通のスキルを見つけて、それがどうやらステータス表示させているものらしい。

スキル名前ってそのまんまだな。気がつかなかったけど。

「どのくらいみえるんや？」

私はとりあえず、ゴブリン、騎士、家族の順番にどんな内容が出てくるかステータスを伝える。
あと、道具が値段とか解説が少々。

「ＨＰは体力、ＭＰは外魔力ってことか。技能はええとしても、補正は？」
「叔父さんの場合だと、イシュタル神の寵愛、マルス神の寵愛、イシュルス男児の心意気、王補正、雷耐性、炎耐性、氷耐性、闇耐性、毒耐性、魔眼耐性、土耐性、下克上、英雄補正……あと、ひとつ？マークついてるからわかんない」

イライラしたように、叔父が舌打ちする。

怖っ――！
叔父マジモードの舌打ち、こ――え――！

鳥肌たった、ほら、鳥肌――って、腕めくってないから、わからんだろうけど。

「他の誰にいうたんや」
「兄に口止めされた」
「騎士のジークホーク＝アルケルト、チャイラ＝アマデウス、ハーンの三名は、ミコが名前と年齢が見えるという話はした。じゃないと、熊がカルム王子だと分かってもらえないだろう」
「あの、馬鹿息子が」

また叔父が鋭く舌打ちして――背筋がぞわぞわする――騎士団長を向き直る。

「すべてを口止めしおります故」

「もう一度、や」

綺麗にナイフとフォークでチーズのようなものを優雅に切りながら、騎士団長は頷いた――ってまだ食べてるんだ……。

どうやら、私たちに関する情報は誰にも話すなと、騎士たちには言ってあるようだ。

しかし、なぜだろうか？

「二人も、他のやつらも迂闊に言うんじゃないんやで」

「珍しいの？」

そうじゃなかったら、こんな風に口止めはしないだろう。

「この世界にやって、人や道具の『魂』みたいな根本の情報を見れるやつはおるで。だが、神の祝福のある道具使ってや。それに、よほどのもんじゃなきゃ明瞭に見れるような力は貸してくれへん。ただの魔力も篭らん眼鏡なんざ、本来ありえへん」

「つまり俺たちが見ているのは『魂情報の閲覧』のようなもってこ

とか」
「そや…まぁ、情報を改ざんする能力も稀にあるから、百パー正確ってわけやないやろうけど。この時代の正確な情報は価値が高い」

魂情報の閲覧―――つまりは、その人の能力を見ることができる力は稀少すぎて、渇望されることがあるということだろう。

でも、相手が強いか弱いか程度で、さしてお得な感じはないと思うけど。

時々、視野にちらついて邪魔くさいとか思うし。

「ミィたん、言っておくけどなぁ。口軽く喋って目抉りだされても、叔父さん、知らへんで」
「は？目抉られ？？」
「この世界にはなぁ、マイナーな魔術やけど、人体の一部やら、魔物の一部やらを奪って、宿る能力を使うってのがあるんやで？」
「はぁああ！！？まぢで？！」

さすがに驚いて、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「マジも、大マジや」

叔父さんは首を横に振って、嫌そうな顔をする。

横から、やや青ざめた顔の宰相が叔父の口を閉ざした内容を続けた。

「昔、魔力の代償なしに、傷を癒す手を持つ聖者がいた。戦争で左腕切り落とされて、それでも聖者の力を発揮するように魔術で、形状を保存して、戦場で使われ続けたらしい。今では殆ど力を発揮しないようで、クルトワ大神殿で『栄光の手』として保存されてる――が、聖者の死後、右手は盗まれて現在まで見つかってない。ついでに左腕を保存した魔術師も、姿を消したらしい」

つまり、私の目が生きたまま抉り取られる可能性も、死んでから抉り出される可能性もあるということだ。

神様の力を借りずに、見れるんだったら楽だろうけど、目だよ、目。

「いうておくがな。枢機卿クラスなら――そう、ゴロゴロ転がっていないんやけど、肉体の一部を他の一部に付け替えるんは、可能なんやで？まぁ、拒絶反応とかもあって危険なんやけどな」

ぞわっ、て、背中がぞわってなったよ。

さらに言えば、私の目が、他人様の眼球になっちゃうってことかいな。

ちょっぴり、涙が出そうだよ。

あぁ、涙が出る眼球が自分の眼球でよかったな、私。

「あと、なんかの文献で読んだんやけどな。黒大陸の――まぁ、魔界みたいな所の魔族にもな王族や貴族ってものがあるんや。そいつらの中にはイカれた蒐集家がおるんや。一部になぁ…様々な種族の特殊な能力を備えた『目玉』を集める貴族がおるらしいで？」

楽しそうに叔父が凶悪な顔で体を揺らして哂ってる。
弟王子と、宰相をみると、有名な話なのか、二人とも真っ青な顔で頷いていた。

「……ミコ、顔色が真っ青だぞ」
「……雅兄こそ」

こうして、叔父の脅しが聞いて、私は無口になるのでした――いや、元からだけど。

Ａｃｔ　０５．　短期アルバイト募集中（後書き）

今回長い。見直しするだけ、すごい時間が…（涙

叔父の独壇場でした。

兄弟たちは、ようやくステータス見えるんのって珍しいんだよってことが分かりましたね。

Ａｃｔ　０６．　朝食の終わり

「しゃーないわ。戦場に出る出ない関係なくミィたんも雅美ちゃんと一緒に修行やで。せめて、どこぞの馬の骨に攫われても、自力で帰ってくる程度やないと危険やで……」

――――どうやら、墓穴を掘ったようだ。

くっ、黙っとけば叔父のブラックジョーク程度で済んだのに、修行確定って空気が流れている。

メンドクサイ。すこぶるメンドクサイ。

私が修行しても強くなるなんて、高が知れているような気がするけど……うん、自分の身くらい守れるように、護身術ぐらいになればいいか。

教えるの叔父なの？

だったら誘拐犯にさらわれる前に死ぬ自信ある。

どうか叔父が教師ではありませんように。

「そんな目で見ないでや。ミィたんのためやで？嫌やろ？目抉られるの？」

愚問だ。目を抉られるのが大好きって人がいるんなら、八時間は説教してやりたい気分である。

というか、そんなやばい考えの人間がいることに驚くべきである。素面でなくたって、とても考えられないが、叔父の言い方ならば可能性はあるということだ。

そんなに危険な所なのか、異世界？

ステータス表示が凄いというのは理解したが、だからといって目を抉られるなんて。

昨日も思ったけど、熊王子も、弟王子も、騎士も、短いとはいえ時間を共有した異世界の人々は――あ、熊は人にはいるのだろうか？――人が良さそうな感じだった。

熊殴った騎士団長にはビックリしたけど。

騎士（目つき悪）は敵意を感じたが、王子たちを守ろうとしてというのが分かったし、騎士（チャラい）に関しては、探るような言動があったが、前者も後者も悪意はなかった。

……叔父の話からは、人の尊厳や命が軽いと言われているようだった。

なんか日本って、すごい平和だったんだなぁ。

態度が悪いだけで死ぬことはないし、目が欲しいと奪われる心配もないし、戦争もない。

事故もあるし、犯罪者はいるだろうけど、滅多に巻き込まれることはない。

それに調味料が最高――げふん、げふん、失敬。

調味料(それ)は置いといて、改めて思う。

そんな世界だというのに、叔父は私たち家族に、もの凄くよくしてくれているんだということも――牢屋には突っ込まれたけど――なんとなく、察した。

私の家族はなんとなく気がついているし、感謝しているだろう。

「でも、魔法使い系の職業ないから、そっち系で攻められたら一溜まりもないんだけど」

「うん？なんや職業？？」

「いやステータス画面に色々あってさ」

兄が職業選択の欄があることを簡潔に叔父に伝える。

少し考えているのか瞳を細め、なぜか私の両親を一瞥した。

両親は、まだイチャイチャしてたが、父が気がついたように肩を竦めた。

お手上げ、という感じだ。

もうゲームなんかの話になると、姉はまだ時々私たちがゲームをしている姿を見ているので、何とかついてこれるが、両親には未知の領域に近いのだから仕方がない。

叔父の柔軟さは、私たちの家に来たときに一緒にゲームしてるのも関係あるのだろうか？

私は初心者の叔父に格闘ゲームにしろ、落ちものにしろ、惨敗だったけどね。

「ちなみに、ミィたんの残りの職業は？」
「遊人、吟遊詩人、弓使い」
「……ミィたん、強く生きるんやで？」

えぇ～～！それだけ！？

憐れみの視線を投げてよこしたテーブルの上のヤンキー座りの叔父だったが、すぐににや、と笑う。
う、なんだ、遊ばれたのか？

「魔法使いじゃなくても、魔法は覚えられる。だろ、叔父さん」
「なんや、気がついてたんか」
「そりゃ、騎士で王様の職業の人間が、俺に向かって攻撃魔法放てば、嫌でもね」
「えぇ――！！」

今度こそ、私は悲鳴を上げた。
魔法使いじゃなくても、魔法が使える？？つーか、叔父さん、魔法使えるのか！
っていうか、本気で殺そうとしてたのか！？

「そや、魔法書ってのもあるし、適性がある属性なら習えば使えるようになるんやで」
「なんか御伽の国の話みたいね」
「はんっ、由唯っちからしたらそうやろうけど、ほんまにあるんやで。ま、魔法使いや魔法書自体があまりないんや。ぱっちもんの方が多いしなぁ。皆が使えるとは限らん。宮廷魔術師がおるから、そいつから魔法道具、奪っとくわ」

おおーっ！なんか、魔法が習えるときいて、滅茶苦茶テンションがあがるんですけども。
魔法道具ってだけで、胸がトキめくよね。

どうか魔法も難しくありませんよーに。

「ミコ、お兄ちゃんの推測だけど、表示されてる職業って、適性だと思うぞ」
「適性？じゃあ、他の職業になろうと思えばなれるってこと？」

魔法使いとか、魔法使いとか、魔法使いに――大事なことですので、三回ですね。

「そして、俺たちはステータスが見て、それを『選択』することによって、職業が変わっただろう？俺たちにしか見えないってことは、普通、こっちの人たちはそれをしないということだ」

そういわれてみれば、音声にしろ、表示にしろ、選択して職業が変わったけど、それが実は普通ではなかったということか。

私は最初、職業がゲーマーだったけど、それって別に前の世界で職業をゲーマーにしますって宣言したわけでもない。

ただ、一日のうち最低でも三時間ぐらいはゲームを毎日して気がするけど。

こちらの世界も一緒だというなら、本来なら積み重ねた行動や意識が職業になるということだろうか。

サブ職業は専門学校に通ってる――という積み重ねが職業へと繋がった??

それは専門学校に通ってる――という積み重ねが職業へと繋がった??

その話には、叔父も興味深そうに耳を傾けている。

どうやらこちらでは魔法系の職業は、神殿で誓いをたてるのが基本らしいということを叔父が付け加えた。

そうしないと魔法を教えてくれる師匠が探せないからだとか。

「たしかに、王になる時――たぶん、結婚して王権を授与されたときから王様やし、騎士団に入ったわけやないけど、剣はそいつから習っておったしなぁ。便利やなー自分ら」

「ねぇ、それって私にもあるわけ?」

と、姉も口を挟んできた。

「あるぞ。遊人、吟遊詩人、僧侶、踊子」
「……遊び人と、吟遊詩人って誰でもなれるわけ」

私も最初そう思ったよ。
歌が歌えればＯＫとか、遊ぶのを命をかければ、なれるんだよ。きっと。

姉は細い指で唇をなぞりながら、なにか考えているようだった。

「でも、兄は吟遊詩人になれないけどね」
「悪かったな。音痴で」

う、と喉を詰まらせて、兄。

私が兄に勝てる事といえば、唯一カラオケの点数とかぐらいだ。
でも嫌がって、滅多にカラオケボックスとかはいかない。

「でも由唯姉は僧侶の適性あるから、回復魔法とか補助魔法とか使えるようになるからいいじゃん。兄さんだって魔法使いの適性あるし、魔法剣士も可能ってことでしょ？」

正直、羨ましすぎる。
適性がないってだけで使えるならいいけど、釈然としない。

あーあ、本当に覚えられるのだろうか。簡単なのだけでいいのだけど。

「レジィー、そろそろ」
「そやな」

どうやら、本当に王様らしい叔父――いや、態度は王様級だけど、信じがたい、というか――には、王様としての仕事があるらしく、宰相に横槍を入れられた。

「アドルフ、何日もつ？」
「微妙だ。イシュルスの王家の血を直接引いているわけじゃないが、現王の傍系だ。祭り上げられはしないが、利用価値は高い。お前は元々敵が多過ぎる。それに『流離人（ルエイト）』となると、それ単体で欲するものも少なくない。最小限に留めたと思うが、あれだけ派手に出現が噂されれば、情報は押さえ込めない」

といいながら、ちらりと私たち家族を一瞥する。

ってか、私たちイキナリ異世界きたんだから、こっそりとか、そんな暇なかったんだよ。車だし。事情がわからんし。

「それにお前サミィ殿を王宮内で追いかけたんだろう。目撃されてるはずだ」
「はん、ちゃんと姿消したで。二日抑えたって」

「難しいぞ――何者か判明せぬ内に襲ってくる者はいないだろうが」

ふう、と叔父のため息が零れる。

一般人の身分もない王様の兄家族だけど、人質とか嫌がらせぐらいの標的になり『流離人（ルエイト）』としての知識に価値があるというところだろうか。

宰相も言ってたけど、叔父のこの性格だ。

敵が少ないなんてありえない。

祭り上げられないということは、イシュルスの王家の血を引いていないので王位継承権で争いは発生しないということだ。

てか、お願いされても、たとえどんな願いを叶えてくれるって言われたって、叔父に楯突こうという勇者（バカ）は、私の家族にいないよ。

身内であるがゆえに、その恐ろしさは身をもって知っているし。

叔父に反感を持つものに、命までは即座に奪われる心配はないと思われるが、危険ではある。

そんな感じだろうか。

ただですら、日常的に兄の敵に狙われていた私だ。

そこら辺の理解は早いぞ――――って、全然、威張れる事じゃないけど。時々凡ミスするし。

「ヴェル」

「はっ」

誰？呼んでるのと思ったら、返事をしたのは騎士団長だった。
どうやら、渾名で呼んでるし、ここに同席してるくらいなのだから、宰相も騎士団長も叔父と仲がいいのだろう。

叔父よかったね、友達できて、とちょっと暖かい目で見守ってしまう。

「第一からはハーン準騎士をサミィ殿。第二からアルケルト準騎士をミコ殿。第三からアマデウス準騎士をユイ殿。コゥーチ殿、リエ殿は、第一から準騎士を専属とし、複数つけます故」

叔父は、少し考えたが頷く。

「よし。ゼル、ほかの判断はお前に任せるわ」
「僕、ですか？」
「そや、ちゃんと守ってやるんやで？お前の従兄弟なんやからな、毎日俺に報告しぃや……して、騒ぎになる前に、雅美ちゃんと、ミィたん、叔父さんがおこづかいあげるから、城下で装備購入しとったらええ――して、明日から、騎士団の鍛錬に混じったらええ」
「……本当に、私もやるの？」

目抉られたくはないんだけど、騎士団に混じって剣を習う１８歳の乙女ってなんか可笑しくない？

どこまで逞しいんだ私は。
なんかその内一人でゴブリンを倒せといわれそうな気がするんですけど。

「叔父さん、あたしも」
「あかん――ショッピングなら、後回しや。雅美ちゃんとミィたんが人並み以上になったら、つれてって貰うんやな」

え、姉のショッピングに付き合えと？

この世界に姉のストーカーはいないけど、歩いてたら御伽噺の笛吹き並に引き連れて歩いてついてきたらどうするの――って、そのための護衛（わたしたち）ということですか。

「そっちじゃないわよ。私も『僧侶』ってのを修行するわ。それって魔法で傷を癒せるってことでしょう？ミコと兄さんが力をつけて、無傷でいると思う？」

逡巡した叔父が苦笑を浮かべた。

姉は私や兄、叔父のように能力を理解しているわけじゃないのに、あっさりと言った。

口にしなければ、騎士たちが守ってくれるだろうし、修行しなくてもいいのに……なんつーか姉は男前だな。かっこいいよ、姉。

それに比べて私は駄目だなぁ。
でも僧侶ってこう清純なる乙女の職業……え？姉、なぜ私を睨む。
声に出てたのか？超能力か？

「長年、この二人の治療してきてないわよ、私」
「せやったな」
「――――それに私適性がある、と思うわ」

と、困ったように眉根を寄せて、姉にしては珍しく弱弱しい語尾。
それには兄も叔父も驚いている。
もちろん私も。

「あるってわかるのか？」
「わかるってほどじゃないけど、この食堂に入ってきたとき、内と外を遮るような…なんていうのか空間を隔離しなかった？」
「っ『隠密遮断（オルゲイト）』が発動されたのがわかるのか？！」

それに声を上げたのは叔父ではなく、宰相だった。
この驚きをみると叔父ではなく、宰相が発動した魔法…なんだろうか？？
外と内側を遮断するということは、盗聴されないようにしたんじゃないかと思う。

「やっぱりね。分かるってほどじゃないけど、部屋自体が包まれたような感覚があるし、牢屋もそうだったんでしょ？……昨日、言うべきだったのかもしれないけど、精霊がいるのが分かる」
「せ、精霊が！！？」
「昨日のミコの――精霊ホイホイだっけ？あれで集まってきた精霊の姿はハッキリしなかったかけど、光が集まっているのが見えたわ」
「なんてことだ――精霊の御使いが、レジィーの家族から出るとはっ」

宰相は頭を抑えて、なにやら神様に祈っているようだ。
弟王子は目を白黒させている。

それもよほどのことらしい。

もしかして、昨日、精霊ホイホイのときに、凶悪な顔してたのってスプレーを使ってたからじゃなかったんだ。怯え損だな私。

「今朝だってミコを見てたでしょう？一喝したら消えたけど、この悪趣味」

え、もしかして、さっき怒鳴ってた奴？兄になんとかしてもらう云々の。
っつーか、私、見られてたんだ。まったく気がつかなかったけど、うん、叔父の悪趣味！変態！と声を大にして叫ぼうか。

「まて――なんや、それ。アドルフ」
「俺じゃねぇよ！」

というものの、叔父は冷ややかで疑惑の含まれた視線を向けると、すぐに宰相の動揺っぷりに、ため息をついた。

「誰かが王宮内を見てたなんて、お前の失態やないの」
「待てっ！俺を一概に悪役扱いするな、ドアホ！王宮はイヴェールの管轄――――」

だろう、とか言葉が続く筈だったらしいが、宰相の喉元に剣先が突きつけられて、青ざめ、頬を引きつらせて黙った。

その剣の主は、座ったままの団長である。

……つまらないことで恐縮なんですが、剣を突きつけたのって、いつ？
そのモーションがまったく見えなかったんですけども。

喉から搾り出すように「すまん」と告げる宰相に、頷いて団長が剣を退けた。

なんだ？なにがあったのさ？

私たちには意味不明なやり取りに、改めて団長こえーと思ったのだが、叔父の本気モードを見た後なので、だいぶ恐怖感は薄い。

「そもそも、王宮内を覗けるなんて、よほどの術者だぞ――残留魔力を辿れるような奴が、大それたことがするわけないだろうし」
「やっぱ、朝まで牢屋突っ込んでおくべきやったな…」

いや、突っ込まれる身にもなってくれよ。

食事が不味かったら、母が不機嫌になって、父が大暴れの三段で、惨事が起きるんだぞ。

「調査はしておく。期待するなよ」
「…由唯っちも、あんまり精霊が見えるって口外したらあかんで？目抉られるどころか、もっと酷い目合うかも知れへんし」
「わかってるわよ。ミコじゃあるまいし」

ええ??ひ、酷くない姉。
地味にけなされてるんだよね、私。うぅ。

ともかくこれで三兄弟全員、目玉抉り出される可能性がでてきたのか。
嫌な可能性だな。フラグたちませんよーに。

「そやなアドルフの種馬にちょっと習ったらええわ。あいつ頭が軽そうなアレでも、精霊魔法を多少習得しとるし」
「ちょ、まてっ、人の息子を種馬呼ばわりするなっ！まだ俺に孫はいねぇよ！」

「あと、兄貴と義姉さんは、くれぐれも大人しくしたってや。王宮内からでーへんように」
「って無視かよ！」

静かに事を伺っていた両親が叔父に返事をして、ようやく解散の雰囲気になった。

朝から長くて、濃ゆい、微妙な異世界朝食を味わって、疲労困憊である。

これからさらにインドアな私が外にでて――これは、異世界ということもあって、ちょっと楽しみなんだけど――なおかつ修行だなんて、ため息しか出てこなかった。

Ａｃｔ　０６．　朝食の終わり（後書き）

姉、意外と感覚が鋭いようです。
だてに長年ストーカーされてませんよね。

Ａｃｔ　０７．　出遅れております

朝食後にその足で出かけるのかと思ったが、一度部屋に戻るように言われた。

どうやら護衛の騎士と一緒に出かけるらしい。

確かに兄弟だけで金を持たされて外に放り出されても、装備を揃えるどころか、スリにでも遭遇するのがオチだろう。もしくは値段を割高で吹っかけられるとか。

さすがに叔父もそこまで常識がないわけでは――十分に非道だけど――なかったらしい。

それから馬車の時間があるらしく、どちらにしてもすぐには外出できないらしい。

両親は自室へと消えていったが、兄弟は兄部屋に集合していた。

時間があるなら、やることはひとつである。

ステータス弄りまくりである。

今のうちにやっておかないと、午後の修行で死ぬ可能性大である。

ベットに腰掛けて私が本格的にステータスを弄ろうとすると、最後に入ってきた兄が扉を閉めた後に呆れたような口調で姉に問いかけている。

「……由唯、ステータス見えないんだよな？」
「見えてないけど、なに？」

不機嫌そうな姉に、兄は顎を指でなぞりながら思案げな顔で、私を振り返る。

「ミコ。由唯のステータス見えるか？」
「うん？？」

【岸田　由唯（２２）】　職業：僧侶（Ｌｖ１）　サブ職業：拳闘士（Ｌｖ６）

ＨＰ：１７７／１７７
ＭＰ：２４８／２４８

【筋力】　２４
【俊敏】　３３
【知性】　２９
【直感】　３６
【器用】　４１　（＋３）
【精神】　６７
【魅力】　１０８
【幸運】　５０　（＋５）

【技能】　［魅惑（シャルメ）］　［真瞳（レアレテ）］　［瞬発（モマン）］
［癒しの心（アペゼ）］

【補正】　母の慈愛　父の加護　ヴィヴェル神の加護

【ＥＸＰ：１４６３】　【次のレベルアップまで：３０】

【ボーナスポイント】　２０１　Ｐ

あれ？姉の職業って看護婦じゃなかった？？いつの間に職業が僧侶になってるんですけど？

しかも、サブ職業『拳闘士』って、最初に見たときちゃんと見てなかったかも。

めちゃくちゃ、異世界職業っぽいな。

ストーカー殴る蹴るしてた積み重ね…なんだろうか？

「なんか、由唯が『僧侶を修行する』って言った途端に、職業欄のナースが僧侶になったんだ。最初よりステータスも上昇してる。やっぱり気がついてなかったか」

「……そんなこと、できるんだ」

「たぶん、それも宣言に入ったか、由唯の『意思』によって変わった可能性もある」

姉はわかっていない様子だったが、兄が説明していた。

これはこの世界で普通…なんだよね？自分の意思で選択している

というか、ステータスが見えないんだから当然だろうけど。

私たちはこっちの常識なんて知らないのに、それを極々自然に行ってしまう姉って逆に凄くない？

あんまり考えたことなかったけど、もしかして姉もチート予備軍……なのだろうか？

単体で微弱と表記されてはいるが、すでに僧侶のスキルである回復魔法【フェーブル・トレト】を覚えて、即使えるようになってしまってるよ。よくみればＭＰの数値がすごいよ、姉。

そういえば、姉は外では優秀な人だと風の噂で聞いたことがある。家ではダラダラしているので、想像できないけれど

兄弟の中で私だけか普通の平凡的な人間は……世の中って公平にできてないんだね。

つくづく実感してしまう。

姉に説明が終わった後、兄は私に提案してきた。

「ミコ、暇なら、遊人以外のサブ職業を選択してみろ。昨日試したんだが、適正のあるやつは基礎技能だけ取得できるぞ」

ええ？兄昨日弄ったんだ。

そういえば結構ボーナスポイント減ってるし、何個か技能が増えているような気もするけど、はっきりと覚えてはいない。自分のステータスでもいっぱいいっぱいだったし。

というか遊人（カサノバ）は技能なしか。

弓使いと吟遊詩人の順番で選択する。

すると、弓使いは技能［風読み（ヴァンリール）］を覚え、吟遊詩人は［音響拡大（ソン・グランディス）］を覚えた。

「さすが兄、外道だ」

「ははは、要領がいいだけだ、要領が」

それで兄もサブ職がすでに魔法使いになっていたのか、納得。

たぶん適正のないやつも試したけど、技能はつかなかったというところだろうか。

「魔法、使えるの？」

兄のスキル画面が一ページ？増えて、魔法という欄ができている。

「太陽から零れ落ちた一粒の赤き熱、我の手に集いたまえ。プティット・フー」

呪文らしい言葉の最後でライターの最大出力したぐらいの火が火種もなく、ぼっと音がしたと思ったら、唐突について揺らめく。

この世界の呪文は、祈言葉＋鍵言葉で発動らしい。

もっとこう理解できないやみたいなのかと思ったら、意外と普通な呪文だなぁ。

最後の鍵言葉だけが、呪文っぽい。

でもやっぱりテレビ画面とかで見るよりも、迫力が主に違う。

「お、おおぉう！すご、すごいよ！」

「やだ！なんか手品みたい」

本物だよ！本物の魔法使いが兄――――なんかちょっと納得いかないけど、魔法使ってるよ！できれば使いたいから、後で私も練習しよう！頑張ろう！使えるかわかんないけど。

しかし、兄の掌の一センチと少し上で燃えているが、熱くないんだろうか？

ちょっと手を翳してみる。

が、炎が揺らめき、私の親指辺りに火が触れる。

「うぁああぢ！！！」

「馬鹿、手を出すな。集中して出し続けるの難しいんだぞ。俺もそこそこ熱いんだから」

「あはははっ！」

やっぱり、兄も熱かったのか。
私も、ものすごく熱い。とりあえず口に銜えて何とかやり過ごそう。
兄が軽く手を振って、火を消した。
不思議なことに燃料がなく燃えているせいか、匂いみたいなものがまったくない。
ってか、姉そこまで笑わなくてもよくないでしょうか。半眼で睨んだら、口を押さえたけど笑いが零れてるよ。ぶーぶー。

「あ、由唯、お前も魔法使って治療してみればいいんじゃないか、丁度よく患者がここに」
「兄よ！わざとか！わざとなのか！」

そうとしか思えないけど、私そうじゃなくたって昨日のゴブリンで結構体傷だらけなんだぞ！
それにさっきも叔父のメリーゴーランドＤＸのせいで死に掛けたし。

「あー、おかしっ……私呪文なんかわからないわよ、ごほっ」
「まてまて、えーと回復魔法のフェーブル・トレトは…『癒しの守護者ヒールよ。その慈悲深き御心にて、傷つくもに癒しの手を添え給え、フェーブル・トレト』だそうだ」

スキル画面の簡易の説明がきに書いてあるらしい。
脳内メモに入れておこう。いつか使える日が来るかもしれないし。
私は兄に促されて、親指を口からだすと赤くなっていて、姉は苦笑を浮かべた。
できるかわからないからね、みたいな顔である。
姉が私の親指に手をかざす。

「癒しの守護者ヒールよ。その慈悲深き御心にて、傷つくもに癒しの手を添え給え、フェーブル・トレト」

ふわり、と姉の手が数秒、燐光を帯びる。
そして親指から痛みが弱まり、赤くなっていた肌も治っている。

「お、おぉおおう！姉も凄しっ！！」

傷の癒えた親指をマジマジと三人で眺めながめていたのだが、もっと凄いことに気がついた。
手の甲にあった昨日のかすり傷も完治していた。
かさぶたに触れると、ぼろぼろと落ちて、その下はすでに真新しい色の違う皮膚。

予想外の出来事に「おぉ！」と今度は三人で感歎した。

効果の範囲が手だったのかもしれないが、最初の一歩でこれだけなら、そのうち姉は死者でも蘇らせるんじゃなかろうか。

ぜひとも我が身の可愛さから、お願いいたします。

たぶん三兄弟の中で真っ先に死亡フラグを立たせるのは間違いなく私だろうし。

常々思う。

兄は天才、姉は優秀、私は平凡以下。

優秀な遺伝を引き継いだのは兄姉で、私は駄目な所ばかりを引き継いだんじゃないだろうか。

もしくは、二人の遺伝子を引き継いでいないのでは？

時々叔父に零すと、お前は橋の下で拾ってきたやら、町にきたサーカス団から養子に、などとからかってくるが、小さいころは本気にしていたぐらいだ。いや、むしろ今も半ば本気にしている。

両親は、こんなアホな子供が生まれて、さぞかしがっかりしただろうに。

一応、これでも頑張ってるんですけど、目の前でさっくさく魔法使われると、なんだかなーと自分にがっかりしちゃうよ。

そこにノックが響き、ステータス弄りが中断された。

「ステータスはまた帰ってきてからにしよう――――どうぞ、鍵開いてます」

兄が扉に向かって叫ぶと、「失礼いたします」と硬い声色が返ってきて、二人の騎士が入ってきた。

鎧を着ていない騎士（毒抜き）と騎士（チャラい）である。

今のタイミングで入ってくるということは、彼らが下町までの護衛ということだろうか？

挨拶もそこそこに、二人の顔色が物凄く悪い。

「おはようございます。昨日の今日で申し訳ないんですが、よろしくお願いいたします」

兄の丁重な挨拶に私たち姉妹も挨拶する。

騎士（チャラい）はともかく騎士（毒抜き）はマトモな部類の人だ。

いくらこの世界で無知とはいえ、そのぐらいの礼儀はあるぞ、私だって……たぶん。

騎士たちが挨拶を返し、扉が閉められると、騎士たちが突如と片方の膝をついて、頭を下げたので私たち兄弟は若干びびった。本当。

誰かに傅くのも嫌だが、誰に傅かれるのも意外と嫌だ。

「昨晩は私の力が至らず、ご不快な思いをさせて非常に申し訳ございませんでした」
「昨日のご無礼をお許しください」

二人の騎士の態度に、兄は合点がいったようで苦笑をこぼした。

牢屋の件と車の中での軽口だろう。
もうすでにどうでもいい。

牢屋の件は叔父のせいだし、車の中ではむしろ彼らには様々なことを学んだのだ。
お金とか、お金とか、魔石とか、むしろありがとうございましたと頭を下げるのは私たちのはずである。

「とんでもないです。ゼルスター王子から伺いました。奔走していただいたことに感謝しています。車の中でのことは、貴方達は知る由もなかったし、この世界について様々な事を教えてくださって礼をいうのはこちらです。それに、こちらこそ俺たちのせいでご迷惑をおかけしたようで、もうしわけありません」

騎士（毒抜き）が不思議そうな顔で、兄を見上げる。騎士（チャラい）は困ったような顔を上げた。

その二人の視線を受けて、兄は真面目な顔で続けた。

「すでに俺たちの事も聞いているようですね。もしアルケルトさんにお許しいただければ、俺の方から降格の無効にするよう口添えさせていただきたいのですが」
「とんでもない！」

思わず声を荒げたらしい騎士（毒抜き）は一度、口を閉じてから首を横に振った。

どうやら既に叔父の兄一家であるということは耳に入っているらしい。
そうか国僕たる彼らが王を敬うのは当然だし、ついでといっても王の兄家族と聞いてしまった以上、昨日のように気軽にはできなかったのだろう。それで突然膝ついたのか。

「失礼しました。皆様一家がそのレジィー王の『大切な方』だとお伺いはしております」

多分、騎士団長から事実と口止めは万全なのだろう。
秘密は少ないほうがいいとかいっていたし。

「私の降格は皆様とは無関係です。ゼルスター王子をお止めできなかった叱責ですし、受けて当然です。ご容赦ください」

兄が考えていた模範解答が帰ってきたらしく、満足げに頷いている。

たぶんだが、兄は口添えする気は最初からなかったのだろう。
なにせ叔父が決めたわけではないだろうが、誰か上の人間が決めたことを覆すというのは、横暴にも感じるだろうし、無用に恨みを買う。

騎士（毒抜き）は昨日から礼儀正しかったし、根本的にいい人なのだろう。

「これから暫く家族共々、お世話になります」
「こちらこそ、無礼なきように精一杯、尽くさせていただきます」
「では早速三つほど、お願いが」

それで兄は言質を取ったといわんばかりに、洗剤のＣＭみたいな爽やかすぎて胡散臭い笑顔になった。

さすがに行き成り過ぎて、騎士達が戸惑うのがわかる。

「は、はっ、できる限りを」
「ありがとうございます。俺たちは元の世界では極々平凡な一般市民で」

嘘付け！この鬼！悪魔！トラブルメーカー！歩く災害！
お前が極々平凡な一般市民の基準ならとっくに世界が滅んでいるっての！！

「人に傅かれるのには慣れていません。これから共に長い時間をすごすのですから、できたら敬語はなしにしていただきたいのですが。ええ勿論、人目がないときだけでも構いません」

逡巡し、騎士たちは見合うと苦笑を浮かべた。

そんなことを申し出る客人たちはいなかったのだろう。

ある意味、これも私たちの我侭かもしれないが。

「畏まり――いえ、わかりまし――わかった。そうさせてもらいま――もらおう」

騎士（毒抜き）は喋りづらそうだが、逆に騎士（チャラい）はほっとした様子だった。

想像つかないし、さっき最初の一言発したとき気持ち悪かったよ。

「二つ目は少し難しいかと思いますが、俺たちが何かしたほうが回避できる危険があるなら事前に説明してください。範疇外であれば、けして我々の我侭を優先させないように」

兄が私と姉を一瞥する。

それでいいよな、というような目。

むしろ私たちの我侭を優先されて全員が危険にあったなら、目も

当てられない。

そりゃそうだ、と私たちが無言で返すと、兄は目元だけで笑った。器用な男だ。

「それを俺たちは感謝すれど、叱責することはありませんから。ま、もしミコが何か文句言うようだったら、俺が言い聞かせますから」

ぐしゃぐしゃと兄は私の頭を撫でる。

なんだよそれ。まるで私が我侭言って———時々しか言ってないし。十回に八回は飲み込んでるぞ。

たぶん今の言葉は彼らに言い聞かせたというよりは、私に言い聞かせたのだろう。

彼らが理不尽な事を言ってきたなら、俺に言え、と。

「護衛としては、至れり尽くせりだ…まいりました」

という言葉とは裏腹に、騎士（毒抜き）の口元は柔らかい笑みを称えていた。

「それで三つ目は？」

「そろそろ立ってください。疲れるでしょう、その体制？」

そこでようやく、彼らは部屋に入ってきたときから膝を床に付けていたことを思い出したようで、赤い顔で立ち上がった。

Ａｃｔ　０７．　出遅れております（後書き）

ぱらっぱぱー。真実子は［風読み（ヴァンリール）］と［音響拡大（ソン・グランディス）］を覚えた。

姉がサブ職にプロレスラーでもよかったような…でも実戦経験はないですからね。実験台にはしたけど。

サブ職が拳闘士でも兄妹はスルー（妹気がついなかった。兄言ったら面倒そう）でした。

Ａｃｔ　０８．　酔ってます

二人の騎士が恥ずかしそうに立ち上がった。

「あ～そういえば、聞きたいことがあるんだど～」

すっかりと気安くなった騎士（チャラい）は、昨日と変わらぬ口調だ。

少しだけ騎士（毒抜き）が呆れたような顔をしてた。

まるでいまどきの若い者は切り替えが早いな、みたいな中年の顔でしたよ。

「答えられる範囲なら」

「ありがと～、サミィ殿。さっそくだけど、ジークホークの旦那が降格したってどこで聞いたのかなぁ。情報が早くてびっくりしたよ～」

きら、と騎士（チャラい）が目を光らせたが、兄は爽やかに歯を光らせて答えずに笑っていた。

ぷくくく、と気がついて、一人笑ってると兄がわざとらしく咳をしてみせる。

へいへい、騎士（チャラい）に熱い視線を送られるけど、黙って

おきましょうか。なので、後でなんか奢れ、兄よ。

きっと、こんな感じだろう。

騎士（毒抜き）が降格されたのを知った。

←

抗議しても聞き入られない。

←

元凶はきっとあの家族だ。偶然遭遇か、探した岸田兄。

←

思いをぶちまけて、殴りかかった。

←

廊下で乱闘。

つまり情報源（ニュースソース）は、たぶん騎士（目つき悪）である。

以上、真実子の兄の推測でした。

でも間違いないと思う。よかった無駄にイベント発生させてなくて。

それをあえて披露しないことで、兄は自分が精神的に優位に立とうとしているんじゃなかろうか？

さきほど叔父との追いかけっこでレベルが1上がったとはいえ、まだまだ彼ら騎士を二人相手にには勝てるとは思えないから、せめてーみたいな。

でもワザとか、反射的にかわかんないけどね。

他人から見ると、兄はどんどん底知れないというイメージがついて、下手に喧嘩を売ってくる人間が減るためだろうと推測される。時々、自分になんの関係もないことがあっても、何も答えずに笑うのだ。

関係のないことなんだから、兄の痕跡はまったく出てこない。しかし、あの男は痕跡もなく、あんなことをしたのか……と周囲の人は勝手に思い込むわけだ。

……いや、時々マジで兄が仕掛けてる時もあるのだが。

今回は騎士（目つき悪）が怒られるのを避けただけかもしれないけど。

「まぁ、大体わかってるけどさ～」

わかってるなら、答えにくいこと聞いてやるなよ。

「もう少しで出発するのだが、ミィコ殿は上着を着替えていただきたい。それでは顔立ちも手伝って少し目立つだろう。こちらでシャツを用意させてもらうので構わないだろうか」

こくり、と頷くと、ばしんと後頭部を平手で殴られた。

この遠慮のない痛みは姉だ。というか兄に殴られていたら、私一撃で死亡する可能性もなきしにもあらず。クリティカルヒットじゃ

ないことをいのるばかりだ――というかなぜ姉に殴られた、私。

恨めしく姉を睨むと、小さなため息が返ってきた。

兄は苦笑で、騎士達はびっくりしている。

「言葉。ちゃんと返事しなさい。今日からお世話になるのよ。特にこのおっさんはミコの護衛になってくれる人なんでしょう？いっつも私たちが側にいれるとも限らないんだから、慣れなさい」

敬ってんのか貶しているのか微妙だな姉。

おっさんって言っちゃったよ。

慣れろっていわれて慣れるもんなら、とっくに前の世界からやっておりますが――戦闘態勢にならないでください。ごめんなさい。

はい、もうしません。

「私じゃなくて、あっちでしょう」

姉の親指が方向を示す。

騎士（毒抜き）が頬引きつってるの気がついてあげてよ姉。

「…シャツで構いません……言葉は、以後気をつけます」

「あ、そうか、わかりました――わかった。俺も慣れる様に努力しま――しよう」

「…はい」

だが大人な騎士（毒抜き）は生暖かい笑みを浮かべて、鷹揚に頷いた。

「それから、ミコ。先に言っておくけど、この方はジークホーク＝アルケルトさんで、こっちがチャイラ＝アマデウスさんだからな。覚えろ」

「ある、けると殿……あるけると、殿。あるけると殿」

あるけると。あるけると。アルケルト――今度、呼びかける時には忘れてるような気がする。

自慢じゃないが、顔と名前一致しない上に、名前覚えるの得意じゃないから。

よっぽどの知り合いじゃないと呼ぶ機会なぞないからな。

「……も、もし呼びづらいようだったら、ジークホークで……いやジークでいい」

頬を引きつらせるけど、心の広い大人だな――ある、あるけると。殿。

ありがたくご好意を受け取らせてもらおう。

「――ジークの旦那」
「ぶはぁっ！」

耐え切れない様子で騎士（チャラい）が噴出した。

それを睨みつけるジークの旦那……よし、これならいけそうだ。

「笑うな元凶。お前が言い続けてるから、小さな子が真似したんだろう」

ち、ちいさな子って――う、ぐぐぅ、これからお世話になる人。お世話になる人。私は大人。私は大人だから気にしませんし。全然、気にしませんし。

「ミコ、とりあえずアルケルトさんを睨むのやめろ、な？それから、旦那じゃなくて『さん』にしろ。『さん』に」
「ジークさん」

よしよし、と兄が私の頭を撫でる。
ジークもほっとしたように頷く。駄目か、ジークの旦那は。

「うぶぶぶ…俺もチャイラでいいよ。苗字呼びづらいだろうし」
「「黙れ、チャラ男」」

私の声と姉の声が寸分変わらず重なった。
お前は岸田一家の女チームから、人類だと分類されていないんだぞ。

「な、なんで俺は名前じゃないの？突然渾名？」
「……申し訳ない。昨日のエロ発言が尾を引いているんだと思うが」
「ふ、変態に人権はないに等しいのよ。認めてほしかったら、それ相応の働きしなさい。チャラ男」

姉、女王様というか男前というか発言かっこいいけど、その人、姉の護衛じゃないの？
あんまり相性…よくなさそうだね。

なんか姉が魔法習えっていってたの、この種馬じゃなかったっけ？悪い人じゃないだろうけど、いささか拒否反応がでてくるんですけどー。

「チャラオって…なんかよくない感じがするんだけど」

どうやら言葉の意味までは理解していないようだ。
しかし友好的ではない呼び名であることも察したようだ。
そういえば、この人名前もなんかチャラチャラしてたような気がするんだけど、思い出せない。

興味のないものはさらに思い出せない。うん、人の世の常である。

「……チャラチャラした男の意味です」

「俺はね。すべての女性に愛を注いでるだけなの。お子様にはわかんないかもしんないけど」

うん、人類の多くの女性を敵に回すチャラ男的発言だな。

でもナンパ師の自覚はあるようですね。

というか、お子様言うな！

「現時点でお集まりの岸田家の皆様。静粛なる拝聴願います。第八十二回、岸田家裁判が開廷しました。議題は赤毛の青年の呼び名についてですが、チャラ男でよいでしょうか、どうでしょうか。いえ、いいですよね。ご賛同の方は挙手を。そうでない方も挙手を」

姉と私の挙手により、無法地帯岸田一家の独裁判決により、二対一で勝訴を勝ち取りました。

勝訴チームの健闘を称えて、熱い握手。

「……ミコ、いつになく滑らかな喋りだな」

「す、すまんが……サミィ殿の家族は、皆こんな感じなのか？」

この微妙なノリについていけなかったジークが呆れ顔で頭を抑え

ている。

すみません、大体こんな感じです。でもその内慣れるんじゃなかろうか。たぶん。きっと。そうだといいですね。

「俺、結構モテるのに。引く手数多なのに。チャラ男…チャラ男」

「すみません、俺の力不足で」

ぽんぽん、と慰めるような兄の手が、チャラ男の肩に置かれた。

よくいうぜ、全然止める気なかったくせに――というか、慰めるなら、その爽やかな笑顔しまえよ。兄。

・　・　・　・　・

それからジークの手配ですぐに侍女さんにシャツを届けられて、私は浴室で着替えた。

ついでにチャラ男が肩を落としながら、抱えていた頭巾外套（フードマント）をくれた。

来る前に騎士仲間と侍女たちのを奪って――いいや、お金と色気にものを言わせて拝借してきたらしい。

新品だと目立つからか？よくわからないけど。

使い込んではあるが、私とっては上等な麻っぽい素材の鶯色（うぐいす）の頭巾外套（フードマント）を貰い、それを目深に被った。うん、ファンタジー気分。いや、がちファンタジーですが。

姉が小豆色で、兄と騎士二人はくすんだ焦茶色で、頭巾（フード）なし。

時間が近いとのことで、移動したのが、王宮の厨房近くだった。朝食を終わったあとだというのに、すでに彼らの持ち場は戦場らしく、忙しそうな声が響く。

そこで、王宮の食料などを搬入している業者が荷物を降ろした後に乗せてもらうのが、この王宮のした働きの人々の移動手段らしい。朝と昼の二回。

曰く、城から下町まで死ぬほど歩くとのこと。

なので荷物を降ろした後に報告のために街中に帰るらしい業者の馬車の空っぽの荷台に乗せてもらうようになったのだとか、なんとか。そして業者に格安とはいえ小銭を渡す、ギブ&テイク。

王宮の裏門のようなところで、中身を確認するらしいが、身分証

が必要で、それを確認しないと門すら開けてくれないらしい。どうやら叔父が事前に用意してくれたようだ。すんなりと外に出れた。

本来なら王宮の馬車を使うらしいが、結構目立つらしいからやめたようだ。

馬の装備にも馬車の部分にも王家の紋章が入っているからだとか。

「皆さんの馬車に比べれば、地獄のような場所だが、行きだけは我慢してくれ」

大分言葉も安定してきたジークさんが、ふう、と息を吐き出した。

ただその馬車の荷台は新鮮な野菜の匂いで満ち溢れ、座る場所などロクにないのが難点である。

広くはあるが、地べたに座っているだけだし、尚且つゆれる。

尻が…尻が二つに割れる。いや元々か。

車の比ではない振動だ。尚且つ道がアスファルトではなくて、石畳という些細な段差が、一層それを煽っているとしか思えない。

出発して数秒で姉は、片膝を立てて座っていた兄の寝ている太ももに尻を乗せて回避した。

兄は邪魔くさそうにしてたが、姉が避ける気がないとわかると面倒そうに放置してしまった。

私は眼鏡をポケットにいれて、ぐったりと、壁に凭れている。

「…うぇっぷ……」
「ミィコ殿は乗り物に弱いのか」

一瞥する元気もないよ。話すと胃液がこみ上げてくるので懸命に押さえ込む。
かわりに兄が「そんなようなものだ」と答えていた。
兄よ、車の中でも本が読めるお前と一緒にするな。うぇっぷ。
姉も騎士も車で平気だった私が馬車で弱っていることに、不思議そうな顔をしていた。
いや最初は元気だった。
小窓がついていることに気がついて、そこから流れていく景色を楽しんでいたのだが、人が多くなるにつれて、恐ろしいこととなった。
ステータスである。
彼らのステータスが、文字の羅列がものすごいスピードで流れていく…おぇっ…見なければいいのだが、視界に入るもだから追ってしまう。
あれだ。車から車道の真ん中の白線を見続けているような感じなのだ。
速度がもう少し速かったら嘔吐しただろう。

すぐにクラクラきて、眼鏡を外して懲りずに外を見たのが悪かった。

眼鏡を外しても、外の人のステータスが消えないのだ。

驚いて部屋の中を眺めても、誰一人ステータスが表示されていないというのに何故？

もしかして、ステータスが表示されるのは『眼鏡』じゃなくて、硝子越しとかなにか視界に透明なものを挟んで見えるというものなのだろうか？これは後で兄と実験しよう。

ともかく『乗り物酔い』ではなく、私は史上初であろう『ステータス酔い』であった……うっぷ。

Ａｃｔ　０８．　酔ってます（後書き）

なんで乗り物酔いの人を見ると乗り物酔いになるんですかね？精神的なあれでしょうか？うぇっぷ。

【ある騎士の起床】

周囲を見渡すと王宮に備わっている医務室の床だった。

初老の医者が「気絶したところを運ばれてきた。外傷がないのでとっととでてってくれ」と首をあきれた様に横に振っている。

く、またしても、あの一家に！

騎士は歯噛みしながら、転げるように医務室から出て行くと迷わず、ある客室のドアを開けた。そこには誰もおらず、通りがかりの騎士が外出したことを口にした。

「あれ、お前も護衛に組み込まれたんじゃなかったけ？」

その言葉に、はっと我に返る。

しまったと思ったが、すでに時遅し。職務をまっとうできずに立ち尽くす騎士であった。

彼が第二騎士団団長に叱責を受けるまで、あと十五分。

Ａｃｔ　０９．　そうさ、武器屋に行こう

整備された灰色の石畳を歩む人、人、人。

同じく石か煉瓦でできた二階ないし三階建ての一階部分の店舗は開店しており――この時間で閉ってたら、商売として成り立たないだろうが――人の出入りが激しい。

道の傍らで遊ぶ子供達。籠を腕にぶら下げ買い物に向かう主婦らしき女性。商人風の男や、多くの荷物を持つ男。売り込みの店員、大道芸人。剣を腰からぶら下げる冒険者風体の人々。

二輪馬車や、相乗馬車らしいのを器用に避けて歩いている。

王道中世ヨーロッパな剣と魔法の世界。

本を読んだり、ゲーム画面で見ているはずなのに、ずっと新鮮な感じた。

騎士達に案内された昼間の大通りは活気に溢れていた。

昨日の夜と同じ道とは思えない。

おぉう、凄い。あれはなんだ？子供たちは何の遊びしてるんだ？いや、店先に並んだあの黒いイボイボは、何に使うんだろう。食べ物は？食べ物はどこで売ってるんだ！叔父さんを労って、なんか作ってやらなくもない――お、なんか美味しそうな匂いが…あまり期待するのもなんだけど、屋台とかいいよね。人波の向こうに見える石のアーチみたいのはなんだ――冒険者と冒険者が喧嘩してるし、あっ、かたっぽは杖も持ってるから魔法使いか？

これはやばい。
もの珍しいものばっかりで、めっちゃテンションあがる。

岸田三兄妹ｉｎイシュルス城下です。

ついでに馬車の中の話だとジークとチャラ男の二人の騎士の他に、町で待機してた複数の騎士がこっそりと私たちの周囲に存在するらしいのだが、さすがに人が多くて、ステータス表示をしてもわからないだろう。

眼鏡外しているので、ステータスも見えない。
ステータス酔いもでまだ胸が気持ち悪いけど、テンションの高さでチャラにできる。

馬車の中でのステータス酔いもそうだが、眼鏡って意外にそこそこ貴重品らしく、多くの人間がかけてないからすぐ顔を覚えられちゃうんだってさ。

だから兄も外しているので、顔立ち以外に目立つ要素はない、はず…？

でも姉がな…もうすでに、ちらちらと通りかかりの男性の目を集めちゃってるので、鬱陶しいと頭巾（フード）を被っている。

これだけ人がいれば、私たち程度に誰も気にかけないと思うが、用心に越したことはない。

ちなみに騎士（目つき悪）も城下への護衛に参加予定だったのだが、言わずかな誰かさんのせいで、まだ気絶しているらしい。それとも、また、だろうか。

昨日は姉に気絶させられて、今日は兄に気絶させられて、明日は私の番だろうか？うぷぷぷ。

到着したのは町の中心に程近い中央公園の十字路の角。

買い物に出かけるには、ここからの移動が一番楽だという話だ。脳内メモに記載だな。

「おい、ミコ。ハシャぐのはいいが、逸れてくれるなよ？兄ちゃん、土地勘ないから探せないぞ」

「迷子になったら、そこ動かないのよ？分かってるわね？」

ご迷惑をおかけしております、我が親愛なる過保護どもめ！

く、迷子になっても自力で帰れるし！ただ王宮の門番が入れてくれるかと、無事かどうか、は別だけど。

「……ミコ殿は、はしゃいでいるのか？」

「「ものすごく」」

ジークが兄と姉の異口同音の即答に、困惑げに眉尻を下げて、私を眺める。

ついでにチャラ男の微妙に疑わしい視線が加わった。

気まずくなって、視線を逸らす。

私がはしゃいでたらまずいのか？っていうか、仕事増やすんじゃねぇよ、的なことなのだろうか。

でも異世界だよ。城下だよ。人だよ。気分はヘブンだよ――うん、語呂がいいね。

ともかく、お昼ぐらいまでに武器を買って、お城に帰って、地獄の――……今だけ、はしゃいでも許されるよね。帰りたくないんだけど。

「まずは一番近いのが、サミィ殿の武器屋だな。本来は専用に作るのが好ましいんですが、時間がないので、既製品を買うことにしよう」

事情を騎士団長から聞いているらしいジークは、やや青ざめている。

四日後に来るゴブリンとの対戦に岸田兄も参加しちゃうよってか、たぶん岸田末っ子もね――あ、これ王命。みたいなことを来る前に言われていたらしい。

兄は尋常ではない戦いっぷりを目の当たりしているだろうが、剣に関しては素人だし、私にいたっては戦闘員ですらない。

それを戦場に出せるレベルまでに上げとけよ、とか無茶ぶりじゃないの？

「長剣（ロングソード）なら、行きつけの鍛冶屋がある。そちらに向かって構わない

か？」
「ええ、お願いします。俺たちは田舎者とかわりありませんから」
町のことなら、まったくわからない自信があるよ。
田舎者に姉の眉が嫌そうに歪んだが――たぶん、私は田舎者じゃないわよとか内心思ったんじゃないだろうか――空気読んだね姉。兄の足踏んだだけで止まって、偉いよ。
本当に人多いなぁ。
逸れたら見つけてもらう自信ないよ。
先頭にジークで最後尾がチャラ男で兄弟は挟まれて移動した。
ゆっくりと誘導してくれているのでなんとかなっているが、人がごったがえしていて、ちょっと視線を前から背けると人波に飲まれることだろう。不味いな。迷子になったら道の端で待つしかない。
兄ならすぐにゴタゴタに巻き込まれるから騒がしいところ探せばいいし、姉なら男の人が集中してデレデレしてるところ探せばいいけどさ。
私、一般人のオーラしかでてないから、紛れると探すの大変なんだよねー、ってよく言われるよ。
かくれんぼなら任せろ。まず普通の人たちとやったら最後まで残るぞ。
時々兄ですら私を探せないぐらいだし。

しばらく直線距離を進んで、横道に一本入ると、人が極端に少なくなった。
三分の一もいるかどうかで、随分と歩きやすい。
喧騒が遠くなる。
そうしている間に、けっこう近場であったらしい一軒目の店に――武器屋だよ、武器屋！――到着した。
看板には槌と剣が交錯しており、三つ葉っぽい葉のレリーフで囲われている感じだ。
年季の入った古ぼけた木の扉をジークが押した。
ぎぃいい、と、ホラー映画にでてくるような錆付いた蝶番の音に凄くびびった。
大丈夫？ここ、武器屋、なんだよね？
微妙に不安になりながらも、姉の後ろに続いた。
足を踏み入れた店内は、すこし埃っぽくて、なにやら金属臭もする。
歩くたびにギシギシと音を上げる床。
ひどくゴチャゴチャしており、入り口の横の窓から光が差し込むだけで、倉庫のように薄暗い。
だが商品の多さはすごく、長剣、大剣、細剣、短剣、刀、三日月刀。
剣だけで、ざっと１００以上はあるだろう。

というか、剣しかない。
それがさして広くない店内の、樽に刺さったり、棚に積み上げられたり、壁に立てかけられたり、果ては床に無造作に置かれたりと、所狭しと並べられている。
まるで一山幾ら八百屋並みの感覚である。
どこになにがあるかなんて、まったく気にしていないのだろう。
カウンターには、武器屋には不釣合いな、ひょろりとした若い茶毛でそばかすの男の店員が剣を点検しているのか、刃の部分を水平にしたりして眺めていたが、こちらに気がついた。
にっこり、愛嬌のある顔で笑う。
武器屋の親父って、もっとこう、いかつい感じだと思ったけど。
なんとなくだが、商売上手の印象がある。
ハンバーガーだけ頼んだはずなのに、いつの間にかポテトとジュースも売りつけられているファーストフード店員のスペシャリスト的なスマイル０円。

「あ、いらっしゃいませ、アルケルト様、アマデウス様。剣でも折りましたか？」
「やぁ、ザナ君久しぶり～。幸い剣は無事なんだよ。大切に扱ってるからねぇ～。今日は別件。悪いんだけど、この人に長剣、見繕ってくれないかなぁ～」
「よろしく」

「はい、長剣ですね」

と、いわれて兄が一歩前に出ると、店員はカウンターを出てきて、兄を頭のてっぺんから足の先まで眺めて、一人頷く。

兄はすぐに眼鏡をかけて、ステータスを表示させているらしい。ぼったくられたら堪らない。騎士の御用達というぐらいだから、大丈夫だと思うけど。

「そうですね…まずは、この三つぐらいで、試してください」

ひょいひょい、と棚、壁、テーブルから、剣を取り出すと、ひとつずつ手渡していく。

鞘から出された抜き身の長剣の手持ちを渡される。

「ほう、これは……」

ジークはどこか感心したような声色だ。

戦闘中は忙しくて、見てなかったんだろう。武器が剣でもなかったし。

兄は右手で受け取って、手持ちの部分に左手を添えて、軽く揺らすように真正面に抜き身を持ってきて構えた。

本格的に剣術を習っていないはずの兄だが、実に様になっていた。
剣の形だけとはいえ、素人目にもしっかりしている。

重心がやや前で、肩幅に開かれた足の、右だけが半歩前に出ているような感じだ。

剣道の形に近い。

ゴブリンとの戦闘から推測するに、兄は速攻型戦士だ。
騎士たちのような重守型戦士とは逆で重装備をさせれば、長所である機動力が失われる。

それを考えると、剣もしなやかで軽いものが好ましいだろう。

「どこかで剣術を習ってたんですか？形的には？東方ですかね？こっちじゃ顔立ちも珍しいし」
「何度か型を見たことある。東方だとは思うが…少し重いな」

パターン的には日本戦国時代みたいな島国が群雄割拠しているんではなかろうか、と兄も思ったに違いない。実際そうであるかは、別として。

でも武器屋がいうのだから、ちょっと信憑性がある。

「みたことが、ある……」

ジークは口元を引き攣らせる。

この人あんまし腹芸ができない人なんだなぁ。

見たことある程度の剣で、あそこまで戦えるなんて、なんて男だ――というところだろう。

「いやーまたまたご謙遜を。お客さん、歴戦の戦士みたいな空気してますよ。さすがアルケルト様、アマデウス様が連れてきたお方だ。騎士団に入るようにスカウトされたんでしょう？」

「まー、そんなとこー」

チャラ男が笑って、肩を竦めてみせる。

二本目、三本目に重心が偏ってるやら、刀身が長すぎるやら、感想を告げて、兄が店員に長剣を返すと、カウンターの奥から不機嫌そうな声が聞こえた。

「おめぇ、その型で戦うなら、刀にしときな」

のっそりと、私の胸あたりまでしかない長い白髭の男……目尻に皺があるから、子供ではないだろうが……が、向かってくる。体ががっちりとしているし、眼光の鋭さが半端ない。

ただ白髭がみつ編みなのが、恐ろしさを半減しているが。

私の推測が正しいなら、ドワーフだろう。

親方っぽい。

「ああ、ゴーゲンディーブル殿、やはり貴方もそう思われますか」

ごー…うん、わからん。

自慢じゃないが、名前は覚えられないであろう。

「ドワーフ…？」

思わず零すと、男ははん、と大きな鼻を鳴らした。

「ドワーフも見たことねぇのか、坊主。どこの田舎もんだか」

「……すっごい、遠いところの」

曖昧に答えると、きょとんとした親方っぽいドワーフは豪快に笑った。

ドワーフって、洞窟の中に住んでいるものかと思っていたが、どこにでもいるのか？

「普通お前ぐらいの坊主ならもっと、つっかかってくるんだがな」

「事実だから」

「そうか」

お、おお。私、なんとか、異種族の方と会話しちゃってるよ。
同族ですら、まともに話できないのにな。

「なに、ドワーフって」

暇そうにしていた姉が、後ろから小声で話しかけてくる。
でも、改めて尋ねられると、困るな。
ドワーフってなんだろうね。

「手先の器用で職人気質の種族。普通は洞窟に生息して、鉱物を発掘する作業を好む。人間より小さくて髭が生えてるぐらいしか、私も知らない」
「へえぇ…あっちの背の高いほうも、ほかの種族？」

いや、知らんがな。
人じゃないの、そばかすの店員は…あれ、でもちょぴーっと耳とがってるな。
もしかして種族違うか、ハーフとかか？
私が小首を傾げると、姉も小首をかしげたが、どうでもよかったのか、また興味なさげに周囲を伺っている。
なぜか時折目を細めて、ちょこちょこ場所を移動してるんですけ

ど……どったの？
なんか見えちゃってるんでしょうか？

「ともかく、そっちのにーちゃんは、悪いことはいわねぇ、長剣はやめとけ」
「俺の型では長剣は難しいですか？これから習う予定なんですが」
「使えねぇわけじゃないが……おめぇの型は独学だろうが基本が出来上がっちまってる」
「俺も同じことを考えてました。騎士としての基本を教え、得物は長剣にする予定だったんですが」

ドワーフの言葉に、ジークが同意する。

「無理に変更させて、苦戦するよりは、長所を伸ばしたほうがいい」

二人とも兄の型を見てるだけで、色々とわかるらしく、動きがどーたら、足さばきやら、刃の幅やらで、盛り上がっており、そこに兄も加わっていく。

うむむ、凄いな。よくわからんがプロフェッショナルって感じがするよ。もしくは戦闘馬鹿かどっちか。

いろいろ回るのめんどくさいから、私もここで武器を買ってしまおう。

ゴブリンから奪った奴があるが、正直あれを長時間もって歩くに

は重いのだ。
もうちょっと軽いのがいい。
きっと店員と騎士たちが顔見知りってことは、騎士御用達だろうから、悪い店ではなさそうだし。
きょろきょろと、短剣を探して見渡すが、どれを触っても崩れ落ちそう。

「坊ちゃんもなんか探してるのかい？」
「ん。軽い武器（やつ）」
「ちょっと待ってな」

頭から足の先までジロジロと眺めた後、周囲を物色して、複数の短剣と細剣を手にして戻ってくる。
一番下になってる短剣を引っ張り出しても、崩れ落ちないとは、流石というべきか。
いちいち、ドミノ倒しになってたら商売にならないか。

「まずこれ」

柄の部分を持たされた細剣（レイピア）である。
長さは腕を下げても地面につかない。
兄の長剣と比べると、かなり短いのがわかる。

うーん、柄の部分がまるで女子高校生の携帯電話並みのデコのように、ごってごての装飾がされているせいか、些か重い感じがする。バランスも手の方が重くて…これを利用して、動かすのか？

軽く振って、あのオリンピックとかで見るような型で構えてみる。小剣を持っているほうが前を向き、敵に対して完全に体が横になっている状態だ。

これだと腕に負荷が掛かって、長時間は持たないのは明白だ。もっと軽いものじゃなければ。

でもあんまり軽いと、私の場合は武器に体重を乗せるには不十分だし、筋力もあるわけじゃない。

首を横に振ると、そばかすの店員は細剣と交換するように短剣（ダガー）を渡してくる。

細剣よりも刃渡りが半分ほどしかない短剣で、昨日お持ち帰りしたゴブリンの短剣より軽く、剣先だけが、ちょっと曲がっているやつだ。

前傾姿勢で構える。

悪くない。基本ヒット&ランになるであろう私には、いいかもしれない。

が、問題もある。

刃渡りが短いが故に、かなり敵と接近しなければならない。

考えても見てくれ。三十センチ定規を手に持って、それが当たるまで相手に近づくとなると……すごく、すごーく、近くない？腕の長さにもよるだろうけど、私の腕の長さは普通だよ。

細剣だと、刃渡りは短剣より長いし、急所を見極めて刺すならいいけどさ。

速度を上げれば、なんとかなるんだろうか？

ただ難点をあげるとしたらグリップが、なんというのか大きすぎて握りづらい。

「もしかして、武器あんまり持ったことない？」

「……昨日、初めて短剣投げた」

もしかしなくても、刃物なんて、カッターとのこぎりと包丁ぐらいしか握ったことないよ。

ちなみに包丁だったら、8年ぐらい握ってるぞ。

そばかす店員は困ったような顔で唸る。

二本目を私から回収すると、三本目をそこら辺に放置して、別のやつを引き出しから手にする。

刃はまっすぐで、鞘に納まってて、埃をかぶっていたらしく、店員が埃を払っている。

「これさ…」
「ミコ、待ちなさいっ！」

受け取る寸前で姉が私の襟首を掴んで引っ張る。
視線を向けると、姉が店員の剣を一瞥してから、首を横に振っている。

私は慌てて眼鏡をかける。

【呪われた短剣（ダガー）】

中確率でクリティカルヒットを出すが、呪われている。
神殿で呪いを解除しないと他の武器が持てない。
販売価格：６２０　Ｂ（ビル）

ひぃええ！短剣の周囲から、黒いオーラが三つほど小さな手の形になって手招きしてるよ！超怖い！呪われていっつも手が見えていたら、私いつか失禁するよ！チキンだからね！危なかった！ありがとう姉！

あれ黒いオーラの手が悪い感じもしないけど良い感じも全然しない、見た目がすでに超怖いよぅ！

ぎゅうぎゅうと姉に抱きつくと、なだめる様に姉が私の背中を撫でる。

よかった。きっと姉は精霊が見える目で気がついたのか、それとも他の人にも見えてるのか？

「どうした？」

こちらの騒ぎに気がついて振り返る兄に姉が無言で剣に指を刺す。
兄が苦笑を浮かべる。

「ま、武器屋だからな…」

いわくつきの一つや二つ出てくるだろうというのか！

可愛い妹が呪われそうになって――――いぎゃぁああ！！兄！兄！！兄よぉおお！！お前の持っている日本刀もどきから、物凄い数の赤いオーラの手が腕に巻きついているぅううう！！

【百人切呪詛刀（ひゃくにんぎりじゅそとう）】

人を切れば切るほど戦闘技能が向上、高確率でクリティカルヒットになるが呪われている。
神殿で呪いを解除しないと他の武器が持てない。
百人の人間を切ると使用者は刀に魂を食われる。残り八人。
販売価格：９３０００　Ｂ（ビル）

「ははは、人斬りだな」

笑顔で言うことじゃないよ！

どこから何を突っ込めばいいんだ私は！

Ａｃｔ　０９．　そうさ、武器屋に行こう　（後書き）

これで、ストックゼロとなりました。
少しアップが緩慢になるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

ぢゃちゃちゃちゃーん。雅美は呪われた武器を手にした。教会で呪いを解いてもらうまで、他の武器が握れない。

Ａｃｔ　１０．　赦者（アヴォワール）

私は武器屋で、ドワーフが選んでくれた小剣二つと短剣二本をお買い上げした。

正直、私は自分の戦闘にあっている武器がいまいち分からない。だから、軽いものを選んでもらった。

ついでに姉も、護身用の細い短剣を買った。

ベルトに挟んである護身用のスタンガンの横に短剣一本を挟んで、姉もスカートについている細いベルトに挟んで歩いていた。ぱっとみえないように背中に回す。

後はチャラ男が持ってくれるらしく渡した。

「ひっ！」

兄の腰のベルトに備えられた日本刀っぽい奴から、赤いオーラのようなものでできた小さな手が私に伸びて思わず姉の後ろに隠れる。

普通は抜刀するまで、呪われることはないらしい。

だが『この刀は呪われている。抜刀するな』云々の説明を受けながらドワーフ親方から受け取った【百人切呪詛刀（ひゃくにんぎりじゅそとう）】は兄が持っただけなのだが、すでに手遅れだったらしく、他の武器を手に取ろうとすると腕が異様に重くなるらしい。

まさかドワーフ親方も、持っただけで呪われると思わなかったらしい。

なにせ、ここまで普通にドワーフ親方は持ってきたのだ。

力のある刀匠が製作したもので、魔力が強いらしい。そういう刀は多少の意思があるらしく自分で持ち主を選別するんだとか。呪われているから外れないオマケつきだが。

剣以外にも魔力のある遺物や、武器や防具などは、持ち手を選ぶんだってさ。

そういった所有者や、使用者を選ぶ道具を『遺物（オプテショーズ）』と呼び、意味は意思のある道具。

んでもって、使う人間を『赦者（アヴォワール）』と呼ぶ。

道具に所持することを赦された者という意味なのだとか。

勿論『赦者（アヴォワール）』以外にも手にすることができるが――でも国宝級になるとできないこともあるらしい――性能が格段に劣るのだという。それでも魔力や神力を帯びた武器だから強いんだそうだが。

昔金に困った男が売りにきて、怪しい風体だったが、名刀なので買い上げてやったんだとか。

ドワーフ親方は最初から気がついていたらしいので、危険だと奥で眠らせてたらしく、兄を見て思い出したとか、どうとか。

刀に掛かっている呪い自体は神殿でも解除できないとのこと。彼らができるのは主に祝福で、反対に呪いを扱う専門の魔法使い『呪術師』に相談せねばならない。腕のいい『呪術師』は費用が結構か

かるので、その分安くしてもらった。

声を大にして言おう！兄、お前はもう呪われている！

「あ、やっぱり？」

ため息を一度ついて、兄は頭痛でもしているのか頭を抑えて、片目を細めた。

でもいい刀なので、呪いさえ解ければ役立つだろうってさ。

刀は赤いオーラが出ており、それが子供サイズの手になっているんだが、兄の右腕にべっとりと隙間なく巻きついていて見てる分にも気持ちが悪い。さっきのステータス酔いの余韻と相俟って吐きそうだ。

岸田兄弟とドワーフには赤い手が見え、赤いオーラが出ているぐらいはチャラ男も分かるらしいが、魔術師でもない限り、普通の人間には見えないのだ。店員には全くわからないらしいが、ジークは辛うじて危険であることがわかるらしい。長年の経験で何度か呪物をみたことがあるのだとかなんとか。

「刀の帯びてる魔力っぽいものがミコに向かってくのがわかる」

「うむぅ、刀はおぬしを赦者（アヴォワール）に選んだはずだが」

何故か私は刀の半径一メートル以内に入ると、うにょにょにょ～

と手が伸びてくるんですよ。

呪われた剣が後二つほど棚と床にあったのだが、その二つも青いのと赤黒いやつが、オドロオドロしく私に向かってくるものだから、武器屋がトラウマになりそうだった。

今日寝れなかったらどうしてくれるんだ、兄ぃ！

枕元で子守唄歌って――――いや、すみません、耳元で殺人的な歌声は結構なので、長編ミステリーでお願いします。どうせ最初から最後まで無駄に暗記してるんだろう。犯人がわかる前に寝ますが。

なので、姉の後ろに隠れております。

え？なんで姉の後ろに？他の奴らを盾にしとけ？いいこと言った、そこの君！

しかーし、不思議なことに姉に赤い手が伸びないのである。

感じ的にはうにょにょにょ～と伸びて、姉が近くなるとやべっ！みたいな感じで、止まって、うにょうにょ戻っていくのである。

それには、呪物を知るドワーフ親方ですら頭を悩ませているようだ。

よくわからん現象に頬を引きつらせていると兄が近寄ってくる。

「ミコ、ちょっとこい。触ってみろ。もしかしたら、なんかわかるかもしれないしな」

えー、超気持ち悪いんですけど。仕方なく、本当にしかたなーく姉の後ろから出た。

「呪われたら面白――――や、べっ」

普通に歩み寄ってきた兄の歩き方が、私の二歩手前でおかしくなる。

心底焦る兄の声に、背筋が凍る。

ぶわぁあ、と赤いオーラの手が兄の肩口までに広がった。

ごっそりと兄の表情が抜け落ちて、無表情になった。眼光だけが鈍く光る。

兄の足が床を滑るように一歩踏み込んだ。きし、と立て付けの悪い床が兄の体重の重みで鳴る。

少し前傾体制になり、兄の右手が刀の柄を握り締め、一瞬だけ動きが止まった。

抜刀。

あまりにも自然すぎて、誰も反応しなかった。

「っ」

辛うじて私は兄の柄を押さえ込んだ――――が、最早、私の行動は本能に近かった。

自分でもびっくりだ。長年危機に曝され続けたせいだろうか。ウサギが狼を見て逃げるが如く。その行為が今の私にとって、兄の刀の柄を両手で押さえ込んで、鞘から出さないということである。

が、凶暴な兄の筋力に負けして、掴んだ刀が鞘の中から二割ほど姿を露にしている。

ギシギシ、と床が兄の足元も私の足元でも悲鳴を上げている。

兄がイキナリ斬りつけてくるわけがない。そしてもし兄の意思によって斬りつけられていたなら、私はすでに、胴体とお別れパーティをしていなければおかしい。

まぁ、そこまで恨まれ――――…え？名前も言えない大人様限定ゲームのアイテムと肌色のＣＧ回収率を１００％にしたから？それとも、昨晩、兄が帰ってくる前に夕食の豚カツを一切れ拝借したから？それで殺されてたら年１５０日ぐらい殺されてるな私。

ともかく兄以外の意思によって、兄の体が動いていることになる。

百人切呪詛刀（おまえ）かっ！

現時点で、もっとも怪しい。

パターンだな、パター…いや、そんなパターンはノーサンキューでございますが。

赤いオーラもぶわっとなっていたこともあるし、予想通り、刀から伸びている赤いオーラの手が私の腕に絡みついてきて、腕から上ってくる姿が目視できる。

服を通り越して、皮膚から体内にひんやりとしたものが染みこんでくるような気持ちの悪さだった。

それのせいで、意識が削がれて、刀が四割ほど鞘から出てくる。

さて答えが出たけど、問題はここからだよね。

後ろに姉がいるわけだし、この状況を打破する手立てがない。

どちらにしても、筋力数値は兄の方が上。

兄が人切り刀から体の所有権を取り戻さない限り手立てはないし、はっきりいって刀を鞘から出した時点で、私の負け＝死であることは間違いない。

刀を抜く兄の初動から数秒。私と兄は膠着状態が続いた。

「お、おいっ！お前！！」

ようやくドワーフ親方が、兄の腕の異変に気がつき、怒声をあげた。

「え？」と間抜けなチャラ男の声が背後から聞こえる。

ぱっと見た感じ、この体制はよろけた兄を支える素晴らしくでき

た可愛い妹といったところか。
兄が妹をまさに斬り殺そうしているだなんて、誰が思うだろうか。
しかし、有効な手立てはないな。どーすんの私？徐々に体が後ろに下がっていく。片手で私の全体重を退けようとするなんて、さすがだな。
一か八かで、一撃目をかわして、二撃目の前に、兄に金的蹴りでも――――…
ドワーフ親方が兄に手を伸ばそうとするより先に、小豆色の外套が視野に入った。
ぱしぃぃぃぃん。
「いっっ！」
「え？」
まるで誰かが全力で頬を平手で殴られたような音――――それ以外に表現の仕様がない。私の目の前で兄が平手で殴られていた。兄眼鏡が吹っ飛ぶ。
姉だった。
しかも姉の平手は何故か光っているんですけど？なぜ？
それのおかげなのか分からないが、一気に兄と私に絡み付いてい

た赤いオーラの手が霧散していく。

「ふ～…、由唯、助かった」
「ありがと」

兄は息を吐き出しながら、刀を鞘にしまうと、額から滲み出ていた汗を袖で拭った。
どうやら、赤いオーラのほとんど見えないので大丈夫のようだ。
私も詰めていた息を吐き出しながら、その場にしゃがみ込んだ。
本当に驚いた顔をして固まっているドワーフ親方、ジーク、チャラ男。店員に至っては、ぽかーんと口を開けている。むしろ気がついた姉の方が凄い。
兄の初動から姉の張り手まで、十数秒も経過していないと思う。

「サミィ殿？」
「えーと、なに？今の～？」

突然、体を寄せ合った長兄と末っ子に、長兄の頬を叩く長女といったところだろう。
私が無駄に初撃を押さえ込んだせいで、体に隠れていたんじゃなかろうか。それで、彼らには何が起こったかわかってない。
というか、姉どうして、すぐにわかったんだろうな。

「説明しなさいよ」

もう一度平手を振り上げる姉に、両手を上げて兄が後ろに下がった。

私は兄眼鏡を回収して、誰か踏まないようにした。

「なんというか、刀握ってから頭の中で、ずーっと低い唸り声が聞こえててなぁ」

その時点で驚けよ！驚いたか？驚いてないだろ！普通は『わー！』とか言うところだろそれ！驚愕をここで使わずどこで……あ、ライアンツが連敗続きで機嫌の悪い叔父と会ったときか。でもそこは、死を覚悟するところか……。

「何事かと思ったんだが、ミコが近付いた瞬間、意識が押し込められて、全身が動かなく…というか、勝手に動き出してなぁ。この刀の意思に体を乗っ取られた」

「はぁ？それで、ミコに斬りかかったとかいうわけ？！」

「ん、まぁ…」

困った顔で言葉を濁す兄と、鬼の形相で兄を睨みつける姉。

「え、あ？斬りかかった？！」

店員の絶叫。彼は見えていたにもかかわらず、信じられないという顔をしている。

さすがに姉もよろけた人間をぶん殴るほど悪魔じゃないと思うけど。

でも音もしなかったし、敵意も殺意もなかった。

あったら、さすがに騎士達が反応していたと思うけど。

「お、おぉ！赦者（アヴォワール）の意識を乗っ取るほどの遺物（オプテショーズ）だったのか！素晴らしいもんだ！」

親方ドワーフが驚いたように、声を上げる。

そんなに喜ばれると若干殺意が沸くんですけど、なんでだろうね。

どうやら時々、やばい感じの遺物（オプテショーズ）は意識を乗っ取るらしい…覚えておこう。

「け、怪我はありませ――ないか？ミィコ殿？」

ない。あったら、もっと大騒ぎしてるよ。即座に姉に抱きついて、治してくれとおねだりだね。

ジークが屈み、眉根を寄せて、私を覗き込む。

「ミィコ殿？」

だから、ないって。みりゃわか――――すみません。姉、お願いだから睨まないで。

「……ありません」

ふぅ、そういや、口に出して意思の疎通とか言われていたっけか。危なく殴られるところだったよ。

私は埃を払いながら、起き上がる。

「兄が、刀に抵抗していたみたいだから…」

「ミィコ殿、そういうの、わかるの～？」

チャラ男の言葉に首を横に振る。

ただ単純な推測だ。

「初手で一瞬動き止まったし……兄が本気だったら、私は今生きていない」

じと～と姉が疑わしいような目で兄を見つめると、『多少はな』と気まずそうに肩を竦める。

不可抗力だったわけだし、姉に兄が殺されないようにフォローしといたぞ。

これで母が料理を作った時の兄のオカズは私のものだ。

「……普通は、遺物（オプテショーズ）に体を奪われた時点で、赦者（アヴォワール）の意思は消えて、奪われたままのはずだが」

あ、そのあたりは兄、基本的に規格外なんで、お構いなく。

兄が正気に戻ったのは、姉の手が光ったことと関係あるのだろうか。

死ぬまでっていってるんだから、普通は正気に戻らないってことなんだろうけど……後で気がついたか、兄に聞いてみよう。

なんか、刀からは赤いオーラは出てるけど、手は出てきてないし。

「それに、どうやら、こいつの呪いが消えたようだな」

ドワーフ親方も気がついたようで、不思議そうに刀を見つめている。

ちなみに表記はこうなっている。

【百人切呪詛刀（ひゃくにんぎりじゅそとう）】

人を切れば切るほど戦闘技能が向上、高確率でクリティカルヒットになる。
百人の人間を切ると使用者は刀に魂を食われる。残り八人。
販売価格：９８０００　Ｂ（ビル）

もう呪われていない。だからかよくわからんけど、値段上がってるし。
まぁ、あと八人斬ったら、魂食われるけどな。
一軒目でこれなんだから、他の店に買物に行くのがとてつもなく、怖いんですけど……う、うぅ。
前途多難って、こういうこと？

Act 10. 赦者（アヴォワール）（後書き）

そういうこと。

ドワーフ親方の魂の一口メモ。

■■■ 赦者（アヴォワール）

魔力や神力を帯び、特殊な力を兼ね備え、意思のある道具である［遺物（オブテショーズ）］に使用することを赦された者。
普通に使用するよりも、利用者に大きな力を与えてくれる。
しかし、赦者（アヴォワール）になる資格や、相性などは不明。一人で複数の［遺物（オブテショーズ）］を持つ者もいるといわれている。

■■■ 遺物（オブテショーズ）

魔力や神力を持つ道具。それらには意思があり、使用者を選択する。
選ばれたものは赦者（アヴォワール）と呼ばれる。特殊な能力を持ち、赦者（アヴォワール）を助けるが、それ以外の者に力を貸すことはほとんどない。そのため自分が持っているものが遺物（オブテショーズ）だと気がつかないものもたまにいる。
そして国宝級になると使用することも赦さないという意思をもつものがあり、触れるだけで害をなすことがある。

Ａｃｔ　１１．　そうさ、防具屋も行こう

呪いを解除しなくてよくなった分、金が浮いたので、兄はもう一本、刀をお買い上げ。

叔父から金は惜しむなと言われてるのだろうか？

金貨を惜しみなく払っているジークは全然嫌な顔をしない。

チャラ男も平然としていた。

そうじゃなかったら、絶対金銭感覚おかしいだろう？

ベルトも買って増やして、刀を二本も腰から下げているのは微妙だが、本人の強い意志を尊重致しました。

左右から刀をぶら下げているのは目立ちそうだが、外套の下なら気がつかないだろう、と。

どちらかというと右利きだけど、左も使えるから平気だろうね。

食卓で兄がキレると、両手に箸を持って阿修羅のように飯食べるから、無性に腹立たしいが、口は一つしかないんだよ。リスみたいに頬を膨らませて食べて美味しいかね。いや、うん、どうでもいいことだが。

片方は人斬れない仕様になっているので、普通に人を切れる刀がないと不安な――――あれ、そもそも人を斬る前提っていうのがおかしいよね。

でも襲われたら、仕方なくって峰打ちじゃ駄目なのか？

まぁ、ともかく親方ドワーフと店員にお礼を言って、トラウマになりそうな武器屋を後にした。

続いて、若干陰鬱になりながら防具屋に向かった。

そこは武器屋の店舗よりも二倍近い店で、尚且つ剣以外の武器が置いてある。

んでもって、でてきたのが……

「ジークホークじゃねぇか」

のっそりと、私の胸あたりまでしかない長い白髭の男……目尻に皺があるから、子供ではないだろうが……が、向かってくる。体ががっちりとしているし、眼光の鋭さが半端ない。

あれ？これさっきも同じことを考えていたよね。私。

つまりは。

「ドワーフ……」

「はんっ！今時の若いやつはドワーフも見たことないのか。どこの田舎もんだ？」

「……すっごい、遠いところの」

「そうかよ。ご苦労なこった」

デジャブか、これは。

背景が違うだけで、似たような会話しなかったか？
とういうか、同一人物…じゃないの？

兄も姉も、兄弟か親子かはかりかねるが、さきほどのドワーフ親方のコピーじゃないかと思っているに違いない。そっくり。瓜二つ……んん？よく見ると、髭の三編みが、二本あるけど。

「ご無沙汰しております、ゼンゲルディーブル殿…あぁ、こちらはゴーゲンディーブル殿と同じ里のドワーフだから、見分けはつかないやもしれないが」
「ったく、奴とは兄弟でもないのに、間違えられてかなわねぇぜっ！」

こっちのほうが若干、威勢がいいかもしれない。

髭以外に違うところを探すのが難しいぐらいなんですけども。
もしかして、先回りしてたとかじゃないよね？

私たち兄弟は、顔を見合わせて、湧き上がってくる衝動…笑動？を耐えた。ここで大爆笑しては、相手方に失礼になるのはわかっているが、肩が震えているのはご愛嬌だ。

「で、今日は何が欲しいんだい」
「彼らに見合う防具を、できれば軽くて丈夫なものがあればいいんですが」
「……ら？そっちの刀を差している奴じゃだけじゃないのか？」

ゼ…なんとか親方は、太い眉を不機嫌そうに寄せ……いや、もう親方ドワーフBでいいか…騎士たちを睨みつける。

「まさか、こんなチビと小娘に戦わせるほど、この国には騎士が不足してるのかよ」

ち、チビってチビに言われた！

私よりちっちゃいでしょ、親方ドワーフB！！

姉なんか小娘で額に青筋がたってるし――兄頑張って、姉が殴りかかったら押さえ込めよ。

撫でていた顎鬚を抜きそうな勢いで、親方ドワーフBがジークを睨みつけている。

「ご、護身用だよー。いくらなんでもねー」

「黙れ、種馬！ドワーフには複数の女の匂いをさせる奴は信用ならねぇって諺があんだ」

女の子が放って置いてくれないんだよ～、と乾いた笑いを浮かべるチャラ男であるが、頬が引きつっている。いいぞ、親方、そっちはもっと言ってやれ。

その後も、絶え間なく親方ドワーフBは文句を言いながらも、次

々に至る所から防具を取り出してくれた。
兄に金属の部分鎧を見繕いながら、私には黒革製の厚手の篭手と脛宛てを放り投げた。
装着すると、物凄く軽い。鉄かと思って持ち上げたらアルミだったぐらいの軽さだ。
……大丈夫か、革で？大きすぎる上に、革だよ？
その上、姉の装備はここじゃなくて、祝福を受けたものを神殿で買えと、よくわからない乱暴な忠告を受けた。
姉は肩を竦めて、興味なさげに下がる。

「ん？」

ヴィンと、どこかで微か変な音がする。
耳鳴りだろうか。
虫の羽音にも酷似しているが、もっと深いような感じだ。
周囲を見渡すより先に、親方ドワーフBに防具を渡されて、取り付けた。
…気のせいだろう。いや気にしない。精神的にそちらのほうがいいよね。
もしくは精霊ホイホイのせいだろう。
前と音が違うけど、種類とかで違うかもしれないし。

「こいつはなめした跳黒牛（ジーガ）だ。二重になってるし、下地にはキャックル金属を使っているんだ。簡単に刃物は貫くことはねぇよ――ま、その分、馬鹿高いんだがな」

不安そうな顔が出ていたのか、親方ドワーフBは鼻で笑って、私の大きすぎると思われた篭手に小さな刃物で線を描いていく。

どうやら調節してくれるようだ。

兄は初めてつける部分鎧に手間取り、チャラ男に助けられている。

「ほう、跳黒牛（ジーガ）ですか。こっちに出回ってくるなんて珍しいですね。キャックル金属だって山脈の向こうの代物じゃないですか」

ジークは関心したように私の篭手を眺めている。

どうやらすごい物らしい。

でも、大丈夫か？軽すぎて不安になってくるんですが。

「山脈の、向こう？――西の山脈？」

問いかけというよりは、独り言のように兄が呟いた。

もう東西南北を把握しているのか？早いな。

会話に入ってきた兄にドワーフは作業を止めずに答えた。

「そうだ」

「それって、いつ頃のことですか？」

「うん？う～む、確か先月、先々月のことだったと思うが、結構な数が流れてきてな」

兄の篭手を装着する手が止まった。

「……それからぴたりと止まった？」

俯く兄は囁くように、親方ドワーフBは頷いた。

他の人は気がついていないようだが――――兄は自分の顎の辺りを指先でなぞっている。

つまりは、今の言葉の中で、思案すべきものがあるということだ。

「あんたも革製品か、鉱物を扱ってんのかい。だったら、当たり前のこと聞くなよな」

「そうですか、失礼しました。いい素材なら俺も欲しかったんで…それではやっぱり、それも高いんですよね？」

「そりゃそうだ。それから全く流れてきてねぇからな」

「勉強になります」

きらきらと、やたらめったら爽やかさを振りまいた笑顔を見せて、親方ドワーフBを引きつらせた。
その目は実に胡散臭そうに兄を見ている。

うん、正しい評価である。

しかし、また良からぬ気配がひしひしと感じるのだが、兄は装備の装着に戻った。

「兄」
「ライアンツだ」

実に嫌々そうに首を横に振る。

つまりは、叔父に関しての良からぬ情報であったことを明記しておこう。
しかも兄があれ程嫌そうにしているということは……考えたくない。かなりやばそうな臭いがする。

だからといって、兄が軽んじているわけではないが、それ以上何もいわないということは、むしろ逆に何も言うなと釘を刺されたに等しい。あえて叔父といわなかったぐらいだ。騎士達にも秘密にしてくれ、という意味も込めているのだろう。

怪訝そうな顔をしていたが、姉も察したようで、特に口を出さなかった。

騎士は不思議そうな顔をしていたが、兄がすぐに話を変えた。
「申し訳ないんですが、俺の装備も、少し大きいかもしれません」
「ああ、そうかい。みしてみな」

すでに私は装備を解除してカウンターに置いておく。
ふと、ジークが瞳を細めて兄を眺めているのが目に入った。
何を考えているのか分からないが、険しい表情である。
気になりはしたが、声をかけて尋ねるくらいのコミュニケーション力が私にあろうか。否。無い。断言。じゃあ無理だ。よしやめよう。

「よし、こいつでいいか。脱げ。後はこっちで調節しておく。明後日取りに来い…おい、ジークホーク聞いてるのか！」
「あ……申し訳ありません、ゼンゲルディーブル殿。できれば明日までに仕上げていただきたい」
「だったら、銀貨2枚追加しろ。明日の昼までには終わらせる」
「わかりました。使いを送ります」

やはり直ぐには大きさを直せないようで、防具は明日までお預けになった。
じゃ、そろ帰ろうかとゾロゾロ入り口に歩みだした時だった。

ヴィィイイン。

今度ははっきりと聞こえた。
どうやら、今度は皆に聞こえたようで、全員の足が止まった。

「あん？なんの音だこりゃ。虫か？」

親方ドワーフBが怪訝そうな顔で小首を傾げているが、音は室内に反響しているようで、ハッキリとは聞き取れなかったようだ。

でも、今度はわかる。
弦を弾いたような音だった。

「ミコ」

言われなくても。
私はすでに目を瞑って、両耳に両手を当てて集中する。

もう一度、大きくヴィィインと弦を弾いたような音が聞こえて、私は歩き出した。

音が部屋の中で反響して至る所から聞こえるので、場所の特定が難しいが、私は耳がいい。

昔、ヴァイオリンをやっていた頃――まぁ、長続きもせず、諸事情でやめてしまったが――楽譜がなくても、一度聞けば大体、耳コピーで演奏できるぐらいだ。

それに弦というのは一度、弾くと波紋のように音が広がり室内で反響するが、音の消えていく順番から、最初の一音を見つけだすのは、簡単なことだ。

最初に消えた一音の場所を特定すればいい。

私は棚と槍の刺さった樽の間に体をつっこんで、棚の後ろに落ちていた音の発信源を引っ張り出した。

それが動いたせいで、棚の後ろの埃が舞って、くしゃみを何度か繰り返す。

重すぎて、地面を引きずって出してしまった。

「弓？棚の後ろに落ちてたのか？」

大量の埃を被っている弓の弦がヴィィインと勝手に震えている。

すると、埃がさらさらと流れるように落ちていく。

拭ってみると全体的に白い。弦も本体も。

普通の弓とは違い、華美ではないが品のいい装飾が施されており、一瞬飾り物かと思うぐらいだ。

決定的に違うのは、持ち手に近い部分の上下に、宝石がはめ込ま

れていたらしい場所がくり貫かれていることだ。
上か下か分からないが、合計七つ。
しかも他の武器や防具と違って、白いキラキラのエフェクトが付いているんですけど。まさか。ね??いくらなんでも。

【七色の女王（レディレインボー）の弓】
七色に輝く力を持つ柔軟な弓。女性専用。
カスタマイズ可。はめ込む魔石の力によって、弓の威力と効果が変わる。
ヴィヴェル神の加護を受けている。
販売価格：１３０００　Ｂ（ビル）

「ま、まて、こいつは年代ものだが、使われてる金属と弦が珍しくて、装飾用で安く買い叩いたんだぞ。確かに使えなくはないが、重すぎて壁にもかけられなかった代物だ」
親方ドワーフＢは、呆れたように首を横に振っている。
現実問題、煩くこの弓の弦は鳴り響き続ける。
明らかに装飾品ではない。

ここにいる、といわんばかりに弦を鳴らして意思表示をしているのだ。
間違いなく遺物（オブテショーズ）なのだろう。

一日二回も遭遇するとは思わなかった。
さっき親方ドワーフAが、武器屋をしてて一生に三度立ち会えるかどうか、と言ってたし。

たとえ所持していても、わからないことの方が多いから、滅多なことじゃない。

それとも、なんだ？
一生分の遭遇率を使い切ったのか？

「ミィコ殿、まさか」

ジークが頬を引きつらせるが、私は首を横に振った。

「……私、じゃない」

頭の中で声とかしないし、ちなみに私には物凄く重くて、持ち上げることもできないのだ。
引きずるのが精一杯といったところ。重量二十キロぐらい？いくらなんでも、こんな重いの持って戦場は駆け巡れませんよ。

これは拒絶されているからなのではないか、と思う。

これは女性用。
だったら他には一人しかいない。
たぶん同じ表示を見ているだろう兄と互いの眼鏡越しに視線が合って、問題の答えあわせをするかのように目配せ。
それから自然と視線は姉に向かった。
「それは大きさからいって、女性専用じゃないか———なぁ、由唯？」
兄が眼鏡を上げながら、弓にも負けず劣らずキラキラを飛ばしながら、胡散臭そうな笑みを浮かべた。
この場にいた全員の視線が姉に集まっていた。

Ａｃｔ　１２．　交番はどこですか

「……なにこれ、軽いじゃない」

兄に言われて、私が床を引きずってきた弓を身を掲げて持ち上げた。

本当に、いとも簡単に、だ。

同時に今まで唸っていた弦が、ぴたり、と止まり、姉は不思議そうに弦を弾いたが、ひゅんと乾いた音が鳴るばかりで、先ほどの音はしなかった。

「これ呪物じゃないね。ちょっと借りてもいいー？」

手を伸ばし期待顔のチャラ男に、少し考えた様子だったが姉が弓を差し出す、刹那。

ごっ

チャラ男が手にすると、重みを増したらしく、即効で地面に落ちた。木の板でできた床に穴が開く。

頬を引きつらせて、手首を押さえ低く呻くチャラ男。

だから女性専用だってそれ。

言ってないし、ステータスが見えないから、仕方がないけど。

というか、私女性なのになぜ持つことすら許されないんだ…じ、実は私は女子（おなご）じゃなかった！なんてことは――――ないか。微々たる物だが胸もあるし、象さんいらっしゃらないんだけどなぁ。

むむむ、真実子七不思議のひとつに認定だな。

【七色の女王の弓（レディレインボー）】はどうやら、兄の【百人切呪詛刀（ひゃくにんぎりじゅそとう）】とは違い、他者が手にすることすら嫌がっているように思える。

女王ってくらいだから、気高い……ん？気高い弓？武器に気高いもあるのか？

たしかにキラキラしてるけどさ。

「どうやら、赦者（アヴォワール）は由唯で間違いないようだな」

「あたし、弓なんて扱ったことはないわよ」

「ま、習えばいいさ」

胡散臭いキラキラ笑顔の兄はサラリと言ったが、姉はめんどくさそうに眉根を寄せた。

後で、弓使いに変更する気だろうか。

でもサブ職の拳闘士Ｌｖ６って勿体無くないか？

「一日……たった一日で、二つの遺物（オブテショーズ）が……規格外の…いや、しか

し…」

ジークは目元を手で押さえて、ぶつぶつと何かを呟いている。
よくわからんが、苦悩していることだけはわかる。

どうせ、レジィー王の兄家族はなんて、規格外なんだろう！みたいなことだろう。

気にするな、前の世界から我が家＋叔父はこんなもんだ。ちなみに苦悩する役は私だったんだけど、ジークがかわりに悩んでくれているからいいや。
とりあえず、兄と姉、めちゃくちゃやん！と突っ込んでおこう。

ん？気にすんなって言っておいたほうがいいのか？いや、私のコミュニケーション能力じゃ無駄だな。よし却下。無理だ、姉。

「ゼンゲルディーブル殿、これを売っていただけませんかね？」
「売るなんて、とんでもねぇ」

お、やっぱり凄い物だから、売るなんてしないのだろかと思ったが、違った。
親方ドワーフが兄ににやりと笑ってみせる。

「そのまま持っていけ。俺の店に眠らせとくには勿体ねぇ代物だ」

ま、姉を選んだ時点で、他の人には使えないことは、はっきりしてる。

「ま、代わりといっちゃなんだが、とりあえずその穴の開いた床の修理費だけはもらうぜ？」

「ありがとうございます」

またしても姉は軽々と床に転がる（刺さった？）弓を持ち上げた。弓を見て姉は、首を横に振ってため息をついている。

もしかして、うなり声とか聞こえているんだろうか。

それとも単純に弓を習うのが、面倒だなと思っているのだろうか。

あの重さを知る私とチャラ男の視線は、まさか怪力なだけじゃないよな、という意味が篭っていたはずだ。

うん、怪力女じゃないよね？筋力値って、２４だよね？

それにしても、兄も姉も赦者（アヴォワール）だなんて、どんだけだよ。

チート…どんだけ、チートなんだ？

もう羨ましいを通り越して、呆れの境地に入ってきたよ。

ともかく、防具屋も無事――だけど、平穏にではないことは確かだ――に終わり、次は親方ドワーフＢのアドバイスに従い、教会に行くこととなった。

他にも多少効果のある魔石のついた装飾品(アクセサリー)も買う予定らしく、ついでに兄が魔石の原石を欲しがった。

なぜと騎士と問い返したが『実験したいことがある』とキラキラ笑顔で告げる。

きっと、姉の持つ武器【七色の女王の弓(レディレインボー)】のために――――いや、それがどれくらいの威力になるか知りたいのだろう。兄の武器とは違いカスタマイズできるとなると、楽しみは増える。きっと内心自分の武器ではなかったことを悔やんでいるだろう。

姉に嫌がらせのように何度も、嬉々として実験につき合わせる気だよ。

知的好奇心を満たしたいって顔してる。だが知ってるか兄よ。好奇心は猫を殺しちゃうんだぞ？

「教会となると、女子供の足では遠いな」

「でも、大通りから、毎時間参拝者のための乗合馬車が出ているはずだよ～」

「そうしたいのだが……」

結局歩きながら大通りへと向かい、乗合馬車で移動しようとしたのだが、ジークが渋る。

「別に乗合馬車とかでもいいわよ。バスみたいなもんでしょう？」

「護衛の関係じゃないか？ざっと、七人は居たみたいだからな、一緒に移動しようとなると、乗合馬車で鉢合わせになるだろ？」

「駄目なの？」

姉が紐で弓をベルトに括りつけながら、小首を傾げる。

というか、どこに七人も護衛が居るんだ？

周囲を見渡しても、まったく分からないんでございますが……兄よ。

「駄目じゃないが、俺たちが護衛されてる人間ですって公表して歩いているようなもんじゃないか。こっそりついてきてくれている意味がないんじゃないか？」

「あぁ、そうか」

納得したのか姉は頷いて、あっさりと引き下がった。

「あ～…でもさ、乗合馬車、徒歩より少し早いくらいだから、影奴（エイド）だってついてくるでしょ～」

「そうだな。わかった。とりあえず大通りまで行こう」

ん？なんだ、エイドって…話の流れからすると、私たちの後をついてくる七人の護衛の人たちか？

「失礼だが、エイドというのは護衛の方々ですか？」

「え、あ～…」

兄の言葉にチャラ男はしまったという顔で、ジークも苦笑を浮かべている。

「騎士の中にも特殊な部署がありまして、表立っては動かない影として動く奴の総称です」

「影奴（エイド）……茶毛に茶目の緑褐色外套の方が、仕切られているんですか？」

茶毛に茶目ってどこにでもいるだろ？

視界に入るだけで、十人ぐらいいるけど、どいつだよ。

ジークとチャラ男は丸くした目を合わせて、兄を向き直った。

「……ええ…そうです」

観念したようにジークは口にしたが、二人とも化け物を見るような目で兄を見ていた。

わかるよ。その気持ち。

相変わらずの兄の兄における兄っぷりに、姉妹で辟易するしかない。

この男の目には、いったい世界の何が映っているんだろうかという疑問がフツフツとわいてくることなんてしょっちゅうさ。

「分かりました。皆さんを今後は頼りにさせてもらいます」

もはや七人の顔は完全に覚えているようだ。言葉に迷いもない。

きっと骨の髄まで頼られるさ。

そして、その人間の限界ギリギリまで追い詰めるんだぜ。いや兄の感覚では、相手の力を最大限に引き出そうとするために、兄は危機的状況でもギリギリまで手を手を出さないだろう。

「ミコ？何祈ってるの？」

横目でちらりと両手を組んでいた私を見て、姉は小首を傾げる。

「影奴さんの今後の地獄のような日々に。アーメン」

「あんたキリスト教徒じゃないじゃない……でも、アーメン」

くすくす笑って姉もノリよく影奴のために祈るように、胸元で十字を切った。

信託（メール）はきたけど、あれは神と認定されてないよ。私の中で。

可愛そうな隊長さんと部下さん。

ご冥福を祈って黙祷。いや死んでないけど。頑張れ。

経験者からのアドバイス———逃げられない状況に追い込まれるから、前に進むしかないんだよ。

そして、私は助けられないから。あしからず。

・　・　・　・　・

そうして、大通りに向かい、五人＋七人の妖精たち（私には見えないから）は急ぐ。

目に付いたのは古びた楽器店。

店のロゴが入ったショーウィンドーに、弦楽器、太鼓、木管楽器ものらしきものが並んでおり、特にギターのような弦楽器に人ごみ越しに視線を奪われて足を止めた。

今日そういえば変な夢を見たなと思った。
ヴァイオリンの音が響き、蛾か蝶か分からないやつが、火に飛び込んでいく姿。
夢の中で私は何故か、すごく焦っていたような気がするが、起きたときにはもう思い出せなかった。

ヴァイオリン。

何年か前までは、飽きることもなく毎日のように奏でていた。
不意にそんな日々が懐かしくなった。

たったそれだけ。

ずき、と痛む、完治したはずの左腕を押さえて、私は楽器店から顔を背けた。
目の前を歩いていた姉の小豆色の外套(マント)から視線をはずしたのは、ほんの数秒だったと思う。

「えっ？」

前を向いた時には、姉はいなかった。
小豆色の外套(マント)などかけらも見えない。
期待に背後を振り返るが、残念ながら立っていたのは草臥れた中

年男性で、チャラ男ではなかった。

振り返った私を怪訝そうに眺めて、すぐに動かない私を通り越して抜けていく。

「……まぢですかい」

ぽつり、と呟いた言葉は大通りのごった返す人の雑踏に飲まれて消えた。

道のど真ん中で思考と共に肉体の活動も停止した私を、善良なるイシュルス市民が邪魔くさそうにしながら通り抜けていく。

参った。

迷子フラグですか。

やだなぁ、兄姉、騎士たちが迷子になっちゃってるよ。はい、嘘です。すみません。

姉のお仕置きフラグの回収ですか。

どちらですか、どちらもですか。そうですか。

私はがっくりと肩を落として、道の端に避けた。

楽器店の前の道はガラガラなので、ちょうどいいなと座り込む。

兄と姉が言っていた通りに、迷子になった場所から動かないことにした。

むむむ、職務怠慢じゃないか、チャラ男よ。と八つ当たりしてみるが、気分はすっきりと晴れない。やっぱりどうやら自分の不注意らしい。ぼーっと楽器店を見つめていたのは自分だ。

でも護衛の人が遠くから、妖精さんよろしく見守っていてくれるのだろう……たぶんだけど。

迷子になったからといって、話しかけてくるだろうか。

そして、それを判別できるのだろうか。

いや、眼鏡をかければ簡単なことだろうが、人目があるのにかけていいものか。

判断に迷うところだ。

果たして、兄たちが私がいないことに気がつくのは何分先だろうか。

それから探すとなると――――ため息しか出てこない。

時間があんまりないっていっているのに、こんなことで兄弟の足を引っ張るか、私は。

でも、探しにいってすれ違いになってしまったら、それこそ目も当てられない。

更なる時間がかかるのは明白。

心細い。

異世界で一人ぼっち。

漠然と兄や姉の姿を探して雑踏を眺めていても、見つけることはできなかった。

でもそのうち、ひょっこりと顔をだすんだろう。

足元で何かが揺れていて、雑踏から目だけ離す。

石畳の隙間から出てきた雑草のようで、ゆらゆら揺れている。よく見ると蕾がついているので、数日後には花が咲くのだろうと予測できる。

こんなところにも、花は咲くんだなぁ、と妙に関心した。

今はそれどころじゃないけど。

「―せ、こ……――」

「って！…っの…が…っ！……ですっ！」

なにやら大通りが騒がしくなってきた。

兄が何やらまた不吉なフラグを立てまくっているのかと不安になって顔を上げると、私の数歩手前あたりで、黒い外套を着た長身の男――私から見れば大抵、イシュルスの成人男性は長身だがそれよりも高め――が、頭巾を目深に被っている子供に外套を引っ張られている。

黒い外套の男は、黒髪蒼目で、剣を腰からぶら下げ、冒険者の風体。二十代前半ぐらいか？
だが妙に振舞いが雅だ。貴族崩れとかなのだろうか。

なかなかの男前で、迫力があり、見たことあるようなないような――あれ、なんで寒気が…んん？鳥肌立ってるのはなんでだ？まぁいいか。

子供は目深に外套を被っているが、ふわふわとしたオレンジ色がかった金髪がはみ出ている。
顔は分からんが、髪が長いし、女の子なのだろうか。体も華奢だし、身長からして、十代前半か、もうちょっと若いかもしれない。

背中に大きなギター…いや、あれは中国の擦弦楽器である二胡（にこ）だろうか？それとも日本の胡弓（こきゅう）や三味線にも似ている。

なので、ちょっと気になって眺めていた。

珍しい楽器だ。
こっちは西洋っぽいのだから、二胡なんてないだろう。

中国系の大陸もあるんだろうか。

ちょっと近くで見たみたいかも。そうそう目前に迫るくらいズームアップ――はぎゃっ！！！

バキッ

眼前を飛び交う星。顔面に訪れる熱。それが数秒で激痛へと変貌する。

男が縋る子供の手を振り払った拍子に、こっちに飛んできた子供を顔に受け、私は地面に大の字でノックアウトされていた。完。

Ａｃｔ　１３．　超美少女、現る

意識が遠のいたと思ったら、顔面で受け止めたオレンジ色がかった金髪の少女が襟首を掴んで、私を揺さぶっていた。

「し、死んでるの？死んでるなら返事してくださいぃ！」

はい、死んでます。

なので、お願いだから襟首掴んで揺さ無ぶるの止めてほしいんですが。

衝撃で鼻腔が切れたらしく、鼻血が喉に流れてくる。鼻から喉に何かが流れ込むのだけでも気持ちが悪いのに、生暖かい血であると滅入ってくる。

よく通る鈴の鳴るような声である。

頭巾の下から覗く顔は、超美少女であった。

姉にも勝るとも劣らない…いや、母の方が可愛さで勝って――――

げふん、げふん。

顔が可愛いと声も可愛いのかと妙に納得しながら、小さな手を振り払って、ゆっくり体を起こす。

途端に、ぼたぼたと喉に流れ込んでいた鮮血（鼻血だけど）が石畳に滴っていく。

これは盛大に切れたもんだ。

まだ鼻血が固まっている気配がまったくないので、意識が途切れたのはほんの数秒のようだ。

口の中に溜まった気配のある鼻血をぺっと吐き出して、あいにくティッシュを持ってこなかったので、外套で鼻を押さえる。じゃんじゃん鼻血を吸収して外套が色を変えていく。

美少女は目を白黒させて、こちらを眺めている。

磁器のように白い肌。ふっくらとっした桜色の頬。零れ落ちそうな宝石のような金色の瞳。オレンジがかった金髪と同じ色のばっさばさの睫。

年齢は12、3歳ぐらいだろうか？身長も私より低い。

高価なアンティークドールとか、一品物の生々しいビスクドールのようだ。

ちゃんと話して動いているにもかかわらず、顔色が悪いというか、どこか憂いを帯びるような――――そうか生きている人間にある強い生命力が感じられないのだ。

地味な服装でも、その愛らしさを損なわないが、フリフリのレースのドレスなんてきたら、まんま人形のようになるだろう。

そんな印象を受けた。

「あ、あの、ごめんなさい。お鼻は大丈夫でしょうか？」

これ以上低くなることはない。
子供がそんなこと、気にしなくていいと思うよ。

「ん。別にいい……怪我してない？」
「え、はい。大丈夫です。わたし、石頭だから！」

それで私、鼻の中にダメージ受けてるんですけどね。しかし、怪我がないのは何よりだ。

こりゃ頭巾を被らないと、大通りとはいえ、危険に満ち溢れているだろう。

いいところの貴族のお嬢ちゃんが、町に出てきました感がある。
悪漢にはさぞかしい、いいカモであろう。

「……もう、戻ったほうがいいと思うよ」

護衛もつけないで出てきているということは、保護者に承諾をもらっていないんだろうし。

なぜかまだ私の側でオロオロする少女は、はっとしたように人波を眺めてがっくりと肩を落とした。
どうやら先程の黒い外套の長身の男を捜したようだが、すでに姿はない。

これ幸いと逃げたのだろう。

「いえ、もう…いいんです。それより、お鼻の手当てしないと」

いえいえ、それこそ結構です。お構いなく。ワザとだったら子供でも、文句言っているところだが、ある意味彼女も被害者だろうし。

後で、姉からティッシュでも貰って鼻に突っ込んでおきますんで、という意味合いを込めて横に振るが、少女は「いいえ」ときっぱり告げて、背負っていた二胡（にこ）のようなものを背中から下ろした。

糸巻きの部分が左右に二つで、合計四つ。

弦は四本。

棹の部分は一メートルはない。

少女が小柄なため大きく見えるが、二胡（にこ）にしては小さめだろうか。

綺麗な尾の長い鳥の模様が刻まれている。

ボディの部分は六角形ではなく丸。駒という表現もしただろうか。

弓は棹と同じくらいか、少し短め。

少女は正座し、その開いた足の中にボディを納めると、左手で弦を押さえ、右手に余るであろう大きな弓を構えた。

このタイミングで、弾くの？
と思わなくもなかったが、奏でられた一音に、その疑問すら消えた。

「――――っ」

ゆっくり（アンダンテ）歩く速度で――――緩やかに奏でられた、細い高音。
それが低音へと強弱をつけながら、下っていく。
血液の流れをイメージできるような音は徐々に速度を増し、弦の響きの余韻が、次の一音に重なるのが、ひどく耳触りがいい。
テンポが早なる心臓の音と重なるように、躍動する響き。
生きていることを、歓喜し、震え、祈るような、そんな意味合いすら聞こえる。
まるで、賛美歌。

空気が高まる気配がする。
吹いていないはずの風が頬を撫でる。
体が熱くなる。
複雑に重なる音が、歌うように響き渡り、音が———輝いていた。
本物の音楽家というのは、こういうことをいうのだろう。
年齢すら関係ないと、昔の恩師は言っていた。
音は愛するが故に響く。
一瞬すら視線を逸らせずに、ただその音と独特な指使いに目を奪われていた。
・　・　・　・

・

手を止めた少女は、ふぅと息を付いて、額に滲んだ汗を拭った。
音は大きくなかったが、周囲にいた数名のイシュルス市民が拍手で終焉を飾ってくれた。
慣れた様子で彼女も頭を下げて、お礼を言っている。

「いかがですか、お鼻」

そう言われて、一瞬何の事か分からなかった。
困ったように、美少女が小首を傾げる。
は、っと意識を戻して、私は体の変化に外套を鼻から離す。

「……止まった」

切れていたはずの鼻の奥の痛みが全くない。
鼻腔から血が流れてこない。
私は血まみれの顔を外套で拭いながら、茫洋と回らない頭を回転

させる。

この音楽を聴いたあとで、少女が大丈夫かと問うということは、この音楽は傷を癒す作用がある、ということだろうか??

「この曲…傷を癒す力があるの?」
「はい。わたし、これでも吟遊詩人なんです」
「…聞いてて、とても幸せな気分になれたよ……ありがとう」
「そ、そんなこと、ないですよ。楽器が素晴らしいんです」
「そう?……いい腕してる」

率直に問うと当たり前のように彼女が微笑みを返してきたので、逡巡するも私は眼鏡をかけて、楽器のステータスを見ようとした。

が、先に目に付いた少女のステータス表示に――――…

【ルイーサ＝ブル＝コローナ（１１）】　職業：王女（Ｌｖ１１）　サブ職業：吟遊詩人（Ｌｖ７）

ＨＰ：９２／９８
ＭＰ：９１／１１６

…――――眼鏡をかけたことを、後悔したり、しなかったりである。

イシュルスって苗字じゃないのに、王女ってことは、他国のお姫様ってことかい。
なんでまた、そんな子がこんな所に。
貴族のお嬢ちゃん、という予測はあっていたけど、まさかお姫様なんて……なに、この恐ろしいフラグの立ち方は。凄く嫌な予感を孕んでおります。

「わたしなんて、まだまだ未熟で」

ヴィィン。

先ほどの防具屋で聞いたような気がする。
つまりは弦が震える音。

彼女が抱えていた二胡（にこ）の弦が、一本だけ震えた。

「……遺物（オブテショーズ）」

血の流しすぎではない、頭痛と眩暈がするよ。
本当に一日で三つも会うなんて！

【奏でる鳳凰のラバーブ】

擦弦楽器。吟遊詩人専用装備品。女性専用。コローナ王国の国宝。
スキルの発動効果を４０％アップさせる。
ジャギニー神の籠を受けている。
販売価格：６３９０００　Ｂ（ビル）

国宝持って普通に街中を歩くなよ、王女！！
それはさすがに子供だからって許されないぞってか、保護者どこ！何千万円を平然と持って歩いているおこちゃまを回収してください！至急！そりゃもう至急ね！

「きゃ、ラブ、ちょっと」

ヴィン――――もう一度、私の問いに答えるように弦が鳴った。
少女が慌てたように外套で包もうとしている。
幸い先程までいた聴衆の姿はなく、目撃したのは私だけのようだが、なんて危ういあ（アヴォワール）敖者なんだろうか。

「……保護者の所に帰ったほうがいい」

私が珍しく非力な年長者として的確なアドバイスを少女にすると、驚いたように長い睫をバサバサいわせながら瞬いている。

「あの、驚かれないんですか？」

小首を傾げると、少女は困ったように眉根を寄せた。

「その……これが、遺物（オプテショーズ）って気がつかれたんですよね？怖く、ありませんか？」

「？　怖い？？」

「わたし、未熟ですが赦者（アヴォワール）なんですよ？」

その言葉に、さらに首をかしげる。

一般的には驚くことだったのだろうか。ポーズだけでも驚いておくべきだっただろうか。

しかし、すでに町に出てから二時間も経過しない内に、二つも遺物（オプテショーズ）を見て、尚且つその赦者（アヴォワール）が自分の兄と姉という事態を経ているわけだ。

こんな可愛くて若い子が赦者（アヴォワール）だったとしても、今更何を驚けというのか。

しかも得物が弦楽器である。

少女は困惑げな表情ではあったが、やがて私から視線を外した。

「遺物（オブテショーズ）の多くは個人の能力を最大限に引き出そうとして開発された戦争時代の負の遺産です。兵器として使用されたことだって少なくないんです」

ほほう…一騎当千に強制的にしてたのね。

で、平和になったらなったで、疎まれたり、厄介者扱いされたわけだ。

あ、そう考えると勇者の防具とか剣って同じことなのかな？

よく次の勇者のために封印されたり、王家で保管したりとか、ゲームの中でしてるよね。

しかも何故かパーツだけで、全部は揃わないみたいな……パターンだね。

「……使い手に、よるんじゃない？…少なくとも君は…悪用するようにはみえない」

少女の金色の瞳が大きく見開かれて、うっすらと頬が染まる。

はにかんだように、少女が微笑んだ。

な、なに、この好感アップしたような感は…――え、一般論だよね、今の私の台詞は。少なくとも、こんな可愛い子ちゃんが、都市を破壊して楽しむようには見えないだけだから。

「ありがとう、ございます。ラブもきっと喜んでいます」
「…その子の名前？」

ラバーブの愛称だろうか。
なんて安直な。

といいつつ、恥ずかしながら私もヴァイオリンに名前をつけていたので、人のことは言えないが。

「はい。ラバーブという楽器なんですが、呼びづらくて……あ、わたし、ルイっていいます。あの、もしかして、貴方も楽器を嗜まれているんですか？」

話の流れが不本意な方に流れて、私は言葉に詰まった。

「名前はミコ……昔、弦楽器を少し」
「あの、ミコさん、もしかして失礼なことをお伺いしましたか？」

感情が読み取りづらいといわれる私の機微を察した少女・ルイは不安そうな顔でこちらを伺う。
私は首を横に振って、苦笑を零した。

「いや、さんは要らないよ。ルイちゃん」
「そんな。でしたらわたしもルイと」

私は頷いて、何事もなかったように笑ってみせた。
上手に笑えたかは定かではないが。

「ただ、大きな怪我して……リハビリ面倒でやめただけだから」

思わず左腕を押さえてしまう。
多少傷跡は残っているが、すでに完治している。

結構な大きな怪我だったが、母とのリハビリのおかげで、奇跡的に左手は前と変わらない動きを見せる。

――――でも、私はやめた。

Ａｃｔ　１３．　超美少女、現る（後書き）

遅くなった上に、話の切れのいいところで切ったためちょっと短め…すみません　ｏｒｚ

Ａｃｔ　１４．　真実子とヴァイオリン

家族のように可愛がった愛猫を失った後、音楽は私が唯一持っていたモノだった。

小さい頃、愛猫を失った私がしょぼくれていた時に、川原で音大に通う女性が奏でるヴァイオリンの音に慰められた。

私はヴァイオリンが欲しいと両親に強請った。

子供用とはいえ、馬鹿高い楽器である。

両親がすんなりと了承するはずもなく、私はお金を地道にため続けていた。

それを見て、両親が中古とはいえ、かなりいいものを与えてくれた。

最初は、音大の女性に基礎を習い、彼女が卒業して海外に行ってしまったために、一人で弾き続ける趣味程度のものだった。

しかし母は、近所の音楽教室に通わせてくれるようになり、そこで恩師にあった。

ノンビリした印象しか受けなかったが、どうやらかなりの凄い人だったらしく、マンツーマンの授業で私の技術は一気に向上したと思う。私の音の世界も広がった。

小学生の時から、聞くのも勉強といって、大会に応募もしてくれた。

まぁ半分素人の私が恥をかくだけかと思われたが、最初の大会で審査員特別賞を受けて、付き添ってくれた母が興奮した様子で喜んでくれたのが、私も嬉しかった。

年に片手ほどのトロフィーやら賞状を持って帰ってくる兄や姉のように、喜ばせる術をしらない。

だから、頑張ろうと思った。

それが、私にできる唯一のことだから。

一度だけ、仕事人間の父が母に内緒で、会社を早退してまで見に来てくれたのを今でも覚えている。

次に出場した二度目の大会で優勝することができた。

それから、中学に入って最初のある有名な楽器メーカーが主催した大会の、学生の部で最年少で優勝することができた。

帰宅前に恩師を通じて、関東の某有名音楽高等学校から声がかかった。

貧しい家ではなかったが、音楽にかかる費用は半端ではない。教室に通うのも結構かかっていたのも知っているし、楽器のメンテナンスだけでも、私のお小遣いで賄えるものではなかった。

その高校の特待生になれば、学費は不要。

音楽を習うには設備も完璧。

しかも、授業中にヴァイオリンが弾けるなんて。

兄姉は高校で、二人とも特待生で奨学金を貰っていたので自分もそうしなければ、と思っていたが私は二人に比べれば頭が悪い。

だが大好きな音楽で特待生になれれば、万々歳だった。

有頂天で興奮したまま、その大会に付き添ってくれていた姉と帰宅していて――――油断していた。

唸るような獰猛なエンジン音。

骨が砕けた音が内側に響く。

血まみれのトロフィー。

ケースごと粉砕されたヴァイオリン。

泣き叫ぶ姉。

・

・　・　・　・

事故の記憶は断片的にしか覚えてないが、次に目が覚めたときには病院のベットの上にいたが、夜中だったせいか、それすらもしばらくわからなかった。

ただ茫洋とした視界に、頭上で白い輪のようなものが、時計の秒針のように一秒ごとに規則正しく回っていたような気がした。

傍に人影があって、柑橘系の香りがしたが、すぐに意識が薄れた。

二度目に目が覚めた時は夕方だった。

話によると事故から五日後。

全身に走る激痛。

感覚のない左腕。

じわじわと不安感が意識を侵食していたが、痛みには適わなかった。動かないことで、激痛を招かないことを覚えた私は、微動だにせず周囲の様子を伺った。

果たして突き飛ばしてしまった姉は怪我をしなかっただろうか。

それを確認することすらできない自分に焦燥が募った。

すぐ傍で人の気配がして、姉かと思って視線だけ向ければ、ベットに肘を付けて、両手で目元を覆っている兄がいた。

背を丸め、肩を震わせて、ひどく弱弱しい印象を受けた。

びっくりした。

痛みを忘れるほど、びっくりした。

いつも飄々としている兄が、１２歳で山で遭難しても楽しげに笑っているような男が、３０人近い男に囲まれてもいつもと変わらない爽やかな笑顔を浮かべる奴が。

一瞬、兄が泣いているような気がした。

大慌てで――とはいっても、痛くてスローペースにだったが――右手のかろうじて動く指で突付いてみる。

「っ…ミコ！？」

驚いた顔の兄がナースコールを押して、その後は大騒ぎで大変だった。

やってきた母がエプロンつけっぱなしでワカメのついたお玉を持っていたり、父がお風呂に入る途中だったらしく上半身裸だったり、姉が視線が合うと、私の横たわるベットにダイブしてきて、私が気絶したり、傷が悪化したりと、若干入院が長引いたり、びいてなかったり。

・　・　・　・　・

「ヴァイオリン…やめるの？」
「ん。ただの趣味だもん…ヴァイオリンも壊れちゃったし」

半月後、叔父並みの超人的な回復力で私は自宅介護になり、兄のゲームをしながら、戸惑う母の問いに頷いた。

医者に言わせれば左腕は絶望的――――といっていたのだが、母と

のリハビリで、前と同じとはいかないが動くようになったので、時間さえかければ日常生活に支障はないぐらいになるだろう。

頑張れば、ヴァイオリンも弾けるかもしれない。

でも、やめようと思った。

誰も私になにも言わなかったが、大体察していた。

事故の記憶が鮮明になってくると、あれがただの交通事故ではなくて、故意であったことがよく分かる。

向かってくる車はブレーキどころか、アクセルを踏んで加速したのだ。

振り返れば、運転席の男の歪んだ口元。

あれは確かに笑っていた。

明らかな殺意。

姉を突き飛ばしていなければ、二人とも轢いたであろう進路。

私は自身は人様に殺したいと思うほど恨まれるような事はないだろうと思うし、姉も同様だろう。

目が覚めたときの兄の弱弱しい姿から考えれば、おのずと答えは出てくる。

誰も言わない。

だから、私も聞かない。

ヴァイオリンはただの趣味で、兄は大切な家族———天秤にかければ、後者に大きく傾くのは計るまでもないことだった。

元通りの音が出せなくなったら、その音を聞くたびに兄は胸を痛めるだろう。

また同じように音が出ても、再び私が傷ついて弾けなくなったら、兄は更に罪悪感を覚えるだろう。

そして、いつか私の固執が、兄の弱みになってしまうかもしれない。

もうヴァイオリンは弾かないほうがいい。

家族より、大切なものは何一つ、私にはないのだから。

・　・　・　・　・

「……コさん？」

鈴の鳴るような可愛らしいルイの可愛い声に、意識を呼び戻され、自分が少し思い出に浸っていたことに気がついた。

事故ったことすら、郷愁を誘う懐かしい思い出だった。

「ん、ごめん」

「え、いえ……そうだ、もう一曲いかがですか？」

どんな顔をしていたのか、ルイはこちらを気遣うように、微笑んでいる。

若いのに立派な子や、お言葉に甘えよう。

「ありがとう」

彼女は「はい」と、再び、ほんのりと青白い頬を桜色に染めて笑った。

え？アップしてないよね？？好感度アップするような選択じゃなかったよね？？普通に感謝しただけだよね、私？

疑問符を飛ばしていると、彼女の小さな指が、足元に咲いていた花を指差していた。

まだ蕾なので花というほどではないが、数日中には咲きそうな感じだ。

「前にオブシュレンドで楽譜を買って、あんまり練習してなくて、お恥ずかしいんですけど……」

オブシュレンド？？町か？店か？よくわからんけど、頷いておこう。

彼女はほっとしたように胸を撫で下ろした。

もう一度ラブを足の間に挟むと、ルイは弓を構えた。

私は、じぃ、と弓と指使いを眺めてしまうのは職業病みないなものだろうか。趣味病？

愛情込めて（アモローソ）――――音は春の日差しのように柔らかく、牧歌的な色を含みながら、静かに流れていく。

優しく、優しく。

ただ楽しげな音が私の心を慰めるようにくるくると響く。

指先から紡がれる音は、眩しいほど輝いていた。
眼鏡をかけているせいか、光の粒子のエフェクトが指先から、星や音符のような形になっては消えていく。

先ほどの傷を癒した曲とは違い、音は控えめにしたようで、こちらに気がつく人は少ない。

彼女は本当の意味で私だけに弾いてくれているのだろう。
そう思うと、少し嬉しかった。

数分弾いた後に、彼女はふぅと小さく息を吐いた。
私はたった一人の聴衆として、彼女に賞賛の拍手を浴びせている。

「ありがとうございます」

彼女はにこり、と微笑を返して、もう一度指先を蕾に指差していた。

驚いたことに、蕾は綻び、小さな愛らしい花を咲かせていた。

この世界の音楽ってのは、傷も癒せるし、植物の成長促進もできるのか。

さすが、ファンタジーである。

「すごい……」

「この花、リィールっていうんですけど、世界中のどんな秘境にも町にも咲いている雑草なんです。踏まれても、時間さえあれば元気になるんですよ」

「……へぇ」

私はマジマジとそれを眺めた。

いわゆる私たちの世界でいうタンポポみたいなものだろうか？

雑草だけど至る所に綺麗な花を咲かせる。

コンクリートの下からだろうとお構いなしに出てくる姿は、実に逞しいと思う。

「リィールの花言葉は、不屈の愛、逞しい心、癒される病――――再生」

少しの間、息ができなかった。

彼女は少し青白い顔で、じっと花を眩しそうに瞳を細めて、眺めている。

なんだか、心の中を読まれているようで、気恥ずかしい。

こんな小さな子に、心底心配させるなんて、大人失格だなと思いながら『うん』と小さく頷いた。

私の体の傷は癒えている。

だけど、兄の心の傷は癒えているだろうか？

ああ見えて兄は図太そうな立ち振る舞いよりも、ずっと思慮深くて、繊細だ。

「大輪の薔薇も綺麗だけど、わたしリィールが好きなんです」

「――――私も、好きになれそうだ」

長い月日が、他愛ない日常に癒えて――――私が考えているより深い傷にはなっていなかったらいいなと思いながら、風に揺れるリィールを眺めていた。

Ａｃｔ　１５．　奏でる鳳凰のラバーブ

「ミコさん、もう大丈夫ですか？」

リィールの花を眺めているとルイに声を掛けられて、優しい気まずさのまま、ぶっきらぼうに頷いてしまったが、よく考えると鼻の中が切れたことだったのかもしれない。

弁明に口を開こうとしたが、彼女の慈悲深い微笑みに押し黙ってしまった。

もしかすると、どちらとも取れる問いをワザとしたんだろうか。護衛なんかを撒いてくる行動力を考えても、この子は意外に将来大物になりそうな気がする。

末恐ろしいというのは、こういうことなのだろうか。

将来美人は間違いないだろうし――――彼女の国なんて知らないけど女王制度とかあったら、きっと立派な女王になるんじゃなかろうか。

「じゃあ、わたしそろそろ、戻りますね」

ルイが立ち上がった。

なんだか、覚束ない足取りである。

「……ルイ？」
「はい？」

やんわりと笑って返事をするが、ルイの呼吸音が少し荒い。
一曲弾いて、疲れたというなら、もう収まっていてもいいぐらいなのに。

それに、日光が当たっているはずなのに、出会った時よりも顔が青白い気がする。

「――――っ！！」
「どうか、なさいましたか？」
「…その…」

咄嗟になんと答えて言いかわからなかった。
まさか眼鏡で貴方のステータスを表示して驚いてますなどいえるわけがない。

ＨＰはそのままなのに、ＭＰが３１しかない――――いや、確かに曲を弾いてＭＰを消費するにしたって、二曲しか弾いていないのにＭＰ１１６が、ここまで減るものだろうか。

急速にＭＰが減ってる。
驚くべきことに、数秒でＭＰが１減った。

いつから、いったい、いつから？

魔石を投げたときにＭＰが減ったけど、私も頭がくらくらして調子がよくなかったような気がする。きっと同じかそれ以上だろう。勝手に減っていってるのだから。

おまけに、ステータスに髑髏マークがついているが、先ほどまでなかったはずだ。

ジークが毒に遣られた時と同じように思えるが、彼はＨＰだった。彼女が減っているのはＭＰである。

毒じゃないとしたら、いったいなにが――――私が驚いていることに不思議そうに此方を見ていたルイの細い体が揺れた。

「ルイ！」

崩れ落ちそうになるルイの体を支えた。

力なく地面に手を付いて、【奏でる鳳凰のラバーブ】がごろり、と地面に転がった。

「す、すみません……すぐ収まり、ますから……」

「ル、ルイっ」

どんどん顔色から血の気が引いて、ヒューヒューと乾いた呼吸音になった。

どうしていいのかわからないまま、腕の中で体が冷たくなっていく。

「だッ――――誰かっ！！医者を！！お願いだから！！！」

私は叫んだ。

躊躇した自分が恥ずかしかった。

呼び掛けに気がついた何名かのイシュルス市民が、こっちに近づいてきて、男たちが医者を呼びに走り出した。運良く道に医者がいるなんてことはなかった。

懸命に、体を摩るも、冷たいまま。

動かしていいのか、横にしたほうがいいのかも分からない。

ただ刻々とＭＰが、割れた茶碗から水が漏れていくように、失われていくのが私だけに分かる。

早く、早く、早くっ――――誰か、医者をっ！！

無情にも、ステータス画面のＭＰが０を表示した瞬間、体が硬直した。

「っ！」

ＭＰが０になった瞬間、ゲームオーバーになる可能性があった。
これがゲームなら、リセットボタンを押すか、セーブポイントからやり直しすればいい。

でも、ここは現実だ。

リセットボタンも、セーブポイントもない。
教会で目が覚めたりするはずがないと、私はとっくに理解していた。

死が待ち受けているのだ。

「みこ、さ…っ…」

だが幸いなことに、ＭＰが０になっても、ルイは死ななかった。
でも意識が朦朧としているようで、焦点があっておらず、今度はＨＰが急激に減りだした———まるで、ＭＰの代わりであるかのように。

それからルイの青白い肌色が斑に色を変え始めた。
部分的に、灰色がかっていく。

そこで、誰かが叫んだ。

「駄目だ！その子はマガツ病だ！」

肌が灰色になったら『マガツ病』？？わけも分からずに顔を上げる。

しかし、それを問う暇もなく男が走り去っていく。こうしている間にも医者はこないし、ルイのＨＰは刻一刻と減っているし、止まらない。

泣いてもしょうがない。

叫んで喚いてもしょうがない。

でも、じわりと目尻に涙が溜まり、周囲にただ立ちすくむ人々に『どうにかしてくれ』と怒鳴り散らしたい衝動に駆られる。

何かしたい。

だが何をしていいかわからない。

この町を歩くのは初めてで、医者も、交番も、どちらの場所も知らない。

男が叫んだ『マガツ病』が何なのかも分からない。

ルイが苦しそうに、微かに震えている。

額から汗が噴出している。

たった少しの間とはいえ、名乗りあって、話し合っていた人間がこうも呆気なく生命の危機にさらされていることに、酷い無力感を味わった。

ィィン。

響く弦の音。

私は目を見開いて、勢いよく顔を上げた。

まだ、あった――まだ、私にもできる事がある。

きっと、私にそれを望んでいる。

そんな気がする。

ルイの――――赦者（アヴォワール）の死を望んでいないという意思が、私にははっきりと分かった。

外套を地面に敷いて、ルイを横たえさせると、私は【奏でる鳳凰のラバーブ】に手を伸ばした。

膝を突いて、その間に本体を安定させる。

弓を手にして、弦を押さえる。

懐かしい感触。

【奏でる鳳凰のラバーブ】の拒絶はなかった。

昔は楽器に触れることが嬉しくてしょうがなかったのに、今は恐怖に指が震える。

腕は、日常生活には支障なんてない。

傷が残っただけで、もうヴァイオリンを弾くにも支障はないほどだ。

だけど、頭の中には長いブランクがちらついた。私の指は果たして、あの曲に耐えうるのだろうか。

大丈夫。

ヴァイオリンと弦の数は一緒。

一度聞いた。
一度見ていた。

十分。十分なはずだ。

昔から姉が好きなテレビドラマの主題歌も、母の鼻歌だって、一度聞いただけで弾いたはずだ。初見でも弾ける。いつだって弾けた。簡単だ。

君は耳がいいんだねって、恩師は言った。

揺れ動く感情に安心材料を与えながら、ルイの顔色を眺める。

灰色がかった肌はＨＰが減っていくと同時に、広がりつつあり、これが広がりきったなら、終わり、なのだろうということが容易に想像ができた。

口にする呪文を間違えれば魔法が発動しないように、一音でも間違えれば、きっと曲の効果は現れないだろう。

最大の敵は指が動かないという恐怖に、自分にできることをしないこと。
そっちのほうが、百倍怖い。

死なせたりしない。

どくどく、と脈打つ心臓を収めながら、目を瞑り、弓を構えた。
この曲に、激しい感情も混乱も必要ではない。あるのは暖かい慈愛と眩しい賛美。

――――ゆっくり（アンダンテ）歩く速度で。

緩やかに細い高音を奏でる。

そこから、低音へと流れるように強弱をつけながら、音を下げていく。

弦の余韻が次の音へと重なるように、重音奏法。

音は間違えてないが、指が攣りそうになる。

左腕、左手の五本の指は最後の大会よりも硬くなっているが、なんとか動く。

弦が思った以上に緩やかに張られているのは、たぶんルイの力が弱いためだろう。出ている音程は変わらないが、僅かな違和感がある。

それもつかの間。

全部の糸巻きが勝手に動き、微調整された。

それを認識するよりも先に、四本の弦がすべて私の力に合わせて、ぴんと先ほどよりも僅かに強めに張られた。
驚きに手がブレかけたが、なんとか修正する。

この曲は祈り。
この曲は命。

聞いていたときよりも、ずっと身近にそれを感じる。共感できる。
キラキラと楽器の周辺から光の粒子が徐々に濃くなっていき、ルイに降り注ぐのが目に見えて分かる。
灰色の肌の侵食がぴたりと止まり、表示されたステータスのＨＰが減り方が緩やかになり１９でなんとか止まった。
もともと９８しかないんだから、非常に低い数値だ。
ＨＰの減少する速度が、曲の効果でＨＰが回復される速度で、相殺されたのだろう。
だが、足りない。

ルイの表情から随分苦悶は引いたが、それでも焦点があっていない。
額から汗が流れて、震える体が止まっていない。

絶対に死なせるものか。

だが焦って勝手に音程や演奏のテンポを変えてしまえば、効果を無くすかもしれない。それだけは、絶対に駄目だ。

意思とは反して、体が非常にだるくなっていく。
ちらりと、自分のステータスに視線を送ると、ＭＰの減り方が半端ではない。

１５０ぐらいしかないのに、一曲弾いている途中で、１２０近い。
多分、私が【奏でる鳳凰のラバーブ】の赦者（アヴォワール）ではないせいなのかもしれない。ルイがこの曲を弾き終わった後は、３０も減っていなかったはずだ。

最後の一音を弾き終わる。

私のＭＰは１２０を切った。
そして、最後の一音が空気に消える前に、更に最初の一音へと戻った刹那、強烈な眩暈を感じた。同時に体が高揚する。

なぜか、一気にＭＰが２０減った。

目の前がチカチカしたが歯を食いしばり、それでも演奏に影響が及ばぬように、構わずに、もう一度ゆっくりと弾きだすと、光の粒子が強くなったような気がした。

ログが黄色く点滅しているが、視線を向けている暇はない。

もっと正確に。もっと丁寧に。もっと――もっと動け、私の指。今だけでいいから、もっと滑らかに。

かなり広がっていた灰色の肌が、ゆっくりとだが、肌色に戻りだした。

ルイのＨＰが少しずつだが、上昇し始めている。

残念なことに、私のＭＰはガンガン減りつつある。

二曲目が終わっても、ＭＰは果たして残っているだろうか？だが、この激減っぷりをみていると、三曲目は無理だろう。

この命を繋ぎとめている間に、医者が来ることを祈るばかりだ。

「ル、ルイっ！！」

「ルイ様っ！！」

人ごみを掻きわけて、息を切らせた男女がルイの側に駆け寄って

くる。

きっとルイの護衛だろう。ってか、こんな公衆の面前で『様』ってつけちゃ駄目じゃない？身分はばれはしないだろうけど、高貴な方だと分かっちゃうだろうし。

医者は来なかったが、護衛の人なら、薬のひとつでも持っているはずだ。

ルイの灰色肌を見て、はっと二人が目を見張った。

女は胡桃色の髪でシスター服のようなものを着ている。

男はすこし暗めのマロンブラウンの髪で槍を持って冒険者風だ。

「こ、これは――ルイ様、こちらをっ！！」

予測は正しかったようで女が鞄から小瓶を取り出して、男が意識は戻ってきているらしいルイの体を起こした。そっと、女が飲ませると、ルイが嚥下する。

ぐん、とＨＰが戻る――――って、それ体力回復薬（ポーション）じゃね？

青色のどろっとした感じの液体は見たことある。いや、ルイのＨＰが６０まで戻ったから文句は言わないけれど。

ルイの灰色の肌が、すぐに綺麗になっていく。

次に紫色のどろっとした液体を飲ませると、今度はＭＰが４０ぐ

らいまで戻ったが、すぐに曲によるＨＰの回復がみるまに増した。
ＭＰの回復薬のようだ。

つまり、ＨＰが減っていない。
しかし逆に、ＭＰがゆったりと減り始めて、女はもう一本紫色の液体を飲ませる。

「…あ……わ、たし……？」

ルイの荒かった呼吸が安定し、意識もはっきりしだしたようで、目を瞬かせている。

気だるそうではあったが、彼女がこちらに気がついたときには、ステータスの髑髏マークが消えていた。
ちょうど二曲目が終わり、私は緩やかに手を止める。

頭が痛い上に、全身がだるいと思ったら、ＭＰが１１しか残ってなかった。

しかし、私の中にあったのは虚脱感と、達成感――――そして、全身に渦巻くような喜びだった。

最後の大会の後に感じたものと似てる。

喝采の中で感じていた手応えのようなものだろう。

周囲に集まっていた老若男女の野次馬が、ルイが無事だったことを喜び、叫びながら手を叩いてくれているせいかもしれない。

大雨のような喝采を聞き、血色のよくなったルイの顔を見ながら、私は息をゆっくり吐き出した。

Ａｃｔ　１５．　奏でる鳳凰のラバーブ（後書き）

気がつけば、お気に入り登録２４００件、総合評価７０００を超えておりました。これもひとえに皆様のおかげです。この拙い小説を読んでいただき、誠にありがとうございｗ

冬の黒猫亭

Ａｃｔ　１６．　転がってました

万雷の拍手が疎らになる頃には、顔色のいいルイは微笑を浮かべていた。

「あのっ、ミコさん、ありがとうございます」

たぶん私は逆に苦笑を浮かべていただろうが、首を横に振り、手にしていた【奏でる鳳凰のラバーブ】と弓を上半身を起こしたルイに渡す。

ルイの従者らしい女が体を支え、男が大声を張り上げて、野次馬を散らしている。

ようやく恰幅のいい医者が到着したが、男は銀貨を渡して追い返した。

「…ラブだよ」

「え？」

「ラブが、演奏助けてくれた……ルイちゃんを、死なせたくなかったんだと思う…だから…お礼はラブに」

私の力と硬い指に合わせて【奏でる鳳凰のラバーブ】が糸巻きの調節をしてくれなければ、二曲目まで持たなかっただろう。

自分に合わない楽器で奏でるというのは、それくらい演奏に影響

が出る。

ルイは驚いた様子だったが、手にした【奏でる鳳凰のラバーブ】を眺めて、ぎゅっと強く握り締めた。

「それでも、曲を弾いてくださったのは貴方ですから、ルイさ――ルイを助けていただいて、なんとお礼をいってよろしいか」

言い直しても遅いが、私は女の言葉に首を横に振る。

正直、ルイの運がよかっただけである。

たまたま、遺物（オプテショーズ）がとてもいい奴？だったからだ。そうでなければ今頃、ルイは生きていなかったと思う。私の腕の中で冷たくなっていたはずだ。

十分の一でもいいから、兄の【百人切呪詛刀】も見習ってほしい。

なんでアイツだけ、妙に凶暴なのだろう。

やっぱり呪われているせいか？

いきなり赦者（アヴォワール）の意識を乗っ取り、人に切りかかるなんて、躾がなってない。あ、赦者（アヴォワール）が赦者（アヴォワール）だからか？

「こちらこそ……知らなかったとはいえ、彼女に曲を強請ってしまい…申し訳ありません」

「ち、違います！二曲目はわたしがっ！わたしが聞いてほしかったんです！」

頭を下げると、ルイが声を荒げる。
それに驚いたように女が目を見張っている。
あんまり表情のなかったシスター服の女は、めちゃくちゃ機嫌がよくなっていくのは、なぜだろうか？よくわからないけど、まぁいいや。

「ずっと聞こえてました――ミコさんの音」

つ、と視線を路傍の花に向ける。

とても酷かったと思う。
やはり、ブランクは長かったのだと私は思い知った。

曲でスキルが発動できたのは幸いだった。たぶん、それも【奏でる鳳凰のラバーブ】が補正をしていてくれたんじゃなかろうかと、思う。

よく考えたら、サブ職業『吟遊詩人』のままだったが、レベルは当然1だ。
今は経験値が入ったようで、レベルが上がっているけど。
きっとあれ、普通、発動できないだろうし。

自然と右手は、左腕を摩る。

それでも。

私は。

あの感覚は。

「わたし、好きです。ミコさんの、優しい音……好きです。きっと、ミコさんの優しさから、出てくる音だもの」

お世辞だと思いつつ顔を上げると、あの慈悲深い微笑を浮かべ、私は首を横に振った。

でもねルイ。

私は優しくない。
私は君のようには優しくないんだよ。

君のことを思って、【奏でる鳳凰のラバーブ】を手にしたのは、事実だ。

だけど、一瞬。ほんの一瞬だったが、君の事を忘れた。兄の痛みすら――――なにもかもを。

自分の指から紡がれる音に、音色に、音楽に、奏でるという喜びに酔いしれていた。

私ってやつは、まったくもって、しょうもない最低な部類の人間だ。よき人間でありたいとは思うが、残念ながら私には難しい。

家族のように、よい人にはなれないんだ。

そう、思い知る。

ありがとう、と私は彼女に素直に返せなかった。

ルイは少し困ったように私を見ていたが、かけられた人を思いやる優しい言葉に、自虐的な気分に陥って、そんな自分に苦笑する。

「大事をとって戻ったほうがいい…よく、わからないけど、病気なんでしょう？」

少なくとも、先ほどまでは瀕死の重傷だったのだから、一日は安静にしていたほうがいい。

私は迷子だから誰かが来るまでここを動けないし、城に戻ったところで騎士達がいないと、中には入れてもらえないだろう。

「ルイ様がマガツ病なんか――――！」

「マーシャ！！」

ルイは病気じゃ、ない？？でも、たしかに目の前で病状らしきものが？

マーシャと呼ばれたシスター服の侍女らしい女はいつの間にか此方に歩み寄っていた男に窘められて、唇を噛んだ。

事情が分からず、謝りどころかもよく分からない。

私は、小首をかしげる。

「いいの、いいから――――すみません、ミコさん。驚かせてしまって…マーシャ」

「申し訳ありません」

女は丁重に頭を下げたので、私は首を横に振る。

しかし、なんなのだろう、そのマガツ病というのは？さすがにルイを目の前にして、尋ねづらかったので、言葉を飲み込み自粛した。

シスター服の女の目が、聞くなと言外に漂わせていたせいかもしれないが。

「ルイ様を救っていただき、感謝のしようもございません。この場でお礼もできずにもうしわけございませんが、お言葉に甘えて、宿にも戻らさせていただきます」

「……お気遣いなく」

ルイもお礼を言って、シスター服の女の伸ばした右手をとる。

その時、ちらりと、手袋をしていたシスター服の女の手首が袖から覗いて、私は眉根を寄せた。

女は白人だ。

顔の肌色も白く、その覗いた腕の辺りは白かったのに、手首から数センチ上の所に茨のような模様が入っていて、そこから手に向かって褐色になっていたのだ。

そして気がつく。

シスター服の女の、左右の手の大きさが違うことに――まるで、女の腕に無理やり褐色の肌の男の手をつけたようだった。

『聖者の死後、右手は盗まれて現在まで見つかってない。ついでに左腕を保存した魔術師も、姿を消したらしい』

『枢機卿クラスなら――そう、ゴロゴロ転がっていないんやけど、肉体の一部を他の一部に付け替えるんは、可能なんやで？まぁ、拒絶反応とかもあって危険なんやけどな』

ぐるぐると、朝聞いたばかりの話が頭を巡る。

は、はは、んな馬鹿な…あ、ありえねー。目の前の女の人が。まさか。ねぇ？あれってフラグ的会話だったのかい？

でも、だったらルイに使ってあげればよかったんじゃないの？

ＭＰが足りないとか？

見なけりゃいいものを、視界に女のステータスを入れてしまった。

馬鹿なやつだ、私は。

叔父の嘘つき――――…

【マールシャル＝フェア＝ブルマシュクル（２９）】　職業：助祭枢機卿（Ｌｖ３１）　サブ職業：メイド（Ｌｖ１９）

ＨＰ：３０９／３１１
ＭＰ：　７２／４９７

……――道端にゴロゴロ転がってるよ。

……。

…。

よし、見なかったことにしよう。

「ミコさん？」

反射的に抉られないように目を――というか顔全体を――手で覆っていた私に、ルイの愛らしい声が振ってくる。

ぶるぶる、と首を横に振りながら、目から手を避ける。

見てない。私、何にも見てませんから～をアピールしておこう。

うん。

「ルイちゃん」
「はい？」

そうだ、忘れるところだったけど、いっておかないと。

「…しばらく、城下の外にでちゃ…駄目だよ？」
「外、ですか？」

小首をかしげるルイに変わって、横槍を入れてきたのはマロンブラウンの髪の男だった。

「しばらく、とは曖昧だ――――それは、いつまでだ？」

探るような目つきに、わずかに気分を害しながらも、私は続けた。

正確ではないだろうが、ゴブリンの大群がやってくるのは、そんなに日数はかからないはずだ。
というか、よく考えると、この王女一行はが旅の途中なのか？ここに滞在しているのか？

「五日…最低でも、六日ぐらい」

「……なぜ？」

さらに男の視線が鋭くなったが、さすがにゴブリンくるんで、外に出ないほうがいいんじゃない？とはいえなかった。

さすがにここから噂が広まって、暴動とか起きたら困るし。

かといって、忠告しないで外に出られて、ゴブリンの大群に遭遇されたら、夢見悪いし。

「ただの親切な忠告……お節介かも、しんないけど」

「自分の問いの答えにはならない」

「……信じるも、信じないも、そっちの勝手だよ」

つまり答える気がないというのを、悟ってもらうために肩を竦めた。

「ならば、答えさせてやろうか？」

表情はあんまり変わらないが男は槍を握る手に力を込める。

ぞわぁああ、とマジな叔父や兄を相手にしたときのような寒気を感じる。かなりの使い手らしい。どうやら対応を間違ったらしい。

【ゼフォルム＝アンダークレス（３２）】　職業：竜騎士（Ｌｖ３８）　サブ職業：拳闘士（Ｌｖ１０）

ＨＰ：７８０／７８２
ＭＰ：１７６／１７６

うん、間違いなく、死んだな私。

冒険者の格好してるけど、竜騎士って反則じゃね？しかも、ここにも拳闘士がここにもいるんですけど、よかったね姉。仲間がいて。

でも素手でもボコボコフラグか、私？

「ゼム、やめて――ごめんなさい、ミコさん。いつもはこんなことないんですけど」

不貞腐れたように、ルイから視線を背けた男はむっとした様子で、槍を握る手から力を抜いた。

とりあえずルイナイス、グッジョブ。

「ん。別に」

多分、王女の護衛だから、ピリピリしてるんだろう。
護衛もつけないで普通に外にでてくる王女の護衛だからね。

「わたし、ここにしばらく滞在する予定なので、外出は控えますね。お気遣いありがとうございます」
「うん」
「それでは、」
「ミィコ様も、この国にご滞在でございますか？」

なんだ？強引に会話に入ってきたな、シスター服の女？

滞在といえば、滞在なのだろうか。

私は頷くと、シスター服の女はニコニコと笑っている。若干、感じられる威圧は、どこか姉を彷彿させるんですけども、そちら系の方でございますか？

じりじり、と下がりながら私は頷く。

「そうですか、ワタクシ達は冒険者酒場の『ユニコーンの角笛と歌姫亭』に長いこと滞在しておりますので、どうぞお暇なときにでもいらしてください。お酒も美味しい店でございますので、一杯ぐらい奢らせてくださいませ」

１８歳だから、酒は飲めんわいヴォケ！などと言おうものなら、殺害されんばかりの空気だね。

というか、女の眼光が『拒絶したら殺す』と雄弁に語ってますよね？

そして、隣で男が滅茶苦茶不機嫌そうな顔をしてるんですけど。

「……では一杯だけ」

まぁ、兄と修行のお付き合いと、ゴブリン大戦で生きていたらの話ですが。

そこで酒じゃなくて、ジュースにしてもらえばいいか。

そして、ささっと帰ってこよう。

「ほ、本当ですか？ぜ、ぜひいらしてください」

「う、うん…すぐにはいけないけど」

そのまま、ルイは礼儀正しく喜び、女はニコニコと微笑みながら『来ないと殺す』と目で訴えてきて、男は『来たら殺す』みたいな目で私を睨みつけて消えていった。

……なに、この新手の拷問。

Ａｃｔ　１６．　転がってました（後書き）

九月二十一日に、真実子のイラストいただきましたｗｗ
イメージとんぴしゃのイラスト、髪の長さまで修正していただき、
本当にありがとうございましたｗ

Ａｃｔ　１７．　兄と妹

三人の背中を見送り、元の迷子と化した私はため息をついて、己の左手を眺めていた。

冷めやまぬ熱を抱えたまま、かすかに震えている――――長いブランクか、喜びにか、それとも両方か、私には判別がつかなかった。

結局、自戒していたにもかかわらず、楽器を弾いてしまった。

ルイは助かったからいいじゃないかと思いながらも、心の何処かで兄に申し訳なくなる。

兄は私に音楽をやめろといったわけじゃない。

事故の後、ヴァイオリンから遠ざかった私を、それとなく音楽の道に戻そうとしてた。

数年して、私の左手が完全に日常生活に支障がなくなると、何かの景品であたったから、なんて、アホみたいな言い訳しながら、私の使っていたのと同じメーカーと型の新品のヴァイオリンを持って帰ってきたことすらあった。中古ですら、馬鹿みたいに高いのに。

私はすごい運だね、なんて、ここぞとばかりに兄の心遣いも分からない馬鹿な子供のふりして、これを売って京都に家族旅行に行こうよ、とやけにはしゃいでみせた。

聡い兄は言外の私の拒絶を感じ取ったようで自嘲的に瞳を細めて、

それ以上何も言わず京都の旅行を手配した。

傷ついたかもしれないが、一瞬だ。

受け取って、演奏する日があるかもしれないなんて、妙な期待はさせなかった。

それのほうが、よほど残酷だ。

私がヴァイオリンを再開すれば、兄の苦しみは永遠だ。

安心していい。もう忘れていい。何事もなかったかのように、日々を楽しく過ごしてくれればいい。

子供の頃、私は誓った。

家族が笑って過ごせるんだったら、私はどんなことだってしよう――私の持っているものが、妨げるのなら捨てよう、と。

なにかに固執して、家族の笑顔を奪いたくない。

私の存在が家族を笑顔にさせられなくたって、せめて悲しませたりしたくない。

ヴァイオリンを初めていなければ、母は私をヴァイオリン教室に行かせなかっただろうし、恩師に会う事もなく、きっと大会なんかにでることはなかった。大会に出なければ、入賞することなんてなかったから、興奮して姉が一緒にいるのに、周囲への警戒を怠るなんて、馬鹿な真似は絶対にしなかった。

だから、あの日以来、私はきっと執着心というものを切り捨てた。

その象徴がヴァイオリンだった。

人助けだったし、ヴァイオリンじゃなかったとはいえ弾いたという事実に――――自分にがっかりする。

もう完全に自分の心にはないと思ってた。

墓場の中まで持っていこう。

今日、私はヴァイオリンを弾いてない。演奏などしなかった。それでいい。

周囲には他人ばかりだったし、今度会ったときにルイにはそれとなくお願いしよう。きっと彼女は私が演奏したことを内緒にしてくれるだろう。

ふと、急に太陽が翳って、顔を上げて、ぎょっとした。

「ミコ」

探してもらおうと、待っていたけど、このタイミングでは最も現れてほしくなかった男。

相変わらず胡散臭い笑顔の兄だった。

＋　＋　＋

はっとして、停止した思考を再起動させる。

ルイ達が去るのをまっていたかのような絶妙さで、現れたからといって先ほど曲を聴いてたと決め付けるのは尚早だ。

演奏している姿を見てないなら、わかるまい。

あの楽器はヴァイオリンに近いが、同じ音をしているわけではない。

ブランクもあるから、腕も鈍っている。

気を取り直して、遅かった事を詰って、誤魔化そう――――ってか、二人だけ？姉いなくない？

口を開こうとした刹那。

「一曲目も素晴らしかったが、二曲目もさらによい演奏だった、ミィコ殿」

あん？

兄の隣にいたジークが瞳を細めて、満足げに何度も頷いている。

いっきょくめもすばらしいが、にきょくめは――――いや、頭の中で反芻しなくたって、意味は理解しているが、心が受け付けない。

ぎ、ぎぎ、ときっと油の切れたロボットみたいに、太陽を背にした兄に視線を戻す。

兄は変わらず、歯の光りそうな爽やかな笑顔。

いつもと一緒で、苦しそうでも、悲しそうでもなく、普通だった。

むしろ細められた瞳は、僅かに温かい色すら浮かんでいるように思える。

地面に座り込んでいる私に手を差し伸べられた。

「まぁ…楽器も違うし、長いブランクもあるから、あんなもんだな」

兄の様子を伺いながら、おずおずと戸惑いながら手を伸ばす。がっちりと、手を掴み引き起こしながら兄はからかうように喉で笑った。

あんまりにも昔と変わらず、ごく自然に馬鹿にするもんだから、私も自然に悪態をついた。

「失敬な。音痴に賛否されたくないし」

「あ、音痴を舐めるなよ？いざとなったら、罵声でワイングラスだって割るぞ？」

んなもん、できるか！お前は、どんなソプラノ歌手だよ！

起き上がると、MP不足のせいか、眩暈が起きて足元がふらふらする。

兄が、『よっ』という掛け声と共に私を肩に担いだ。

「っつーかさ」

「俺とアルケルトさんが居たって、かわらんだろう？回復魔法を覚えているわけじゃなく、ポーションもってるわけでもないんだし」

おとなしく肩に担がれて揺られながら、先回りされて、むっとする。

少なくとも、ジークさんは医者の場所ぐらい知っていただろうし、私一人で声を上げる以外の有意義な救出方法を思いついただろう。

「お前を見つけたのは、一曲目の途中だからな。確認したら、ＨＰは戻ってたんだから、遠慮したんだ。二曲目には彼女の知り合いも来たんだろう？」

そういわれてしまえば、罵詈雑言の飛び出すはずだった口を閉じるより他ない。

眼鏡で確認はしたのだろう。

たぶん、あの場面で兄が出てきていたら、私は演奏を中断したが、理性で踏みとどまっても、演奏ミスをしただろう。それは、私が一番よく分かっている。

私がわかることなら、兄だってわかる。

可能性を踏まえながら、兄は最善を選んだであろう。

背中に顔があるから、兄の表情は見えないが、きっと苦笑していることだろう。

だが、一人でじたばたしていたようで面白くはない。

ごすごすと兄の腹部に軽く膝を入れながら、過ぎたことは後回しにした。

「由唯姉は？」

「ん～…まぁ、色々あって別行動だ。教会に防具買いに」

なぜ言葉を濁す？なにがあった、兄よ？？

兄だから、姉を危険な目に合わせたりしないだろうし、今気がついたが、姉どころか、チャラ男もいないので一緒に歩いているのだろう。

……それって大丈夫っていうんだろうか？？

色々な意味で、一抹どころか、三抹ぐらいの不安を感じるんですが。

ストーカーの大安売りとか。熱狂的ファン急増とか、誰かに喧嘩売られて火花を散らしているとか――果たして、チャラ男はそれを止めれるんかい。

いや、無理。きっと無理。兄の妹で、私の姉だぞう？

「妖精さんもいるの？」

「勿論だ。四人ほどな。お前が想像しうる危険はないと思うが――

いや、一部は可能性があるが」

チャラ男より、まだ顔も知らない影奴のほうが安心だ。

「結構時間食いましたけど、徒歩で１０分といったところですかね？」

「あぁ。待ち合わせには十分間に合う。多分、あちらの移動時間を考えると、我々の方が早いぐらいだ」

「そうですか」

どうやら、どこかで集合するようだ。

ゆらゆら、揺れながら、逆方向に流れる人を眺めてた私は、ボンヤリと己の左手に視線を送る。

もう熱はすっかりと引いて、震えは治まっている。

「……痛むか？」

肩に担がれて、顔は反対側にあるんだから見えないはずなのに、タイミングよく兄はぼそりと、呟いた。

感情の色を出さない事務的で淡々としているが、此方を伺うよう

な音。

「別に」

痛みなんて、とっくにない。

私は家族以外の何を失ったって、もうなにも感じない。
兄が心配するような、苦しみも、悲しみも、私にはない――――そう、捨てたから。

矛盾、してる。

ルイが――目の前で人が死に向かうさまに強い恐怖を覚えた。
子供だが、出会ったばかりの赤の他人だ。

楽器を弾いて、高揚した感情。

捨てたというのなら、それらは何処から来たのだろう。

わかりきっていることだ。

「――……雅兄は？」

家族大好きの称号を返上しなければならないくらい酷い妹だな、と自分でも思いながら、問わずにはいられなかった。

私の足を掴んでいる手が僅かに強まった。

兄の体が強張ったのは、無意識だったのだろうが、それが答えのような気がした。

いま、兄の顔が見えなくて、本当によかったと思う。

強かで、タフそうに感じる兄だけど、その内側がとても脆くて繊細だということを、知ってるくせに、残酷な失言だった。

「ごめん……今のなし」

いつもの調子で殊更明るく声を出そうと思ったが、カラカラに乾いた喉からは掠れた音がでた。

慌てたが二の句は上手く紡げなかった。

暫し無言が続いて、兄はとても長い息を吐き出したように思える。

たとえば、数年間分ほどの。

「知ってたんだな」

たぶん事故のことだろう。そんな気がする。

そりゃ、兄の妹だからね――――なんでもない風に笑って言おうと思ったのに、兄の弱弱しい声色に、またしても喉の奥で詰まったまま出てこなかった。

「本当に今更だが、俺が悪かった。お前を危険な目に合わせて――」

その時のことを私より鮮明に覚えているのか、ぎりと悔しそうに歯噛みしたのが分かった。

当時それを言わなかったのは、私を気遣ってでしょう？

それがわからないほど、私は子供じゃない。

「――そして、きっとこれからも俺の存在が、もっとお前を危険な

目に合わせるだろう。俺を恨んでも構わない…ごめんな。俺がお前の兄で……ごめんな、ミコ」

わかってる。わかっているよ。
だから、謝る必要なんて、ひとつもないんだよ。

謝罪が必要なのは私でしょう？兄に恨まれるのは私でしょう？
私が———私が弱いから、攫われて、人質にとられて、でも妹だから見捨てられなくて、兄はいっつも苦労するんだ。私のせいで殴られても蹴られても、大丈夫だからって笑うんだ。

いつだって、私は兄の弱点だった。

きっとこれからも。

「だからって、お前がヴァイオリンをやめる必要なない。これっぽっちもな。父さんだって言ってただろう？好きなことをすればいいんだって、誰も止めたりしない。それがお前の弱点だというなら、俺は今度こそ、それごと守るさ」

それでも兄は、私という弱点に、さらなる弱点を持つことを許すんだよ？

兄だって、きっと傷ついているはずなのに。
私がヴァイオリンを弾いたら、気分がいいはずないのに。

すごいだろう？

誰がなんと言おうと、私の兄は家族の味方で、ついでに正義の味方で、最近は勇者なんかにもなったみたいでさ――――かっこいいだろう？悪を砕いて、弱者を守るんだよ？自分の弱点の弱点ごと守ろうとするんだよ？

そんな奴、テレビの中とか、ゲームの中でしかいない。でも、たしかにここにいるんだ。

これが、私の自慢の兄なんだ。

「雅兄」

涙が出そうになるのを懸命に堪えるせいか、声が震えた。

「――――楽器が、弾きたいよ」

閑話　【護衛の中年騎士】（前書き）

※この話は中年騎士の視点でお送りしております。
※１０月４日加筆いたしました。

閑話　【護衛の中年騎士】

俺は国王陛下の甥と姪の防具と武器を買いに、下町を連れて歩いている。

その時点でなにか可笑しい気もするが、事実、先頭に立つ俺の誘導の後に、王の兄の娘息子たちが、続いている。

「あ、やべ。アルケルトさん、事件です」

その中で一人、異世界にきて二日だというのに、極々稀で、しかも持ち主を選ぶという遺物（オブテショーズヴォワール）の赦者となった規格外の長兄のサミィが背後から声を投げてきた。

元の世界でも一般市民だったというだけあって、貴族特有の高慢な立ち振る舞いはない。

だからといって、粗野な態度も見られない。

どちらかというと物分りもよく、気さくな空気を醸している。

特にぱっと見た目だけなら、長兄は実に礼儀正しい好青年だった。

いや、物腰は穏やかで、文句はないが、その頭の回転の速さと、ゴブリンとの戦闘が目に焼きついているせいか、見た目どおりに感じられなくなっているのだろう。

むしろ王の甥だと知って、納得してしまった。

彼に感じた底知れぬものは、数度しか見かけたことない王によく似ている。

彼の父で王の実兄の方が顔は似てると思うが、雰囲気は間違いなくこちらの方が近いだろう。

何も知らずに出会っていたなら、騙されてただろう。

上手に包まれている。

できれば、背後に歩いてほしくない人間だ。

サミィの声は世間話でもするくらいの平坦なものだったので、靴紐でも解けたのかと思った。

彼ら兄弟は、敬語なしでもいいといったが――実は意外と難しい――だからといって、護衛と護衛対象の一線を越え不遜を働くわけにはいかないので、俺は進む脚を止める。

立ち止まる際は、影奴の場所を確認したが、若干立ち居地が変わっている。

一人二人が、危険を排除するために、立ち回ることがあるので、格段不思議には思わなかったが、人数が減っているようだ。

二人ほど減っても、護衛に支障はない。

「どうかしたのか？」

振り返ると周囲を見渡していたが、誠実そうな微笑を浮かべたサミィは頷いた。

「いや、事件ってほどではないのかもしれませんが――」
「うぁああ！！」
「――困ったことになったというか」

合間の悲鳴は、サミィが突然左側の人波に俊敏に腕をつっこんで、誰かを掴んで、こちら側に引きずり込んでいるようだった。

「さ、サミィ殿っ」
「に、兄さん！？」

すぐ後ろにいたサミィの妹で、長女のユイが怪訝そうな目つきを兄に向けている。

その異邦の顔ではあるが、綺麗に整った面立ちであるためか、周囲の――いわずがな男のだ――視線を集めるために、頭巾（フード）を被って

いる。

それでも美しいと思える唇から顎のラインを隠せずに、密かに人目を惹いている。

大輪の華と呼んで差し支えない空気を漂わせる華奢な女性だが、すでに彼女の手にも弓の遺物（オブテショーズ）が握られている。

チャイラの話では、先ほど兄の手にした刀の呪いを平手で解呪したらしいことを考えると、只者ではない。

襟首を掴まれて、人並みから引き摺りだされたのは、茶色い髪と茶色の目をし、緑褐色の外套を身に纏った可もなく不可もない平凡な容姿の男だった。

道端ですれ違っても、まず気にも留めないだろう部類だろう。

最後を歩いていたチャイラの目は驚愕に見開かれ――――すぐに俺も見開いていた。

だからこそ、驚いたのだ。

さきほど、彼は影奴（エイド）が七人いるのも、隊長格も見破っていた様子だった。

具体的な言葉だったので、本当に分かっているのかもしれないと、

内心冷や汗を流していたが――――彼の言葉が真実だったことを証明された。

今回の護衛につけられた騎士の影奴（エイド）の隊長格のザザス。

兄弟の買い物の前に打ち合わせで、早朝に顔を合わせているのだから、間違いない。

それが、サミィに襟首を掴まれている。

「なんだ、あんたいきなり――」

「ご苦労様です。我々兄弟の護衛、ありがとうございます。さっそく仕事を増やしたようで申し訳ありませんが、結構前ですか？」

目を瞬かせ他人と成りすましているザザスが声を上げようとする。自分の意思ではなく、警護対象と向き合うことになったせいか、少し慌てている様子だ。

遮る様なサミィの言葉に口を噤んだ。

言葉を発するタイミングを失い、困惑げに眉根を寄せ、俺を睨みつける。

俺がサミィに告げ、仕事の邪魔をしたとでも思ったのだろう。

隊の仲が良くないからといって、俺が護衛の妨害をするような男に見えたのだろうか。性格の不一致はあるが、隊の違うチャイラやハーンとも円滑にやっているつもりだ。

「ザザス、俺じゃない」

そんなことあるか、というように疑いの眼差しを向けてから、サミィに向き直る。

俺に名前を呼ばれたので、もうあきらめた様子だった。

「十分ほど前です」

「そうですが。二人ほどいるなら、ある程度大丈夫ですよね」

「あ、あぁ…やつらは腕が立つ」

俺は『二人』という言葉に眉根を寄せる。

先ほど立ち止まる際に確認した限り、影奴が二人減っていることに気がついたから。

それに、影奴（エイド）は護衛対象者の手が届くところにいることは滅多にない。危険を察知して距離を縮めたか、なにかの知らせがあるときだけだ。

俺は眉根を寄せた。
サミィはわずかに安堵の息を吐き出し、謎の男と会話している兄をユイが小突く。
「なにかあったわけ？」
「ん？あぁ、大したことじゃないんだが……ミィコが迷子だ」
「は、はぁ？？ミィコなら――」
私の後ろに、とでも言いかけて振り返って、ユイが固まった。
ついでに、最後尾――ミィコの後ろ――を歩いていたはずのチャイラは、いつもの飄々とした笑顔のまま青ざめていた。多分、俺もだろう。
ザザスの密やかなため息が耳朶に痛む。
警護対象を十分も失っていて、平然としていられるほどではない。
「場所を移動してなければ、二本前の西通りに。自然に接触するのに手間取り、ご報告が遅れたことを謝罪いたします」

当初の人数より一人少ない――いや、率直に言えば、ミィコの姿はなかった。

それで、二人。

迷子になった子供を、陰ながら二人が見守っているということか。

兄弟の末の子は、容姿もさることながら、中身もどちらかといえば平凡のように思っていた。

車の中で長兄を叱咤したり、素晴しい料理を披露したりと、他にも色々印象深かった。

だが、この長兄の前にはどうもかすんでしまう。

口数が少なく、表情も目立って変わらないので、意思の疎通も不自由するが、兄姉のように気にかけるべきものはないとそう思ったが、認識を改めねばなるまい。

サミィとユイの存在感が異常なまでに際立っているせいか――――ミィコの存在感が薄い。

今回はチャイラの失態やもしれないが、怒鳴りつける気力はないし、そうした所でミィコが迷子になったことを帳消しにできるわけではない。

俺は頭を抱えたい衝動をぐっとこらえる。

瞬時に全員で戻ろうと口にしようとしたが、遮ったのはやはりサ

ミィだった。

「道の脇に避けて、座り込んでました？」
「え、ええ、私が最後に見たときは」

普通に話しかけられて――貴族の護衛対象は護衛の失態には辛辣だ――驚くザザスに構うことなく頷き、やはり爽やかな笑顔を浮かべている。

素朴でとても好青年にしか見えない。

「なら大丈夫。あいつは滅多な事じゃ、迷子になった場所を動きませんから。ユイ、お前は先に教会で防具買ってこい。アマデウスさん、申し訳ないが付き添いを。そちらに影奴（エイド）四人を選抜してください。俺はアルケルトさんと、影奴（エイド）からの道案内でこちらに一人。待ち合わせ場所は、距離と場所から言って、最初に馬車を降りた商会の前でこれから一時間後に待ち合わせを。十分以上遅れた場合は、向かいのとおりに大衆食堂があったと思われますので、そちらで座って待っているというのはどうでしょうか？」

しかし反面、語りの軽やかさと、落ち着いた声色に舌を巻く。

どうでしょうか？という疑問系にして、俺に笑いかけているが、すでに彼の中で決まりきったことのように思える。

彼らには午後までに城に戻る予定で、武器と通常の防具を揃えるのにも手間取ったし、これから予定外となった教会まで足を伸ばさなければならない。

時間に余裕をもって計画されていたこととはいえ、その余裕は使い切りつつある。

それに、護衛は――昨日のゴブリンとの戦いっぷりを見る限り――この男には必要ないだろう。

逆に、頭巾を被っていても、男の目線を引くユイの方が偶発的に危険を招く恐れがある。

俺が噛み砕いて考慮する限り、限りなく冷静で正確な選択であろう。

「それで最善でしょう。手配してる馬車も、商会があったとおりの一本裏通りに呼んでありますし、時間には限りがあります。チャイラ、ユイ嬢を教会へ。ザザス、道案内を一人残して、ほかをユイ嬢の護衛へ。待ち合わせ方法も、今のもので構いません――かまわない」

完全に敬語になっていたので、慌てて最後を修正したが意味がな

いことだった。

俺は敬語なしであることが苦手であるわけじゃない。

日頃ならばそれのほうが楽であるが、ただ気を抜くと『彼』に対して敬語になってしまうのだ。

まるで王に拝した、ような。

超越に対して膝を折るように、ライオンを前にして怯む様に、自然と敬語になってしまう俺をいったい誰が責めるというのだろうか。

構わずに崩した口調で話すことのできるチャイラが少し羨ましい。

＋　＋　＋

待ち合わせの時間を確認して解散した我々だったが、サミィが動かない。

残念ながら、道案内はザザスで――どうやら隊長補佐にチャイラの方の全権を委ねたようだ――若干ギスギスした空気を醸し出している。

影奴（エイド）の戦力比を考えれば妥当だ。

しかし俺にしてみれば、人数で負けるこちら側の三人の方が総合戦闘力が高いと断言できる。
ザザスはサミィが戦えるとは露ほどにも思っていないための采配だろう。

それを説明し、納得させるにも時間を浪費するので口を噤む。

「どうかされま――したか？」
「すみません、時間があるので寄り道を。この近隣に先ほどの跳黒牛（ジーガ）とキャックル金属を取り扱っている店に向かいたいのですが」

防具屋のゼンゲルディーブルと話していたときに、なぜか彼が反応したのが俺の記憶に刻まれている。その態度がゴブリンとの戦を知り、家族を戦から遠ざけようとする姿に似ていたからだ。

兄の態度に反応したミィコに何かいっていたような気がする。

「その……よくわかりませんが、らいあーつの関係ですか？」
「？らいあーつ？」

不思議そうに彼は逡巡したが、すぐに苦笑を浮かべて頷いた。

「ライアーツ――ええ、そうです。少し気になることがありまして、お手間を取らせて申し訳ありませんが」
「いえ。しかし、先にミィコ殿を回収したほうがよいのでは？」

「いいんです。どうせ、早く行っても遅くいっても何か起きてるだろうし。たまには自分で自分の尻拭いをさせるのも兄としての思いやりです」

にやり、と少し意地悪そうな笑みを浮かべた。

その言葉に不安を覚えながらも、団長を通じて国王から『彼らの好きにさせるように』と言われているので、従うことにした。

安全性というのなら、ミィコにも二人の影奴（エイド）がついているので、多少ならば無茶がきくだろう。

道中で跳黒牛（ジーガ）とキャックル金属の出荷地や、流通など聞いてきたので知りうる限り答え、彼の意思に添うように近場の防具屋、素材屋、道具屋を数件ずつ回った。

彼は素材を探している客のふりをして跳黒牛（ジーガ）とキャックル金属の在庫や、いつから、どれくらいのペースで来なくなったかを、何気ない風を装って短い間で聞き出していたのには、国の諜報部隊も舌を巻くであろう。

人当たりのいい笑顔がここぞとばかりに発揮される。

ザザスはかなり破天荒な護衛対象者に頬を引きつらせていたが、本来の任務を思い出したようで、周囲の警戒を強めた。

そうして、どれくらい時間を費やした後だったかだろうか。

サミィが眉根を寄せるような事件が起きたが、彼の名誉のために

口を噤んでおこう。

＋　＋　＋

ようやく時間を無駄な浪費して本筋に戻り、ミィコを迎えに最初にチャイラ達と別れた道の二本西通りに差し掛かったときだった。

とおりの人が、珍しいことに疎らで、遠くに人だかりができている場所があった。

「あれだな」

サミィは僅かに苦笑を浮かべて、迷いなく人だかりに向かった。

ザザスに視線で確認したが、この通りであることは間違いないようで、頷いていた。

途中で、ザザスの部下が目配せで、人だかりの奥を示していた。

しかし、数メートル手前で、彼はぴたりと足を止める。

「……ちょっとまってくれ」
「は、はぁ…かまいませんが」

もう少しで人だかりというところで、足を止め、瞑目していた。

気がつけば、緩やかに奏でられる美しい弦楽器で奏でられる音楽が聞こえている。

柔らかく耳朶に触れる。

気がつくと、意識をそっちの持っていかれそうなほど心地がいい。

かなり身分の低い貴族とはいえ、俺にも多少の教養はあり、数度王宮の要人警護の付き添いで社交界に足を向けたこともある。その時に聞いた音楽家たちの腕に並ぶものがあるだろう音色だ。むしろ上品な音色よりも、俺はこの音のほうが好みである。

パフォーマンスで弾いているにしては、腕のいい吟遊詩人だ。

残念なことに、音の繋ぎが一瞬だけぎこちなく響くが、他は文句のつけようがないだろう。専門家が聞けば、もっと何か分かるだろうが、俺にわかるのはそれくらいだ。

サミィはその音楽に耳を貸しているようだった。

「あいつ、の――――ミィコの…音だ……」

一瞬、耳を疑った。

ため息のような弱さで吐き出されたサミィの声が微かに震えていた。普段よりも通りが静かでなければ聞こえなかったような弱さだ。

懐かしむような、喜ぶような、奇妙な声色だった。

己の胸の辺りを掴み、瞳を瞑り、俯くような姿は、まるで神に祈りを捧げている敬虔な信者にも見えた。足を止めて彼は聞き入っている。

ザザスもどことなく不機嫌そうな空気を弱めて、音の発信源であろう人だかりの眺めている。

野次馬が多すぎて、隙間から瞬時には見えるのだが、ミィコはしゃがんでいる為か、こちらで判別はしにくい。

だがサミィは断言した。

なぜか、彼が言うなら、間違いないと思う。

「これは、ミィコ殿が弾いているのですか？」
「あぁ」
「見事な腕前ですね」

冗談抜きに、ミィコの年を考えるならば、素晴らしい腕前だ。
家族ならば誇らしく思って、当然であろう。

続けて弾かれた二曲目も同じ曲ではあるが、さらに豊かさを増して、伸びやかに響いていく。音に酔いしれるというのはこういうことなのだろうか。

野次馬でもない人間すら、足を止めているのがちらほら見える。

「――――そう、だな」

暫しの間を置いて、吐き出された返答は、予想とは遥かに違って冷たい自嘲を含んでいた。

ゆっくりと、両目が開かれる。

「あいつは幼い頃から将来を嘱望されてたヴァイオリニストだったよ。音楽に触れているときが、一番幸せそうだった」

「だった？」

声を上げたのは俺ではなく、意外にもザザスだった。

まるで遠い昔の話でもするかのようにサミィの言葉は、過去形であった。

「俺が」

護衛対象者に対して無遠慮とも思える発言だったが、それにサミィは気にかけた様子もなく、鋭く瞳を細めた。

「潰した」

問うたことを後悔するほどの、凍えるようなどす黒い憎悪と、渦巻くような凶悪な激憤が、蓋を開けたように突如放たれて全身が粟立つ。

冷や汗が噴出して、俺は恐怖によろめき、一歩下がる。

四肢が強張り、モンスターを相手にした時すら感じ得ない威圧に耐えるように、奥歯をかみ締めた。

彼が護衛対象でなければ逃げていたであろう、強烈な———殺気だった。

それも一瞬で、閉じられたように消えたが、その強すぎる余韻に、

暫し彼を凝視したまま、言葉も発せられず、動くこともできなかった。

柔らかな曲はいつの間にか終わっていた。

サミィが、ミィコの側に寄ったときにはいつもどおりで、ザザスも自分の仕事に戻ったようだった。俺は恐怖を打ち消すように静かに首を振る。

俺は素晴らしいミィコの演奏を素直に褒め、その事を忘れるように勤めた。

俺の目から見ても、彼らは驚くほど仲のいい兄弟だ。
見知らぬ世界に放りだされて結束が強まるというのではなく、元々そうであったように感じる。

だからこそ、サミィが自らの手でミィコの未来を潰すとは思えない。

ましてや、殺意は明瞭に誰かを思い描いて放たれていた。
さすがにそれくらいはわかる。

そうでなければ、とっくに俺は逃げ出していた。自分に放たれたものではないから、なんとか踏みとどまることができたのだ。

ミィコに危害を加えた人間がいたのだろう。

俺は直感的にその者は、ただでは済んでいないことを悟っていた。あえて、口に出して確認するほどではない。

再び誘導しながら、後ろの二人のやり取りに失礼ながらも聞き耳を立てて、胸を下ろし、楽器を弾きたいと望んだミィコの為に時間に遅れるのを覚悟で進路を変更した。

閑話　【護衛の中年騎士】（後書き）

少し前にイラストを描いていただきました方が、みてみん様でイラストを公開してくださるとのことｗｗこちらならば、ＵＲＬを公開してもよいとのことでしたので、遠慮なく掲載させていただきましたｗな、なんと、岸田兄弟全員です！しかも作者イメージにぴったりｗｗ本当にありがとうございましたｗ

ｈｔｔｐ：／／４０５３．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３２０５５／
ｈｔｔｐ：／／４０５３．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３２０５４／
ｈｔｔｐ：／／４０５３．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３２０５３／

もし、ＵＲＬで飛べないようでしたら、みてみん様の『岸田』で検索なされるとみれる、はず？

Ａｃｔ　１８．　機嫌の悪い姉

「――――と、まあ、色々あってなぁ」

ふーん、と相槌をうつが、兄のかくかくじかじか的な説明を受けつつ、こりゃ大分省いたな、と内心呟いた。もっとなんかあったのだろうことが容易に想像できる。

まず途中で気がついて、引き返したのがいつだか分からないが、時間が経ちすぎている気がする。

時間を省くために『兄探索チーム』と『姉買い物チーム』の二手にしたまではいい。

その後、ずっと探していたなんてことは兄に限ってない。

迷子に気がついても、兄ならもっと早く――――もしかして、迷子になったのも気がついてたけど、放置されていたのか、私??

腹時計的に一時間は過ぎているだろうし。

適当な兄の説明に、ジークが微かに視線を彷徨わせているところからも容易くわかる。

ま、いいや。

今は気分がいいから、後回し。

後でジークに事情聴取しよう。

私はＭＰ不足で、まだ頭重く、多少足元をふらつかせながら、ジークの後ろを歩く。私の後ろには兄。もう絶対に、迷子にさせないぞーな陣形だ。

両手で布に包まれた楽器を抱えて、ニヤニヤしてしまう。

そう、ゲットいたしました！

この世界でも予想はしてたが新品の楽器は高額で、新品は当初から諦めた。

しかも入った店ではヴァイオリンの中古品がなく、待ち合わせまで時間がないから、他の店を回る余裕もなかった。

別にヴァイオリンに固執する気はない――――勿論、私が音楽の徒となったきっかけはヴァイオリンだし、一番要領を得ているが――――今は、ただ楽器が弾きたい。見知らぬ楽器なら、独学で始めればいいだけの話だ。

それにヴァイオリンの新品が高いなら、いつか自分で金を貯めて

買えばいい。

これは武器とか防具じゃないから、本当は叔父さんからのお金で買っちゃまずかったようで、ジークは苦い笑いを浮かべていた。

ジークが怒られるのかもしれないので、謝ると彼は首を横に振って「いつかもう一度聞かせてくれたらチャラにしよう」と大人の余裕のある発言で返してくれた。

叔父さんにも謝って、地道に返金するとしよう。

何にしようかと迷ったけど、ルイと同じラバーブをチョイス。

これも実は新品はヴァイオリンほどではないがいいお値段だった。でも幸い中古品があったので、一度弾いていることもあって、決めた。

特に銘のあるものじゃないが、きちんと調律されている。

前に、これを使っていた人が、心を込めて使用していたのだろう。

なかなかの掘り出し物だと、人の良さそうな親父は笑っていた。

実際、一度商品なのに弾かせてもらったのだが、音は文句なくいい。

親父はかなり値引きしてくれた上に、調律をいつでもしてくれるとの約束までしてくれた。

腕の中のラバーブ。

心が躍るというのはこういうことをいうのだろうか。
もう、弾きたくてウズウズしている。

ふと、ヴァイオリンケースを片手に練習場所である川原に向かっている自分を思い出した。そういえば、こんな逸る気持ちで毎日走り出していたような気がする。

あの時、世界が輝いていた。

澄み切った空が高くて、川原の草が風に揺れる音がヴァイオリンに重なって、水面に反射した太陽がキラキラしてた。

微かに自嘲が零れる。

こんな気持ちすら忘れていたのだ、私は。

きっとあの時のような、真っ直ぐな音はきっとでないだろう。
でも、あの時は弾けなかった音を奏でられる。

地獄の特訓の後じゃないと好きなだけ弾けないので、それだけが

無念である。できれば、一日中弾いていたいが、命の方が大事だろうと兄に諭されてしまった。そりゃそうだ。

ただ私には、兄姉のように遺物（オブテショーズ）とは出会わなかった。

でも、いいと思う。

良くも悪くも私は平凡なのだ。

やっぱりな、とか思うけど、私はできることをやればいい――きっと、したいことをすればいいんじゃないだろうか。

前ほど卑屈にならずに受けいられるのは、手に重みがあるからだろう。

＋　＋　＋

ただ姉に会うのは、なんともいえない感情を抱いた。

あの事故以来、二度と弾かないという空気を出していた私が、異世界で楽器を抱えて歩いているだなんて、驚くだろうか、いぶかしむだろうか。

姉はどう思うだろう？

父は元々放任主義だったし、母は時々「もったいない」と言いながらも放置してくれた。

兄はさりげなく私を音楽の道に戻そうとしたが、姉は違った。

ヴァイオリンをやめ、一日の大半を家でダラダラとゲームにうつつを抜かす私を嫌がった。

妹がオタクの道に進むのが嫌だったのかもしれないが、それまでは休日には一緒にあまり出かけることはなかったのだが、やたらと外に連れ出すようになった。

荷物持ちだったかもしれないが、それなら姉の下ぼ――いや、姉を慕う男性が喜んでしてくれるはずだ。

気を紛らわせようとしてくれていたのだと思う。

ヴァイオリンを手にしない休日の時間の流れは、ひどく緩慢だったから。

その心遣いを有難く思いながらも、なかなか素直にお礼など言うことはできなかった。

「やはり時間が過ぎたのでしょう。向いの大衆食堂に移動しましょ――しよう」
「大衆食堂？」
「時間が過ぎた場合の待ち合わせの場所にしたんだ」

最初に馬車を降りた大通りの食堂らしき場所に誘導されていく。
お世辞にも綺麗とはいえない食堂だったが、店内は明るく光が差し込んでおり、そこそこ清掃が行き届いている。

昼が近いせいで、けっこう混雑していた。

きっと安くて、早くて、ボリュームたっぷり的な店なのだろう。
味は…どうだろう？王宮があんなのを出しているだけで、下町は意外と美味しい物を食べているのだろうか？

でも騎士ですら、ホットサンドを美味そうに食べていたところを考えると、期待は薄い。

労働階級の男性がほとんどだが、ちらほら女性もある。

私はようやく気がついたのだが、労働階級の女性も髪の毛を束ねているだけで、長いのが基本だ――――というか、街中でも、この世界で髪の毛が短い女性を見たことがない。

私の髪は短く、ショートなのだが『弟』に間違えられているのは、

そのせいなのだろうか？
いや、そのせいだと思いたい――いや、そういうことにしておこう！

姉はこの食堂でも頭巾（フード）を目深にかぶっていたので、すぐ見つかった……のだが、機嫌が悪い。というか、物凄く機嫌が悪い。

足を組み、腕を組んでいるのは、その合図のようなものだ。
日頃はこんな座り方を滅多にしない。

親指の爪を噛んでないだけ、まだましだが。

眼鏡をかけていたら、ブリザードが吹き荒れているエフェクトが見えていたんじゃないだろうか。

神殿だか、教会だか、の目的地か、その往復の途中で嫌なことがあったのだろうと、思うけど…？

まさか、私たちが遅れたせいで、とかじゃないよね？
そんなに遅れてないよね？？

テーブルの上のコップから湯気が上がっているということは、なにかを注文して届いてから、時間が経過してないためだと思われる。

姉が大衆食堂についたのは大分前というわけではなさそうだ。

ほっと胸を撫で下ろす。

「あ、あちらに――――どうかしましたか？」

思わず、兄と私は足を止めてしまう。
たじろぐ私たちをジークが不思議がっている。

「ん、いや。由唯の機嫌が良くないので」
「え？そう、ですか？」

私も兄の言葉に大きく頷くと、ジークが小首を傾げていたが、ここで立ち往生しているわけにはいかないので、決死を覚悟して、そーっと近寄る。

ちなみに隣にいるチャラ男は生気のない顔をしている。

こう、なんていうか……口から魂でてるけど、大丈夫？と聞きたくなる。

大衆食堂の一角のここだけ、葬式の後か！と突っ込みたくなるくらいの暗さだ。遠めに見ても二人の間に会話らしい会話がまったくない様子。

近寄りながら兄と私は互いに目配せし、じゃんけん――しょっ！

私がパーで、兄がチョキ。ちっ！なんでヤバイ所で、いっつも負けるんだ私！

負けた私は潔く、姉に声をかける。

「由唯姉……遅れて御免」

俯いていた様子の姉が、ゆらりと顔をあげる。

頭巾の隙間から、厳めしい色の浮かぶ瞳が細め、辛うじて笑みらしいものが浮かぶ。見えないけど、コメカミに青筋とかリアルに浮き上がっているんじゃなかろうか？

「べぇぇつにぃ、待ってませんけどぉ？」

うわ！機嫌悪！

懸命に押さえ込もうとしてるけど、バレてますけど！

でもＭＡＸっていうわけではなかった。それだったら話しかけた瞬間、八つ当たりしてくるはずだし、最悪の場合は口も開かない。

「ちゃ、チャイラ、なにかあったのか？」
「ん…あぁ～」

ジークも重々しい空気に耐え切れずに、チャラ男に問うが瞳が遠くを見てる。
側に来た私たちに、やっと気がついたって感じだ。

「た、只者じゃないと…思ってたけどぉ…華麗な連打が――てっ！」

きっと姉に睨みつけられて、見えないけど、テーブルの下で蹴りを食らったのだろう。そのまま、首を横に振って、引き攣った笑みを浮かべている。

姉よ！あんた、いったい何をやらかしたんですか！！
なんだ、華麗な連打って！？暴行罪しちゃってるんですか姉！？

チャラ男が荷物をもっているから、無事？に買い物は済ませてきたのだろうけど、なにが起きたのか物凄く気になるんですが！

果てしない疑問に駆られたが、ふ、と姉の機嫌の悪い目が私の腕の中に向く。

「ミコ、なにそれ？」

ううぅ、やっぱりきたか。
心構えはしていたが、できれば機嫌の悪さに任せて、スルーしてほしかった。

後ろめたさのような、気恥ずかしさのような気分に、ぎゅっとラバーブを握り締めて、知らぬ顔で視線を彷徨わせると、兄が口を開いた。

「ラバーブだ」
「らばーぶってなによ？」
「ヴァイオリンのご先祖様みたいなもんだ」

ヴァイオリンと呟いた後に、姉がただですら大きな瞳を、さらに大きく見開いた。

「そう」

と、あっさりと姉は引き下がって、問い詰めることもなく、ひとつ小さく頷いて、嬉しそうに微笑んだ。

あまり姉が見せることのない類の、優しい微笑だった。
いつも美人だが、このときばかりは聖母のように神々しかった。

同性で顔立ちに見慣れた妹ですら、見惚れる。

事故以降、数年も絶っていた音楽に舞い戻る私に対して、素っ気無いものだったかもしれないが、今はそれがありがたい。

無駄に騒いだりしない姉の心遣い。
でも姉が自分のことのように喜んでくれているのがわかる。

だから、私も照れ隠しに笑った。

上手く笑えていたかわからないけど、姉は立ち上がってくしゃり、と私の頭を撫でた。

うっかり、そんな姉の聖母のような微笑を目撃した数名の男が動きをぴたりと止めて、耳まで真っ赤になっていたが、見なかったことにしよう。

Ａｃｔ　１９．　昼食の幸一

装飾品(アクセサリー)も買う予定だったが、頼んでいたらしい馬車の時間になり、帰ってきた。

もう叔父が、誰かから奪ってくるという魔法道具？に期待しよう。と話し合いで決定。

兄が魔石の原石を欲しがったが、これも断念。

きっと姉の弓に装着して、実験する気満々だったんだろう。

帰りの馬車の時間、岸田兄弟はぐったりとしていた。

目まぐるしい午前中を過ごして、もう私としては昼寝したいぐらいの疲労感が満ちているが、午後からの特訓とやらがあるので、そうしてもいられない。

幸いな事に、帰りの馬車は四輪馬車？というやつらしく、ゆったりと六人ほど座るところがあった。

車とは違い、御者の後ろに三人掛けと向かいに三人掛けがある。

どうせ、無心で外を眺めることもできないので、仮眠をとることにした。

短いけど、ちょっと寝れるだけでも違うだろう。

話によると、騎士の訓練は本職であるジークをもってしてもきついものなのだと、脅された。体力がない状態で一般市民が挑んだら

……あぁ、考えたくない。

兄は珍しく椅子の背にもたれていた。

外では、いつでも動き出せるように浅くしか腰掛けない。

多少は兄も気を張って疲れたんじゃないだろうか。姉も機嫌はよくなったがダルそうに髪の毛を掻き上げている。

すぐに姉が兄の肩を枕代わりにしていた。

席に多少のゆとりがあったので体を縮まらせて、私は兄の膝枕で眠った。

母より硬くてむかつくが、枕がないよりはましだ。

＋　＋　＋

王宮に帰ると、すでに十二時を過ぎており、昼食の時間だった。

部屋に装備を置いた後、叔父と最初に会った王家の食卓っぽい所に通される。
さすがに、赤毛の人と騎士団長はいなかった。
叔父と父と弟王子の「お帰り」に応えながら、真っ先に声をかけてくるであろう母がいないことに気がついたが、それよりも先に叔父が声をあげる。

「どやった？装備買えたかいな」
「装飾品（アクセサリー）以外は大体」
「さよか」

と、叔父は苦笑した。ちら、っとこっちに視線が向いていた。

「どうせ、またミィたんが迷子にでもなったんやろ」

ば、ばれている！さすが叔父！とでも賞賛しておこうか。

「迷子に？大丈夫でしたか、ミィコ殿？」

無駄に心配するな！弟王子！居た堪れないから！
大体、兄と姉が一緒なんだぞ。迷子になってもどっちかが迎えにくるんだい！

……姉だと即オシオキ決定だけどもね。

「あ～……ゼル、そこは気にしたらあかんよ。甘えや甘え。寧ろミィたんは方向感覚ええし、一人で歩いてたら道迷わんのに、兄弟おったら甘えっぱなしで、前すら見て歩かんのや。はぐれて当然や」

「それはいえてるわ」

「だな」

鼻で笑う姉に、歯をきらりと光らせた兄。

父は苦い笑いを浮かべている。

迷子を心配していた弟王子は困惑げに口を開こうとしていたが、私はそれを遮った。

「……母は」

話題転換のために気になっていたことを口にすると、叔父はにやり、と笑った。

「キッチン」

主婦がキッチンですることは一つ。

よっしゃ、と内心ガッツポーズである。我が兄弟たちも同じ気持ちだったらしい。

「やっぱり人の三大欲求のひとつなのね、食事って」

「んだな。他はどうにかなっても、睡眠欲と食欲は抑えがたいもんだ――まぁ、それさえなんとかなれば、どこだって難なく生きていけるさ」

つまり母の作った食事が恋しいということだ。

食材とキッチンが一緒ならば、母の腕は料理人並のである。というか、母のステータスのジョブは料理人と主婦だったような気がする。

しかし、ここは異世界。

不思議異世界食材と、キッチンの使い方で手間取る可能性も考慮してるが、それでも期待してしまうのはしょうがないだろう。それほど朝食は味気ないものだった。

「あら～、おかえりなさい。ちょうどいいわぁ」

ちょうどよく母が戻ってきて、その背後から、生執事と生メイドがお盆を持ってくる。

そのお盆の料理の上に蓋はしてあるけど、いい匂いが漂った。

生執事と生メイドも時折喉仏を鳴らしているように感じるのは気のせいではないだろう。思わず、鼻がひくついてしまう。

こ、この食欲を掻き立てるようなスパイシーな香り！

「お、久々やなぁ」

叔父なんぞは、懐かしそうに目を細めて、涎を垂らさんばかりの顔だ。

王子は嗅いだことがないらしい刺激的な香りに目を瞬かせている。

お盆が目の前に置かれて、かぱーと開かれると、予想通り湯気を上げているカレーライス！！野菜もお肉もごーろごろだ！

全米ならぬ全岸田一家が愛したカレーである。

しかも手捏ねハンバーグにチーズのせ、ゆで卵半分付――――私のカレー美学における最高コンボである！これに福神漬がついていたら、至高の域に達するであろう。

さすがにそこまでは用意できなかったようだが……チーズあるん

だな。よかった。母の持ってきたスライスチーズと違い、黄色が強いので、この世界のものだろう。

だとすると、他の家族は見なくても大体わかる。

兄が大盛りカレーライスにハンバーグと半熟卵が天辺に乗ってるやつ。

父は同じく大盛りカレーライスにハンバーグが二つ。

姉のは皿ではなくて器に入っており、天辺に大量のチーズが乗ってる焼きカレー。

母も器の焼きカレーで、後乗せのハンバーグと、私と半分このゆで卵付。

叔父は大盛りカレーライスにハンバーグが二つで片方はチーズがのって、半熟卵が天辺に乗っているにもかかわらず、半分に切られた半熟ゆで卵が二つ。

本当は父の皿にらっきょがたっぷり乗っているだろうが、さすがに異世界にはないだろう。

私の福神漬もなかったし。

きっと、叔父の家に行った時に、私が食事当番で使おうとしていたカレー粉を使用したのであろうが、別に文句はないというか、ありがとうございます。

母の機嫌のいい時とか、労いの時にしか出現しない『特別な母のカレーライス』である。普通の日はみんな同じカレーライスのみである。

サラダとらっきょと福神漬ぐらいはつくが、ハンバーグや卵なんて滅多につかない。

今回は異世界二日目頑張ってるねw的な労いだと思われる。

ついでに、岸田一家ではこれが出ると皆、瞳を輝かせて――

「幸一やん！」
「幸一だわ」
「幸一だな」
「……幸一」
「俺か！」
「そうなのぉ、今日はお父さんなのよ」

――という不可解な掛け声が発せられることになる。

なぜかこれを目の前にすると岸田家族は同じことを――うっかり流れで恥ずかしながら私も――必ず口走るのである。理由はくだらない。

特別な母のカレーライス
←
母のカレーライス

←
母のカレー
←
母の彼？
←
母の彼って幸一（父）じゃね？

という正直どうでもいい駄洒落である。

「こ、これは？」

そこで、困惑の声を上げたのが弟王子だった。

家族が各々眼前のカレーを食い入るように眺めていたが、それに顔を上げる。

弟王子のカレーライスにもハンバーグが乗っている。

「あぁ……ゼル、カレーライスは初めてかいな。せやったら、お前にはハードル高いわ」

「かりぇーあいしゅ？ですか？？」

かりぇーあいしゅ……辛くて甘くて冷たそうな物騒な食べ物が頭に浮かぶ。

名前も駄目だけど、和製英語?も駄目なのか。それとも名前のみ??でも、ホットサンドは普通に発音してなかった?まぁ、どうでもいいけど。

「そや、コシェが煮詰められて、辛い味付けになったと思ったらいいわ―――さすがに、色味があわんやもしれんけどな」

色味……あぁ!そうか、彼は初めて見たのか。

それだと、うん、ちょっと引くよね。ということを私は理解した。

弟王子にとっては、三度目の異世界料理であるが、見た目がレッドフォックスやホットサンドよりも物凄くレベルが高い。

躊躇うのもしょうがない。匂いで食欲をそそられていたいたらしい生執事と生メイドも、視野に入った途端に、一転して青ざめているようだ。

どうやら、この世界では、カレーが出現したのは初めてらしい。

「無理せんでええ。もし見た目であかんかったら、わて喰うし」

いや、むしろ、弟王子が残すことを望んでないか?

叔父よ、目が爛々としてるぞ。

数秒の間を置いて、ぐっと弟王子が決意をしたようにスプーンを

握り締める。

「――――いえ、僕も獅子王の息子。この試練を乗り越えてみせます」

重っ――――弟王子、重っ！

いや、岸田家で基本的に好き嫌いはご法度で、母の作った食事を残そう物ならば、なぜか父が珍しく怒るのだが、勿体無いから吐くくらいなら食うなと言われるだろう。

しかも「獅子王」ってどんだけ、中二病を患っていらっしゃるのだ。

人様のことをいえませんけどね。

「獅子王」

「うっさいわ、ミィたん――笑うな、雅美ちゃん！」

にやにや、獅子王こと叔父に視線を送ると、軽く睨み返されてしまった。

照れ隠しのようで全然怖くない、獅子王よ。ぷぷっ。

兄もニヤニヤしている。

「もう、なんだっていいわ。いただきます」

姉の投げやりな「いただきます」に続いて、岸田一家が「いただきます」をすると、勢いよく食べた。

一口目はやっぱりノーマルカレーから口にする。

ちょっとご飯の水分が多いような気もするがご愛嬌だ。

人それぞれの好みの範疇程度だろう。

ちょっと甘めなのが好みなので、父や兄には物足りないかもしれないが、丁度いい。多分、私に合わせたというよりは、弟王子が食べやすいように辛さを抑えたのだと思う。

それでも刺激的な辛さに食が進む。

なぜか同じカレー粉を使っても、この味は出ない。野菜や肉の分量だって一緒だけど、幼い頃から食べている母独特の味である。

恐る恐るという様子で、スプーンにカレーを掬い上げる。

く、と眉根を寄せて、口に含む。

目を瞑りながら租借して、徐々に目を見開くと、カレーを嚥下する。

「お、美味しい――――とても美味しいです！リエさん！」

「うふふ、そぉ？ゼル君のお口にあってよかったわぁ。いっぱい食べてね」

いつのまにか、岸田一家全員＋αで弟王子の行方を、一大スペクタクル映画のように眺めていたが、その言葉に詰めていた息を吐き、自分の食事を開始した。

王子が私たちと同じように山賊みたいに食べているのに優雅なのは何故だろう。

どうでもいいことを考えながら、私は午後の鍛錬に備えて、食事を再開した。

昼食の最中に、兄と叔父は長いこと話してた。

兄と姉が赦者（アヴォワール）で、武器屋と防具屋にあった遺物（オプテショーズ）を手に入れたことなど。

叔父は「へぇ～」が3程度の反応だったが、弟王子は水を噴出した。

向かいに誰も座ってなくてよかったな。いてもテーブルがでかいから無事だろうけど。

弟王子の話だと、兄弟が二人とも赦者（アヴォワール）であることは珍しいということだ。

それから、叔父のお金で楽器を買ったこと。

むしろ叔父の驚きはそっちのほうが大きくて、誰が買ったと言わずとも、こちらに視線が向けられる。ついでに父と母の優しい眼差しに居た堪れなくなる。

視線を泳がせて、音を立ててカレーを食べた。

「ま、ええわ…せやけど、金払った分、聞かせてくれるんやろなぁ」

冗談めかして、叔父は悪戯っぽく笑った。

それに私は苦笑を返した。

今の状態では無理だろうけど、いつかそんな日が来てもいい。

「……ヴァイオリンじゃないから、時間かかる」

「さよか。楽しみにしとるで？」

慌しい朝食よりも落ち着いており、岸田家の食卓は穏やかに続いた。

・　・　・　・　・

しかし私は、この時まだ知らなかった。

母が午前中に王宮のキッチンで王宮料理人とひと悶着あって、料理対決で大勝利を掴み、王宮の台所に第一次料理革命を起こしていることなど。

そして後々、余波が私に飛んでくることなど、全く知らないのであった。

Ａｃｔ　２０．　第二騎士団へようこそ

ジークが所属する第二騎士団で世話になるらしい。

昼食が終わった後、連れて行かれたのは地獄――――騎士の鍛錬所だった。

バタバタしているのは常なのか、ゴブリンの大軍に備えてなのかはわからない。

すでに鍛錬が始まっていたらしく、気合の入った掛け声と、激しい剣戟の音が響き渡り、むさっくる……いや勇猛果敢なイシュルスの騎士たちが汗を流していた。

うん、わりと吐きそう。

まだなにもしてないけど、口元を押さえてしまう。

幸一を――――カレーライスを食べてきたから、すぐ嘔吐できるよ。たぶん。

「……雅兄」

「なにもいうな。俺だって、死活問題でなければ、近寄らん領域だぞ？」

兄は何処か遠い眼をして「せめて全員、女騎士だったらやる気が上がるんだがなぁ」とぼやいていたが、スルーした。

私だって、ファンタジーにありきたりな獣人とか、もふもふ系だったら１２０％やる気でてるわぃ！

ただですら、熊王子がどっかにいってしまって、癒しが足りない。

せめて叔父の家にいたウサギがいたら……この際、柵の中で放し飼いしていた鶏でもいいよ。見るだけで、癒えるよ。

せめて叔父に厩舎に入る許可を取っとけばよかった。

馬に人参食べさせてあげるくらい許して欲しい。

「アルケルト様！」

兄妹で青ざめてげんなりしてると、誰かが案内役のジークを呼んだ。

ちなみに姉はチャラ男と専門の場所？で修行するらしく、どこぞに連行されていった。

「様」と呼ばれているということは、もしかして彼は偉い人だったのだろうか？

呼んでいるのは、私よりも三つか四つ年上ぐらいの褐色の肌にくすんだ金髪の若騎士である。

姉と同い年ぐらいだろうか？

どうやらジークを尊敬しているらしく、若者特有のキラッキラした瞳で彼を見ている――いや、年下であろう私がなんですが。

「エミィ、様はやめてくれ。俺は今はしがない準騎士(ガーディアンナイト)だ」

エミィってもろ女の名前のような気がするが、男、だよね？
やっぱり、すぐに忌避の声があがる。

「エミィはやめてくださいよ。俺はエミィリオですから……アルケルト様の実力は正騎士(ハイナイト)ではないですか――と、失礼。こちらの方々は、騎士の入団希望…ではないですよね？」
「いや、入団希望ではないが…」

全然目に入ってませんでした、といった感じで、後ろにいた私たちに視線を向ける。

怪訝そうに私たち兄弟を頭から足の先まで眺めて、値踏みされているようだ。しかもそれを繕わないのは正直者なのだろうか？別に悪意はない気がするが、気分はよくない。

いや、入団ではないですが、似たようなものです。
ものすごく、残念ながら。

「昨晩の流離人(ルエイト)殿だろう」
「ベルルム。二人とも丁度いい」

今度はぬぅ、とスキンヘッドの強面のおっさんが出てくる。

怖っ！！

私は視線を逸らして、反射的に兄の後ろに隠れた。
父も顔が怖いけど、ヤのつく本職の方々でも、こんな怖い方みたことないわ！ってぐらいの顔だ。

頭部と顎の辺りに傷があるし、眼力が半端ない。
こりゃ子供泣くわ。

兄も私も見上げなければいけない長身で三十代半ばぐらいの熟練の騎士っぽいハ――いえ、スキンヘッドに、見覚えがあるんだけど、もしかして昨晩、車を警護していた騎士だろうか。

滅茶苦茶、こっち見てたし。

しかもベルルムって名前……聞き間違いとかじゃないよね。
変わった名前だ。

「え？昨日の流離人（ルエイト）って……まさか！牢屋に突っ込まれたって話だろ？」

ええ、突っ込まれておりましたよ。

どうやら、出されたという話までは広がっていないようだが、流（ルエイト）

離人がやってきたことは、ばれているらしい。

「間違いない。こっちのちっこいのは、昨日の馬のない馬車から顔をだしていた」

と、兄越しに覗き込まれて、反対側に移動する。
しかし、スキンヘッドも負けじと、反対側から覗き込もうとするので、また逆に移動する。

やっぱり、昨日の奴だったのか。

「……馬車の警護は第一騎士団の仕事だったはずだぞ」
「あっはっはっ、なんだか面白そうだったんで、一人きぜ――――いえ、代わっていただきました」

絶対、気絶させたんだろう！！

ジークも若騎士もしっかり聞こえていたようで、呆れ顔でスキンヘッドを眺めている。
どうやら、この男は問題児？のようだ。

「代わったって……規則違反じゃないか、それは」
「まぁ、細かいことは気にするな。ほーれ、怖くないぞ」

説得力なしっ！すっげー怖いわ！その顔で子供――いや、あんまり認めたくないが、侍女の扱いも含めればそう思われていて仕方がない――好きか！吃驚するわ！自分のキャラクター守れよ！どう見ても古参の騎士っぽいんだから、どっしりと構えてろ！無言で新参者を睨みつけろ！

「暇なら、おにーさんとあっちで遊ぶか？」

暇じゃない！遊ばない！おにーさんって年か！

っつーか、兄は一人で十分です！手に余ってます！これ以上いりませんから！ノーセンキュー！

ついにはヒートアップして、兄の周りでぐるぐると回りだす羽目になった。

くっ！フェイントなど使いおって！

伸ばされた手を持ち前の足の速さでギリギリ避ける。

兄は助けてくれるどころか、面白そうに笑っているだけであった。

ジーク、ヘルプ！と視線を投げると、なぜか微笑ましそうに眺められていた。

み、味方がいないっ！

こちらは汗が出てきたが、スキンヘッドは全く汗をかいていないし、涼しい――いや、相変わらずの怖い顔であった。

「こらこら、じっとしてろ。ここは本当に危ないんだ。子供が来るところじゃないぞ」

お前が一番危ないわ！そして、誰が子供だ！

視界の隅に、屈んだ騎士を発見して、そこに駆け出した。

休憩時間となったのか、木陰に入ったらしく、丁度よく木の前であった。

「すみません」

「ぐあっ！」

一言断ってから、その背中を踏み台として跳躍し――やっぱりまだ少々慣れないが、いつもよりも高く飛び上がれるようだ――太い枝に手を伸ばして、足を乗せ、一気に登った。

そのまま勢いに任せて、私の体重を支えられる限界の枝まで見極め、天辺に向かう。

最終的に、細い枝の上で膝を抱えて、相手が諦めるまで待機。

相手が上ってくるようなら、隣の木に移動するために、周囲の木々の状態を確認しておく。

勢いよく上がってきた反動で、枝が上下に撓っているのが若干危なっかしいが、少しでも遠くをモットーに実行しております。はい。

よく、昔から兄の敵に襲われたときに使ってたなぁ、この手。

相手が諦めるまで木の上で本読んでたり、携帯ゲームしたり、痴漢撃退グッツの警報機を複数投げて、人様に警察を呼んでもらうとか、上ってこようとする人間を蹴落としたり懐かしいなぁ。

一回隣の木に飛び乗るの失敗して、誰かを下敷きにしたっけ……私も若かった。

あの後、追い詰められて大変だった。

交番に駆け込もうと思ったら、巡回中で誰もいなかったし。

あ、なんか涙出てくる。

突き抜けるような秋空――といっても、この世界に秋という概念があるのか、秋であるかもよくわからないけど――眺めていると、下が騒がしくなる。

ついでに、物凄く木が揺れている。

茂る葉の間から下を覗くと、慌てているスキンヘッド騎士が、私を追いかけるように木登りしようとして、幹に抱きついて、困り果てた顔の若騎士とジークが押さえ込んでいるようだった。

頼むから抱きつくなよ。
あんまり太い木じゃないから、振動が上までくるんですけど。
兄が爽やかな笑顔で仲裁に入るが、その目は「オモロイ人達」だと語っている。
多分、しばらく兄妹が騎士の鍛錬にお世話になりますよ～みたいなことを話しているらしく、若騎士とスキンヘッド騎士がこちらに悲鳴が聞こえるほど驚いている。
後頭部だけで顔は見えないが、その間に第三者がやってきて兄と向き合って、なんやかんや言ってる。聞こえる言葉の端々が刺々しい怒声だ。お世辞にも友好的とはいえない。
私の上っている木の幹に、男の拳が渾身で叩きつけられ、一際大きく揺れた。

ばきっ

あっ、と間抜けな一音を発して、全身に浮遊感。
反射的に手を伸ばし、地面に落ちきる前に、何とか下のほうの枝を掴んで、地面に叩きつけられるのを回避した。どうやら、身体能力も上がっているような気がする。

ホッとしたのも束の間、ごん、と鈍い音がした。

あと短い悲鳴。

足元を見下ろすと、先ほど兄に文句？を言っていたような男が地面に倒れていた。

どうやら白目を向いて気絶しているようだ。

その頭部の横には私の乗っていた枝が転がっていた。

しかも、男の顔をよく見ると、騎士（目つき悪）だった。

姉にも兄にも気絶させられていたから、この男を失神させるのは明日かな（笑）なんて、冗談まじりで思っていたが午後のうちに現実のものになろうとは。ぷぷぷっ。

とりあえず地面に降りて、「不可抗力」と謝罪して、両手を合わせて拝んでおいた。

＋　＋　＋

足を掴まれて、他の騎士に引きずられていく、騎士（目つき悪）

を見送り、改めて二人を紹介された。

くすんだ金髪に褐色の肌をした細身の方が、エミィリオ。通称エミィ（本人非許可）。

スキンヘッドの方がベルルム。歴とした騎士で、兄弟が多く子供が好きらしい。なんてはた迷惑な。

「二人には、サミィ殿とミィコ殿に指南していただきたいと思っている」

というと、二人が大きく両目を見開いた。

「こんな優男を――」

「こんなちっこい子を――」

「「冗談でしょう？！」」

二人の声が、一部、綺麗に重なった。

詰めるように一歩前に進み出るが、ジークが迫力にやられたように後ろに下がる。

ちっこい子って私か…地味に喧嘩売られてるのだろうか？

兄、優男って。そのまんまじゃん。

「それが冗談ではないんだ。数日後の大惨事は知っているだろう？」

大惨事って、もしかして、ゴブリンの大軍のことであろうか？
すでに騎士団には伝わっているらしく、二人の騎士は勿論だというように顔を引き締める。

「彼らは前線に出る」

「な、なにぃ！？」
「なんとっ！？」
「え！うそ！」

え？兄だけじゃないの？私も決定事項なの？

さらに悲鳴を上げる二人に合わせて、こっそり私も悲鳴を上げてしまった。

「だ、駄目だろ！それは！」
「危険ではありませんか！」
「流離人（ルエイト）をそのような場所へ！」
「無理だ無理だ！」

しかし、四人で額を突き合わせていたのだが――こんな青空の下では機密性などないが――――鍛錬をしていたはずの第二騎士団の面々が私たちを取囲んでいる。ジークの言葉に、各々好き勝手に叫ん

でいるので、誰も私の悲鳴に気がつかなかっただろう。

いつの間にか、鍛錬の剣戟の音がせず、物凄い人が集まっていた。

なんだ、この騎士団？

しかも、しゃがんで本格的に話し合いを始めちゃってるんですけど？

「――も時間がなさ過ぎるだろう」

「ジークが連れてくるほどだ。流離人（ルエイト）とはいえ、きっと――」

「いや、むしろ、我々の第二騎士団でお守りするというのはどうだろうか？」

「おお、それはいい考えだ！」

「いやいや、しかし、鍛錬をと望まれて――」

親身になりすぎってか、アットホームってか。

なんか、可笑しくない？

他の騎士団もこんな感じなのだろうか……非常にイメージというものが、この世界に来てから崩れ落ちているのですが？

スキンヘッド騎士と若騎士も完全に輪に入ってしまっている。

それを止めるべくジークが声を上げているが、あんまり聞き入れ

られてない。

第二騎士団？の面々が、やんややんやと本人そっちのけで言い争っている中で、覇気のない髭のオッサン騎士が横にぬぼーっと立っていて吃驚した。

あまりにも地味過ぎて、側にいるのも気がつかなかった。

たぶん集団に最初から紛れていたのではないかと思うけど、特徴がない分、わからなかった。

「君も、若いのに大変だねぇ」

こくこく、と大いに同意すると、オッサン騎士――五十歳前後だろうか？――苦笑を浮かべた。

モブの中のモブって感じだが、いい人だ。

でも、この人がサラリーマンなら、中間管理職なんじゃないかという雰囲気だ。

かかあ天下を強いられているとか。

「それにごめんね。皆、どうも感情移入しやすいたちでねぇ」

「――――とてもよい所だと思います。俺は」

兄が答えると、オッサン騎士は困ったように、でも誇らしそうに

笑った。

うーんん、駄目だ。

どうも年上特有の威厳みたいなものが感じられない。

「そういってもらえると、ありがたいよ。でも仲がいいんだ、僕たちの預かる第二騎士団は」

おまけに気弱そうな感じが、同期や部下にも舐められ――――え？

僕たちの預かる第二騎士団？

「ん？どうかしたのかい？」

オッサン騎士が不思議そうに小首を傾げると、丁度よくジークが此方に振り返った。

そしてオッサン騎士に視線を向けると、はっとしたように声を上

げた。

「トーマス団長！」

なに、その機関車みたいな名前はっ！――――驚くよりも先に私は内心ツッコミを入れていた。

Ａｃｔ　２０．　第二騎士団へようこそ（後書き）

すみません…大分遅れておりました　ｏｒｚ
三日に一遍ぐらいって思ってたけど、最初にご感想でいただいていたように無理でしたね（涙）

Ａｃｔ　２１．　悪魔、降臨しました？

ジークが私の隣の冴えないオッサンの名を叫んでいるようで、先ほどとは違う意味で、第二騎士団の諸君がざわざわした。

え？この隣の人、第二騎士団長とかなの？

「団長…？」
「え、あれ団長か？」
「いや、どうだろう？半月ぐらい会ってないから…」
「え？俺、二ヶ月」
「まじか！トーマス団長かなぁ？」
「でも、ジークホークさんがいうなら、団長だろう」

ええ？？自分とこの上司だろう？顔わからないのか———と、隣の地味な親父を眺めるが……うん、覚えられないかもしれない。何度会っても、難しいかも。

どんだけ、印象薄いんだ。

なんかホクロみたいな特徴もないし、髪の毛もありきたりな茶色だし、目も同じ色してる。
辛うじて髭が生えてるけど、第二騎士団の面々に髭面が多いせいか、これといって特徴ともいえない。

ぬぼーっとしていたオッサン騎士の瞳が少し泳ぐ。

「トーマス団長！今までっ――」

喋る機関車のような名前が再び、叫ばれると、それが合図だったようにオッサン騎士が砂煙を上げながら、猛烈な勢いでジークとは逆方向に走り出した。

瞬く間に数メートル離れたオッサン。

その背中には小さな足跡が――って、私の靴の足跡じゃない？もしかしてさっき木に登るために踏み台にした人か！？

ちっと、珍しく舌打ちした険しい顔のジークが無言で、間髪いれずに、走り出した。

第二騎士団の面々からは、歓声？が起こった。

「逃げた！間違いない団長だ！」
「と、トーマス団長！」
「あのスピード、まさしく団長だ！」
「ジークホークさんが引き剥がされている！団長だ！」
「俺、二ヶ月ぶりに会った…」

…わけわからん。
第二騎士団、わけわからんよ……。

団長も、団員も謎すぎる。

そして、一体何しにきたんだ、団長よ。

案内人の不在により、不安に引き攣る私の横で、兄が笑いを堪えているらしく、それを発散するために木を叩いている。

一体、今のなにがツボに入ったのかわかんないよ、兄。

今日からここで世話になると思ったら…なんか、頭痛いよ……姉、ヘルプ…

＋　＋　＋

「お二人が――いや、一人かもしれないが、戻ってくるまで軽く鍛錬でもするか」

そう言ったのは、金髪騎士だった。

どうやら、彼はこの第二騎士団の纏め役に近いらしく、ぱんぱん、と手をならして、ジークと団長が消えていった方向から意識をこちらに戻した。

女みたいな名前の癖に、やるな、こやつ。

「では、よろしくお願いします。ベルルムさん」
「さん、はよしてくださいよ。ただのしがない騎士です」
「はは、では俺のことは、サミィと呼んでください。身分もない、しがない一般市民ですから、ベルルム師匠」

「さん」から、「師匠」にグレードアップしてるよ、兄。

きょとんとしたスキンヘッドは———きょとん顔も怖いな———豪快に笑い出した。

笑い声が聞こえなかったら肉食獣が牙を向いたって顔だ。

「流離人（ルエイト）とは、謙虚なんだな、サミィ殿」

あはは、と兄も負けじと、洗剤ＣＭばりの爽やかな笑顔で笑っている。

「お前の武器はなんだ？」
「一応、刀を買いました。今日は木刀という話だったので置いてきたんですが」
「俺と一緒か」

二人は同じ武器だったためか、一気に打ち解けた感じである。

ってか、スキンヘッド！その顔――は関係ないけどさ――で刀使ってるの！？まったく似合わない！むしろ武器が斧二つとか言われたほうが、納得するよ。

兄は声を張って、第二騎士団の面々を前に軽くお辞儀をしてみせる。

「俺はサミィです。いつまでかはわかりませんが、お世話になります。どうぞ、ご指南のほど、よろしくお願いします――――ほら、ミコ、お前もお世話になるんだから挨拶しろ」

兄の背後から、前に出されて、第二騎士団の視線が集まって、緊張した。
こういうのは得意ではない。というか、コミュニケーション能力の低さを舐めるなといったところである。

「…ミコ、です……よろしく、おねがいします」

告げて、頭を下げる。

あ、もしかして、兄のようにご指南よろしくお願いしますの方がよかったか？と思い至ったが遅い。

咄嗟に兄に言われたから、そこまで思いつかなかったけど、姉曰く、最初の日こそバッシッと決めればいいと。でも私はどうしてよいのかわからない。

そして、拍手が起きたのにびっくりして、兄の背後に戻る。

至る所から「よろしく」とか「頑張れよ」とか掛け声が聞こえて、その方向に頷いて答えた。

兄も笑顔でそれに答えていた。

「じゃ、ミィコはこっちな」

やっぱり、ミィコなんかい！！しかも、即呼び捨て！？

この、金髪騎士め。

と睨みつけている間にも、兄はスキンヘッドと話をしながら、木刀を取りに行ってしまった。

「お前の得物は？」

さっきジークと話していた時とは、うってかわって愛想が悪いというか、かなり口が悪い。

武器は、と聞かれて、自信を持っていえるものは一つもない。強いているなら、包丁だけど、この場でそれをいったら、呆れられること間違いない。

金髪騎士は横に並ぶと、割と大きかった。

さっきは、スキンヘッドと並んでいたせいで、小柄に見えていたけど、１７０センチぐらいだろうか。

もっと身長が低いかと思った。

「細剣（レイピア）……」

「ふーん、俺と同じ細剣（レイピア）か」

「……たぶん」

と、期待されてもあれなので、付け加えた途端に、金髪の騎士の眉根に皺がよる。

「たぶんって、なんだよ――――まさか、お前素人か！？」

頷く私に、金髪騎士は「ありえない」と呟いて、呆れたように、大げさに首を横に振っている。

私も同意しておこう。ありえない。

こんな剣も持ったこともない――――いや、兄はあれ、規格外だから、平凡だと思っちゃだめだよ――――ド素人を戦場につれてったりしないよね。

なにかの間違いだよね？なぁ、叔父よ――殺す気か！！

間接的殺人事件か！だったら死ぬときのダイイングメッセージは「おじ」って書いてから死ぬぞ！

「アルケルト様は何を考えてられるのだ……いや、俺の能力を試しているのか」

よく分からないことをブツブツと呟いていたが、よし、と突然、気合を入れるような声を上げた。

「お前に自分の身を守れるぐらいまでにするからな。覚悟しておけよ！」

いらんわ！そんな覚悟！

金髪騎士の意思の強い瞳に気圧されて、私は一歩下がった。

背後では兄とスキンヘッドが、すでに鍛錬を始めたらしく、木刀の打ち合いの音が響き、第二騎士団の歓声が響き渡った。

＋　＋　＋

「〜〜ろ、〜きろ、ミコ」

瞼の裏に日差しが差し込む気配。
もう朝か。学校に行かねばなるまいが、全然動きたくない。むしろ、休みたい。体がだるい。頭痛い。

つーか、なぜ兄の声がする？いつもは姉か、母だけど。まぁ、どうでもいいや。

ここで、お決まりの台詞だ。

「あと…ご、ふん」
「お前の意識がないだけで、五分前から声かけてるぞ」

く、煩いなぁ、もう。
いいじゃん、今日は体調が悪いので欠席します。頭痛い。

「あと、はち、じかん」
「そりゃいいが、晩飯食い損ねるぞ」

そりゃ、死活問題だ。

母さんは、なにがあっても、私の―……あぁ、うん、時々私の晩御飯、食べちゃうけど。

仕方なしにパンにジャムとか塗って、ミルクと砂糖たっぷりの珈琲を飲んでると『ちゃんと食べないと、夜中にお腹すいて目が覚めちゃうわよー』って、私のご飯食べながら言うんだよね。

って、あんたがいうな、母！とか、耐え切れずに、つっこんじゃうんだよね、私は。

パターンだよ。パターン。

そうそう、最後には三分間ギリギリでヒーローが巨大な怪獣をやっつける、典型的な――……

あれ、これ今日の朝も、似たような事、考えていたような。

しかも、ベットが硬いというか、頬に当たってるのって地面じゃね、これ？じゃりじゃりいって、石が当たってるし。

目開けたら、兄の足があるし。視点が低すぎ。

「お、生きてるみたいだな。平気か？」

いや、全然。目を瞬かせながら、起き上がろうとしたら、眩暈が――――つうか、頭が凄く痛いんですけど？頭に触れると、ぬるっとした感触がする。

手を離すと、真っ赤になっていた。

スプラッター。頭部裂傷で、気絶したっぽい感じか。

でも、傷の感触がないような気がする。

ぐるっと、周囲を見渡すと屈んで私を揺さぶっていた兄に、ごっついオッサンノ群れ――――じゃなかった、騎士が私を囲んで心配そうに覗き込んでいる。

どうやら、金髪騎士との訓練中に気絶させられたようだ。

とほほ…普通の同世代の女性よりは体力があると思っていたが、かなりもうクタクタだった。

あぁ、日頃の引きこもりが、響いてるんだろうな。

騎士と訓練してたんだから当然か――って、少しは手加減ってものを知らないのかね、金髪騎士よ。

私は兄に頷いて、ポケットから手拭――グラデーションのかかった三日月の夜空の下でウサギが餅つきをしている可愛い奴なのに勿体無い――で手と頭の流血を拭った。

後で洗っても、血がとれるだろうか？

起き上がると、ふらふらした。

出血多量か、もしくは完全に打撲を味わっている全身か。動きすぎという可能性もある。

眼鏡越しに兄が、私を覗いていた。

血を拭っていて思っていたんだが、出血の原因であろう傷はカサブタになってるんでございますが？？

姉……は見渡す限りいないし、昨日は頭に怪我なんてしてなかったはずだ。

「……傷、ない」

「治しておいた。兄ちゃん、そこまで薄情じゃないぞ」

え、えええ！！？？治したって、誰が！？いったい、いつ、どこで、どんな風に！！地球が何回、回った時に！

「俺。今。ここで。今朝の由唯と同じように。この世界が自転しているか不明だ」

正確に心読まれた！！！

ってか、どうやって！お前は魔法使い兼剣士とかだっただろう！？

「ま、細かいこと、気にするな」

……そうか、兄だもんな。細かいこと気にしてもしょうがないか。

爽やかに兄が笑い、私は冷めた視線を兄に送る。

「……どのくらい？」

寝てたんだ、私は。

金髪騎士に型を習ってから、即木刀で打ち込みになった。

もう、休憩もなく、ただひたすらに、どれくらいやってたのかわからないぐらい。

ほぼ一方的に木刀で殴られまくってた。

前に兄と倉庫に閉じ込められて、木刀で殴ってきたやつとは比べ物にならないくらいの速度でかわせないのがほとんどだった。

しかも、当たると骨が折れるんじゃないかってぐらい、ものすっごい痛かった。

泣くぞ！この野郎！と思ったのは一度や二度ではない。

途中で、ジークが戻ってきて声をかけられたような気もする。

最後に覚えているのは、金髪騎士の一撃をかわして懐に入ったと思ったら、アイツは体を回転させて、その反動で蹴られたのは覚えているけど。

足がふらふらだったから、そのまま吹っ飛んで記憶がない。

「大丈夫だ。ほんの三十分ぐらいだ」

「……ん」

そうか。三十分か。

――その三十分の間に一体、なにがあった？兄よ？

どうして、私をぶっ飛ばしたはずの金髪騎士がのびてるんだ！？第二騎士団の面子の一部が、彼を囲んで頬を叩いてたりしてるんですけども！？私じゃ、ないよね！どう考えても！

あっちでスキンヘッドと数名の若者騎士が肩で息して、転がってるし！

なにやらかしたんだ、兄よ。

怒らないから言ってみ？

第二騎士団のむっさいオヤジどもの、兄を見る目が滅茶苦茶怯えてるんだから、なにかやったんだよね！

「あははは、色々と」

って、爽やかな笑顔が今は黒いよ、兄！

兄とは反対側にジークがいることに気がついて、視線を送る。

ジーク！あんさんは何か知ってるよね？！この場にいたんだよね！？と、目で訴えたが、彼は青ざめたまま首を左右に緩く振った。

なんだ！なにがあったんですか！？？

ま、まさか、悪魔（あに）が非道の限りを！？

だ、誰か至急、説明求む！

閑話　【金髪騎士の動揺】

エミィリオは顔色を変えないように努めたが、内心焦りを感じていた。

流れる汗は、運動量に対して多い。

（なんだ、これはっ――――）

この兄弟に感じたものをなんと言葉にしていいか、エミィリオには分からなかった。

＋　＋　＋

とりあえずミィコと呼ばれた流離人（ルエイト）の少年に自分勝手に剣を振らせたが、やはり足運びも、剣の使い方も、何もかもが完全なるド素人だった。

街中を歩く女子供と変わらないへっぴり腰で、数日で前線に出るような力の持ち主ではない。
この時、騎士エミィリオは、そう断言できた。

あの流離人（ルエイト）といえど、人の子供でしかないのだ。

すでに隣では木刀の交差する音が、軽快に響いている。

「いくぞっ！サミィ！！」
「ええ、どうぞ。ベルルム師匠」

背を向けているが不足のない弟子を得て嬉々とした声をあげるベルルム。そして、この流離人（ルエイト）の才能豊かな兄・サミィの口元には微笑が浮かんでいる。

やってきた流離人（ルエイト）は噂では家族だというし、東方よりの顔立ちがどことなく似ているし、二人の立ち振る舞いからも、兄弟で間違いはないだろう。

サミィは第二騎士団でも五本の指に入るベルルムの獰猛な剣筋を前にしても余裕があるようだ。

正直、ベルルムが羨ましい。

兄のサミィは剣筋は粗いが、多少は武術の心得があるようだし、隠しきれない天性の才能が輝いている。数日で前線も難しくないだろう。

しかし、自分の尊敬する正騎士（ハイナイト）――いや、今は準騎士（ガーディアンナイト）になってはしまったが――だった、アルケルトは自分に少年の鍛錬を指示した。

第二騎士団には細剣（レイピア）使いは少なく、学生騎士相手に何度か鍛錬を行ったことしかない。

だが、アルケルトが望むなら、なんとしても任を遂行したい。

彼がこの少年を数日で前線に出せるようにというのなら、そのために努力は惜しまないつもりだ。

エミィリオは硬く決意していた。

戦闘に生かせそうだったのは、その素早さ。

先ほど見せた身軽さ。

それは細剣（レイピア）を扱うものには重要な素質ではある。

ゴブリン相手に正面から向かっていくには不向きだが、相手の隙を突き、弱らせるには十分だ。

そこは普通の同世代の少年よりも優れているようで、瞬発力に恵まれている。

軽く基本中の基本である型を三つ教え、ミィコは暫くそれを意識

させ、打ち込ませた。
基本だからこそ、疎かにしてはならない。
だが、今は時間がない。
だからこそ、実践に近い状況で対峙して、感覚を覚えさせることにした。
戦場で危険なのは、恐怖で動けないことだ。いくらゴブリンの動きが早くないとはいえ、足を竦ませてしまったら、避けれる一撃も避けることができないだろう。
こんな少年に、相手を殺せとはいわない。
生き延びている事を目標に定めた。

実践模擬の簡単な手合わせ。
やはり素人らしく、基本の動きですら隙だらけであった。
その隙目掛けて打ち込むと、息を呑む音がする。
加減しているとはいえ、痛みがないわけじゃない。だが、その痛みを忌避する感覚を覚えていれば無駄に敵に突っ込もうとは思わないだろう。その点、ミィコは慎重で、強引に飛び込んできたりはしない。
内心、エミィリオはミィコを見直していた。
関心したといってもいい。
教える経験の少なかったエミィリオが力加減を間違い、激痛だと

予測される打撃でも、息を詰めたり、一音を零すだけで、悲鳴を上げることはなかった。

息は荒いが、眉根を寄せる程度で、苦痛で顔を歪ませることも殆どない。

恐怖で目を逸らすこともない。

我慢強いタイプの人間なのだろう。

同い年ぐらいの学生騎士ならば、先ほどの一撃で悲鳴を上げてたに違いない。

それに若者特有の血気盛んな気骨はなく、落ち着いている。

もしかすると、荒事には場数を踏んでいるのかもしれないとすら思えた。

わっ、と第二騎士団の歓声があがる。

ほとんどが、派手な交戦となっているベルルムとサミィを遠巻きに観戦しているようだ。一部で賭け事まで始めている始末だ。

数日後にはゴブリンとの大戦があると分かっているはずだが、相変わらず第二騎士団は団長の気質が表立っているせいか暢気なものだ。だが、日頃の鍛錬を怠っている者は皆無であろう。

木刀を交えている二人を眺める。

あちらは、ベルルムと互角とはいわないが、サミィは吸収率が高いようで、この僅かな時間にベルルム特有の東方の型を自分のものにしていた。

特に滑るような独特な足運びは、顔に似合わずベルルムが得意とする技術だ。

恐ろしい才能を持つ男である。

あと半月、いや十日もあれば、ベルルムすら凌ぐだろうという予感すらさせた。

やはりサミィと目があって、なんだか背筋によからぬものが走った。

その一瞬の隙にベルルムが打ち込む。

意識がこちらに向いていないことに気がついたミィコも打ち込んできた。

遅れはとらないだろうが、慌ててエミィリオは構えた。

暫くするとミィコは全部当たっていた木刀が、五回に一度は回避するようになっていた。

それは彼の素早さと瞬発力のなせる技かと思っていたが、こちらの動きを予測しているようで、打ち込むより先に防衛の構えをとる。

体力を消耗して動きが鈍いはずなのに、五回に一度が、四回に一度に。

徐々にではあるが回避するようになっている。

時間が経てばたつほど普通は集中力を欠いて、当たる回数が多くなるというのに、ミィコは逆だった。

驚くことに集中力を増している。
それに、無駄な動きが目に見えて減っていてる。
防戦一方だったミィコは反撃に転じることもあり、剣筋を先に読まれて木刀で防がれることすらある。
四回に一度が、三回に一度に。
それどころか、こちらがひやり、とするような一撃まで放ってくるようになってきた。
ミィコの突きが腕を掠めたのには、驚くしかなかった。
直接木刀で防ぐ他に、こちらの剣筋の流れを木刀で変え、最小限の回避ですぐに反撃へと転じるのだ。
本人は呼吸は荒く、頬に汗を伝わせているものの、攻撃は鋭い。
的確に急所を狙ってきている。
体力はエミィリオの方が勝っているだろうが、額から汗が滲むのを自覚していた。
肉体的な疲労よりも、精神的な疲労が大きい。
たった一日、それも数時間でこれほど明確に成長する少年と対峙したことはない。
前に何度か教えた騎士学生を相手にしていても一度もなかった。
あまりにも非凡な兄と比較するから、彼は凡人以下に感じるが、同年代の少年にしては頭ひとつ抜きん出ている才覚があるのだ。

兄ほどじゃない。
だが半年もすれば、この少年はエミィリオと互角に持ち込む可能性すらある。

エミィリオもベルルムとほぼ同格。
第二騎士団では五本の指に入るといってもいい。

圧倒的に戦力も経験もエミィリオが勝っている———だが、じりじりとした焦りを覚える。

ベルルムに関しては、自分よりも脅威を感じていることだろう。
彼の気合の入った声が聞こえないのが、何よりの証拠だ。ベルルムは切迫すると、声を潜める癖がある。

最もエミィリオの精神を乱したのは、サミィだった。
ベルルムの観戦する第二騎士団の歓声が上がるたびに、視線をちらりと向けるのだが、常にサミィがこちらを見ていることに気がついた。

何度見ても、サミィはエミィリオの視線に一瞥を返す。

これが意味しているのは、ただ一つ。

サミィは歴戦の騎士であるベルルムに背後を取らせていないのだ。
もしくは踏み込んでも、すぐに此方を向くように対峙を調節しているとしか思えない。

そんなことができるとしたら、相手が弱い場合だけ。

つまり、ベルルムと対峙した時点で、剣に関して素人であろうサミィがベルルムよりも力量が上だったのかもしれない――――そんな事ありえないと思いながらも、寒気が走る。

なんだ、この兄弟は。

木刀を握る手に力が入る。焦りからか、ミィコに本気で打ち込んでしまった一撃は鈍い音がする。同時に強烈な殺気が自分に向けられた。

それはミィコ本人からではない。

ベルルムと鍛錬しているはずの、サミィだ。

第二騎士団のほとんどは、ベルルムとサミィの鍛錬――いや、対戦の観戦に周り、エミィリオとミィコの鍛錬を気にしているのは、戦っているはずのサミィだけだった。

「――――エミィ！！」

打ち込んだ刹那、アルケルトの声と、更に強いサミィの殺気に注意が削がれ、ミィコに放った一撃が回避されると同時に、懐に飛び

込まれた。

狙われた無防備な喉元に突き出される木刀。

――――まずいっ！

騎士としての本能だけで、なんとか避けたが、若い頃に刷り込まれた危機感は煽られるがまま、蹴りを繰り出していた。

だが幸いな事にミィコは剣を捨て、蹴りを両腕で防いだ。

しかし、長時間の鍛錬で足腰がフラフラしていたようで、華奢な体は木刀置き場に吹っ飛んでいった。

派手に音があがった。

ぐったりと動かないミィコは置いてあった木刀か、それを収納している棚に当たって、額を切ったようで、流血しているのが遠めにも分かった。

駆け寄るよりも先に、誰かの舌打ちが聞こえた気がした。

振り返る刹那、ベルルムを含む複数の悲鳴が響き――どうやら、サミィはすでに複数を相手に鍛錬していたようだった――野次馬の第二騎士団を潜り抜けて、サミィが俊敏に駆け寄ってくる。

そのサミィ越しに、崩れ落ちるベルルムと三名ほどの騎士が見えた。

「まて、頭を――――へぶっ！っぐあっ！！」
「え、エミィ！！」

頭を打っているから、動かしてはならないと、注意するよりも早く、立ちはだかったエミィリオは腹部に木刀を受けていた――いや、受けていたようだった。

気がつけば、サミィが木刀を振りきっている。
木刀の軌跡を知覚すらできなかった。

崩れ落ちる体に間髪をいれず、頭部に衝撃が走り、目の前がちかちかする。
体が浮き上がり、受身も取れずに地面に叩きつけられ、エミィリオは意識を失墜させた。

閑話　【金髪騎士の動揺】（後書き）

腹部に一発木刀を打ち込んでからの頭部へ回し蹴りで（たぶん）、ノックアウト……兄半端じゃありません（涙）しかも、ジークさんも遅すぎ。どんだけ、団長探して走り回ってたんですかね；；

年末は仕事が繁忙期なので、少々更新がスローペースになるかと思います。申し訳ありません　ｏｒｚ　う、今でも十分遅いですが（汗）

Ａｃｔ　２２．　まだ寝れません

結局、兄のことは誰も教えてくれなかった。
横で兄が睨みを――いや、胡散臭く笑ってるけど――きかせているんじゃ、答えられないか。

運ばれていった金髪騎士に代わり、改めて師匠となったのはジークだった。

細剣の基礎ではなくて、身の守り方みたいなことを、実践で教わっていた――というのか、なぜ常に実践なのだ。

どこかで地道に型の練習とか、じゃないのかい？普通はさ。
まー、時間がないからだろうか。

……やっぱりさぁ、こういう力仕事？武力行使？っつーのは、兄と父でいいんじゃない？

私のようなチキンハートと惰弱な肉体を持つ人間には合わんよ。
すでに感じる全身筋肉痛に、ぶるぶるしながら歩く。

しみじみと思う。

死にたくはないし、兄の足手まといにもなりたくないので、できるかぎり努力はしたい。

だが、とてもじゃないが前線で三分以上生き残れる気がしない。

適正がないというか、無謀な挑戦だ。

ステータスのボーナスを全部入れたって、まともに戦えるか分からないし――途中で、休憩の合間にちょこちょこ入れてたんだけど、ジークに勝てるはずもない。

というか、途中で勝手にボーナスポイントが減って、体力値とか増えていたのに驚いたけども。

でも金髪騎士とは違い気絶させられるということはなかった。

細剣のではなく、ゴブリンが装備しているであろう近接武器の木造の剣や斧をジークが装備して、実践に近い状態で模擬訓練。

当たる瞬間には、力を弱めてくれてくれた。金髪騎士とは違って。

せいぜい転ばされるぐらいで、大きな怪我もなく終わった。金髪騎士とは違って。

避け方や、足捌きなどを的確に言葉で教えてくれるしね。

今なら分かる。

金髪騎士、教えるの下手すぎる。

だが、正直に言おう。

「無理」

金髪騎士と同じ時間ぐらいは稽古をつけてもらった。

だがジークに反撃できたのは1、2回程度だ。

反撃しても、さらっと避けられちゃうし。

金髪騎士との模擬練習では、終盤に差し掛かったあたりで、細剣の軌道も推測できたし、剣筋も読めていたので避け、それから反撃できたが、ジークの場合は攻撃が速過ぎる。

一撃ならばなんとかなるが、連撃は無理だ。

なんとか反応してるけど、ジークの加減があるからだろう。

当たったり、上手く避けることができないので、体制が崩れて、反撃に転じることができないのだ。

ジークが木造の剣を持とうと、斧を持とうと、最後まで防一線になった。

褒めてはくれたが、あれだ。

ここで臍曲げられたら困るんだよね、的なもんじゃなかろうか？

もしくは豚も煽てりゃみたいな？

「そんなことはない。短時間でここまで成長するなんて、ミィコ殿は素晴らしい才能を――――」

うぉおおおお！！！

ジークの声を遮って、第二騎士団の野太い歓声が一際大きくなった。

いや、さっきから煩かったんだけどさ。

「２０人抜き達成だ！」
「よっしゃ！おい、大銅貨二枚だからな！」
「そ、そんな馬鹿な！」
「く、くそ～！！」
「最後は準騎士が二人だったろ！？おい、みたか？あの一撃！」
「俺の全財産が！！！？」
「うーん、うちの隊に欲しいなぁ」

叫びの内容と、落胆する騎士と、ガッツポーズの騎士の明暗がはっきりと分かれている事から推測するに、兄の鍛錬は賭博場となっていたようだ。

そして賭けの対象である当の本人は元締めらしき騎士と、胡散臭

い笑顔で会話している。
あれは、儲かったの掛け金の何割かを流してくれるんですよね？
って顔だ。

うん……多少、息は切れているようだが、平然と。
しかも、汗はかいているが、無傷で。

こっちは何度も転んでボロボロだっちゅーの！！

しかも一番最後に呟いていた声は、トーマス隊長じゃないか？
声はなんとなくわかったけど、大勢のおっさん騎士の中を見渡しても、ぜんぜん分からない。

もう、どんな顔だったか思い出せない。

ジークは騎士が賭け事をしているせいか、それとも兄の驚異的な成長っぷりにか、額に手を当てて、心なしか青ざめているように思える。

———で？素晴らしい才能が、なんだって？

やっかみ半分でジークを睨みつけると、困ったように眉根を寄せて、何もいわず口を閉じた。

そして、そのまま一日目の鍛錬は終了。

夜は王宮内とはいえ、完璧に光が灯されているわけでもないし、夜間は夜間で使用する他の騎士隊があるらしく、引き上げることになった。

兄とジークと、なぜかスキンヘッドがついてくる。

目をキラキラさせて、楽しそうに兄の素晴らしい才能というか武勇伝？を懇切丁寧に私に語っていた。

いわれなくても、もっと凄い武勇伝を知ってる――いや、常に巻き込まれているぞ！！

と胸を張って、突っ込みたかったけど、私にはその体力も残っていなかったので、スキンヘッドに適当に相槌で誤魔化した。

「そうだ！騎士風呂よってくか？」

「騎士風呂？」

スキンヘッドの話だと、騎士宿舎が騎士専用の浴場がある。

今日寝ていた客間にバスタブがあるから、普通に風呂があるのかと思ったら、どうやら貴族だけらしく、一般的には普及していない

ようだった。

それも湯に漬かるという風習が一般的には、あまりなかったらしい。

お湯に濡らしたタオルで体を拭くって……　ｏｒｚ

意外と新しいらしく、実は現王――つまりは叔父さんだ――が昔、騎士のためにわざわざ作ったらしい。

それまでは、冬でも井戸の水に浸した布で体を拭いていたようだ。

……よく心臓麻痺で死ぬやついなかった。

なぜか、説明しているスキンヘッドが自慢顔をしている。

「王宮内にも従業員ようにひとつあるんですよ」

「へぇ……魔法式かぁ」

ジークの説明では、浴場はそこそこ大きく、魔法式で稼動しているらしい。

兄は興味を示したようだった。

「じゃあ、四人で仲良く、泥を落としてくか！」

スキンヘッドが親切に言ってくださったので、お言葉に甘えて四人で仲良く浴場に――――って、入るか！ヴォケ！！

反射的に、スキンヘッドの脛を蹴った。

そいつは男専用の浴場だろうが！痴女か私は！！

はい、そこ！兄、大爆笑しない！

ジーク！あのスキンヘッドのセクハラ発言をどうにか――――って、きょとん顔されてる！？

ま、まさか、お前もかブルータス、じゃない、ジーク！

大爆笑の兄と脛を押さえて跳ねてるスキンヘッドと捨て置き『風呂で溺れて、むっさい騎士に人工呼吸されろ』と心中で呪い、私は号泣しながら、走り去った。

途中、姉を見つけて、悲しみのまま抱き付こうとしたら、避けられた。

筋肉痛で足に力が入ってなかったので、そのまま廊下にダイブしてしまった。

幸い柔らかい絨毯が敷いてあったので、怪我はなかったけど――――

「汚れるじゃない！」

――と背中を踏まれた。

泥だらけで、すみません。鍛錬、お疲れ様です。ご機嫌斜めのところにすみません。

私がわるーございました。おねがいですから、踵でぐりぐりするのはやめてください。姉の下僕のM属性ではないんで、普通に痛いです。

後ろから追いかけてきていたジークに慰められつつ、侍女の方に運んでいただき、部屋の備え付けのバスタブにお湯を運んでもらって入った。

風呂に入るのが贅沢だなんて、元の世界では思いもしなかった。

＋　＋　＋

晩飯は、なぜかマヨネーズを使用した料理ばかりが出てきた。

サラダは勿論、肉にもハーブみたいなのが入ったものがソースとして掛けられている。

この世界にもマヨネーズがあったんだ――馴染みの味に、和む。

色々種類があって、マスタード？っぽいものやら、チーズが入っ

ているものまであって面白かった。

あるんだったら、朝にも出してほしかった。

魔法の勉強で疲労している姉も同じ思いだったらしく、同じようなことを零したら、厨房を借りたときに母が伝授したらしいことがわかった。

となると、醤油とかケチャップと濃口ソースとかないんじゃ……脳裏を過ぎるが。

疲労が大きすぎて、すぐに考えるのをやめた。

「あぁ、料理文明の革命の時やで！」

よく分からないことを口走りながら、叔父は嬉しそうに、物凄い勢いで――ちゃんと噛んでいるのか心配になるが――食事を平らげて、追加まで催促していた。

ついでに、弟王子も優雅にだが、結構な量を食べていた。

気をつけたほうがいいよ、弟王子よ。

意外とカロリー高いんだから、すぐに下っ腹にくるぞ。

あぁ！パンにまでマヨネーズをつけて食べるの！？いや、美味しいけどさ！ぎゃあ！スープに突っ込もうとしてるから、誰か止めて！と思いつつ、放置しておいた。

どうやら、熊王子はまったく姿を見なかったので、まだ呪い？が解けていないようだ。

王宮魔術師に預けただか、丸投げしたらしい。

＋　＋　＋

夕食後は自室に戻って、真っ直ぐベットに飛び込んだ。

もう筋肉痛が半端じゃないし、色々ありすぎて、頭がパンクしそうだ。

この世界じゃ、日が沈んだら、ほとんどの人の活動は停止――お休みの時間で、その分早朝は日が昇ったらすぐというぐらい朝が早いらしい。

夜型人間の私には迷惑極まりないが、それで明日今日ぐらいボコボコだったら、嫌だ。

いつもなら、日付変更線を越えるか超えないかで寝ている私の生活を考えると、まだ眠るには早い。

でも、物凄く眠くてしょうがない。疲れが全面にでてるな。

私の視線はどことなくテーブルの上に置きっぱなしの、ラバーブ

に向かっていた。

明日の朝から稽古するって言ってたので、気持ちとしては、このまま明日に備えて寝るのが一番なんだろうと思う。

ふと、己の左腕を眺める。

完治してる。

楽器を弾くにはぎこちないが、問題はない。

だけど、ゴブリンさえ終われば時間はあるのだと自分に言い聞かせて、布団の中に潜り込んだ。

すぐに睡魔が襲って――――……

こんこん

控えめだが、はっきりとしたドアノックの音が聞こえる。
眠りに落ちかけていたので、僅かに苛立ちを覚えながら、視線を向けると、聞きなれた声。
「ミィコ殿、おきていらっしゃいますか？」
「……寝てらっしゃいます」
それで引き下がってくれるなら寝ようと思ったが、もう一度ノックしてきた。
「あ～…お疲れの所、申し訳ありませんが、王がミィコ殿をお呼びなっていると、伝言が」
「断る」
「はい、すぐに書斎に――」
一瞬の間を置いて、ジークが短い悲鳴の後に、ドアを連打しながら、焦ったように叫んでいる。
大体、用事があるなら、晩御飯の時にいっとけ。
もう、完全に眠るモードだ。
「ことわ――――！？王命なのですが！？」
「だが、断る」
「み、ミィコ殿！」

王様といっても相手叔父さんだし、私じゃなくて、兄の所にいきなさい、兄のところに。もしくは、父の所に。次が母さんで、駄目なら姉――は無理だな。絶対拒否るだろうけど。

肌が荒れたらどうするのよ、平手で一撃。対象を沈黙させて、終わるんじゃなかろうか？

それに叔父さんが呼んでるなんて、ろくな事じゃない。

新しい罠が完成したとか。

夜中に月が綺麗だから、餅を焼けとか。

基本、わけわからん。

ポテトチップス作れとか、ドーナッツ食べたいとか、夜中にタバコ切れたから買ってこいとか――叔父の家から近隣の自動販売機まで、何キロあると思ってんだ！ちゃんと買い溜めしておけ！

前に『私道だから、バイク乗ってけばええやん～』って、途中から私道じゃなくなってるよね、あれは。何度も言うけど、私、免許もってないから。

頑張って乗ったけど、子供の私に３５０ｃｃはでかすぎるだろう？

いやゲームセンターで何度かバイクレースので乗ったことあるけどさ、それとこれは違うしさ。

一回転んで、バイク起こせなかったから、車道に放置して暗闇の

中、歩いて帰ってきたの忘れたのか？
軽く転んだだけだから、ボディがへこんで、ミラーが片方粉砕ですんだけど。

せめてスクーターあるんだから、そっち貸して欲しかった。

それなら、起こせた――――って、まぁ、今となってはいい思い出…んん？いい思い出なのか？

扉越しにジークの声を聞きながら、私は窓を音を立てないように少し開けた。
若干、夜風が冷たいが、一日ぐらいなら平気だろう。

窓から逃げた風を演出。

痺れを切らして、入ってきそうなので、先手を打っておこう。

外套とクッションを持って、ベットの下に潜り込むと、ジークの声が遠くなって丁度いい。

うとうとしていると、扉の外がさらに騒がしくなった。
どうやら、本当に入ってきたらしい。

ばたーん、と勢いよく扉が開いて、ベットサイドに垂れている布団の淵から、うっすらと二人分の足が見えた。

「も、申し訳ありません、窓から逃げられたようです！」

ひとつの足はジークだろう。

カーテンが靡いていることに気がついたらしく、窓に向かい、確認している。

なんだか緊張しているのか声が震えている。

上司と一緒か？って、トーマス隊長ではない気がする。

だったら、即捕まえているだろうし。

「声を聞いてから、時間がたっておりません。すぐに探索にいってまいります」

もうひとつの足に――といっても長い外套を引きずっていて靴は見えないが――向かって声を上げているらしく、外へ出て行こうとした。

「よい、かまわん」

思わず、噴出しそうになって口を塞いだ。

どうやらもう一人は、声から察するに叔父さんのようだ。

話し方が、微妙な関西弁ではなく、偉そうなので、笑いがこみ上げてくるが賢明に堪えた。

命令した本人ご登場で、ジークが焦っているとか、そんな感じか。

叔父が歩き出して、このまま退出するのかと、ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間。

「ミィ～イ～た～ん～」

私の足元の僅かな隙間から、ぎらり、と鈍く光る目が覗いていた。

気がつけば、がっちりと足首を掴まれている。

怖っ！！

二重の意味で怖っ！！

Ａｃｔ　２２．　まだ寝れません（後書き）

【とある中年騎士と王様】

「よい、かまわん」

俺は頭を深々と下げて答える。
これほど間近で、しかも一対一で会うとは思わなかった王の迫力に押される。絶対的なカリスマとはこういうことをいうのだろうか。
自分の失態を胸に刻む。ただ自然に立っているだけなのに、一分の隙もなく、微動だしない表情からは感情が伺えず、びくびくしていた。
まさか、王の命に逆らい、窓から逃げ出すとは。
王が室内をぐるりと見渡した後、動き出して、会うことをあきらめたのだろうと思った刹那。

い、イシュルス王ぅぅぅぅ！！！！！

王は地面に伏せ、ベットの下に手を突っ込んだ。

「ミィ～イ～た～ん～」

ぎらぎらと鈍く光る瞳をベットの下に向けて、にたぁあ、と背筋も凍るような笑みを浮べていた。
俺の心臓は揶揄なしで数秒止まっていたんじゃないかと思う。

Ａｃｔ　２３．　岸田家系図の修正要請

「絶対ヤダ」

ベットの下から引きずりだされた私は、瞬時の判断でベットの足を掴む。

だが、叔父は構わず私の足首を引っ張るものだから、体が空中に浮くような形になった。

種も仕掛けもございません。叔父の腕の力のみです――って、違っ！

「ええやん、ちょっとぐらい」

よくない！叔父さんのちょっとで、ちょっとだったことないじゃん！

疲れてるんだから、寝かせてよ！

大体、叔父さんが自分から来る時って大抵碌なことがない。

寧ろ危険になったことのほうが多いぐらいだし。

「可愛い叔父さんの頼みやん」

ずぅえん、ずぇん、可愛くない！可愛い叔父さんは、お年玉とお

小遣いを余分にくれたり、実家に来るときはケーキやオヤツを買ってきてくれたりして、誕生日とかクリスマスのプレゼントを奮発してくれたりするんでしょうが！

焦げ付かないフライパンも、最新型の電動泡だて器もいらないやい！

間違っても血まみれの鉄パイプ片手に、怪我人引きずって家に放り込んで帰ったり、突然フラッとやってきて、海鮮餡かけチャーハン食べたいとか、材料を持って人に押し付けたりしないんだよ！しかもなんだよ！作ったら作ったでイカが硬いだと！自分で作れ自分で！この料理音痴が！少なくとも中学生の私に海鮮餡かけチャーハンはレベル高いわ！せめて母さんに頼め！

「嫌や。あの人に貸し作ったらどうなると思ってんねん」

知るか！

頼んで、母の心行くまで、奴隷のように扱き使われろ！

浮いている足で、叔父の鼻っ柱に向かって蹴りを繰り出すがあっさりと避けられてしまった。

「せ、僭越ながら、イシュルス王」

「……よい。発言を許す」

ジークが膝をついて頭を下げると、叔父は思い出したように、きりっ、と真面目な顔を作った。

遅っ！叔父遅っ！

絶対に野蛮な本性がばれているだろうが、大人なジークは――たぶん、ジークよりも年上な叔父よりも確実に大人だ――それを見て見ない振りをしているようで、敬いの姿勢を変えない。

くっ！掴んでいる腕に蹴りを入れたら、瞬時に掴んでいる手とは逆の手で足首を掴みなおしやがった！

こんな時ばかり、チート能力を発揮しやがってますよ。

「ミィコ殿は、午前中は城下に出向き、午後からは第二騎士団で鍛錬をされております。子供であるミィコ殿には、その疲労は計り知れないかと。ご考慮いただければと」

ジ、ジーク！！お前はなんていい奴なんだ！

子供言うたけど、超許す。

さっきのお風呂の件で、きょとん顔したのも全然許す。いい人だ。

私から言っても無駄なんて、いってやってくれ。

責任はもたないけれど。

「笑止。我が血族に軟弱な者はおらぬ」

笑止とかいいつつ、鼻で笑うなよ。

「ここにいるから！っつーか、岸田の家の人間が全員チートだと思ったら大間違いだし！極々平凡な一般人の私は惰弱だから！殺す気か！」
「あー…ミィたん。自分が思ってるより、頑丈やで」

ミィたん言うな！私が頑丈にできたら人生苦労しないわい！！
相手によって話し方変えてるの器用だな！叔父よ！

しかも、蹴りが一発も当たらないのが腹立たしすぎる。

「で、ですが、イシュルス王――――」

おお、それでも叔父（王様）反論するなんて、凄いなジーク。

その背後から後光がさして見えるよ――部屋、暗いけど。
きっと天使みたいに背中から、白い羽が生えているに違いない。

「異世界ではデザートに『ドーナツ』というのものがあるのだが……食べてみたくはないか？ジークホークよ」
「さ、ミィコ殿！王命です！厨房へ！」

うぉおい！一気に堕天しやがった！！

結局、ベットを掴んでいた手をジークに引き剥がされて、叔父に足首を掴まれたまま、廊下を移動することとなった。
夜でよかった誰もいない――って、せめて普通に歩かせてよ！

「うむ、よい働きである。ひとつ恵んでやろう」
「はは、ありがたき幸せ」

頭上では、悪代官と越後屋みたいな会話が繰り広げられていた。
うん、でも作るの私なんですけども、この野郎と思ったら叔父は先回りして、テーブルの上のラバーブを人質――いや物質（ものじち）にしやがりましたよ。

やめて！振り回さないで！バットじゃないんだから！
この鬼！悪魔！人でなし！
いつか、あの髭全部抜いてくれるわ！叔父め、覚えてろ！！

＋　＋　＋

厨房はなぜか晩御飯が終わったはずなのに、まだ料理人がいた。
明日の仕込みだろうか？

しかも、マヨネーズ臭が凄いのなんのって……この人たちはどれだけマヨネーズを作り続けていたのだろう？卵、残ってるんだろうか？

なぜか目が血走ってて怖いけど、叔父が顔を出したとわかると全員が膝をついて頭を下げて、水戸のご老公が！という状態になってしまった。

料理人の力添えがあって、さほど時間をかけずに出来上がった揚げたてのドーナツ。

手伝ってくれてありがとうの気持ちで、一人一個ずつ置いてきた。

大量に作ったので、皿の上に山盛りになっている。それとお茶セットを乗せたカートをジークが押している。

そして、叔父に背負われている私。

なんでやねん。

さっきみたいに頭に血が上らなくて、いいけどさ。

どう考えても、自室へは向かっていないような気がする。

いくら足首掴まれて光景が逆さとはいえ、通っている場所が違うのはわかるぞ。ちなみに、厨房までの道のりも覚えたので、夜食が食べたくなったらあそこだな。

料理長直々に『好きに使ってください』とドーナツを齧り、泣き

ながら言われた。
威勢のいい赤毛のおねー様に、ドーナツレシピを教えたので、いつの日か食卓に並ぶであろう。

『アタイは必ず、このオーナツで――』

いや、ドーナツだから。

なんで、伝わったり、伝わらなかったりなんだろうか？

メラメラと闘志の燃える赤毛のおねー様は自分の世界に入っちゃって、聞いてなかったけど。他の料理人に謝罪された。いや、別にどうでもいいんですけども。

「叔父さん……もう、眠たいんだけど」

背負われているせいで、揺れ心地が絶妙だ。
ドーナツを頬張りながら、うとうとしているのだが、まだ行ったことのない廊下を歩いている。広すぎるだろ王城よ。

「もうちょい、起きとき」

自然現象だから、しょうがないじゃん。
トイレ行きたいとか、お腹すいたとかと、一緒で…我慢できな……

「あかんよ」

と、眠りかけた私の耳に叔父の声が届いて――――気がつくと、メリーゴーランドＤＸを食らったことを明記しておこう。

眠る前に永眠するって！

いつか絶対髭抜く、と私は飛んだ眠気と共にダメージを受け、心に強く決意した。

ピンセットで一本ずつ、じわじわ抜いてくれるわい！

その前に、吐くかもしれないけど。

後ろからドーナツ頬張りながらジークは、微笑ましい笑顔で私たちを眺めていた。

ジーク……頼むから、叔父止めて。

＋　＋　＋

なんやかんやで、叔父はどこぞの部屋をノックしていた。

「入れ」

上からの高圧的な女の声が聞こえると同時に、叔父は部屋の扉を開けていた。

室内はごちゃごちゃとしていて薄暗く、微妙な臭いがする。

床に積み重なった古そうな本に、天井まで届きそうな本棚。

ビーカーやら三角フラスコが火にかけられたりして、微妙な色の液体がぐつぐついっている。

ビー球のようなものが入った試験管が並び、自分勝手に地球儀が回っている。だがその地球儀の大陸の形が私の記憶と異なることから、異世界球儀とでも呼んだほうがよいのだろうか。

なんか、どことなくマッドサイエンスの香り漂う。

「イベイベ、生きとるかいな」

「……私を、イベイベと呼ぶな。殺すぞ」

叔父の言葉に答えたのは、三十台前半ほどの女性だった。

姉と母で美人は見慣れている私であるが、それでも『イベイベ』は美貌と呼べるだろう。

金髪碧眼でフランス人形のように精巧に整った面立ち。

肉体は『ぼん、きゅ、ぼん』で、ハリウッドの女優のような体つきである。
出るところはでて、細いところは細い。その体は、体にぴったりとフィットしたシンプルなドレスを纏っているのだが、それは一層女の魅力を高めていた。
ただ座っているだけなのに、気品があり、強烈な印象を植え付けた。
あまり豊かではないらしい表情が冷たい印象を与え、鋭い碧眼だけがギラギラしていた。後半は叔父の渾名に対する殺意なのかもしれないが。
睨みつけられた叔父は気にした様子もない。
叔父が渾名をつけている事から、親しい間柄なのだろう。
はっ！ま、まさか！ここにきて、まさかの奥さん！叔父さんのお嫁さんなの！？だから、私をつれて……いや、でも奥さん渾名って。
城に滞在してから、一度も会ってないから気になるけど。
まぁ、いつか紹介されるだろう。
しかも、叔父の嫁がこんな美人だったら、びっくりだよ。いや、叔父に嫁がいることだけで十分にびっくりだけどさ。
怖くて誰も聞けないし。
王様である叔父を殺害宣言して許されるぐらいだから、多分偉い

人なのだろう。
一介の研究者って感じではない。
才女って空気は醸されているけど……流行のクーデレか？
「なんのようだ。疫病神」
うわー…その言動から察するに、うちの叔父が毎度、大変なご迷惑をおかけしております。
喋り方が高圧的だが、それまたクーデレのクール感を漂わせてるよ。
「カルムどうなっとるんか様子見に来たんや」
「元より呪術など畑違いだ。最初の報告書からは進展しておらん。明日にでも、アドルフに引き渡す――――戯言はいい、本題はなんだ」
「相変わらずのツンツンやなぁ」
つーか本当に誰だ？国の偉い人か？
一緒に部屋に入ったジークを振り返ると『宮廷魔術師のイヴェール様です。カルム王子の呪いの関係かと』と耳打ちしてきた。
その顔は聊か青ざめているような気がしなくもない。
宮廷魔術師かぁ。

てっきり、白髪の長い髭と髪のお爺さんが出てくると思ったが、無駄なまでに美人が配置されているな。

カルム――…王子と呪いということだから、あの熊王子か。名前じゃ、ぴんとこないな。

あれも従兄弟なんだよなぁ……熊が従兄弟か。熊が。私的には、むしろ人よりも熊の方がいいけど。

宮廷魔術師は魔法使いだから、呪い解けませんか？という形で預けられたのだろう。

「それになんだ、その背負っている奴は」
「ミィたんや。兄貴の所の子やで」
「……貴様の、兄だと？」

金髪美女は眉根を寄せて、私の顔をじっと見つめている。

いや、私、叔父の悪事とは無関係なんで、お構いなく――――っつーか、ミィたん言うのやめろ。

「血は繋がらないとはいえ、私の甥か」

そうそう、私はただの一般人――――ん？なんか幻聴が聞こえたよ

うな？

私の頬が引き攣る。

イベイベは優雅に立ち上がると、叔父は私を背中から下ろした。

差し出された手に私は大いに戸惑った。

叔父に視線を送ると、叔父は頷いて促したので、その白く細い手を握り締める。

近くに来ると、物凄くいい匂いがした。

「私の名前はイヴェール。イヴェール＝アヴェ＝ラカヴァ＝ナイトヘルツォーク＝ヴェルクスタ公爵夫人だ。旧姓はイヴェール＝フォン＝イシュルス」

長っ！イベイベ長いよ！

だが、彼女の名前に驚いて、手を握ったまま固まってしまった。

つ、と私の額から汗が流れたような気がする。

この時、私はどんな顔をしていたのか想像できないが、後にジークに『珍しく驚いた顔をされていましたね』と言われた。

「職業は王宮魔術師だ。不本意ながら、この疫病神の義理の妹でも

ある」

叔父の時とは対応が変わり、私に柔らかい微笑を浮かべた。
だが、頭の中はそれどころではない。

宮廷魔術師はいい。

叔父の義理の妹――――つまり、叔父の嫁さんの妹＝イシュルスのお姫様＝私の叔母??

まだ嫁さんにも会ったことないのに、叔母が登場したよ！
ってか、イベイベ叔母さんと呼ぶのも、気が引けるような若くて美人だな、どうしよう！

それに最初の公爵夫人のファミリーネームどっかで聞いたことあるよ。たぶん、いや、もう本当ここ数日で。

「それから、第一騎士団ヴェルクスタの妻をしている」

え、えええええええ！！！！やっぱりですかい！！

熊を素手で殴る第一騎士団長の！食べるのが凄く遅い第一騎士団の！？

嫁美人！嫁凄い美女！あの人もたぶん人だから、嫁の一人や二人いてもおかしくないけどさ！？

え、ええ？じゃ、あの人も、実はお、お――――駄目だ！脳が拒絶するよ！私の中で岸田家の家系図を作り直すことを俄然拒否しているよ！！

つーか、姪ですから！イベイベ叔母様！

ああもう！これがテレビなら、ＣＭでお願いします！！

Ａｃｔ　２３．　岸田家系図の修正要請（後書き）

＝＝＝　真実子は混乱している。

Ａｃｔ　２４．　癒しのもふもふ

「…真、実子……です」

辛うじて頬を引き攣らせながら、自分の名前を発するので精一杯だった。

「アミーゴか、よい名だ」

そうそう全世界お友達って、違っ！

自己紹介するたびに、私の名前がおかしくなっていくし！

ちょっと動揺して『真』の部分で切ったのはわるかったけどさ！

「ちゃうちゃう、ミィたんやで」

「ああ、すまぬ。ミィタンか。よろしく頼むぞ」

叔父の渾名だけ解読できるんかい！違う！断じて違うから！いや、でもアミーゴは嫌だ！だけど、くっ！背に腹はかえられない！

「み、ミィコ…です」

泣く泣くミィコと名乗る私に、イベイベは『ミィコだな』と頷いている。

岸田家は身内の少ない家だ。

叔父なら一人いるのであれだが、叔母というのはぴんとこない。

大家族にちょっと憧れてたので嬉しいけど、叔父叔母が増えるなんて―――いや、うれ……うん、微妙？……はっ！もしかして、彼らに子供がいたら、従兄弟もっといるのだろうか？いや、考えてみれば、王家って他国に嫁いじゃっている方もいるのだろうから、実は他の国にも？？だとしたら、他の国の王族の叔父叔母がいて、子供がいたら従兄弟が？恐ろしいまでの大家族だな。仲良くできたらと思うが、コミュニケーション能力の低い私が上手くやっていけるか、非常に心配だ。

そもそも叔父の嫁と仲良くできるだろうか。熊王子はコミュニケーション以前の問題だがもふもふ的な外見が素敵だし、弟王子はちょっと感性がずれているような気もするが、彼は悪いやつではなさそうなので、仲良くできると思いたい。弟王子から推測するに、叔父の息子なのに割と大人しい部類なのだから、母親の教育がよかったんじゃないか。だとしたら叔父嫁は素晴らしい女性に違いない。

「ミィコはどうしたのだ？固まっているが」

「ん～？なんや自分の世界にはいっとるっぽいわ」

「本当にこの子がお前の甥なのか？話に聞いていた感じとは……」

「あ、ちゃうちゃう、そっちやない。あんな化け物と、ミィたん一緒にしたらあかんて」

はっ！もしかして、念願のおじいちゃん、おばあちゃんがいるのか！？縁側で猫を膝の上に乗せながら囲碁（将棋でも可）しつつ、一緒にお茶をするプレイを是非ともしてみたい。死ぬまでに一度はやってみたかった。

それに従兄弟がいっぱいいるということは兄念願の『ぐしゃりもあるよ！全岸田の子供たちのパイ投げサドンデスマッチかくれんぼ頂上決戦』ＩＮイシュルスが三日三晩開催されるというのか。いや、母姉念願の『ほろりもあるよ！（野郎どもの涙的な）全岸田の子供たちよ美女、美少女になろう（年齢上限１８歳、性別に制限なし）。リアル着せ替え人形のお茶会』ＩＮイシュルスで――――おお、なんと恐ろしい。前者も後者も阿鼻叫喚の地獄絵図が――――…

「しゃーないわ、現実世界へ戻っておいで――――叔父スペシャルハンドパワー！！」

「へぶぅ！！」

「み、ミィコ殿！」

額に強烈な一撃。

鞭打ちになりそうなほどの衝撃に、吹っ飛んで背中から地面に着地した。

額が割れそうなほどの激痛に涙を浮かべながら、額を押さえて地面をゴロゴロ転がって痛みをやり過ごす。

一瞬、なにが起きたかわからなかった。

だが、この額への痛み。事故にあったのではないかと思うほどの衝撃。

間違いない。

威力が増しているとはいえ、叔父のデコピンだ。

メリーゴーランドＤＸで減っていたＨＰが更に危険領域まで減っていることだろう。

これ、今日鍛錬で体力上がってなかったら、死んでたな、私――って、ベニヤ板を割るようなデコピンを人様に向けてんじゃないっつーの！！目玉飛び出すかと思ったわい！！今日の鍛錬で金髪騎士の木刀も痛かったが、これに勝る痛みではなかったぞ！！

もしかして、額割れてない？ってぐらいの痛みだよ！このヴォケ！！

この手のヌルって感触血じゃね？！今日二回目の流血？！

「あ、しもうた。ミィたん大丈夫かいな？」

私はすく、と立ち上がって、叔父に背を向けると、扉の付近まで移動する。

「ミィコ殿、部屋に戻られ――――」

ジークの焦ったような声を無視して、私は振り返って数メートル先から叔父(ひょうてき)を睨みつける。
はっとしたように、叔父は首を横に振ったが、私は走り出していた。

「ちがうんやで！わざとやない！ちょっと力入れす――――」

叔父の言葉は最後まで続かなかった。

全速力で走った私は数歩手前で踏み切ると、両足を揃えて、勢いのまま叔父の胸を蹴った。

＋　＋　＋

「……痛い」

額は割れていなかったが、どうやら叔父の爪が長かったようで、掠って流血していたようだ。
胸の辺りに綺麗に私の靴跡がついた叔父が苦笑している。

「せやから、悪いいうてるやんか」

それを払い叔父を睨みつけていると、イベ叔母がハンカチ貸してくれたので血を拭った。

お礼を言いつつ、叔父の脛を蹴る。

爪が当たったのは叔父にも予想外だったようで、本気で悪いと思っているようだ。

じゃなかったら、大人しく蹴られたりはしないだろう。

だがよろけただけで、姉直伝のドロップキックを受けて、ほとんどダメージがないというのはなんだか腑に落ちないというか、ノーダメージか！化け物一号め！姉に近距離からのほぼノーモーションドロップキックを受けたとき、私は吹っ飛んだぞ！靴か！靴がブーツだからか！

イベイベ叔母様が『まさしくお前の甥だ』と叔父に真顔で訂正している。

いや、姪なんですけどね。

なんかこう、訂正のタイミングを失っている気が。

岸田家の血統をドロップキックで見極められても、なにやら微妙な虚しさだけが、残るよ。後、首が寝違えたような痛みと、額の痛みが。受身は成功したんだけどね。

っていうか、普通に揺さぶってくれればよかったんじゃない？

まぁ、旅立った私も私だが。

父もそうだけど、私が遠い世界に旅立ったら、子供にするみたいに『高い高い』とかして、空中に放り投げて遊ぶのやめてほしい。

イベイベ叔母様の紹介が目的なら終わったので、帰ろうかと思ったが視線を感じる。

これが姉が朝感じていたという視線か、と思ったら、隣の部屋に続いているであろう扉から円らな朱色の瞳が覗いていた。

「ん？おお、カルム生きとるかいな」

器用に自分でドアノブに手をかけて入ってきた。

つか、忘れていたのか叔父よ。

くぅん、くぅん、と戦いに負けた犬のような鳴き声を発しながら、よろよろと此方に二足歩行で――イベイベ叔母様と叔父を綺麗に避けて――私の元へきた。

その赤い目元が潤んでいたので、可愛さのあまりギュウギュウと抱きしめる。

というか、抱きしめあっていた。

熊王子よ。口から内臓が出ちゃうから、力を緩めてくれ。たとえ出ても、熊毛に包まれて圧死ならば、ある意味本望だが。

「なんや、二人とも仲良しさんかい――――テレビなら背後に、別れた主人と感動の再会みたいなテロップがでそうやな」
「れれび、とはなんだ？」
「テレビや。あんま細かいこと気にしたら、胃痛になるで？」
「お前の存在が私の胃痛の原因だ」

後ろが煩いが、かまわず熊頭をナデナデする。

あぁ、癒される。
癒しのオーラが熊から出ている。

どうやら、よほど酷い目にあっていたようだ。
心なしかやつれ――――うん、よくわからん。でも歩き方から推測するに、随分力ない感じがする。

私はジークが押してきたカートの上に乗っていたドーナツを口の中に突っ込んだ。
これでも食べて英気を養うんだ。

はっ！ドーナツはこの再会の為の伏線か！？

「ちゃうで。ドーナツはイベイベにやる予定やったんだ」
「おーなつ？」

小首を傾げるイベイベ叔母様。

異世界の菓子であることを説明すると、その瞳がぎらり、と鈍く光った。

「――――対価はなんだ」

ジークの押していたカートを自分の方に引き寄せて、ドーナツを親の敵のように睨みつけている。

うん、凄く分かりづらいけど、話の流れから推測するに甘いもの好きなんですね。

「さすが、イベイベ。話が早いわ」
「貴様に褒められた時点で、人として終っている。だが甘味のためならば、私は悪魔に魂でも売ろう」

叔父＝悪魔か。
きっと叔父が毎度ご迷惑をおかけしてたんですね。

たかが甘味如きで、魂売られては凄く困るんですが……たぶん、弟王子は叔母似ではなかろうか。

「イベイベ……ラバーブを弾けたやろ」
「嗜み程度には」

熊王子から引き剥がされ、私の背中が叔父に押され、ようやく事を理解した。
まさか、叔父が無償で善行を行うなど、考えもしなかった。

「ミィたんに教えたって」
「ほぅ、楽器を嗜むか。それはかまわん……が、あまり時間はとれん」

うずうずとした様子で、ドーナツを見つめたまま、イベイベは端的に言い放った。

あ、ですよねー。
社会人？でお仕事なさってますもんね。

基礎さえ教えていただければ、独学で習得いたします。

「せいぜい今時間に十分ぐら――――」
「ミィたんは異世界の菓子作りの名人やで？今ならもれなく、オヤツ付きや」
「――片手間でよいのなら、三十分は見てやろう。明日もこの時間に来るといい。必ず菓子を持参するように」

菓子があれば、教えてくれるのか。

いや、ありがたいんだけどさぁ……なんか、家庭教師が豪華すぎ

ない？

というか、王宮魔術師を音楽教師にしていいのだろうか。いくら王（叔父）が許してたってさぁ、普通は一般人に教えるって駄目じゃなかろうか？

ちら、と常識人のジークを窺うと、青ざめたまま微妙な顔をしていた。

此方の視線に気が付いたようで、曖昧な笑顔が返ってくる。

「ふむぅ、我が可愛い甥よ。美味だ」

美味って割には、眉根を寄せて険しい顔で、ドーナツを頬張る美女。

本当に甘味が好きなのだろうか？

一抹の不安を感じていると、固まっていた熊がよろけて本棚にぶち当たり、本棚を粉砕した音が室内に響いた。

やっぱり、二足歩行は熊には難しいのだろうか？

本棚に本を入れなおした後、イベイベ叔母様にお礼を言って、お暇しよう。

さすがに安住の地であるベットが恋しい。

叔父も一緒に部屋を出るのだろうと思ったら、叔父は何処か別の場所を見つめながら、茫洋と瞳を細めていた。

どこか疲労を滲ませていたが、元気いっぱい？の叔父にしては珍しい。
室内は明るくないが、それでも顔色がよくない気がする。
もしかして王様として忙しいのだろうか。
その僅かにしかないであろう暇な時間を、このために割いたのかと思うと、少し申し訳なく思う。
日頃の被害を考え見て、ほんの少しだけど。

「叔父さん」
「ん？あぁ、もう戻るか？」

一瞬、無表情になったが直ぐにいつもの調子になった叔父に、私は眉根を寄せる。
うちの家族はなんでこう、意地っ張りというか、素直じゃないというか———人に弱みを見せることを嫌うんだろう。
他人ならまだしも、家族なのにさ。

「うぉ……なんや？下がればええんか？」

私は両手で押すと意図を察したのかなすがまま叔父は誘導される。
そのまま、空いている椅子に腰掛けさせた。

幸い私には適当な理由があるので、ドーナツの乗ったカートの下に置かれていた人質ならぬ、物質（ものじち）であったラバーブを手にした。

「イベ叔母様……腕前、見てほしい」
「ん？かまわんが――――」

戸惑った様子の叔母は「『イベ』ではなく『イヴェ』なのだか」とブツブツいっていたが、私は聞かなかったことにした。

私は膝をついてラバーブを構えると、長く息を吐き出す。

ゆっくり（アンダンテ）歩く速度で――――緩やかに始まる、細い高音。

まだ、細かな動きに少しぎこちなさの残る左手。
それでも正確に音を刻むように心がけた。

光の粒子が溢れて、ゆっくりとそれは叔父に向かっていった。

閑話　【魔術師の眼差し】

『彼は救世主ではありません。ましてや英雄でも、勇者でも、聖人でもない――しかし、あの方はこの腐敗した国を生かすには、絶対に必要な方です』

姉が幾度となく口にした『レジィー』という男の名前。

その後に必ず、姉は付け加えた。

暗愚である父王の暴政に国が疲弊し、他国からの介入を許し、ほとんど根元まで腐りかけているイシュルス王国。

最早、イシュタルの加護などないのだ。

国の崩壊など、時間の問題。

いや、もしかすると国としては、崩壊しているのかもしれない。

目も覆いたくなる高税、高い失業率、無職者から犯罪者への転向、森からやってくる魔物の大群、寂れた大通りに横たわる骨と皮だけの浮浪者。

物心ついた時には、末期状態であった。

生まれたときからかもしれない。

一番古い記憶の姉は常に悲しげに瞳を伏せていた。

私は自分が、女の身であることが、憎かった。

男であれば、王子として、この国の政治に介入することができた。
姫など、契約の名の下に他国に嫁がせるだけの見掛け倒しの人形でしかない。

愛など、欠片も存在しない。

姫は人権も、自由も、国家の二の次とまでさえ、言われたことがある。

大好きな魔法学を本格的に学ぶことすら夢のまた夢。

いくら『レジィー』が凄かろうと、自分と違い正妃の娘である姉とて、若くして輿入れ先の決まってしまい、もう少しでこの国を旅立つのだろう。

イシュルス王国を、イシュルス国民を案じる唯一の王族――――それが姉だった。

私はすでに諦めていた。

この国は、もう駄目なのだと。
己の未来は決まっているのだと。

滅びの時は近い、と。

イヴェールは、レジィーとの邂逅を今でも鮮明に覚えている。
並大抵の者は、その流離人（ルエイト）の凶行を忘れることはできないであろう。

手にした金属の棒で肩を叩いて、不機嫌そうに王の間に現れた。

そう、ふらりと迷い込んだように。

『――――馬鹿で無能な権力者は、二回死ねっ！！』

叫んだと同時に、加速したレジィーは相手の手前で踏み切り、飛ぶと両足をそろえて父王の顔面を蹴った。

吹っ飛ぶ父王に爽快な気分を覚えたのは、末代までの秘密である。

後に姉の婿となり、このイシュルス王国を切り盛りした。

その義兄の手腕は姉の見込んだとおり、革命後のイシュルスは、たった十数年あまりで、その体制をほぼ建て直し、名だたる強国と名を連ねるほどになった。

レジィーの二つ名を『純黒（じゅんこく）の獅子王』。

『獅子』というのは勇猛果敢の意だ。

今は殆ど城内を出ることも少なくなったが、幾度か見舞われた戦火で、義兄は前線で独壇場ともいえる純然たる強さを示したのだ。

『純黒』というのは黒髪黒目のためだろう。

そして、黒目は微笑を浮かべてもなお鋭利で、深淵を覗き込んだような底知れないほど印象を与えることからきたのではないかと思う。

それに汚れが目立たないという理由から義兄は黒い衣服を好んだ。

この二つ名を聞いただけで、今では隣国の王族は震え上がるというほどだ。

ただ私と夫は奴隷よりも扱き使われることなど、その時は知ることもなかったが。

＋　＋　＋

ミィコと名乗ったレジィーの甥は護衛騎士を伴ってやってきた。
年頃は１３歳前後だろうか？
東方系の民族は顔立ちが幼く感じることを加えても、せいぜい１５歳だろう。
髪を伸ばし、スカートを穿いていれば、少女であると言っても過言ではない。
幼いが故に性別のはっきりとしない中性的なものなのか、元々こういう顔立ちなのかは分からないが、伏目がちのせいか、年の割には少し陰鬱げな影がある。
やはりこんな叔父を持った為に、苦労したのだろう。
同情を覚える――――被害者意識と言い換えても過言ではない。
レジィーと話ている時は多少表情を覗かせるが、ほとんどの場合は無表情である。
やり取りから推測するにレジィーとの関係は友好的のようだ。
恐ろしい話ばかり聞いていたので、かなり驚いた。
想像とはだいぶ違う。
彼の甥は確か、『大魔王から生まれた魔王』だとか、『同い年で

あったら、同属嫌悪で血で血を洗うような殺し合いをしていた』とか『天敵その2』などと言うほどだ。

生きている間に会うとは思わなかった。

というか、正直会いたくなかった。

あのレジィーが話をするたびに嫌そうに眉根を寄せるのだから、よほどの甥なのだろうと思ったが、拍子抜けだ。

それとも、こう見えて、物凄い猛者なのだろうか。

握手を交わした手も、小さかった。

何をしていたのか分からないが、手はボロボロであった。

皮膚は剥けている所もあり、傷もついている。

努力家の手だと思う。

初対面のせいか、硬く緊張している様子が、普通の子供のようだった。

だが、その後、両足をそろえた飛び蹴りに、父王を蹴ったレジィーの姿が被る。

甥ではないと言ったが、間違いなく、彼の血族ではないか。

もともと食事は共にすることは滅多にないが、兄家族を紹介するので出席しろとのレジィーから要請があったのだが、忙殺されて、すっかり忘れていた。

日々溜まっていく通常業務に加えて、部下の新たな研究案。

異形となったカルムの肉体の調査。
王宮に魔術的に入り込んだであろうネズミ。
ここ数日、まともに食事をした記憶もない。
姉に至っては、あの場所から動く気もないだろう。
だというのに異世界の菓子を報酬にミィコにラバーブを教えろというのだ。
でもまぁ、この美味いもが食べられるのだというのならば、少しぐらいは片手間で見てやろうという気分にはなる。
魔術学ほどではないが、音楽も私は好み、自らの給料で楽器を買い集めたものだ。
それの一つ一つに魔法をかけて、自動演奏にして仕事に励んだ。

「イベ叔母様……腕前、見てほしい」

レジィーを椅子に座らせると、準備のいいことに異世界の菓子を載せたカートに乗せられていたラバーブを手にしていた。
使い込まれた良いラバーブだが、小柄なミィコには大きいような気がする。
家に楽器の保管場所に、サイズの合いそうなラバーブが合った筈だ。
ただ専用の弓がなく、格安だったが、名品であった。

魔法で自動演奏にするので必要ないと思ったのだが、なぜか魔法がかからずに結局放置することとなったのだが――――明日にでも家から取り寄せるか。

ゆっくり歩く速度で（アンダンテ）――――……曲目は『慈悲降り注ぐ月光』である。

吟遊詩人としては、下級の上程度の曲目である。

一曲の魔力の消費率が高く、連発は難しいのだ。

それに回復の威力は強くはできない。

だが範囲は広く――とはいっても、ラバーブでは、せいぜい音の響く酒場の一室程度でだろうが――よく冒険者酒場で弾かれると聞いたことがある。

音色は複雑ではなく、演奏者が増えると効果も範囲も大きくなる。

ぎこちなさはあるが、ほぼ無難に弾きこなされている。

魔力の強いものなら感じ取れるだろう。

かなりの威力がある演奏だ。

音の力は、その音色の威力は、真っ直ぐにレジィーへ。
どうやらミィコはレジィーの顔色が優れないことに気がついていたのだろう。

あのように平然と歩き回っていることの方が可笑しいぐらいなのだ。

レジィーへと向かう魔力の余波が流れてきて、心地よく、私は思わず目を細めた。
蓄積された疲労が、僅かにとはいえ回復している。

一曲に随分と魔力を投じているようだ。

ただ観察した結果、左手の動きがぎこちないことに気がついた。

ふとレジィーの話を思い出す。
兄家族の子供の一人に大きな事故にあって、左腕に怪我を負い、才能があった音楽をやめていたのだということを。

つまり、彼は———いや、その表現は不適切だろう。

「……ミィコは、末の子か」

兄家族の兄弟の末っ子――――『次女』であることに思い至って、演奏と同時に確認するように呟く。

演奏が終わったミィコは驚いた様子で、頷いた。

「この国では女は老いも若きも、髪を長く伸ばし、スカートを履くのが一般的なのだ。とはいえ、姪を甥と間違えるなど私も耄碌したものだ。失礼をした」

「ん……別に」

少し照れくさそうに、首を横に振るミィコ。

「私も――――誤解を招く格好をしている、ので」

「まぁ、わてらの国は、女も男も好きな格好しとるからな。わからんでもないわ」

よく聞けば、その声だって、少年というよりは少女のように甲高いではないか。

これが思い込みというのものだろうか。

多分、レジィーはにやにやしているので、私の勘違いに最初から気がついていて、訂正しなかったのだろう。

この部屋に入室してから事を静観していたミィコの護衛騎士が両目を見開いる。

「――――え？」

うっとりと演奏に聞き入っていた様子から一転して、間抜けな顔で、一音発する。

カルムは胸に手を置いて頷いており、密かにレジィーは意地悪そうに笑っており、ミィコは気まずそうに眉根を寄せていた。

どうやら、勘違いしていたのは私だけではなさそうだった。

そして誤解させたままの者は意外にに多そうだ。

なにか言いたそうに、ミィコを凝視し、口をパクパクさせているが、身分を弁えているようで護衛騎士が王族に求められてもいないのに発言することはなかった。

ただ処断の決定した罪人のように、顔面を蒼白にさせていた。

閑話　【中年騎士の失態】

素晴らしい音色だった。

華美さはないだろうが、夜に月を眺めているような静かさがある。それでいて、か細い印象はなく、包み込まれているような感覚。

今日はただ歩き回っていただけなので、疲れてなどいないと思っていたが、ミィコを指導し、相手に合わせて力を加減していたので、その分気疲れしていたのだろう。

心地よく疲労が抜けていく。

路地で聞いたときよりも、ずっと豊かな音だった。

間近で演奏を聴いているせいか、遠めで見たときよりも迫力があり――――なにより、ミィコが柔らかな微笑を浮かべていることに気がついた。

いつもなら、無表情に近い。

せいぜい家族と会話をしている時に、多少表情や声を出したりする程度。

姉であるユイにいわれたこともあってか、俺に対しても言葉は発しているが、あんな風に注意するということは、元々他人に口を開くことは少ないのだと思う。

伏目がちで影の薄い、口数の少ない少年。
そんな印象を受けていたが、浮かぶ微笑は幸せそうだった。
音を奏でることを、心から喜んでいるのだと。

カルム王子も音楽を好むので、うっとりと聞き入っている様子だ。
ただ熊の姿なので、草食動物を前にして喜ぶ肉食獣にしか見えなかったが。

叔父である王は、両目を瞑りびくとせず、師となる予定のイヴェールは瞳を細めて、何か考え込んでいるだった。

音色を聞きながら、思わず口を綻ばせた。

イヴェールを師に仰ぐということは、演奏に立ち会える可能性も少なくないだろう。
俺はミィコの護衛であることを、ある意味幸運だと思う。

サミィのように腹に一物抱えているようなタイプではなさそうだし、ユイのように美貌で気を散らすこともない。

恥ずかしながら、実は女性が苦手なのだ。
間違いなく、己を包み隠さない妹のせいであろうが。

多少、コミュニケーションには問題があるが、慣れの問題だろう。

「この国では女は老いも若きも、髪を長く伸ばし、スカートを履くのが一般的なのだ。とはいえ、姪を甥と間違えるなど私も耄碌したものだ。失礼をした」

と、イヴェールが口にするまで、俺はそう思っていた。

言葉はわかっていたが、意味を何度も脳裏で反芻させて、理解した。

そして、それを王も否定しない。

つまり、ミィコは――――…

＋　＋　＋

イヴェールの部屋から退出し、王がまだ行く所があると自室に戻っていく姿を眺めた後、俺はミィコに猛烈に謝罪したのはいうまでもない。

エミィに指南を頼み手酷い怪我を負わせ、ベルルムの暴言。

ようやく、ミィコが風呂に共と誘い――アイツの場合は王の作った風呂を自慢したかっただけだろうが――突如としてベルルムの脛を蹴り上げた意味を知った。

これほど焦ったのは、久しくなかった。

まさか、護衛対象の性別を見誤るとは――――よく注意すれば、少年にしては声も甲高いし、骨格も華奢である。

年若い者は性別は分かりづらいが、大抵は衣服か髪型で見分けがつくのだ。

男は貴族でない限りは髪は短い。女性は未成年が伸ばした髪を下ろしており、一纏めにしたり、髪飾りをつける程度で、成人すると髪を結い上げる習慣がイシュルスにある。

だからイヴェールも編みこんだ髪を結い上げていた。

この地方は殆どそうだ。

他種族は分からないが、女性でミィコの髪ほど短いなど、ありえないことである。

幸いミィコは怒ってはいなかったようだ。
多少、不貞腐れていたが。
もう一度丁重に謝ると、ミィコは謝罪はいいと首を横に振った。
どうやら自分でも分かっていて、あのような少年のような格好をしているようだ。
理由があるのかと思って尋ねると、短い沈黙の後に気まずそうに頷いた。

「ただ……兄の敵が多かったから」

何でも小さい頃は髪が長く、スカートも履いていた時期もあったようだが、サミィの敵――そんな無謀な人間がいるとは。もしかすると、敵は獣人か??――――が多くて、髪を掴まれたり、連れ込まれそうになったりするからやめたのだとか。
なんという卑劣な。
本人に敵わないからといって、その周囲に手を伸ばすなんて外道である。
ムカムカと聞いているだけで腹の底から湧き上がるような不愉快さを覚えるが、本人といえば軽く肩を竦めただけで終わった。
「髪短い方が洗ったら乾くの早いし、スカートより動きやすいし…

…何より姉と母の玩具にされないからいい」

慣れて平然としているミィコが、なんだか不憫に思えた。

護衛騎士に期間はあるだろうが、終わりを迎えるその日まで、全力で守ってやろうと、密かに心に誓った。

閑話　【とある騎士達の危惧】

イシュルス騎士団には、それぞれ象徴するものがある。

第一騎士団は王冠。

第二騎士団は剣。

第四騎士団は盾。

そして、己が所属する第三騎士団は杖。

第三部隊は『魔道騎士（マジックナイト）』の所属する部隊であった。

騎士の力量を持ち、騎士団ひとつが魔法を重ねることで広範囲攻撃魔法を発動することができる第三騎士団は戦場の花形といってもよかった――――ただ、それは三百年以上前の話だ。

元々魔法には魔法書、魔石と、馬鹿高い費用を必要としたため、主に金を持つ権力者がそれらを握り、原因は不明だが魔力の高い者の出生率が下がり、大陸では魔法技術が衰退していった。

大体の術式が一子相伝ということも関係しただろう。

同時に第三部隊から『魔道騎士（マジックナイト）』は激減した。

イシュルスでは、遥か昔『魔道騎士（マジックナイト）』を騎士見習いの時から育成

するシステムがあったらしいが、長い暴政で完全に機能していなかったのである。

その費用は、どうなったか想像に容易い。

かの有名な異国の竜騎士など、年々繁殖が成功せず保持する竜が雌が三頭と繁殖には難しい老いた雄が一頭だけで、竜騎士団の存続すら危ぶまれているらしい。

形だけでも残っている第三騎士団は運がいいといえよう。

第五騎士団のように、抹消されなかったのだから。

年々魔法を使える騎士は減った。

現在は自分が知る限り、中級以上の魔法を駆使できるのは、五名しかいない。

そうして第三騎士団は、魔力が普通の人よりも多少強い、もしくは魔法抵抗が強い騎士が配属されるようになっていた。

とはいっても、相手が魔術師かわかるかどうか。

せいぜい、弱い魔法を使える程度だろう。

これでは、戦闘では役立つというほどではなかった。

そしていつの間にか、魔法で五感を強化しての斥候などから、様々な情報収集の役割を併用し、水面下で動くようになり、最終的には諜報機関のような役割へ変化していった。

レジィー王が君臨してからは、騎士団の監視も加わった。

王の杖、という呼び名から、影に潜む奴という意味合いで『影奴（エイド）』という隠語めいた別称に変わっていた。

現在はほとんどないが、彼の王が王座に座るまでは騎士団は酷かった。

実力はないが見栄えのあるステータスを望む貴族のいい温床となっており、不正、収賄など茶飯事。正式な公文書ではないが、仕事の関係で旧体制の不正の調査の報告書を何度か読んだことがあるが、とても尊敬に値する活動などしていなかった。

中には、理不尽で一方的な殺害をもみ消したものまであったと記憶してる。

この時代に生まれなくてよかったと、心の底から思うほどだ。

イシュルスの革命の最中、父親の時代は大変だったろう。

何故騎士を目指したのかは知らない。

しかし、ほぼ平民と変わらぬ貧乏貴族であった父が騎士団長に上り詰めるなど――生半可な苦労ではなかったはずだ。

だが、逃げることもなく立ち上がった父。

その背を眺めていて、幼かった俺は騎士になりたかったのだと思う。

残念ながら自分が考えていたよりも、魔力抵抗が強かったようで、

父のいる第二騎士団ではなく、第三騎士団に配属となってしまったが、国に使えている騎士であることにはかわりない。

＋　＋　＋

「その役目を、私に？」

ザザスは、感情を表に出さないように己を律してはいるが、今回ばかりは困惑げに眉根を寄せた。

それに気がついたようで、第三騎士団団長ラージスは薄く苦笑したようだった。

告げられたのは、流離人（ルエイト）の監視である。

「珍しいな、お前がそのような顔をするなど」

「――――失礼いたしました。しかし、」

本日与えられたのは、流離人（ルエイト）の護衛の援護。

一人の人間を護衛するのに、一人というのは難しいものだ。
そのため、表向きには一人の護衛を各々つけ、バックアップするために影奴（エイド）がつけられていた。
内密利というのは、彼らが息苦しさを感じないための配慮だったのだろう。
三人の子供が十人近い護衛がつけば、目立つということもあった。
ザザスにしてみれば、失敗以外のなにものでもない。
民間人の買い物と言ってもいい。
が、結果的には護衛対象に存在が露見し、護衛対象の末の子供が迷子にさせ、一人が鼻血を出す程度の軽傷とはいえ、怪我を負わせるに至った。
言い訳をするならば、彼らの護衛はトラブル続きであった。
本来なら、子供が逸れそうになるならば、一向をそれとなく止める芸当ぐらいはできた。
しかし、今回ばかりは部下を数名引き連れたザザスであっても至難であった。
率直にいえば次女の容姿である。
異国の顔立ちとはいえ、街中では見かけることのない美貌だ。
華やかな空気は、男の視線を集め、ふらふらと寄せ集めるのだから始末が悪い。

彼女に偶然を装って近づこうとする男の多いことか――――本人が察して、外套の頭巾をかぶってくれなければ更に困難であっただろう。

長男もそこそこの顔立ちで女が振り返っていたが、次女のように追ってくるほどではなかったようだ。

その上、貴族の気を引いたか、王の情報を引き出そうと権力者かわからないが、数名の追跡者の姿も確認し、近づけないように牽制する必要もあった。

彼らが今後どのような立ち位置になるかは不明だが、情報をもらすのは得策ではない。

手の内を知る第三騎士団のチャイラが、ザザスを援護するように、追跡者を牽制し、さりげなくではあるが次女の周囲に近寄る男を密かに撃退していたのはありがたかった。

そのせいで、最後尾であったのに末の子を見失ったのだろうが。

「私は、臆病な人間だ」

イシュルス最後の『魔道騎士（マジックナイト）』と呼ばれるラージスは、考え込むように沈黙した後、独り言のように呟いた。

五人の流離人（ルエイト）家族には全員、影から見守られていた。

父親は鉄の馬車を確認していたようだが、料理を始めた母親に呼ばれて二人で行動。
午後からは父親は、王の許可を経て、王が当初に持ち込んだとされる鉄の馬をいじっていたらしい。母親は、図書館で本を借りた後は、部屋で眠っていたようだ。

ザザスの担当であった長女は、凄まじ才能と魔力を秘めていた。
たぶんであるが、精霊に愛されているのだろう。
常に彼女の周囲には精霊の気配が漂った。

魔法の存在を昨日まで信じていなかったとチャイラに零していた長女であったが、初級の回復魔法は習う前より使用可能だった。

そして、年単位を費やして覚える初級魔法を、一日で五つほど覚えて帰った。
勤勉でもあったが、なにより魔法に対する感覚が鋭いのだろう。

チャイラは幼い頃、神聖魔法の申し子と呼ばれていたが、それでも一ヶ月で三つの初級魔法程度だったはずだ。

長女は神童とよんでもいい。

傍目に眺めていても、能力の飛躍に恐れ戦いたものだ。

しかし、驚愕はそれだけでは終わらなかった。

どうやら長男も只者ではなかったようで――元々強者であったのかは不明だが――鍛錬の終わりには第二騎士団の準騎士ではトップ

レベルであるベルルムに勝利したようだ。
その後も、複数の準騎士を相手に鍛錬を繰り返したようだ。
あのエミィリオすら昏倒させたと報告が入っている。
こちらは最早、化け物レベルである。
いつもならありえないが、部下の報告を二度も聞き返してしまった。
「王レベルに成長するであろう人物が二人。そして二人は戦闘等は不明———彼らがどう転がるか、警戒するに越したことはない」
「ですが、彼らは王の」
「君は」
血の繋がりを主張するザザスの言葉を遮って、ラージスは重々しく、息をつく。
「君ぐらいの世代は、王の若い頃を知らないからだろうな」
そのラージスの両目に鬱屈としたものが揺れ、見ているものを不安にさせた。
ザザスは反射的な反論を堪えて、口が開かれるのを待った。
「私たちは———この国は運がよかったにすぎない。王がこの国を

敵と見做したのなら、今頃瓦礫の山しかのこっていなかっただろう」

いいすぎだ。

が、イシュルスでは子供の寝物語に使われるほど、王の英雄伝は伝わっている。

勿論、全てが真実ではないだろうし、誇張されたものであろうが、それを半分に聞いても人の所業ではなかった。

ザザスの記憶には、ほぼ統治されたイシュルスの姿しかない。

しかし、ラージスには違うのだろう。

「正直、私は怖いのだよ」

歴代のイシュルス王族の親兄弟で血を血で洗うような争い。

国が荒れ果ていく姿を知っているだけに、彼らが現王族と争わないかどうか、常に考慮しなければならないのだろう。

不穏の芽を摘む。

それもまた影奴（エイド）の仕事ではあるが、不穏を見極めた時———果たして、刈り取ることができるのであろうか。

こちらが監視を続け、その結果兄家族の不信感を煽る可能性もある。

影の薄い男が口を開いた。
声を発するまで、存在すら本気で忘れていた。
「僕は考えすぎだと思うけどねぇ？」

実に軽い口調で、同じく報告を聞いていた第二騎士団団長――ザザスの父親であるトーマスが肩を竦めた。

「トーマス、君は気楽すぎる」
「そうかい？僕はそれよりも気になることがあるよ」
「ゴブリンの大群か？」

ラージスの言葉に、トーマスは曖昧に笑った。

「それもあるんだけど、なんていったらいいのかな……胸騒ぎがするよ。こういったら可笑しな話だけどね。イシュルス崩壊の危機で流離人（ルエイト）が一人現れて、イシュルスを救った――――歴代の流離人（ルエイト）も」

ふとザザスは思考を巡らすも、確かに歴代の流離人（ルエイト）が現れたときも、イシュルスは様々な困難に見舞われていたかもしれない。
確か、過去最多で流離人（ルエイト）が三人現れたとき、イシュルス――――世界が魔王が率いる魔族に膝を屈しかけていた。

もう三百年ほど前の話だが、世界には多くの戦火の爪あとが残っている。

ラージスは表情を変えなかったが、青ざめたように思えた。

「どういう意味、ですか」

直属ではないが、上位役職の父親に不躾に問うと『ただ思っただけだけどね』と前置きしてから、苦笑を浮かべた。

「流離人（ルエイト）が一人でイシュルスの滅亡を回避、流離人（ルエイト）が三人で魔王を回避――流離人（ルエイト）が五人もいなければ回避できないこと。僕は彼らが現れてから、そればかり考えているよ」

勿論、現れた流離人（ルエイト）全員が大業をなしたわけではない。

力もなく、象徴として平和に余生を送った者だっていた。

可能性の域をでない。

しかし、トーマスは危惧している。

「――――僕たちが気がついていないだけで、世界では、すでに何

かが起こってるんじゃないかってね」

それこそ、考えすぎだ、とザザスは一笑できなかった。

「奇遇であるな、我も同じ事を考えておった」

足音も、ドアが開いた音すらしなかった。
しかし、三名しかいなかった室内には第四の声が響く。

全員が瞬時に帯刀に手をかけたが――――黒く、どこまでも黒い光のない両の眼に気圧されるように、頭を下げる。

手を振って、顔を上げる事を許可したのは他でもないイシュルス王であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8025u/

岸田家の異世界冒険

2012年1月10日02時27分発行